植松遺跡2

二〇一〇年十一月

財団法人　大阪府文化財センター

（財）大阪府文化財センター調査報告書　第 208 集

八尾市

植　松　遺　跡　2

大阪府営八尾植松（第２期）住宅（建て替え）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010 年 11 月

財団法人　大阪府文化財センター

（財）大阪府文化財センター調査報告書　第 208 集

八尾市

植　松　遺　跡　2

大阪府営八尾植松（第２期）住宅（建て替え）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人　大阪府文化財センター

序　　文

植松遺跡は、河内平野の南部、長瀬川の左岸に立地する遺跡です。周辺には、弥生時代の銅鐸が発見された跡部遺跡や、古墳時代前期の集落跡として名高い久宝寺遺跡、弥生時代前期の集落として認識されている木の本遺跡など、弥生時代から古墳時代の遺跡が数多く存在します。

また、式内社である渋川神社をはじめ、竜華寺や大聖将軍寺などの寺社が点在することから、古来より信仰を集めた土地であったと考えられています。

植松遺跡周辺ではこれまでにも八尾市教育委員会や財団法人八尾市文化財調査研究会によって発掘調査が行われ、奈良時代から平安時代の集落が確認されていました。但し、平成 17 年度に当センターが行った発掘調査では、古墳時代から平安時代前期まで続く大規模な河川が、この地を流走していたことが明らかとなり、それ以前の遺構面はその流れによって損なわれてしまったと考えられました。

しかし今回の調査では、その川砂の下から、大量の土器だまりをもつ古墳時代前期の集落が発見されました。また、さらにその下を掘り進めたところ、弥生時代前期に遡る遺構面が確認されました。相次ぐ予想外の展開に、調査現場のスタッフはおおいに沸き立ちました。

地表面から 4.5 mも下から発見されたのは、弥生時代前期の水田でした。なだらかな斜面を利用して、米が作られていたようです。大阪平野の中でも、比較的早い段階の稲作痕跡と考えられます。この発見は、植松地域の歴史を解き明かす、大きな一歩となることでしょう。

本書では、これらの調査成果を余すところなくまとめ、報告書といたしました。この地域の歴史解明に向けた一助となれば、幸いに存じます。

最後に、調査にあたってご助力・ご協力をいただきました関係諸機関・地元関係者各位、また埋蔵文化財の調査に対してご理解とご教示をいただきました地域のみなさまに、深く謝意を表します。

これからも、変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成 22 年 11 月

財団法人　大阪府文化財センター
理事長　　水　野　正　好

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市植松町８丁目地内に所在する、植松遺跡の発掘調査報告書である。

2．この発掘調査は、大阪府営八尾植松（第２期）住宅（建て替え）建設工事に伴い、大阪府住宅まちづくり部住宅経営室住宅整備課事業第二グループから財団法人　大阪府文化財センターが委託を受け、実施した。調査・整理の委託契約名と委託期間は、以下のとおりである。

〔発掘調査〕

契約名：大阪府営八尾植松（第２期）住宅（建て替え）建設工事に伴う植松遺跡発掘調査

期　間：平成 20 年11 月４日 ～　平成 22 年１月 29 日

〔整理作業〕

契約名：大阪府営八尾植松（第２期）住宅（建て替え）建設工事に伴う植松遺跡遺物整理

期　間：平成 22 年　２月１日 ～　平成 22 年３月 31 日

契約名：大阪府営八尾植松（第２期）住宅（建て替え）建設工事に伴う植松遺跡遺物整理（その２）

期　間：平成 22 年４月１日～平成 22 年 11 月 30 日

3．発掘調査および整理作業は以下の体制で実施した。

〔平成 20 年度〕　調査部長　赤木克視、調整課長　田中和弘
中部調査事務所長兼調査係長　寺川史郎、同主査　片山彰一 [写真]、
同副主査　黒須亜希子

〔平成 21 年度〕　調査部長兼調査課長　福田英人、調整グループ長　金光正裕
調査グループ長　寺川史郎、中部総括主査　秋山浩三、同主査　片山彰一 [写真]、同副主査　黒須亜希子

〔平成 22 年度〕　調査部長兼調査課長　福田英人、調整グループ長　江浦　洋、同主幹　岡本茂史、調査グループ長　岡戸哲紀、中部総括主査　秋山浩三、同主査　片山彰一 [写真]、同副主査　黒須亜希子

4．今回の調査では、以下の機関に、自然科学分析を委託した。

〔花粉分析〕パリノ・サーヴェイ株式会社　　〔植物珪酸体分析〕株式会社古環境研究所

本報告書「第４章　自然科学分析」は、各委託機関の報告書に基づいて黒須が加筆編集を行った。

5．発掘調査および整理作業の実施には、中部調査事務所をはじめとする当センター職員の協力を得た。

6．発掘調査および整理作業の過程では、府営八尾植松住宅自治会をはじめ、下記の方々にご協力、ご教示を賜った。記して謝意を表したい。玉井　功・宮崎泰史（大阪府教育委員会）

7．本書で用いた現地写真は、調査担当者である黒須亜希子が撮影した。また遺物写真の撮影は、片山彰一が行った。

8．出土した木質遺物･動物遺存体の同定は、当センター調査グループ主査　山口誠治が行った。また、木製品および骨角類の保存処理は、山口および専門調査員　倉賀野健が行った。

9．本書の執筆および編集は、黒須が行った。

10．本調査に関わる遺物、写真、図面、データ、作成プレパラート等は、すべて「植松遺跡 08-1」の調査名称を冠し、当センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1．挿図の縮尺は、各図内にスケールバーを掲げ、縮尺率を明示した。
遺構図および断面図の使用単位尺は、mを基準とした。基準高は、東京湾平均海水面（T.P.）を使用した。また、遺物図の使用単位縮尺は、cm を基準とした。記述もこれに倣った。

2．遺構平面図の使用測地系は、「世界測地系（測地成果 2000）」を使用した。単位はすべてmで表記した。

3．本書で用いた遺構平面図に付す方位針は、国土座標軸第Ⅵ系の座標北を示す。

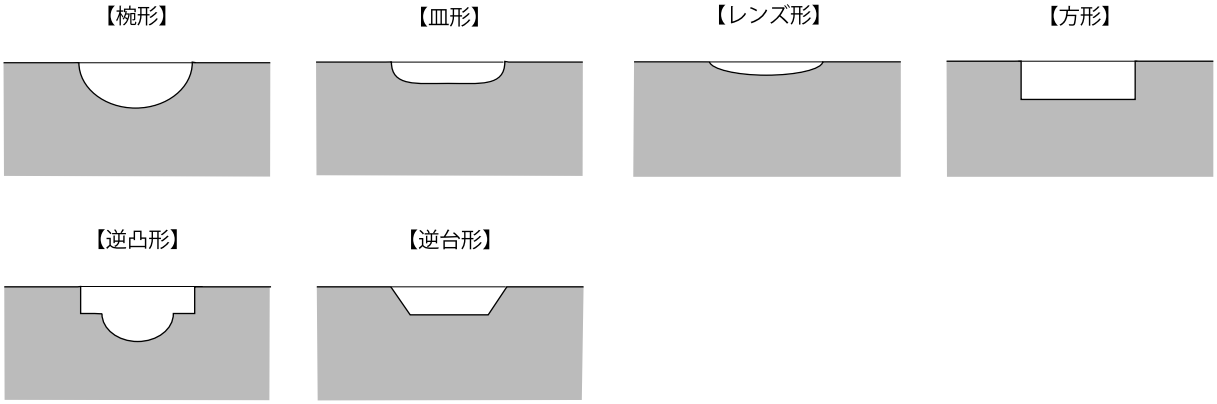
4．現地調査や遺物整理の主な手法については、『遺跡調査基本マニュアル』財団法人大阪府文化財センター 2003.8 に準拠した。遺物の取り上げには、国土座標軸（世界測地系）を用いた地区割を設定した。

5．土層や土器胎土の色調については、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2004 年版　農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用して識別した。

6．遺構番号は、調査区や遺構の種類に関係なく、調査時において検出順に 1 からの通し番号を配した。ただし、明らかに連続する遺構として認識される場合は、同遺構番号を付した。また、現地調査時の付番以外に、本書編集時点で新たに付番した遺構もある。なお本書では、遺構の種類の前にアラビア数字の番号を付け、「1 溝」のように表記した。

7．遺構平面図における「⊥」マークは、断面観察を行った地点を指す。観察方向は、断面図に記載された方位（N ＝北・S ＝南・E ＝東・W ＝西）によって判断されたい。

8．遺構の断面形状については、「椀形」「皿形」など、任意の呼称で記述している。凡例は下図に示すとおりである。



9．遺物実測図における黒塗りやアミカケ範囲は、陶磁器になされた絵付けや文字の書き込み、漆皮膜、炭化物の付着、木製品の炭化部位などを示す。その詳細は、解説文中において記述した。

10．挿図中の遺物番号は、挿図ごとに付番した。この番号は、巻末の遺物観察表や写真図版に明示した番号と一致させている（例：第 49 図 1 の遺物は、写真図版では「49-1」と表記）。
なお、写真図版中に番号が付されていない遺物は、実測図の作成が困難ではあるが、報告が必要であると判断されたため、写真図版において掲載したものである。

11．本書文中において引用した文献は、引用・参考文献として、各章末に列挙した。

目　　次

序　　文
例　　言
凡　　例
第１章　調査の経過と調査方法 …… 1
　第１節　調査に至る経緯と経過 …… 1
　　１．調査に至る経緯 …… 1
　　２．調査区の設定 …… 2
　　３．現地調査の経過 …… 3
　第２節　調査の方法 …… 4
　　１．調査区内の地区割方法 …… 4
　　２．調査の方法 …… 6
第２章　調査地周辺の地理と環境 …… 9
　第１節　調査地周辺の地理と地形 …… 9
　第２節　文献史料に見る調査地周辺 …… 10
　第３節　調査地周辺の遺跡と調査成果 …… 11
　　１．調査地周辺の遺跡 …… 11
　　２．既往の調査成果 …… 13
第３章　調査成果 …… 19
　第１節　基本層序 …… 19
　第２節　遺構と遺物 …… 26
　　１．第１遺構面（近世） …… 26
　　２．第２遺構面（中世末～近世初頭） …… 28
　　３．第３遺構面（中世後期） …… 32
　　４．第４遺構面（中世） …… 34
　　５．第５遺構面（古代末～中世初頭）・遺構内出土遺物 …… 34
　　６．第１～第５層出土遺物 …… 43
　　７．第６遺構面（古墳時代後期～平安時代初頭） …… 46
　　８．第６層出土遺物 …… 46
　　９．第７遺構面（古墳時代前期）・第７層出土遺物 …… 58
　　10. 第８－１遺構面（古墳時代前期） …… 59
　　11. 第８－１層・第８－２層出土遺物 …… 60
　　12. 第８－２遺構面（古墳時代前期） …… 74
　　13. 第８－２遺構面（古墳時代前期）・遺構内出土遺物 …… 79
　　14. 第９遺構面（弥生時代中期）・第９層出土遺物 …… 89
　　15. 第 10 遺構面（弥生時代前期） …… 91

16. 第 10 層出土遺物 …… 96
17. 下層掘削トレンチ調査状況…… 98
第４章　自然科学分析…… 102
第１節　自然科学分析の概要…… 102
１．自然科学分析の意義と既往の分析結果 …… 102
２．分析の経緯と経過 …… 103
第２節　花粉分析…… 103
１．分析方法 …… 103
２．分析結果 …… 103
３．考察 …… 104
第３節　植物珪酸体分析…… 108
１．分析方法 …… 108
２．分析結果 …… 109
３．考察 …… 109
第５章　総括 …… 115
第１節　検出遺構面の変遷 …… 115
第２節　植松遺跡の動向 …… 118
抄　　録
奥　　付

挿　図　目　次

第 1 図　調査地位置図 …… 1
第 2 図　調査区配置図 …… 2
第 3 図　調査区地区割図 …… 5
第 4 図　調査地周辺の旧地形および旧河道復元図 …… 9
第 5 図　周辺の遺跡分布図 …… 12
第 6 図　既往の調査地位置図 …… 15
第 7 図　基本層序模式図 …… 20
第 8 図　08 －１－１区　壁断面図 ……21・22
第 9 図　08 －１－２区　壁断面図 ……23・24
第 10 図　第１遺構面　全体図 …… 27
第 11 図　第１遺構面　遺構平面断面図 …… 28
第 12 図　第２遺構面　全体図 …… 29
第 13 図　第２遺構面　遺構平面断面図 …… 31
第 14 図　第３遺構面　全体図 …… 33

第 15 図　第４遺構面　全体図 …… 35
第 16 図　第５遺構面　全体図 …… 37
第 17 図　第５遺構面　遺構平面断面図（１）…… 38
第 18 図　第５遺構面　遺構平面断面図（２）…… 39
第 19 図　第５遺構面　遺構平面断面図（３）…… 40
第 20 図　第５遺構面　遺構平面断面図（４）…… 42
第 21 図　第５遺構面　検出遺構内出土遺物実測図 …… 43
第 22 図　08 － 1 － 1 区　第１～５層出土遺物実測図 …… 44
第 23 図　08 － 1 － 2 区　第１～５層出土遺物実測図 …… 45
第 24 図　第６遺構面　全体図 …… 47
第 25 図　08 － 1 － 1 区　第６層出土遺物実測図 …… 48
第 26 図　08 － 1 － 2 － 1 区　第６層出土遺物実測図（１） …… 50
第 27 図　08 － 1 － 2 － 1 区　第６層出土遺物実測図（２） …… 51
第 28 図　08 － 1 － 2 － 2 区　第６層出土遺物実測図（１） …… 54
第 29 図　08 － 1 － 2 － 2 区　第６層出土遺物実測図（２） …… 55
第 30 図　08 － 1 － 2 － 2 区　第７層出土遺物実測図 …… 58
第 31 図　第８－１遺構面　全体図 …… 59
第 32 図　第８－１遺構面　土器だまり１遺物出土状況図 …… 60
第 33 図　第８－１遺構面　土器だまり１・土器だまり１付近出土遺物実測図 …… 61
第 34 図　第８－１遺構面　土器だまり２遺物出土状況図 …… 62
第 35 図　第８－１遺構面　土器だまり２出土遺物実測図 …… 63
第 36 図　第８－１遺構面　土器だまり３遺物出土状況図 …… 65
第 37 図　第８－１遺構面　土器だまり３出土遺物実測図 …… 66
第 38 図　第８－１遺構面　土器だまり４遺物出土状況図 …… 68
第 39 図　第８－１遺構面　土器だまり４出土遺物実測図 …… 69
第 40 図　第８－１遺構面　土器だまり５遺物出土状況図 …… 72
第 41 図　第８－１遺構面　土器だまり５出土遺物実測図 …… 73
第 42 図　第８－２遺構面　全体図 …… 74
第 43 図　第８－２遺構面　遺構平面断面図（１）…… 75
第 44 図　第８－２遺構面　30 溝土器だまり６遺物出土状況図 …… 76
第 45 図　第８－２遺構面　30 溝土器だまり７遺物出土状況図 …… 77
第 46 図　第８－２遺構面　30 溝土器だまり８遺物出土状況図 …… 77
第 47 図　第８－２遺構面　遺構平面断面図（２）…… 78
第 48 図　第８－２遺構面　30 溝出土遺物実測図（１） …… 84
第 49 図　第８－２遺構面　30 溝出土遺物実測図（２） …… 85
第 50 図　第８－２遺構面　30 溝・31 溝・35 土坑・36 土坑出土遺物実測図…… 86
第 51 図　第８－２遺構面　30 溝出土遺物実測図（３） …… 88
第 52 図　第９遺構面　全体図 …… 89

第 53 図　08 － 1 － 2 － 2 区　第 9 層出土遺物実測図 …… 90
第 54 図　第 9 遺構面　遺構平面断面図 …… 90
第 55 図　第 10 遺構面　全体図 …… 93
第 56 図　第 10 遺構面　レベル諧調図 …… 94
第 57 図　第 10 遺構面　遺構平面断面図（1） …… 95
第 58 図　第 10 遺構面　遺構平面断面図（2） …… 96
第 59 図　08 － 1 － 2 － 2 区　第 10 層出土遺物実測図（1） …… 97
第 60 図　08 － 1 － 2 － 2 区　第 10 層出土遺物実測図（2） …… 97
第 61 図　下層掘削トレンチ設定図 …… 98
第 62 図　下層掘削トレンチ A　壁断面図 …… 99
第 63 図　下層掘削トレンチ B　遺構平面断面図 …… 99
第 64 図　分析試料採取地点・層位図 …… 102
第 65 図　花粉化石層群の層位分布図 …… 106
第 66 図　植物珪酸体抽出結果図 …… 111
第 67 図　植松遺跡 08 － 1　遺構面変遷図（1） …… 116
第 68 図　植松遺跡 08 － 1　遺構面変遷図（2） …… 117
第 69 図　植松遺跡　土層対応図 …… 119
第 70 図　植松遺跡 05 － 1 ・08 － 1　遺構面合成図（弥生時代後期～古墳時代前期） …… 120
第 71 図　植松遺跡 05 － 1 ・08 － 1　遺構面合成図（古墳時代後期～古代初頭） …… 120
第 72 図　植松遺跡 05 － 1 ・08 － 1　遺構面合成図（中世末～近世初頭） …… 121

挿入写真目次

写真 1　各種作業状況（1） …… 6
　1 － 1　重機掘削作業状況
　1 － 2　人力掘削作業状況
　1 － 3　出土遺物検出状況
　1 － 4　平面測量作業状況
写真 2　各種作業状況（2） …… 7
　2 － 1　写真測量実施状況
　2 － 2　遺物復元作業状況
　2 － 3　遺物実測作業状況
　2 － 4　デジタルトレース作業状況
写真 3　第 8 － 1 遺構面　土器だまり 1 周辺遺物出土状況 …… 60
写真 4　検出された花粉化石 …… 107
写真 5　検出された植物珪酸体 …… 112

表　目　次

表１　花粉分析結果一覧…… 105
表２　植物珪酸体分析結果一覧…… 110
表３　主な分類群の推定生産量…… 110
表４　遺物観察表（土器）…… 122
表５　遺物観察表（動物遺体）…… 135
表６　遺物観察表（金属製品）…… 135
表７　遺物観察表（木製品・自然木）…… 135
表８　遺物観察表（石器・石製品）…… 136

写真図版目次

写真図版１　１．08－１－１区　第１遺構面全景（北西から）
　　２．08－１－１区　第２遺構面全景（北西から）
写真図版２　１．08－１－１区　第２遺構面全景（西から）
　　２．08－１－１区　第３・第４遺構面全景（北西から）
写真図版３　１．08－１－１区　第５遺構面全景（北西から）
　　２．08－１－１区　第５遺構面全景（南から）
写真図版４　１．08－１－２－１区　第１遺構面全景（南西から）
　　２．08－１－２－１区　第２遺構面全景（東から）
写真図版５　１．08－１－２－１区　第４遺構面全景（南西から）
　　２．08－１－２－１区　第２遺構面畝群検出状況（東から）
　　３．08－１－２－１区　第４遺構面水田検出状況（東から）
　　４．08－１－２－１区　第４遺構面鋤溝群検出状況（東から）
　　５．08－１－２－１区　第５遺構面溝群検出状況（東から）
写真図版６　１．08－１－２－１区　第６遺構面全景（南西から）
　　２．08－１－２－１区　第６遺構面全景（北東から）
写真図版７　１．08－１－２－１区　第８－１遺構面全景（東から）
　　２．08－１－２－１区　第８－２遺構面全景（南西から）
写真図版８　１．08－１－２－１区　土器だまり１遺物出土状況
　　２．08－１－２－１区　土器だまり２遺物出土状況
　　３．08－１－２－１区　土器だまり３遺物出土状況
　　４．08－１－２－１区　土器だまり４遺物出土状況
　　５．08－１－２－１区　土器だまり５遺物出土状況

６．08－1－2－1区　30 溝土器だまり６遺物出土状況
７．08－1－2－1区　30 溝土器だまり７遺物出土状況
８．08－1－2－1区　30 溝土器だまり８遺物出土状況
写真図版９　１．08－1－2－1区　南西部微高地（東から）
２．08－1－2－1区　36 土坑・37 土坑（東から）
３．08－1－2－1区　30 溝上層完掘状況
４．08－1－2－1区　30 溝断面ａ（北から）
５．08－1－2－1区　第９遺構面全景（南西から）
写真図版 10　１．08－1－2－2区　第１遺構面全景（北東から）
２．08－1－2－2区　第２遺構面全景（西から）
写真図版 11　１．08－1－2－2区　第３遺構面全景（北東から）
２．08－1－2－2区　第５遺構面全景（西から）
写真図版 12　１．08－1－2－2区　第６遺構面全景（北東から）
２．08－1－2－2区　第８－２遺構面全景（北東から）
写真図版 13　１．08－1－2－2区　第８－３遺構面全景（西から）
２．08－1－2－2区　第９遺構面全景（西から）
写真図版 14　１．08－1－2－2区　第 10－１遺構面全景（西から）
２．08－1－2－2区　第 10－１遺構面小区画水田
３．08－1－2－2区　第 10－１層打製石器出土状況
４．08－1－2－2区　下層掘削トレンチＢ　遺構検出状況（西から）
５．08－1－2－2区　第 10－２層石庖丁出土状況
写真図版 15　１．08－1－1区　第１～５層出土遺物
２．08－1－2－1区　第１層出土遺物
写真図版 16　１．08－1－2－1区・08－1－2－2区　第２～５層出土遺物
２．08－1－2－1区・08－1－2－2区　第５遺構面検出遺構内出土遺物
３．08－1－2－1区・08－1－2－2区　出土遺物（付木）
写真図版 17　１．08－1－1区　第６層出土遺物
写真図版 18　１．08－1－2－1区　第６層出土遺物
写真図版 19　１．08－1－2－1区　第６層出土遺物
写真図版 20　１．08－1－2－1区　第６層出土遺物
写真図版 21　１．08－1－2－1区　第６層出土遺物
２．08－1－2－2区　第６層出土遺物
写真図版 22　１．08－1－2－2区　第６層出土遺物
２．08－1－2－2区　第６層出土遺物
写真図版 23　１．08－1－2－2区　第６層出土遺物
写真図版 24　１．08－1－2－2区　第６層出土遺物
写真図版 25　１．08－1－2－2区　第７層出土遺物
２．08－1－2－1区　第８－１遺構面土器だまり１出土遺物

写真図版 26　１．08－１－２－１区　第８－１遺構面土器だまり１・土器だまり１付近・
　　土器だまり２出土遺物
写真図版 27　１．08－１－２－１区　第８－１遺構面土器だまり２出土遺物
写真図版 28　１．08－１－２－１区　第８－１遺構面土器だまり３出土遺物
　　２．08－１－２－１区　第８－１遺構面土器だまり４出土遺物
写真図版 29　１．08－１－２－１区　第８－１遺構面土器だまり４出土遺物
写真図版 30　１．08－１－２－１区　第８－１遺構面土器だまり４・５出土遺物
写真図版 31　１．08－１－２－１区　第８－１遺構面土器だまり５出土遺物
　　２．08－１－２－１区　第８－１遺構面土器だまり５出土遺物
写真図版 32　１．08－１－２－１区　第８－１遺構面土器だまり５出土遺物
　　２．08－１－２－１区　第８－２遺構面 35 土坑・36 土坑出土遺物
写真図版 33　１．08－１－２－１区　第８－２遺構面 30 溝出土遺物
写真図版 34　１．08－１－２－１区　第８－２遺構面 30 溝出土遺物
写真図版 35　１．08－１－２－１区　第８－２遺構面 30 溝出土遺物
写真図版 36　１．08－１－２－１区　第８－２遺構面 30 溝出土遺物
写真図版 37　１．08－１－２－１区　第８－２遺構面 30 溝出土遺物
写真図版 38　１．08－１－２－１区　第８－２遺構面 30 溝・31 溝出土遺物
写真図版 39　１．08－１－２－１区　第８－２遺構面 30 溝出土棒状割材
　　２．08－１－２－１区　第８－２遺構面 30 溝出土板状割材
　　３．08－１－２－２区　第７層出土獣骨（ウマ）
　　４．08－１－２－１区　第８－２遺構面 30 溝出土獣歯（イノシシ）
写真図版 40　１．08－１－２－２区　第 10－１層出土打製石槍（石剣）
　　２．08－１－２－２区　第 10－２層出土石庖丁
　　３．08－１－２－２区　第 10－２層出土土製投弾
　　４．08－１－２－１区・08－１－２－２区　石製品・剥片
写真図版 41　１．08－１－２－２区　第９層・第 10 層出土遺物
　　２．08－１－２－２区　第 10 層出土弥生土器壺頸部
　　３．08－１－２－２区　第 10－２層出土壺形ミニチュア土器
　　４．08－１－２－１区　下層掘削トレンチＡ　出土遺物

第１章　調査の経過と調査方法

第１節　調査に至る経緯と経過

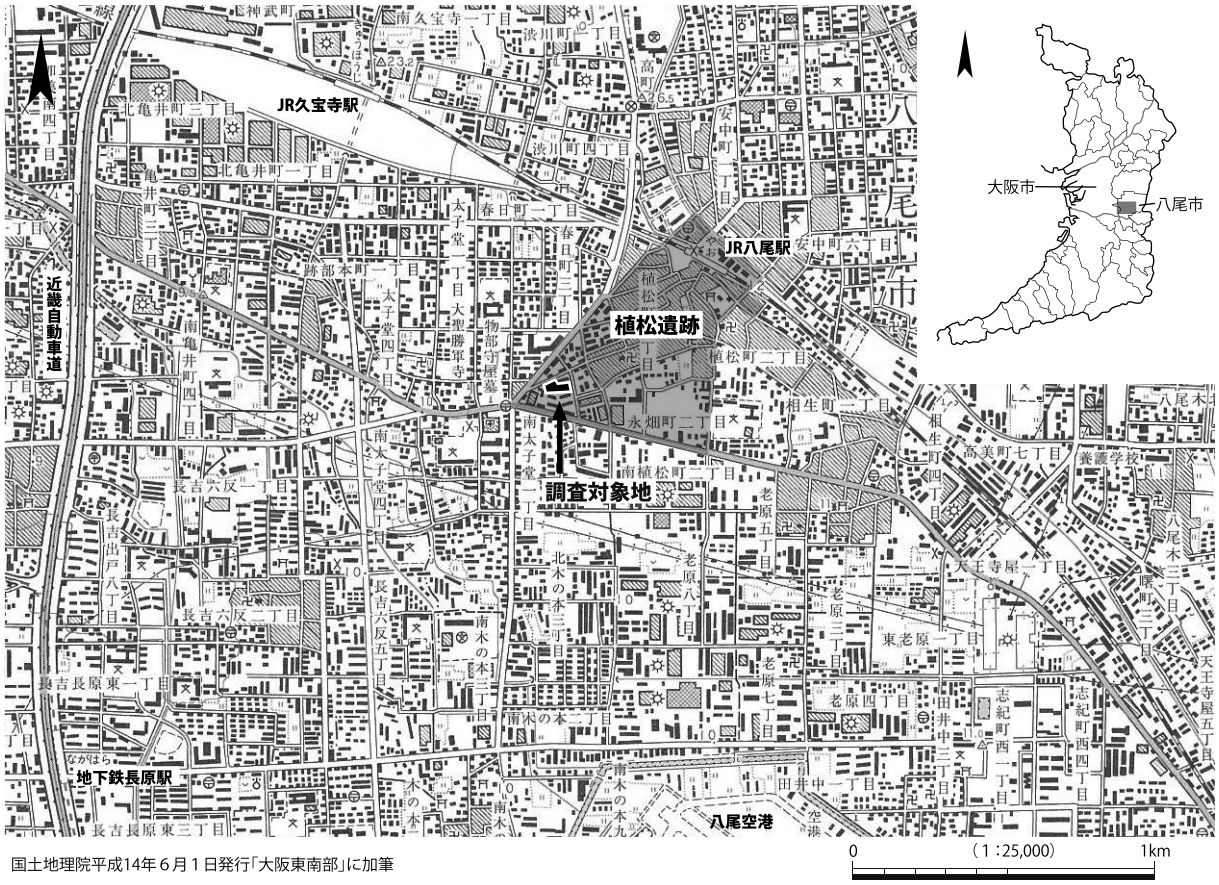
１．調査に至る経緯

植松遺跡は、八尾市植松町・永畑町に所在する周知の遺跡である。周辺は、JR 関西本線や国道 25 号線が通る商業地および住宅地であるため人々や車の往来は多く、賑わいをみせる地域である。

今回の調査は、大阪府住宅まちづくり部住宅経営室住宅整備課が行う大阪府営住宅八尾植松（第二期）建設工事に伴うものであり、対象地は府営植松住宅地内にあたる。建設より四十年余りを経たこの府営住宅は、建て替え工事が順次進められており、平成 20 年 11 月の時点では、建物全６棟のうち、すでに第１・第３・第５棟は取り壊されている。また、このうち第１棟は、新棟として建て替えられ、共用が始まっている。

当センターでは、平成 17 ～ 18 年度に、この新棟および新棟に付随する貯留槽の設置範囲について、発掘調査を行った（植松遺跡 05 － 1 発掘調査）。その結果、古墳時代前期から平安時代初頭の流路を確認し、埋土である川砂の中から奈良時代や平安時代初頭に所産時期をもつ、多くの出土遺物を得た。

このときの調査報告〔川瀬 2007〕では、調査地を埋め尽くした古墳時代前期から平安時代初頭の流路は、最大幅 150 mを上回ると復元されている。その水底は地下５mまで達し、付近に存在していた弥生時代の堆積層を削り流したものと推測された。このため、前回の調査地より北へ 50 m程度を隔て



国土地理院平成14年６月１日発行「大阪東南部」に加筆

第１図　調査地位置図

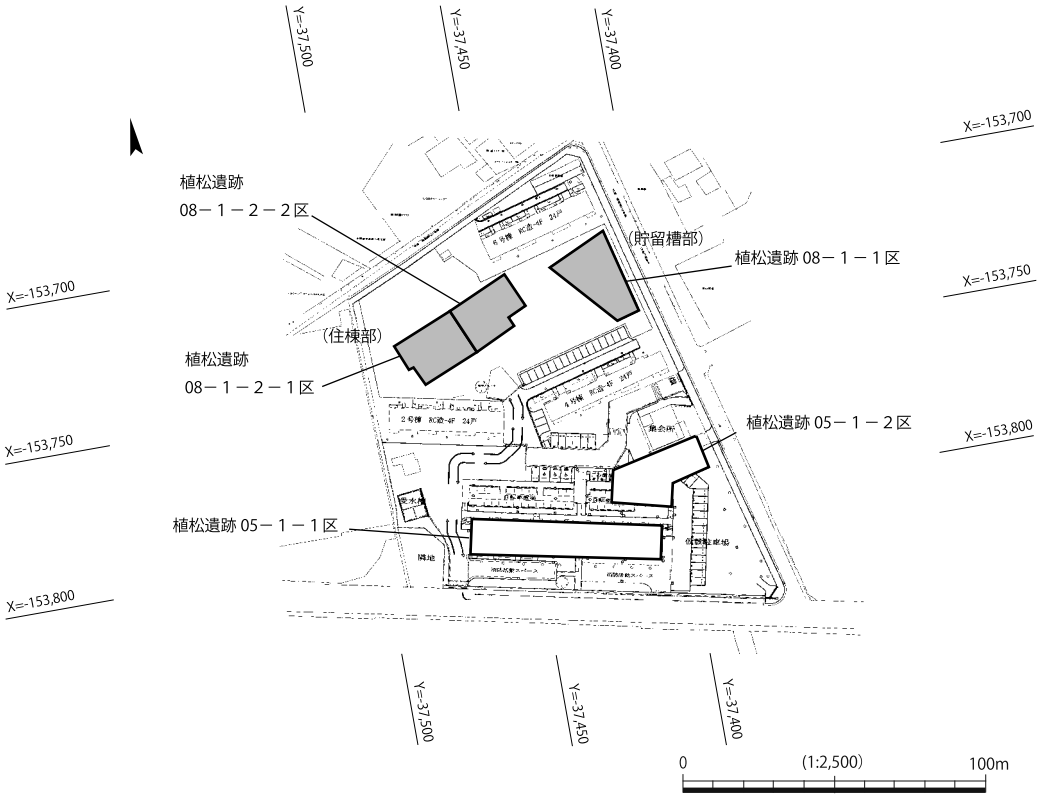
た今回の調査地では、河川内からの豊富な遺物の出土が期待されるとともに、河川がどの程度まで広がるのかが注目された。

今回の調査では、当初、地表面以下５ｍまで続くと予想された川砂は地下３ｍ程度で終息し、川底ともいうべき粘土の広がりが確認された。さらにその粘土層を掘り進めたところ古墳時代前期の遺構面を、さらにその下層では弥生時代前期の遺構面を検出した。ともに、植松遺跡内では初めての検出事例となる。古墳時代前期の遺構面からは、庄内式・布留式に類される古墳時代前期の土器等がまとまって出土した。また、弥生時代前期遺構面からは、弥生時代前期に遡る土器片や石器も出土し、耳目を集めた。

２．調査区の設定

今回、調査の対象となったのは、最大長 43.0 m、最大幅 16.0 mを測る住宅棟（住棟部）１箇所と、その東側に設けられる逆台形の雨水貯留槽予定部分（貯留槽部）１箇所である。最終遺構面の面積は合計 1,033㎡である。調査着手時、場内では文化財調査のほか住宅周辺の歩道整備や植樹、水道・ガスなどの関連工事が、同時並行で進められていたため、工事ヤードの確保を目的として住棟部を分割し、貯留槽部→住棟部西半部→住棟部東半部の順に調査を進めた。各調査区の面積は、貯留槽部 399㎡、住棟部西半部 319㎡、住棟部東半部が 315㎡である。

現地調査では、『遺跡調査基本マニュアル』に則り、貯留槽部を 08 － 1 － 1 区、住棟部を 08 － 1 － ２区とし、さらに住棟部のうち西半部を 08 － 1 － 2 － 1 区、東半部を 08 － 1 － 2 － 2 区とした（第２図参照）。各調査区の掘削深度は、08 － 1 － 1 区の設計底面が T.P.+7.59 mまで、08 － 1 － 2 区が T.P.+6.29 mである。但し、08 － 1 － 2 － 2 区については、弥生時代前期包含層が西へ向かって下がる傾向が認められたため、さらに深く掘削し、最終的には、T.P.+6.0 m前後の深さにまで及んだ。



第２図　調査区配置図

３．現地調査の経過

現地調査は、平成 21 年 1 月 23 日に大阪府営八尾植松住宅自治会を対象とした説明会を行った後、各工程に着手した。主な日程は、以下の通りである。

〔08 － 1 － 1 区〕

平成 21 年 1 月 23 日　地元説明会開催　調査に先立ち植松住宅自治会に調査概要を説明
1 月 30 日　資材搬入　監督員詰所設置作業着手……2 月 5 日　完了
2 月 6 日　鋼矢板圧入作業着手　圧入困難のため先行掘削工法へ変更
2 月 12 日　鋼矢板圧入先行掘削作業開始……2 月 17 日　完了
2 月 18 日　鋼矢板・立杭（H 鋼）圧入作業開始……2 月 25 日　完了
2 月 26 日　現況測量実施
3 月 2 日　機械掘削開始……3 月 3 日　完了
3 月 3 日　機械掘削出来高測量実施
3 月 9 日　人力掘削開始
3 月 18 日　高所作業車より写真撮影（第２遺構面）　クレーン車による写真測量実施
3 月 27 日　高所作業車より写真撮影（第４・５遺構面）
4 月 1 日　切梁・腹起し設置作業開始……4 月 3 日　完了
4 月 13 日　大阪府教育委員会立会　人力掘削完了　人力掘削出来高測量実施
9 月 21 日　切梁・腹起し撤去作業・中間杭切断作業開始……9 月 22 日　完了

〔08 － 1 － 2 － 1 区〕

4 月 17 日　資材搬入
4 月 21 日　鋼矢板圧入先行掘削作業開始……4 月 24 日　完了
4 月 27 日　鋼矢板・立杭（H 鋼）圧入作業開始……5 月 1 日　完了
5 月 8 日　現況測量実施　機械掘削開始……5 月 11 日　完了
5 月 11 日　機械掘削出来高測量実施
5 月 12 日　人力掘削開始
5 月 26 日　高所作業車より写真撮影（第２遺構面）　クレーン車による写真測量実施
6 月 1 日　高所作業車より写真撮影（第５遺構面）
6 月 4 日　切梁・腹起し設置作業開始……6 月 8 日　完了
6 月 25 日　大阪府教育委員会立会
7 月 3 日　大阪府教育委員会立会
7 月 7 日　高所作業車より写真撮影（第８遺構面）　クレーン車による写真測量実施
7 月 31 日　大阪府教育委員会立会
8 月 10 日　大阪府教育委員会立会　人力掘削完了　人力掘削出来高測量実施
8 月 11 日　埋め戻し作業開始
8 月 19 日　切梁・腹起し撤去作業開始……8 月 20 日　完了
8 月 25 日　埋め戻し作業完了
8 月 26 日　鋼矢板引抜き作業開始……8 月 31 日　完了

〔08－1－2－2区〕

9月 1日　先行掘削作業開始……9月2日　完了
9月 3日　鋼矢板圧入作業開始……9月8日　完了
9月 9日　現況測量実施　機械掘削開始……9月11日　完了
9月11日　機械掘削出来高測量実施
9月14日　人力掘削開始
9月25日　大阪府教育委員会立会
9月29日　高所作業車より写真撮影（第2遺構面）　クレーン車による写真測量実施
10月14日　高所作業車より写真撮影（第5遺構面）
10月19日　切梁・腹起し設置作業開始……10月20日　完了
11月17日　大阪府教育委員会立会
11月26日　大阪府教育委員会立会
12月 7日　人力掘削完了　人力掘削出来高測量実施
12月 8日　埋め戻し作業開始
12月10日　切梁・腹起し撤去作業開始……12月12日　完了
12月16日　埋め戻し作業完了
12月17日　鋼矢板引抜き作業開始……12月18日　完了
12月24日　監督員詰所撤去作業実施
12月25日　後片付け完了

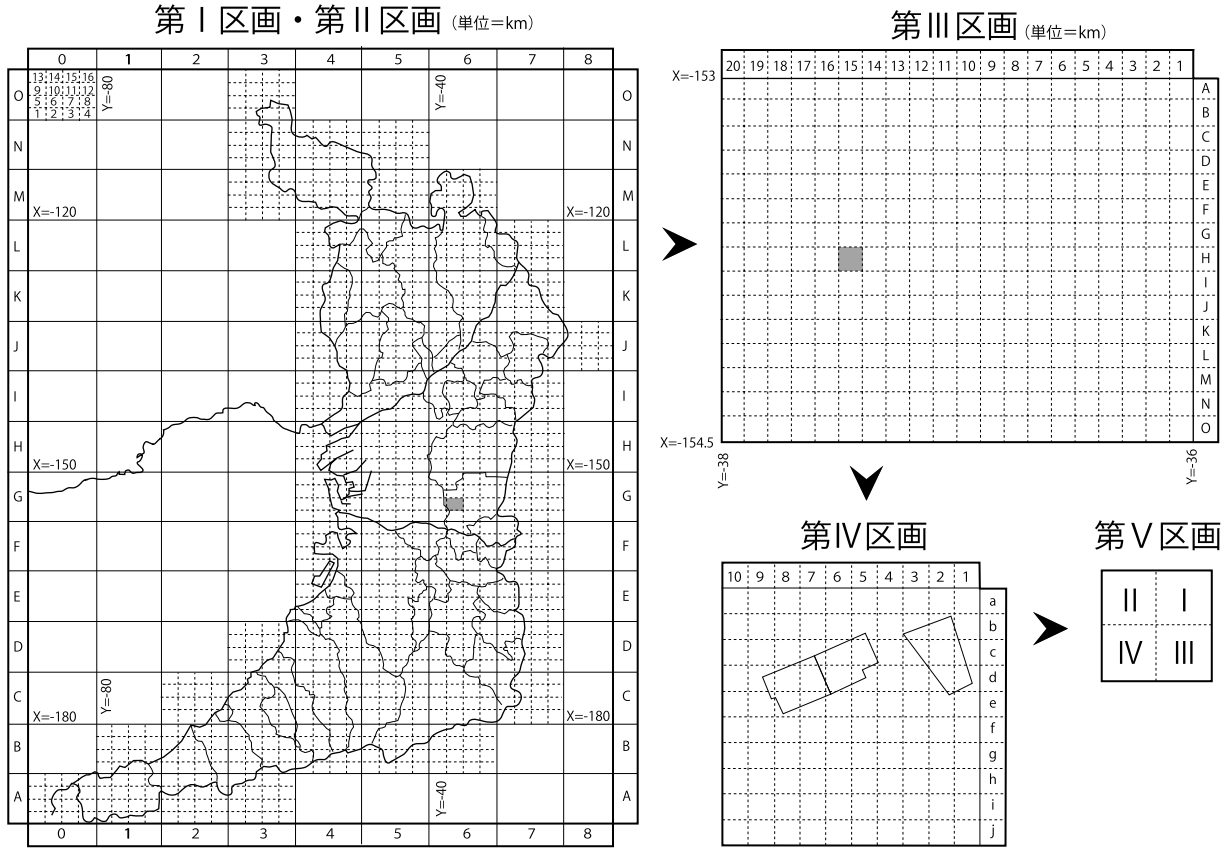
第2節　調査の方法

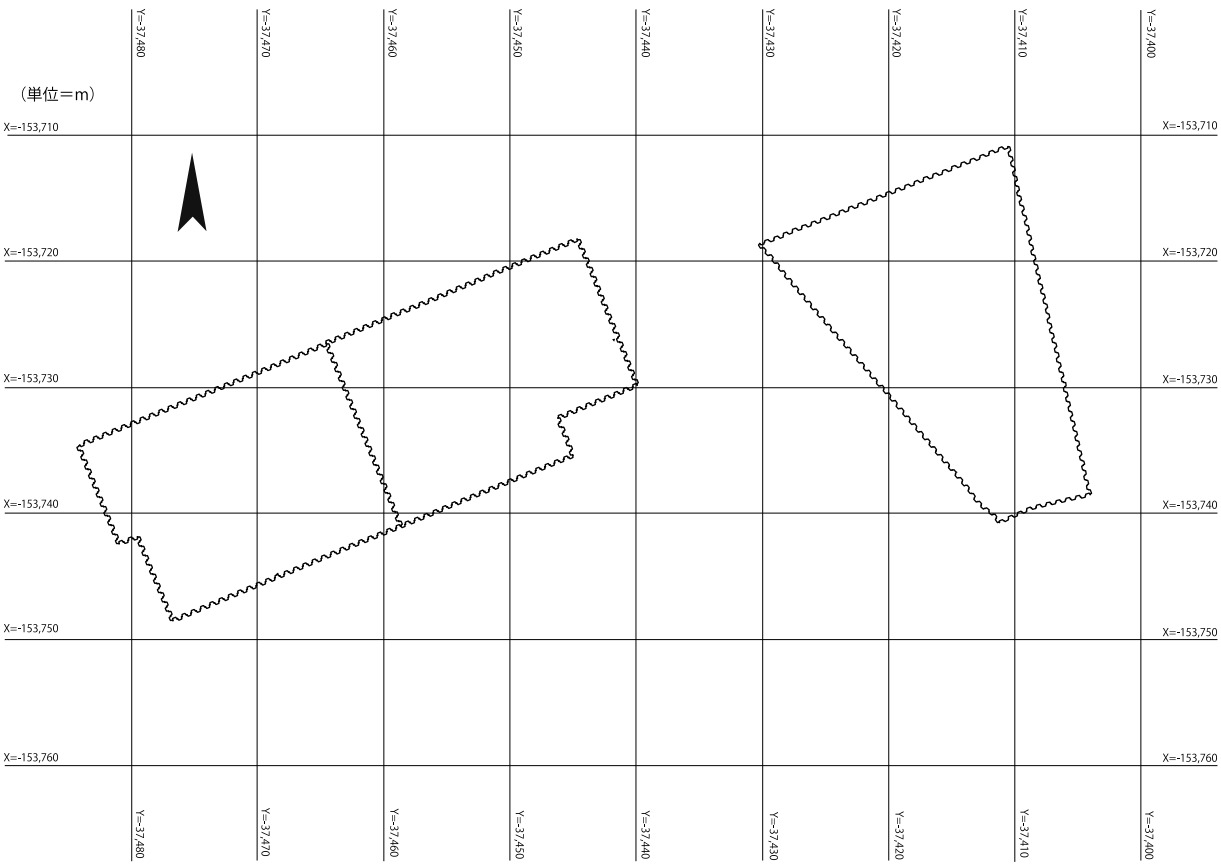
1．調査区内の地区割方法

現地調査では、調査区を国土座標軸（世界測地系）に基づく地区割法を用いて分割し、検出遺構や出土遺物の管理に用いた。各調査区ともに人力掘削の開始と平行して、XY座標点および水準点を設置し、これを測量基準点として一辺10ｍの座標グリッドを設定した（第3図参照）。用いた国土座標軸は、第Ⅵ座標系である。

国土座標軸に設定されたグリッドでは、第Ⅰ区画から徐々に細分された第Ⅴ区画までを定めている。第Ⅰ区画とは、大阪府の南西端X=-192,000ｍ、Y=-88,000ｍの交点を基準として、南北6km、東西8kmの面積で府域を62分割した区画をいう。このうちの1区画をさらに南北1.5km、東西2.0kmの範囲で各々4分割し、計16区画としたもののひとつを第Ⅱ区画とする。さらにこの第Ⅱ区画を南北に15分割、東西に20分割した一辺100ｍの範囲を第Ⅲ区画とし、さらにこれを東西、南北ともに10分割した一辺10mの範囲を第Ⅳ区画とする。第Ⅴ区画は、第Ⅳ区画を5ｍ単位で分割した区画となるが、今回の調査では、第Ⅳ区画までを使用した。

遺物は、グリッドごとに第Ⅲ区画・第Ⅳ区画および出土遺構や層位、遺構面などを記入したラベルとともに取り上げ、登録番号を付した。また、検出遺構は、実測図作成に際してグリッド名を明記して、後に一覧とした。今回の調査区は、第Ⅰ区画が「G 6」、第2区画が「6」、第3区画が「15H」の範囲


第Ⅰ区画・第Ⅱ区画（単位＝km）
第Ⅲ区画（単位＝km）
第Ⅳ区画
第Ⅴ区画
X=-120
X=-150
X=-180
Y=-80
Y=-40
X=-153
X=-154.5
Y=-38
Y=-36
Ⅱ Ⅰ
Ⅳ Ⅲ


（単位＝m）
Y=-37,480
Y=-37,470
Y=-37,460
Y=-37,450
Y=-37,440
Y=-37,430
Y=-37,420
Y=-37,410
Y=-37,400
X=-153,710
X=-153,720
X=-153,730
X=-153,740
X=-153,750
X=-153,760

第３図　調査区地区割図

に含まれている。

２．調査の方法

発掘調査および整理作業は、以下の手法を用いて行った。

仮設土留工（鋼矢板の圧入引抜き・支保工設置撤去など）　始めに土留工として調査区の四周に鋼矢板を圧入した。また、切梁設置のための立杭（H 鋼）を随所に打設した。これらの作業では、当初予定していた油圧式の圧入工法が、強固な土質により困難となったため、先行掘削を行う手法に変更した。切梁は、地表面以下２ｍまで掘り進めたところで掘削を一時中断して設置作業を行った。撤去は同じく、埋め戻し作業を一時中断して行った。鋼矢板は、当初の計画において指示のあった必要枚数を現地に残置したほかは、すべて引抜き、撤去した。

機械掘削　現地盤測量後、重機を用いて表土等を取り除いた（写真１－１）。既往の調査成果より、島畠の盛り上がり等、起伏のある遺構の存在が予想されたため、掘削には慎重を期した。

人力掘削　中世包含層以下の土層については、人力掘削を行い、主要遺構面の検出に努めた。土層の掘削は、シャベルやツルハシ、鋤簾を用い、土砂はベルトコンベアを使用して排出した（写真１－２）。なお、08－１－２区では、出土遺物の集積が顕著であったため、適宜、小型シャベルや竹ベラなどの道具を用いて状況に対応した（写真１－３）。

１－１　重機掘削作業状況

１－２　人力掘削作業状況

１－３　出土遺物検出状況

１－４　平面測量作業状況

写真１　各種作業状況（１）

掘削中に出土した遺物は、グリッドごとに取り上げ、取り上げ番号（登録番号）を付して管理を行った。残存状態が良好な遺物や特異な遺物については、出土状況写真撮影と出土状況図作成の後に取り上げた。また、木製品など脆弱な遺物については、水分補給を行い、劣化の防止に努めた。

作業中、地表に溜まった湧水や雨水は、ポンプを用いて汲み取り、沈砂槽を介して場外へと排出した。遺構面に溜まった水に関しては、遺構を損なわないよう柄杓やバケツ、スポンジを用いた人力排水を行った。

現地記録作業　今回の調査では、調査区により、４～10 面の遺構面を検出した。これらは主に平板測量を行い、平面図を作成した（写真１－４）。また、レベル値を測定し、地形の変化を記録した。検出した遺構は半裁して断面図を作成し、記録写真を撮影した。各調査区の北壁および西壁については、連続する土層断面図を作成した。今回の調査では掘削深度が深いため、安全上の観点から、２～３回に分割して作図を行った。

なお、検出した遺構面のうち、主要な遺構面については、高所作業車より写真撮影を行った。また、すべての調査区の第２遺構面と 08 －１－２－１区の第８－１遺構面は、クレーンを用いた写真測量を行った（写真２－１）。写真測量図は、50 分の１スケールの平面図として作成した。

現地調査において、記録撮影に使用したカメラは、６×７カメラ、35㎜カメラであり、それぞれ黒白フィルム、リバーサルフィルムを用いた。また、台帳作成や作業状況については、デジタルカメラに

２－１　写真測量実施状況

２－２　遺物復元作業状況

２－３　遺物実測作業状況

２－４　デジタルトレース作業状況

写真２　各種作業状況（２）

よる撮影も随時行った。

埋め戻し作業　現地調査は、大阪府教育委員会の立会を経た後、埋め戻しを行った。但し、08－1－1区は、引き続き事業者による貯留槽部本体の設置工事が着手されたため、埋め戻し作業は行わず、排出された土砂の一部は場外へ搬出し、処分を行った。

調査は、すべての工程を終えた後、事業者へ引渡し、終了とした。

出土遺物の整理作業　出土遺物は、登録、洗浄、注記までの基本的な整理作業を、現場設置の監督員詰所内にて行った。基本整理作業終了後は、中部調査事務所（東大阪市長田東）において、遺物の実測作業とトレース、図版作成、データ編集作業など、報告書作成にかかわる作業を実施した。

出土遺物は、登録番号に順じて洗浄し、注記を行った。注記を終えた遺物は、接合復元し、彩色を施した（写真２－２）。また、残存状態が良好なものや重要なものについては、実測図を作成し（写真２－３）、写真撮影を行った後、報告書に掲載した。

現場で作成した遺構図と土層断面図に関しては、原図をスキャナーによって画像データとしてとりこみ、コンピュータ画面上でデジタルトレースを行った（写真２－４）。これに用いたコンピュータソフトは、adobe 社製 IllustratorCS2 である。また、出土遺物に関しては、手書きによるトレースを行った。これら一連の作業によって得られたデータは、コンピュータ入力によって記録した。

整理作業は、以上の工程を経た後、本報告書の刊行をもって完了した。

【参考文献】

川瀬貴子　2007 「第３章　総括　第２節　植松遺跡の位置づけ」『（財）大阪府文化財センター調査報告書第 164 集　八尾市植松遺跡　大阪府営八尾植松（第１期）住宅（建て替え）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人大阪府文化財センター　P.127-136

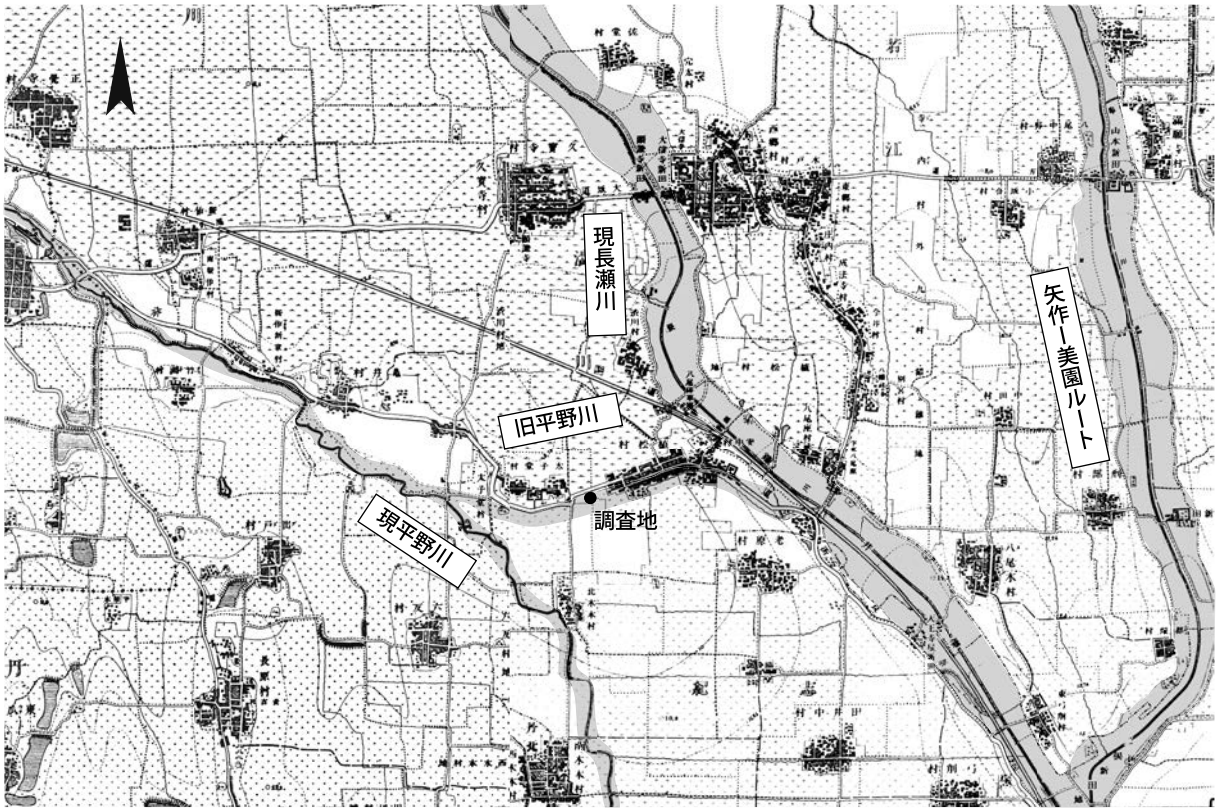
第２章　調査地周辺の地理と環境

第１節　調査地周辺の地理と地形

植松遺跡が所在する八尾市は、大阪平野の東部に位置している。南に大和川、東に奈良県との境である高安山を始めとした生駒山地、西側に上町台地と大阪湾を臨むため、南東部がわずかに高く、北西へ向かって緩やかに傾斜する地形上に立地する。

大和川は、宝永元年（1704）に付け替えが行われるまでは、現在の長瀬川・玉櫛川・恩地川付近を北上して流れており、早くから流域一帯に多量の土砂を供給してきた。現長瀬川左岸にあたる植松遺跡もその範囲に含まれており、度重なる洪水と湿地化した泥土の堆積が土壌を発達させ、現在に至る。

河内平野低地部の河川の変遷については､阪田育功氏の研究がある〔阪田 1997〕。氏の論考によると、弥生時代後半から古墳時代前期頃、旧大和川は、現石川と現大和川の合流地点である柏原市片山町付近から、北北西に延びていたとされる。古墳時代中期に旧大和川の本流を固定する工事が行われると、長瀬川は旧大和川の一支流として久宝寺の北側を通るようになる。古墳時代後期には、長瀬川の本流は八尾市矢作から美園町へ抜ける「矢作－美園ルート」を通るようになり、これと同時に八尾市相生町から現平野川へ抜ける「旧平野川」が形成される。古代になると旧平野川が長瀬川の本流となるが、９世紀には廃絶し、10 世紀には、相生町から八尾市佐堂へ抜ける「現長瀬川ルート」が形成され始める。14 世紀以降になると、築堤により長瀬川の本流が固定されたため、東を流れる楠根川は、長瀬川と分離し



明治 18 年測量大日本帝国陸地測量部作成地形図「天王寺」「八尾」に
川瀬貴子　2007『植松遺跡』（財）大阪府文化財センターを参照として作成

0　(1:20,000)　1km

第４図　調査地周辺の旧地形および旧河道復元図

て独立し、さらに東側を流れる玉串川とともに三川が並走するに至ったと考えられる。

植松遺跡の周辺をみると、古墳時代後期から形成され始めた旧平野川が調査地付近を通ると推定されている。今回の調査では、古墳時代後期から平安時代にかけて洪水砂の堆積が認められたこと、また、平成 17 年度の調査では、さらに大規模な洪水痕跡が確認されていることから、旧平野川に関する阪田氏の論は実証されたといってよい。

なお、これら河川の状況は、周辺の地割にも影響を及ぼしている。条里地割の復元は、植松地域以南および以西では試みられているものの、植松周辺へは及んでいない。現在、調査地周辺では、北東－南西方向に主軸をもつ地割が形成されており、これは長瀬川沿岸付近の地割方向と合致している。このことから、当地の開発は、長瀬川の安定が大きく作用していること、また、正方位に即した条里制が敷かれた周辺地域とは、その開発に時期差のあることが窺える。

第２節　文献史料に見る調査地周辺

「植松」という地名は、『僧都覚有一跡配分目録』（永徳二年（1382））に、「同国植松慶満阿闍梨跡旦那」の一文があることから、中世後半にはすでに成立していたことがわかる。それ以前では、「渋川（河内国渋川郡）」という地名が、この一帯を指すものとして史料に表れる。

『日本書紀』崇峻天皇前紀には、物部大連守屋の本拠地が「河内国澁河」にあり、物部氏と蘇我氏の戦いが繰り広げられた場所として記されている。植松遺跡の南側を通る奈良街道は、早くから大和と難波を結ぶ主要ルート（亀瀬街道）であることから、植松遺跡周辺は物部氏が本拠地を営むにふさわしい土地柄であると目されてきた。長瀬川の対岸に残る「矢作」「弓削」の地名が、物部氏の同族である矢作連、弓削連に由来することも、この説を補強している。

物部宗本家滅亡後、渋川は蘇我氏もしくは天皇家が所管したと推測される。平城京跡より出土した長屋王家木簡には「渋川御田侍奴末麻呂食封」の文字があり、長屋王家が御田を「渋川」に持つことが確実視された。長屋王母である御名部皇女が蘇我氏を母にもつことから、長屋王木簡が指す「渋川」は、旧物部領の澁河である可能性が高い。植松遺跡周辺を含む渋川の地は、律令期以前より、有力豪族や大和政権と深いかかわりがあったことが窺える。

中世初頭になると、『岩清水文書』『真観寺文書』『慈願寺文書』などの記録から、古長瀬川と古平野川に挟まれた現在の植松から久宝寺、加美にかけての地域は、橘島と呼称されていたことが知られている。室町時代には畠山氏の所領となるが、周辺では戦乱が続き、応仁の乱を経て戦国時代へと突入する。当該地周辺の集落である若江、萱振、東郷、亀井などでは、自衛を目的とした防御性の高い集村形態が発達した。また、八尾、萱振、久宝寺など、浄土真宗寺院を中心とした寺内町が形成された。その集落形態は現在まで続いている。

近世になると、植松周辺地域は、大坂城下町で消費される生活物資を供給する生産地としての性格が色濃くなる。『河内国渋川郡旧法事村当子年植附書上帳控』（宝暦六年（1756））には、八尾周辺が「久宝寺木綿」「八尾木綿」の生産地であり、村内耕作地のうち、綿の植え付け面積が約７割を占めていたことがみえる。この傾向は、上述した大和川付け替え以降、より顕著となる。水害の減少とともに生産性が向上したこと、加えてこの地域に適した島畠という田畑混在の耕作形態が、大きく作用したものと推測される。

第３節　調査地周辺の遺跡と調査成果

１．調査地周辺の遺跡

植松遺跡周辺の発掘調査は、近畿自動車道建設に伴う調査をはじめとして、数多く行われている。特に八尾市域の沖積低地では、土砂堆積が厚く埋蔵文化財の残存も良好であるため、隙間なく遺跡が広がる状況にある（第５図参照）。以下、時期ごとに示す。

旧石器時代・縄文時代草創期　調査地より南西２㎞の地点に位置する八尾南遺跡や、その北に位置する長原遺跡では、有舌尖頭器や石鏃の出土が認められる。但し、今のところその出土状況は点的であり、遺構の検出にまでは至っていない。

縄文時代　上町台地上では森の宮遺跡、生駒山地の扇状地上に馬場川遺跡、縄手遺跡が発見されている。森の宮遺跡では貝塚の検出があり、馬場川遺跡や縄手遺跡からは、土偶の出土が報告されている。

縄文時代は海水面の上昇とともに河内湾の形成が始まる時期であり、低地はほぼ水底に沈んだと考えられている。縄文時代前期末には、河口付近で砂州の発達が始まり、河内湾は徐々に淡水化の傾向をたどる。森の宮遺跡の貝塚から発見された貝相の分析では、集落の人々が、縄文時代には海水性の貝、弥生時代には淡水性の貝を捕食していたことが知られている。

弥生時代　河内湾の淡水化が進み、河内湖が形成される時期である。周辺地域では、平野部の自然堤防上に集落が営まれるとともに、本格的な水田開発が始まった。調査地より南東へ２㎞を隔てた田井中遺跡では、突帯文土器および弥生前期土器を有する集落が確認されている。南へ２㎞の位置に広がる木の本遺跡では、流路から前期中段階の土器や木器が多量に出土した。木器には直柄鍬の未成品が含まれており、集落内で細部を加工し、使用したことが推測される。なお、田井中遺跡に東接する志紀遺跡では、水田遺構が検出されていることから、この周辺一帯は、大阪府内でも比較的早い段階において水田開発を手がけた地域であったと理解される。

弥生時代中期には集落数が増加し、河内平野では鬼虎川遺跡、亀井遺跡、瓜生堂遺跡など拠点的な集落が繁栄をみせる。微高地には集落のほか墓域が作られ、低地では水田経営が盛んに行われた。

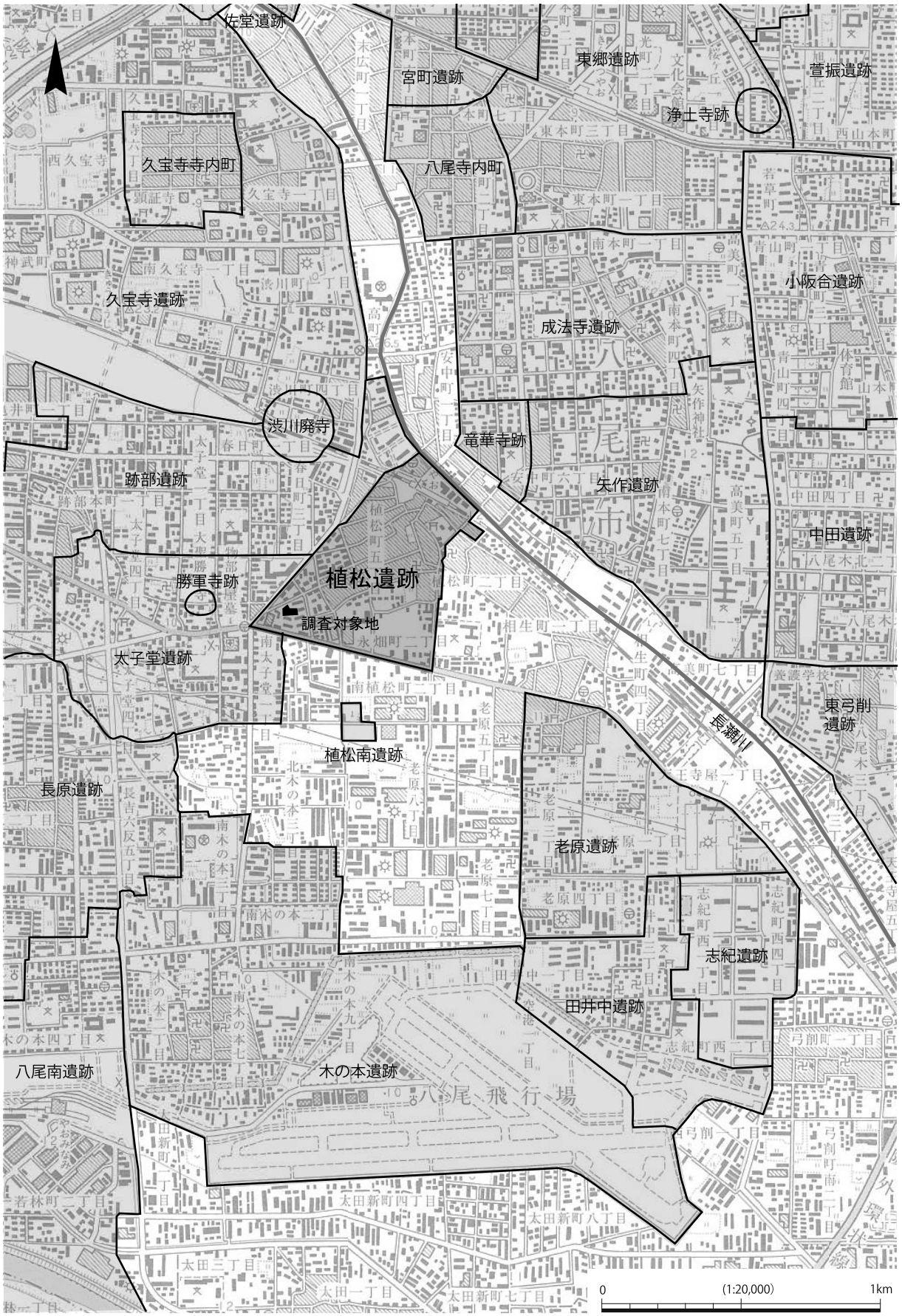
弥生時代後期になると、河内平野では環境が不安定となり、集落の規模は縮小する傾向にある。八尾南遺跡では、弥生時代後期前半の集落が洪水砂に埋没した状態で確認された。平成 14 ～ 16 年に行われた調査では、周堤や建築材を残したままの状態で竪穴住居が検出され、建物の上屋構造を知る上で貴重な発見となった。また、調査地の北西に広がる跡部遺跡では、扁平紐式流水文銅鐸が埋納された状態で出土しており、集落の習俗を窺うことができる。

古墳時代　河内湖が縮小して河内潟となる時期である。河内では、集落の数が爆発的に増加する。

調査地北西に位置する久宝寺遺跡では、古墳時代初頭の集落および前方後方墳を含む墓域が確認されている。集落内からは、準構造船とみられる木材が出土し、当時の木工技術の高さを現代に示した。また、調査地より北東２㎞に位置する小阪合遺跡では、集落内の溝よりシカと船が描かれた手焙り形土器が出土した。当該地域において船を用いた交易が盛んに行われていた状況を窺い知ることができる。

古墳時代中期も引き続き平野部では集落が存続する。特に金属製品や馬匹生産など、渡来系技術の積極的な導入がより顕著となる。生駒山西麓で大規模な古墳の築造が続く中、調査地周辺では長原古墳群など小規模な方墳を主体とする古墳群が展開される。

古墳時代後期になると、河内平野では集落規模が縮小し、分散化の傾向を見せる。平野部に広く集落



国土地理院平成14年６月１日発行「大阪東南部」を拡大加筆

第５図　周辺の遺跡分布図

および生産域が営まれ、山麓に古墳群が築かれるなど、地形による集落のあり方が異なるようである。調査地周辺では、この頃から洪水砂の堆積が始まり、不安定な環境下にあったと考えられる。

古代　大和地域と難波津を結ぶ交通の要所である中河内地域は、先進的な渡来文化を受容する地域として、発展を遂げた。調査地西に隣接する跡部遺跡と太子堂遺跡には、当該時期の集落が連続して広がっていた可能性が高い。特に太子堂遺跡からは、奈良時代前半期の土器棺墓、船材転用の井戸、土坑、溝などの遺構が、転用硯や墨書土器などの遺物とともに確認されており、文字を用いる知識層の起居が想定される。

平安時代初頭には、植松遺跡 05 － 1 調査で出土した墨書土器が語るように、律令的な祭祀を行う集落が周辺に存在したことが知られている。植松遺跡内では、調査地より南東 0.3km の地点において、奈良時代後半から平安時代に営まれた集落が確認されており、その候補として目される。

このほか、調査地より北へ 0.6㎞隔てた地点に位置する渋川廃寺や、北東へ 1 ㎞隔てたところに位置する竜華寺跡などの寺院遺跡が存在することから、早い段階から仏教文化を受容した地域であったことが窺える。渋川廃寺の調査では、基壇、整地層が確認され、多量の瓦が出土した。

中世・近世　大規模な河川の氾濫が、平安時代まで存続した周辺集落を廃絶させたようである。河川の氾濫が一時収束した鎌倉時代、調査地周辺は、生産地として再開発が手がけられた。

植松遺跡では、調査地から南東へ 0.3㎞程度の地点を中心として、集落が形成されている。調査地の西には、聖徳太子信仰のもと、勝軍寺が建立された。農地の整備も盛んにおこなわれ、中世以降、周辺地域は水田と島畠が広がる景観が続いたと推測される。

２．既往の調査成果

植松遺跡及び隣接する太子堂遺跡、跡部遺跡、植松南遺跡では、当センターのほか、大阪府教育委員会や八尾市教育委員会、財団法人八尾市文化財調査研究会等により、これまでにも多くの調査が行われている（第６図）。その詳細は、前掲〔川瀬 2007〕に詳しいが、ここでは、近年の情報を加えるとともに、今回の調査において重視される古墳時代前期以前の情報を、特に抽出しておきたい。

植松遺跡（調査会 UM92-1）　遺構面は検出されていないが、T.P.+6.5 ～ 7.0 m付近において弥生時代中期の包含層が、T.P.+8.0 m付近で古墳時代前期の包含層が確認されている。北側に設定された第 1 調査区では、弥生時代中期後半の土器片が一定量確認されており、居住域の存在が想定されている。また、T.P.+5.0 ～ 5.5 m付近では、弥生時代前期に相当すると考えられる土壌の堆積が報告されている。なお、この調査区では、植松地域に横臥した旧平野川の洪水砂堆積が認められていない。〔高萩 1993a〕

植松遺跡（調査会 UM93-3）　T.P.+6.3 m付近で弥生時代前期の包含層、T.P.+6.6 ～ 7.2 m付近で古墳時代前期（庄内式新相～布留式古相）の包含層が確認されている。その下面では、溝および落込みが検出された。なお、上層面では、旧平野川による奈良時代遺構面の侵食が確認されており、その南側汀線を推測することができる。〔川瀬 2007 参照 p.127〕〔高萩 1997〕

植松遺跡（調査会 UM95-4）　T.P.+6.5 m付近において、土坑と溝を伴う弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式新段階）の遺構面が確認された。その上位には、0.5 m程度を測る弥生時代中期の包含層が、さらにその上位には弥生時代後期～古墳時代と推測される粘土と砂の互層がある。T.P.+8.6 m付近では、奈良時代の遺構面が確認されているが、古墳時代前期の遺構面に関する報告はない〔岡田 1999〕。

植松遺跡（調査会 UM98-7）　T.P.+6.0 m付近で弥生時代前期～中期の包含層と目される黒灰色粘土層

が確認されている。ただし、遺構面の検出には至っていない。上層では、T.P.+8.5 m付近において、土坑を伴う奈良時代の遺構面が確認されている〔高萩 2000〕。

植松遺跡（府教委 2002） 古墳時代の洪水砂層と古墳時代前期（布留式）の遺構面が確認されている。川底は、T.P.+6.0 m付近にあり、その上には 1.5 mの厚さを測る砂層が堆積する。報告文では、旧大和川の氾濫堆積であると推定されているが、周辺にて確認されている旧平野川の洪水砂（古墳時代後期～平安時代前期）より、はるかに時期が古い。川底に堆積する粘土層からは、布留式土器のほか、勾玉が１点出土した。また、トレンチ掘りによる下層確認では、T.P.+2.0 mまでの間に 4 層分の黒色粘土層の堆積が確認された〔泉本ほか 2002〕。

植松遺跡（センター 05 － 1） 古墳時代以前の遺構面および包含層の大半が、旧平野川の氾濫によって大きく削り取られている。T.P.+6.5 m付近では、調査区の一部で川の南岸が確認された。その下層では、T.P.+6.2 mのレベルで弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構面が検出されている。なお、旧平野川の氾濫堆積中からは、韓式土器や墨書土器、ミニチュア土器などが出土した。〔川瀬 2007〕

植松南遺跡（調査会 UMS97-1） 植松遺跡の南に位置する南植松町内の調査である。T.P.+7.0 m付近で庄内～布留式期の遺構面が確認されている。検出遺構は、土坑８基、ピット 25 基、溝９条を数えており、居住域が存在した可能性が高い。〔森本 1998〕

なお、この調査に先立つ「八尾市教育委員会 96-641」の試掘調査では、南側に設定した調査区において、奈良時代以降の大規模な洪水痕跡が報告されている〔藤井 1997〕。また、この調査区の北側に設定された「植松南遺跡 UMS99-2 調査」区では、古墳時代前期包含層の上下で洪水砂が確認されている。この周辺にも旧平野川のような埋没河川が存在する可能性が高い〔成海 2001〕。

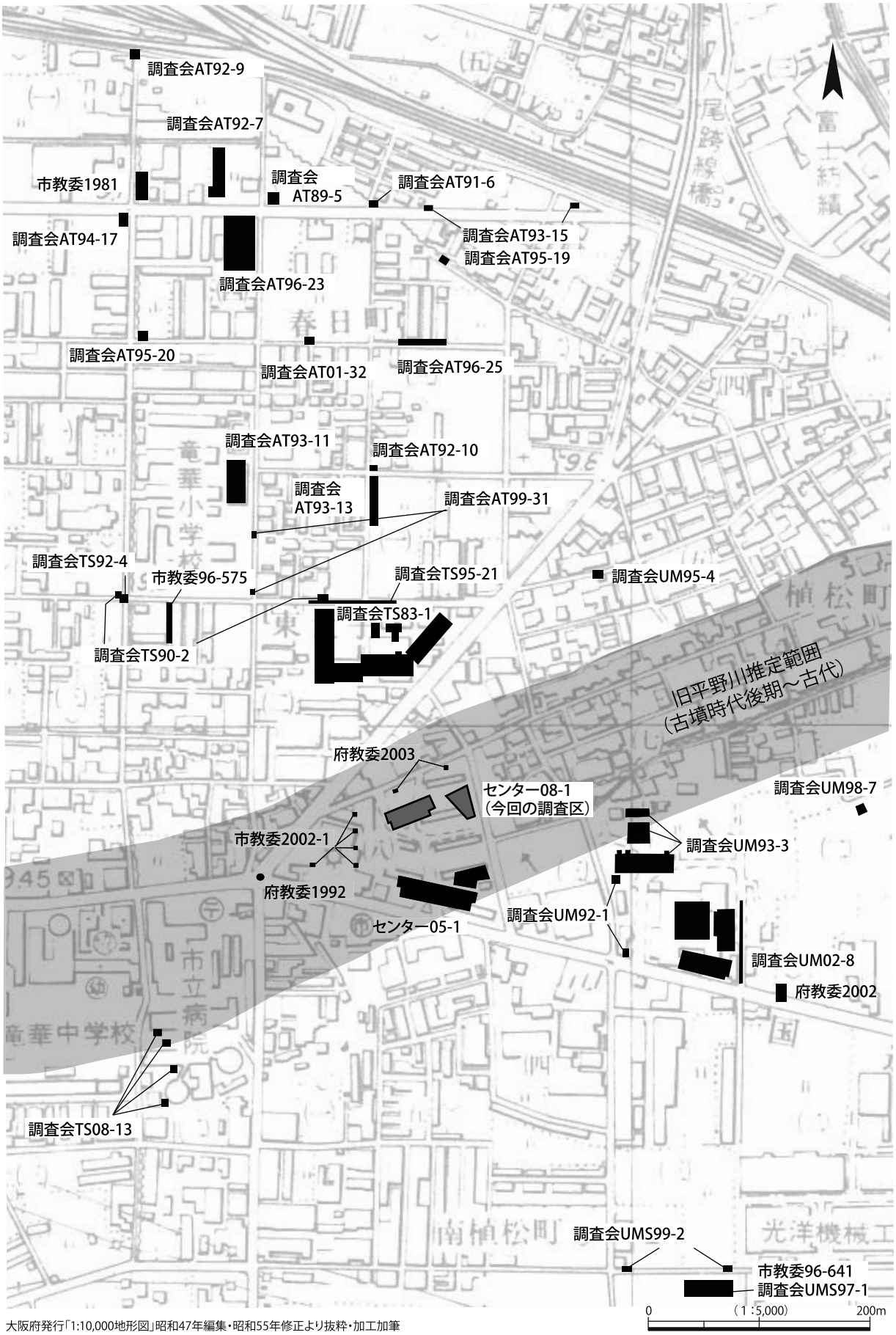
跡部遺跡（調査会 AT89-5） 弥生時代後期の土坑から埋納された銅鐸が出土し、後に「跡部銅鐸」として学史に残る報告となった調査である。弥生時代後期～古墳時代前期（布留式）の遺構面が、T.P.+6.7 ～ 6.8 m付近で検出されており、その下層には、T.P.+6.1 ～ 6.5 mに弥生時代中期初頭の包含層、さらにその下層には、T.P.+5.0 ～ 6.0 m付近に弥生時代前期新段階の包含層が存在する。弥生時代後期～古墳時代前期の遺構面では、銅鐸埋納土坑のほか、庄内式新相～布留式古相の土器を伴う方形にめぐる溝状遺構が検出されている。〔安井 1991〕

跡部遺跡（市教委 1981） T.P.+6.5 m付近で古墳時代前期の遺構面を、T.P.+6.0 m付近で弥生時代前期～中期の遺構面が検出されている。古墳時代前期の遺構面では、周溝墓状の盛土とともに木棺と人骨の一部が発見され、周辺が墓域であったことが推定されている。弥生時代前期～中期の遺構面では、溝２条が確認された。〔高木 1983〕

跡部遺跡（調査会 AT91-6） 土坑を伴う古墳時代前期の遺構面を T.P.+6.9 m付近で検出した。遺構内からは、布留式古相の遺物が出土している。また、T.P.+6.4 ～ 6.6 m付近では、弥生時代前期の包含層が確認された。〔高萩 1992〕

跡部遺跡（調査会 AT92-7） T.P.+6.9 m付近で弥生時代後期～古墳時代初頭（庄内式古段階）の遺構面が検出されている。遺構面では弥生時代後期の自然流路（溝？）が１条確認された。また、T.P.+6.5 ～ 6.9 mには弥生時代中期の包含層が存在する。ただし、当該期の明確な遺構は確認されていない。〔原田 1993〕

跡部遺跡（調査会 AT92-10） 弥生時代の遺構面が計 4 面検出されている。T.P.+7.4 m付近で弥生時代後期後半（第１面）、T.P.+7.1 m付近で弥生時代後期前半（第２面）、T.P.+6.7 m付近で弥生時代中期後



大阪府発行「1:10,000地形図」昭和47年編集・昭和55年修正より抜粋・加工加筆

第６図　既往の調査地位置図

半（第３面）、T.P.+6.1 m付近で弥生時代前期末～中期初頭（第４面）の時期差を確認することができる。このうち、第１・第３・第４面では溝状遺構が検出されている。特に第１面の溝埋土からは、銅鏃が１点出土し、注目を集めた〔西村 1997〕。

跡部遺跡（調査会 AT93-11） T.P.+6.5 m付近で弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構面を、T.P.+6.3 m付近では弥生時代後期前半の遺構面を、 T.P.+5.6 m付近では、弥生時代中期の遺構面を確認した。各遺構面において溝やピットが検出されており、居住域に相当すると報告されている。集落のピークは弥生時代中期前葉（畿内第Ⅱ様式）～中葉（畿内第Ⅲ様式）にあり、一旦廃絶した後、再び弥生時代後期に開発が始まるようである。その後、流路が形成されはじめ、古墳時代前期（布留式古相）には周辺一体が埋没すると推測されている〔成海 1997a〕。

跡部遺跡（調査会 AT93-15） T.P.+7.0 m付近において古墳時代前期（布留式古相）の遺構面が検出されている。遺構面では土坑１基が確認されており、埋土上層からは古墳時代前期（布留式古相）の遺物が、下層からは、弥生時代後期末に比定される土器類がまとまって出土している。また、T.P.+4.5 ～ 5.8 mには洪水砂の厚い堆積があり、報告書では周辺の状況から弥生時代前期の埋没河川である可能性を示している。また、T.P.+3.5 m付近では、縄文時代晩期と推定される自然流路が確認された〔岡田 1997〕。

跡部遺跡（調査会 AT94-17） T.P.+6.8 m付近において古墳時代前期遺構面が、T.P.+6.2 ～ 6.4 m付近において、弥生時代前期の遺構面が検出された。後者では、落込みと小穴が確認されており、このうち小穴の埋土からは、弥生時代前期新段階に属する壷、甕の破片が出土した〔成海 1997b〕。

跡部遺跡（調査会 AT95-19） T.P.+7.4 m付近において弥生時代後期末から古墳時代初頭の包含層が確認されている。弥生時代前期～中期の包含層は確認されていない〔坪田 1996〕。

跡部遺跡（調査会 AT95-20） T.P.+6.7 m付近において、土坑および杭列を伴う弥生時代後期～古墳時代前期（庄内式新相）の遺構面が検出された。T.P.+5.5 ～ 6.3 mでは、弥生時代前期～中期の包含層が確認されたが、明確な遺構は検出されていない〔高萩 1996〕。

跡部遺跡（調査会 AT96-23） T.P.+7.1 ～ 7.5 m付近において、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構面を検出した。同一遺構面ではあるが、弥生時代後期、庄内式古相～新相期、布留式古相期の各時期に帰属する遺構が確認されている。弥生時代後期では土器を多量に含む流路が、庄内式古相段階では溝、土坑、ピット等がまとまって検出されており、当該時期には居住域であったと判断されている〔原田 2004〕。

跡部遺跡（調査会 AT01-32） T.P.+7.2 m地点において、古墳時代前期（布留式古相）の遺構面を検出した。遺構面では、溝や土坑が検出されている。その下層には、先行する埋没河川が存在する。

T.P.+6.8 ～ 7.2 m付近では、弥生時代中期前半の遺物を含む盛土層が検出されている。この盛土上面から、弥生時代中期末の土器棺をもつ墓壙が掘り込まれている。このため、その基盤層となる中期前半の盛土についても、墓に伴う施設としての可能性が示されている。また、その下層にあたる T.P.+6.5 m付近では、土坑を伴う弥生時代前期の遺構面が確認されている。〔岡田 2003〕

太子堂遺跡（調査会 TS83-1） T.P.+7.6 ～ 7.9 m付近において、井戸や柱穴、落込みを有する奈良時代の集落跡を確認し、さらにその下層（T.P.+7.2 m前後）において、古墳時代の遺物包含層が確認されている〔原田・成海編 1984〕。

太子堂遺跡（調査会 TS90-2） T.P.+7.1 m付近にて古墳時代前期の遺構面が確認されている。井戸１基、土坑３基、溝１条が検出されており、遺構埋土及び包含層内からは、布留式土器がまとまって出土して

いる〔坪田 1990〕。

太子堂遺跡（調査会 TS92-4） T.P.+6.5 mにおいて古墳時代前期（庄内式新相）の遺構面を検出した。但し、包含層からは布留式新相の遺物も若干量出土している。遺構面では、落込みとピットが検出された〔高萩 1993b〕。

太子堂遺跡（調査会 TS08-13） 計 4 箇所の調査区のうち、北側の調査区（１区・２区）の T.P.+8.0 m付近において、飛鳥時代前半期の溝や流路を伴う遺構面が確認されている。その下層には、洪水砂と炭化物を含む粘土層が存在する。この粘土層は、T.P.+7.0 m付近まで連続する〔坪田 2009〕。

以上の調査報告からは、以下のことが看取される。

①弥生時代前期の遺構面は、跡部遺跡の北半部と植松遺跡の一部において確認されている。検出レベルは T.P.+5.5 ～ 6.6 mを測る。標高は、東に向かい徐々に低くなるようである。跡部遺跡では、集落の存在を示唆する遺構の検出があるが、植松遺跡内では明確な遺構の検出例がない。

②弥生時代中期の遺構面や包含層は、植松遺跡、跡部遺跡内で確認されているが、ともに東部では希薄である。また、植松南遺跡、太子堂遺跡では、報告例がない。

③植松遺跡、植松南遺跡、跡部遺跡、太子堂遺跡の既往の調査では、T.P.+6.5 ～ 7.5 mのレベルにおいて、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構面が検出されている。このうち、調査区より北方 0.5㎞までの範囲と植松南遺跡では、検出レベルが T.P.+7.1 ～ 7.4 mと高く、遺構の検出も顕著である。

④古代の遺構面は、植松遺跡および太子堂遺跡内で確認されている。標高は、T.P.+8.0 ～ 8.5 mを測る。

上記のとおり、既往の調査成果からは、調査地周辺に弥生時代前期から古代までの遺構面が広がる可能性が考えられた。しかし、今回の調査区に近接するセンター 05 － 1 の調査では、これらの遺構面をすべて旧平野川が削平したと推定されており、今回の調査では、その残存状況が注目された。

【引用・参考文献】

泉本知秀・山田隆一　2002「植松遺跡」『中田遺跡他発掘調査報告～寝屋川流域下水道事業に伴う～』大阪府教育委員会

岡田　清一　1997「Ⅲ跡部遺跡（第 15 次調査）」『八尾市文化財調査研究会報告』58　（財）八尾市文化財調査研究会

岡田　清一　1999「Ⅰ植松遺跡（第 4 次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告』63　（財）八尾市文化財調査研究会

岡田　清一　2003「Ⅰ跡部遺跡（第 32 次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告』76　（財）八尾市文化財調査研究会

川瀬　貴子　2007「第３章　総括　第２節　植松遺跡の位置づけ」『（財）大阪府文化財センター調査報告書第 164 集　植松遺跡　大阪府営八尾植松（第 1 期）住宅（建て替え）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人大阪府文化財センター

阪田　育功　1997「河内平野低地部における河川流路の変遷」『河内古文化研究論集』和泉書院

高木　真光　1983「第６章　跡部遺跡（春日町 1 丁目 57 番地）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981 年度』八尾市教育委員会

高萩　千秋　1992「ⅩⅢ跡部遺跡（第６次調査）『（財）八尾市文化財調査研究会報告』34（財）八尾市文化財調査研究会

高萩　千秋　1993a「ⅩⅥ植松遺跡（第１次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告』39　（財）八尾市文化財調査研究会

高萩　千秋　1993b「ⅩⅦ太子堂遺跡（第４次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告』39　（財）八尾市文化財調査研究会

高萩　千秋　1996　「ⅩⅢ跡部遺跡（第 20 次調査）『（財）八尾市文化財調査研究会報告』53　（財）八尾市文化財調査研究会

高萩　千秋　1997　「Ⅰ植松遺跡（第３次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告』59　（財）八尾市文化財調査研究会

高萩　千秋　2000　「Ⅳ植松遺跡（第７次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告』65　（財）八尾市文化財調査研究会

坪田　真一　1990　「18 太子堂遺跡第２次調査（TS90-2）」『平成２年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会

坪田　真一　1996　「Ⅰ跡部遺跡（第 19 次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告』53　（財）八尾市文化財調査研究会

坪田　真一　2004　「Ⅱ太子堂遺跡（第 13 次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告』128　（財）八尾市文化財調査研究会

成海　佳子　1997a「Ⅱ跡部遺跡（第 11 次調査）」『八尾市文化財調査研究会報告』58　（財）八尾市文化財調査研究会

成海　佳子　1997b「Ⅴ跡部遺跡（第 17 次調査）」『八尾市文化財調査研究会報告』58　（財）八尾市文化財調査研究会

成海　佳子　2001　「植松南遺跡第２次調査（UM99-2）」『八尾市文化財調査研究会報告』67　（財）八尾市文化財調査研究会

成海　佳子　2008　「植松遺跡第 10 次調査（UM2006-10）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告』113　（財）八尾市文化財調査研究会

西村　公助　1997　「Ⅰ跡部遺跡（第 10 次調査）」『八尾市文化財調査研究会報告』58　（財）八尾市文化財調査研究会

原田　昌光　1993　「Ⅰ跡部遺跡（第７次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告』39　（財）八尾市文化財調査研究会

原田　昌光　2004　「Ⅱ跡部遺跡（第 23 次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告』81　（財）八尾市文化財調査研究会

原田昌光・成海佳子編　1984　「４太子堂遺跡」『（財）八尾市文化財調査研究会報告５　昭和 58 年度事業概要報告』財）八尾市文化財研究調査会

藤井　淳弘　1997　「植松南遺跡（96-641）の調査」『八尾市内遺跡平成８年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市教育委員会

森本めぐみ　1998　「植松南遺跡第１次調査（UM97-1）」『平成９年度財団法人八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会

安井良三編　1991　『（財）八尾市文化財調査研究会報告 31　跡部遺跡発掘調査報告書　－大阪府八尾市春日町１丁目出土銅鐸－』（財）八尾市文化財調査研究会

第３章　調査成果

第１節　基本層序

今回の調査において確認した土層の基本層序を第７図に、断面実測図を第８・９図に示す。

調査地の現地表高は T.P.+10.20 ～ 10.29 mである。以下掘削するごとに層番号を付し、層序の下面において遺構面の番号を付した。このため、第１層を除去した段階で検出した面が第１遺構面となる。

盛土・整地土・旧耕作土　近現代の盛土および整地土、旧耕作土に相当する。現府営住宅の建設に伴う基礎や水道管、ガス管、貯水槽などの埋設工事により、下層を深く撹乱する箇所がある。特に、第５棟住宅の跡地にあたる 08 － 1 － 1 区中央部や、貯水槽跡にあたる 08 － 1 － 2 区北辺には、大規模な撹乱が認められた。

第１層　近世相当層である。灰色細砂まじりシルトを主体とする。08 － 1 － 1 区では 0.3 m程度、08 － 1 － 2 区では 0.2 m程度の層厚を測る。08 － 1 － 1 区では、より砂質度が高い第１－１層とやや粘性が強い第１－２層に細分することできる。

08 － 1 － 2 － 1 区では、機械を用いてこの層を掘り進めたところ、調査区東南隅に高まり状の遺構を確認した。このため途中より人力に切り替え、掘削作業を行った。層内からは、常滑焼、瀬戸・美濃焼などの施釉陶器のほか、染付、真鍮製の煙管などが出土した。時期は、18 世紀以降である。

第２層　中世末～近世初頭包含層である。暗灰黄色細砂まじりシルトを主体とする。管状斑鉄の形成が顕著に認められる。層厚は 08 － 1 － 1 区、08 － 1 － 2 区ともに 0.2 m前後を測る。下層の洪水砂が盛り上がる 08 － 1 － 2 区では、やや砂質度が高い。この層を除去したところ、鋤溝や畝群を検出した。このため、耕作土であると考えている。層内からは、瓦質土器火鉢、施釉陶器、磁器等が出土した。時期は、14 ～ 16 世紀である。

第３層　中世後期包含層である。粘土質の高いオリーブ褐色シルトに黄灰色シルトブロックが入る。鉄分の沈着が顕著であるため、やや褐色味が強い。08 － 1 － 2 区北辺部では薄層であるが、08 － 1 － 2 区の南辺や 08 － 1 － 1 区では 0.1 m程度の層厚を測る。この層を除去したところ、階段状に整形された水田跡を確認しており、同じく耕作土であると推測される。層内からは、土師器羽釜、瓦器椀、白磁碗、土師器皿、付木、馬歯、表面に縄目をもつ平瓦等が出土した。時期は、概ね 13 ～ 14 世紀である。

第４層　中世前期包含層である。08 － 1 － 2 区南半部と 08 － 1 － 1 区の低地では、オリーブ灰色を呈する粘土が 0.15 mの層厚をもって堆積する。この部分では、管状斑鉄の形成が顕著である。

一方､08 － 1 － 2 区北辺の微高地上では､黄灰色細砂まじりシルトを主体とする砂質土で構成される。層厚は 0.05 m未満である。08 － 1 － 2 － 2 区中央部など、堆積が認められない箇所もある（この部分では、下層の洪水砂（第６層）が露出する）。第４層内からは、瓦器皿・椀、磁器、土師器皿などが出土した。時期は、13 世紀である。

第５層　中世初頭包含層である。第６層（砂層）直上に堆積するため、粗砂を多分に含む暗灰黄色シルトを主体とする。層厚 0.02 ～ 0.03 mの薄層として、08 － 1 － 1 区および 08 － 1 － 2 区南半部に堆積する。但し、08 － 1 － 2 区の第５遺構面では方向性を違える溝が検出されたこと、また、遺構の切り合いが確認されることから、第５層は一定の時間幅をもって堆積した後、上層からの撹拌によって削平されたと考えられる。層内からは、黒色土器椀、瓦器椀、土師器皿等が出土した。時期は、12 世紀

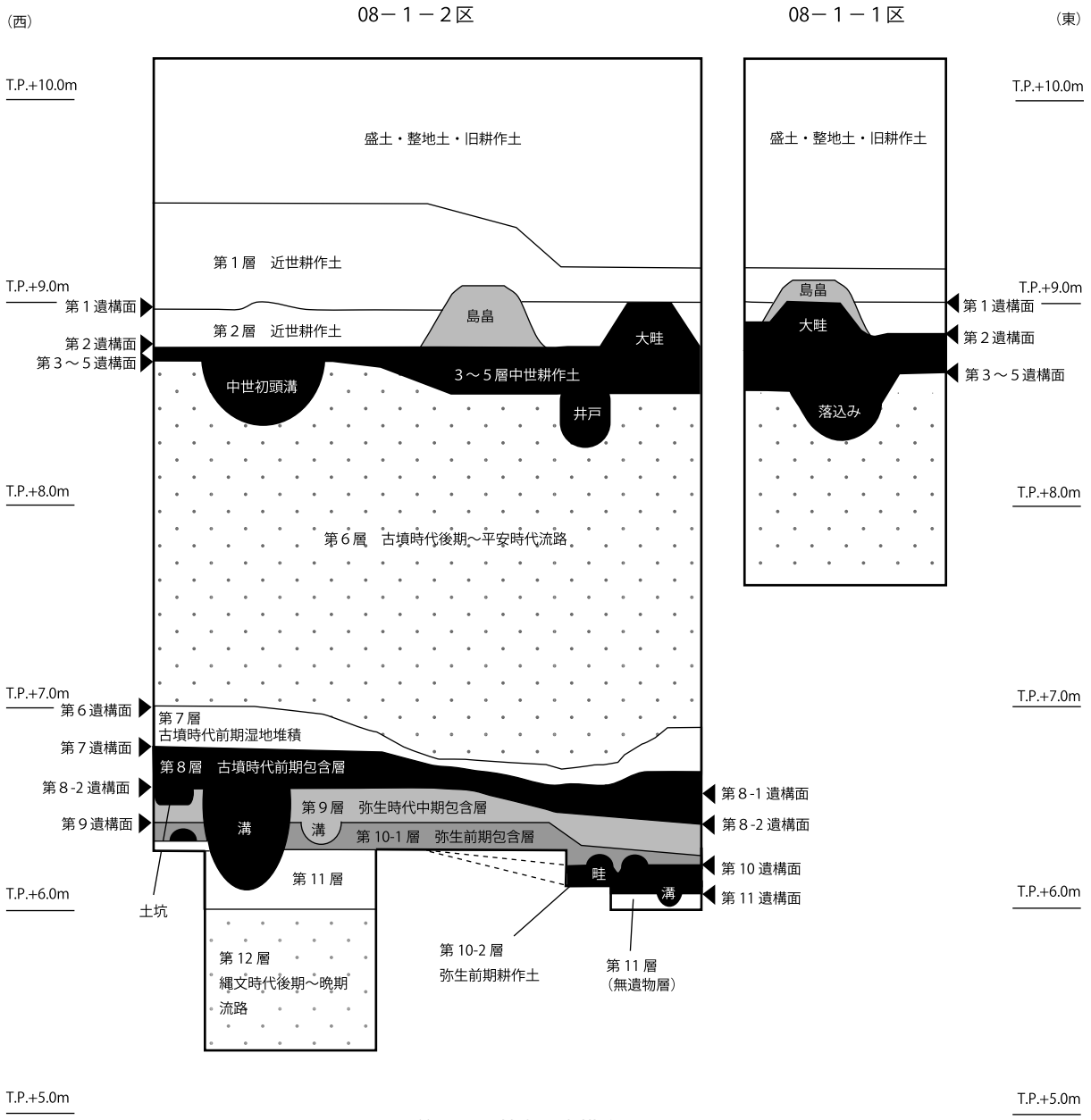
後半～ 13 世紀と推測される。

第６層　古墳時代後期～平安時代初頭に堆積した流路である。灰黄色を呈する粗砂～細砂が 1.5 ～ 1.8 mの厚さで堆積する。層内からは、古墳時代後期から平安時代初頭までの土師器・須恵器が出土した。今回の調査では、堆積状況から上・中・下の３層に分けて掘削したが、上・中・下層とも、出土遺物には、時期差がほとんど認められない。

第６層上層は、層厚 0.5 m程度を測る。横方向のラミナが顕著に認められ、直径１㎝程度の円礫が含まれている。下層に比べてしまりが良い。層内から出土する遺物は細片が多く､摩滅したものが目立つ。

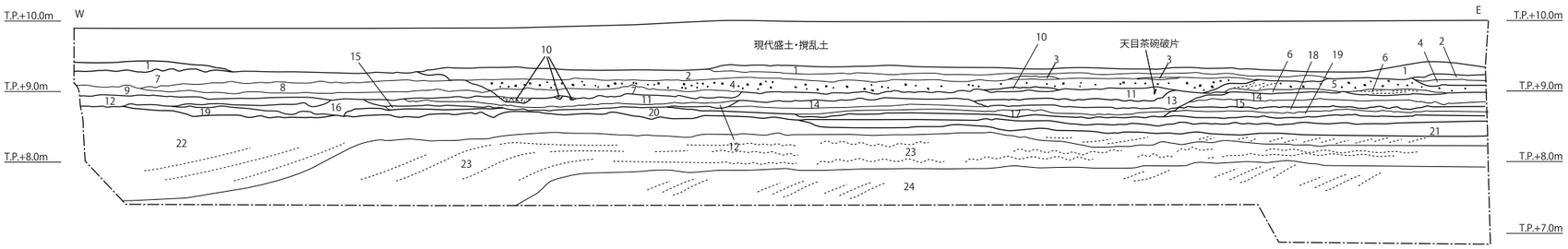
第６層中層は、層厚 0.8 m程度を測る。斜め方向に大きくうねるラミナが特徴的である。砂のしまりは悪く、部分的に微砂層を咬む。層内から出土する遺物は、大きな破片が目立つ。

第６層下層は、層厚 0.2 ～ 0.5 mを測る。横方向の弱いラミナが認められる。砂のしまりは悪い。遺物の出土量は上層に比べて多く、遺存状況も良好である。



第７図　基本層序模式図

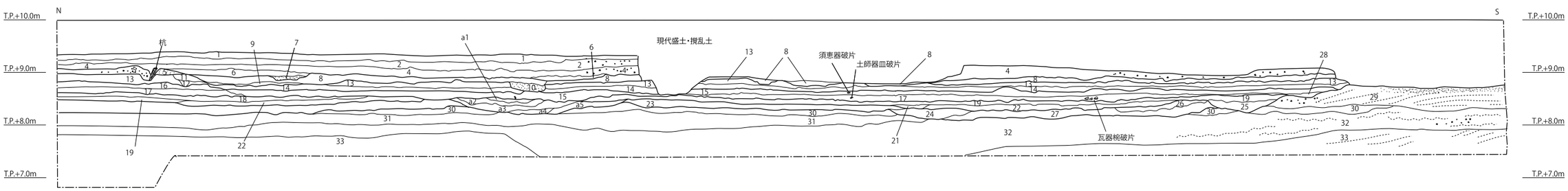
【08－１－１区北壁】



【08－１－１区北壁】

１）灰色	5Y4/1	細砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る　しまり悪い　（旧耕作土）
２）オリーブ黒色	5Y3/1	細砂まじりシルト　径2cm未満の礫少量入る　しまり悪い　（旧耕作土）
３）暗灰黄色	2.5Y4/2	粗砂まじりシルト　径2cm未満の礫少量入る　管状斑鉄形成　（旧耕作土）
４）暗灰黄色	2.5Y4/2	粗砂まじりシルト　径3cm未満の礫多量入る　しまり悪い　集水枡の影響により部分的に還元化　（整地土）
５）灰黄色	2.5Y6/2	粗砂～シルト　径3cm未満の礫多量入る　しまり悪い　斜め方向のラミナあり　鉄分沈着により褐色化　（61高まり）
６）黄褐色	2.5Y5/4-5/6	細砂～粗砂　水平方向のラミナあり　鉄分沈着　（61高まり）
７）暗灰黄色	2.5Y4/2	細砂まじりシルト　径1cm未満の礫少量入る　管状斑鉄沈着　（第１－１層）
８）オリーブ褐色	2.5Y4/3	細砂まじりシルト　径2cm未満の礫多量入る
暗灰黄色	2.5Y5/2	微砂ブロック10%程度入る　しまり悪い　管状斑鉄形成　（第１－１層）
９）暗灰黄色	2.5Y4/2	細砂まじり粘土質シルト　径3cm未満の礫少量入る　ややしまる　炭化物少量入る　土師器片入る　（第１－２層）
10)オリーブ褐色	2.5Y4/3	細砂まじりシルト～細砂　径1cm未満の礫少量入る　（１溝埋土）
11)オリーブ褐色	2.5Y4/3	粗砂まじり粘土質シルト　径0.5cm未満の礫少量入る
黄灰色	2.5Y4/1	細砂網の目状に入る　管状斑鉄沈着　マンガン粒入る　（第２層）
12)暗灰黄色	2.5Y5/2	粗砂まじりシルト　径1cm未満の礫少量入る　ややしまる　（土坑68・69埋土）
13)黄灰色	2.5Y4/1	細砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る　ややしまる　管状斑鉄形成　（第３層）
14)灰色	5Y4/1	細砂まじり粘土　径0.5cm未満の礫少量入る　軟質　鉄分沈着のため上位褐色化　（第３層）
15)オリーブ黒色	7.5Y3/1	粗砂まじり粘土質シルト　径1cm未満の礫少量入る　やや軟質　管状斑鉄形成　炭化物少量入る　（第３層）
16)暗灰黄色	2.5Y4/2	粗砂まじりシルト　径1cm未満の礫少量入る　（畦埋土）
17)灰色	10Y4/1	微砂まじり粘土　径2cm未満の礫少量入る　しまり良い　軟質　管状斑鉄形成　（第３層）
18)オリーブ灰色	10Y4/2	細砂～粗砂まじり粘土　径2cm未満の礫少量入る　しまりやや良い　軟質　管状斑鉄形成　（第３層）
19)オリーブ黒色	10Y3/1	粗砂まじり粘土　径2cm未満の礫少量入る　軟質　管状斑鉄形成　（第３層）
20)灰色	5Y4/1	粗砂まじり粘土質シルト　径2cm未満の礫少量入る　やや軟質　（第４層）
21)オリーブ黒色	7.5Y3/2	粗砂まじり粘土　径2cm未満の礫多量入る　しまり悪い　やや軟質　撹拌による下層の巻上げあり　（第５層）
22)灰色	7.5Y6/1-5/2	細砂　径2cm未満の礫少量入る　斜め方向のラミナあり　（第６層上層）
23)黄灰色～にぶい黄色	2.5Y6/1-5/2	礫まじり粗砂　径2cm未満の円礫多量入る　ややしまる　波状ラミナあり　鉄分沈着　（第６層上層）
24)灰色	7.5Y6/1-5/2	細砂　径2cm未満の礫少量入る　斜め方向のラミナあり　（第６層上層）

【08－１－１区東壁】



【08－１－１区東壁】

１）灰色	5Y4/1	細砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る　しまり悪い　（第１層）
２）オリーブ黒色	5Y3/1	細砂まじりシルト　径2cm未満の礫少量入る　しまり悪い　（第１層）
３）暗灰黄色	2.5Y4/2	粗砂まじりシルト　径2cm未満の礫少量入る　管状斑鉄形成　（第１層）
４）暗灰黄色	2.5Y4/2	粗砂まじりシルト　径3cm未満の礫多量入る　しまり悪い　集水枡の影響により部分的に還元化　（第１層）
５）灰黄色	2.5Y6/2	粗砂～シルト　径3cm未満の礫多量入る　しまり悪い　斜め方向のラミナあり　鉄分沈着により褐色化　（61高まり）
６）暗灰黄色	2.5Y4/2	粗砂まじり粘土質シルト　径1cm未満の礫少量入る　管状斑鉄形成　（第１層）
７）オリーブ褐色	2.5Y4/3	細砂まじりシルト～細砂　径1cm未満の礫少量入る　（１溝埋土）
８）暗灰黄色	2.5Y4/2	細砂まじりシルト　径1cm未満の礫少量入る　ややしまり悪い　管状斑鉄形成　（第２層）
９）暗灰黄色	2.5Y5/2	粗砂まじりシルト　径1cm未満の礫少量入る　ややしまる　（66土坑埋土）
10)暗灰黄色	2.5Y4/2	シルト～砂質シルト　径1cm未満の礫少量入る　しまり悪い　管状斑鉄形成　（２溝埋土）
11)オリーブ褐色	2.5Y4/4	シルト～粘土質シルト　管状斑鉄形成　マンガン粒入る　（第３層）
黄灰色	2.5Y5/1	シルトブロック10%程度入る
12)オリーブ褐色	2.5Y4/4	シルト～粘土質シルト　径1cm未満の礫少量入る　管状斑鉄形成　マンガン粒入る　11)層より砂質度高い　（第３層）
13)オリーブ褐色	2.5Y4/3	細砂まじりシルト　径1cm未満の礫少量入る　ややしまる　上位に鉄分沈着　（第３層）
14)オリーブ褐色	2.5Y4/4	細砂まじりシルト
黄灰色	2.5Y4/1	シルト網の目状に入る　径1cm未満の礫少量入る　（第３層）
15)灰オリーブ色	5Y4/2	粘土質シルト～粘土　径2cm未満の礫少量入る　鉄分沈着　（第３層）
灰オリーブ色	5Y5/2	微砂ブロック10%程度入る
16)黄灰色	2.5Y4/1	細砂まじり粘土質シルト 径1cm未満の礫少量入る　ややしまる　やや軟質　（第３層）
17)暗灰黄色	2.5Y4/2	粗砂まじりシルト　径2cm未満の礫少量入る　しまり悪い　鉄分沈着　（第３層）
18)黄灰色	2.5Y4/1	細砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る　（第４層）
灰黄色	2.5Y6/2	微砂ブロック50%程度入る　管状斑鉄形成
19)灰色	5Y4/1	粗砂まじり粘土質シルト　径2cm未満の礫少量入る　やや軟質　（第４層）
20)灰オリーブ色	5Y4/2	細砂まじりシルト
灰色	5Y5/1	粗砂ブロック30%程度入る　しまり悪い　（第４層）
21)灰オリーブ色	5Y4/2	粗砂まじり粘土質シルト
灰オリーブ色	5Y5/2	細砂ブロック30%程度入る　しまり悪い　径1cm未満の礫少量入る　（３溝埋土）
22)オリーブ黒色	5Y3/1	粗砂まじり粘土　径2cm未満の礫少量入る　軟質　管状斑鉄形成　（３溝埋土）
23)灰色～灰オリーブ色	5Y5/1-5/2	シルト質粗砂　径1cm未満の礫少量入る　しまり良い　（第５層）
24)灰色	5Y6/1-5/1	細砂～粗砂　径1cm未満の礫少量入る　斜め方向のラミナあり　（第５層）
25)暗灰黄色	2.5Y4/2	粗砂まじりシルト
暗灰黄色	2.5Y5/2	シルトブロック10%程度入る
灰黄色	2.5Y6/2	細砂ブロック10%程度入る　ややしまる　径1cm未満の礫少量入る　しまり悪い　（５溝埋土）
26)灰黄色	2.5Y6/2	細砂～粗砂　径1cm未満の礫少量入る　（第５層）
27)暗灰黄色	2.5Y4/2	粗砂まじりシルト
暗灰黄色	2.5Y5/2	シルトブロック10%程度入る
灰黄色	2.5Y6/2	細砂ブロック10%程度入る　径1cm未満の礫少量入る　下層粗砂ブロック40%程度入る
28)灰色	7.5Y4/1	微砂～粗砂まじりシルト　しまり悪い　鉄分沈着　（６溝埋土）
29)褐灰色～明黄褐色	10YR6/1-6/6	粗砂～細砂　下位に径2cm未満の円礫入る　ややしまる　斜め～水平方向のラミナあり　（第６層上層）
30)黄灰色～暗灰黄色	2.5Y5/1-5/2	シルト質粗砂～細砂　しまり良い　（第６層上層）
31)灰色～灰オリーブ色	7.5Y6/1-5/2	細砂　径2cm未満の礫少量入る　水平方向のラミナあり　（第６層中層）
32)黄灰色～黄褐色	2.5Y6/1-5/3	礫まじり粗砂～細砂　径3cm未満の礫多量入る　ややしまる　波状ラミナあり　（第６層中層）
33)黄灰色～にぶい黄色	2.5Y5/1-6/2	細砂　しまり悪い　斜め方向のラミナあり　（第６層上層）

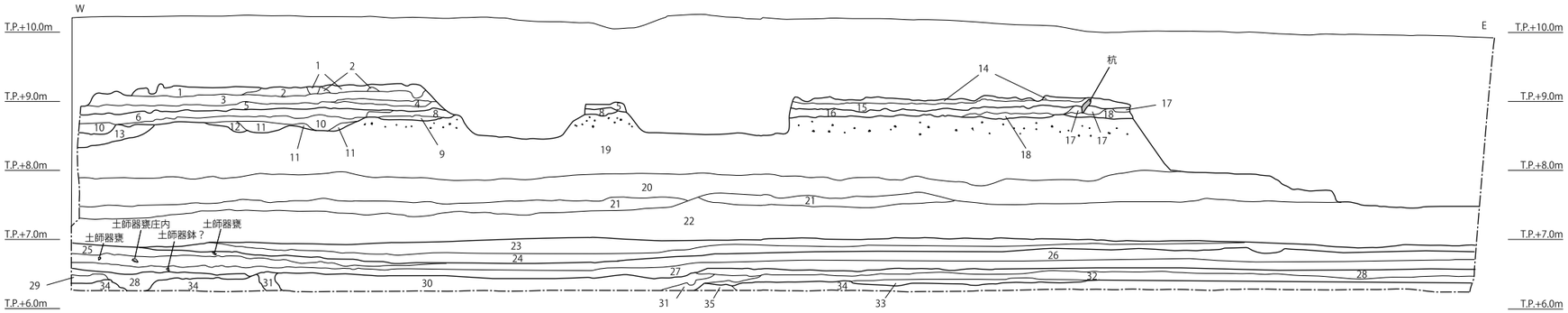
【４土坑埋土】

a1)灰色	7.5Y4/1	細砂まじり粘土　径2cm未満の礫少量入る　しまり良い　軟質　鉄分沈着
a2)灰オリーブ色	7.5Y4/2	細砂まじり粘土質シルト　径2cm未満の礫少量入る　ややしまり悪い　やや軟質　鉄分沈着
a3)黄灰色	2.5Y4/1	細砂まじりシルト
黄灰色	2.5Y6/1	細砂ブロック40%程度入る　しまり悪い　鉄分沈着　径1cmの礫少量入る
a4)黄灰色	2.5Y4/1	粗砂
黄灰色	2.5Y6/1	細砂ブロック50%入る
a5)灰色	7.5Y6/1-5/1	粗砂～細砂
灰色	7.5Y6/1-5/1	シルトブロック10%程度入る　ややしまる

0　(1:80)　4m

第８図　08－１－１区　壁断面図

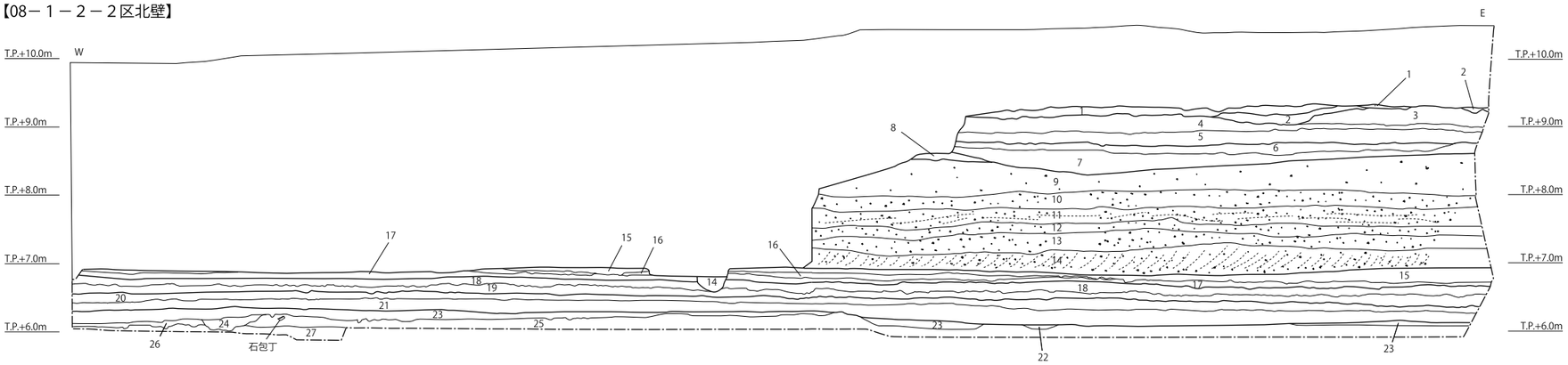
【08－１－２－１区北壁】



【第08－１－２－１区北壁】

1）オリーブ黒色　5Y3/2　粘土質シルト　径0.3cm未満の礫少量入る　ややしまる　管状斑鉄形成　（第１－１層）
2）黒色　2.5Y2/1　粘土質シルト　径0.5cm未満の礫少量入る　ややしまる　管状斑鉄形成　（第１－１層）
3）灰色　5Y4/1　粘土質シルト　径1cm未満の礫少量入る　しまりやや悪い　管状斑鉄形成　（第１－２層）
4）灰オリーブ色　5Y4/2　微砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る　しまり悪い　（第１－２層）
5）灰オリーブ色　5Y4/2　砂質シルト　径0.5cm未満の礫少量入る　しまり悪い　鉄分沈着　管状斑鉄形成　（第１－２層）
6）暗オリーブ灰色　5GY4/1　粘土
　灰色　7.5Y4/1　シルトブロック30%程度入る　径0.5cm未満の礫少量入る　管状斑鉄形成　（第２層）
7）オリーブ黒色　5Y3/2　細砂まじり粘土質シルト　径1cm未満の礫少量入る　ややしまる　鉄分沈着　（第３層）
8）暗オリーブ灰色　2.5GY4/1　シルトまじり粘土　下層粗砂ブロック10%程度入る　鉄分沈着　（第３層）
9）灰色　10Y4/1　細砂～シルトの混合層
10)暗オリーブ灰色　2.5GY4/1　シルトまじり粘土　下層粗砂ブロック20%程度入る　鉄分沈着　（第３層）
11)オリーブ灰色～灰色　2.5GY5/1　細砂～粗砂
12)灰色　7.5Y4/1　粗砂まじりシルト　径1cmの礫少量入る　やや軟質
　灰色　7.5Y4/1　粘土ブロック20%程度入る　しまり悪い　鉄分沈着　（第３層）
13)灰色　10Y4/1　粗砂まじり粘土質シルト　鉄分沈着のため褐色化
　灰色　10Y4/1　粘土まじり粗砂ブロック10%程度入る　やや軟質　（落込み埋土）
14)暗灰黄色　2.5Y5/2　微砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る　ややしまる　マンガン粒・炭化物入る
　（第１－２層）
15)暗灰黄色　2.5Y4/2　シルト　マンガン粒入る　径0.5cm未満の礫少量入る
　黄灰色　2.5Y4/1　細砂～微砂ブロック30%程度入る　ややしまる　（第１－１層）
16)オリーブ褐色　2.5Y4/3　粗砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る　ややしまる　マンガン粒入る　（第２層）
17)オリーブ褐色　2.5Y4/3　粗砂まじりシルト　径2cm未満の円礫少量入る　ややしまる　マンガン粒入る　（第２層）
18)暗灰黄色　2.5Y4/2　シルト
　暗灰黄色　2.5Y5/2　粗砂ブロック40%程度入る　径2cm未満の円礫多量入る　（第２層）
19) 黄灰色～暗灰黄色　2.5Y5/1-5/2　シルト質細砂～粗砂　しまり良い　（第６層上層）
20) 灰黄色～にぶい黄色　2.5Y6/2-6/4　細砂～粗砂　径2cm未満の礫多量入る　ややしまり良い　（第６層中層）
21）にぶい黄色～明黄褐色　2.5Y6/3-6/6　微砂～粗砂　波状ラミナあり　（第６層中層）
22) 灰白色～黄灰色　2.5Y7/1-5/1　細砂～粗砂　径2cm未満の礫多量入る　水平方向の弱いラミナあり　（第６層下層）
23) 灰色　10Y4/1　粘土　軟質　黒色化した植物遺体筋状に入る　コバルト粒入る　（第７層）
24) 暗オリーブ色　5GY4/1　粘土　軟質　コバルト粒入る　しまり良い　（第７－２包含層）
25) 暗オリーブ灰色　5GY4/1　細砂～粗砂まじり粘土　軟質　炭化物・土器片入る　（第８－１層）
26) 暗緑灰色　7.5GY3/1　粗砂まじり粘土　軟質　炭化物・植物遺体・コバルト粒入る　（第８－２層）
27) 暗緑灰色　10GY4/1　粘土　径0.5cm未満の礫少量入る
　灰色　N4/0　粘土ブロック10%程度入る　（第８－３層）
28) 暗オリーブ灰色　7.5Y4/1　粗砂まじり粘土
　暗オリーブ灰色　5GY4/1　微砂ブロック10%程度入る　カルシウム塊入る　（第９層）
29)暗オリーブ灰色　5GY3/1　粘土　軟質　コバルト粒・カルシウム塊入る　（第９層）
30) 暗オリーブ灰色　2.5GY3/1　粘土　炭化物僅かに入る
　灰色　N5/0　シルトブロック10%程度入る　しまり悪い　（落込み埋土）
31) 暗オリーブ灰色　5GY3/1　粘土　非常に軟質　コバルト粒入る　カルシウム塊入る
32) 暗オリーブ灰色　5GY3/1　粘土　非常に軟質　カルシウム塊入る　（第９層）
33) 暗緑灰色　7.5GY4/1　粘土　軟質　コバルト粒入る　（第９層）
34) オリーブ黒色　10Y3/1　粘土質シルト
　暗オリーブ灰色　5GY3/1　粘土ブロック50%程度入る　径0.5cm未満の礫少量入る
　しまり悪い　やや軟質　（第10－１層）
35) オリーブ黒色　5Y3/1　粘土　カルシウム多く入る
　灰色　5Y4/1　粘土ブロック20%程度入る
　灰オリーブ色　5Y5/3　粘土ブロック5%程度入る　ややしまる　軟質　（畦畔埋土）

【08－１－２－２区北壁】



【08－１－２－２区北壁】

1）暗灰黄色　2.5Y4/2　粗砂まじり粘土質シルト　径1cm未満の礫少量入る　しまりやや悪い　管状斑鉄形成　（第１層）
2）灰黄褐色　10YR4/2　粗砂まじり粘土質シルト　径0.5cm未満の礫少量入る　管状斑鉄形成　（第２層）
3）にぶい黄褐色　10YR4/3　細砂まじり粘土質シルト　径1cm未満の礫少量入る　しまり良い　部分的に下層ブロック入る　（第３層）
4）オリーブ褐色　2.5Y4/4　粗砂まじり粘土質シルト　径2cm未満の礫少量入る　固くしまる　マンガン粒入る
　黄灰色　2.5Y5/1　シルトブロック10%程度入る　（第３層）
5）にぶい黄褐色　10YR4/3　細砂まじり粘土質シルト　径2cm未満の礫少量入る　しまり良い　マンガン粒入る
　黄灰色　2.5Y5/1　シルトブロック管状に入る　（第３層）
6）褐色　7.5YR4/4　礫まじり粘土質シルト
　黄灰色　2.5Y5/1　細砂ブロック20%程度入る　（13溝埋土）
7）灰オリーブ色　5Y4/2　粗砂まじり粘土質シルト
　灰色　5Y4/1　粘土ブロック30%程度入る　径1cm未満の礫少量入る　ややしまる　マンガン粒入る　（13溝埋土）
8）黄灰色　2.5Y5/1　シルトまじり細砂　ややしまる　やや軟質　（第５層）
9）黄灰色～暗灰黄色　2.5Y5/1-5/2　シルト質細砂～粗砂　しまり良い　（第６層上層）
10)灰黄色～にぶい黄色　2.5Y6/2-6/4　細砂～粗砂　径2cm未満の礫多量入る　ややしまり良い　（第６層上層）
11)にぶい黄色～明黄褐色　2.5Y6/3-6/6　微砂～粗砂　波状ラミナあり　（第６層中層）
12）黄灰色～にぶい黄色　2.5Y6/1-6/3　細砂～粗砂　径1cm未満の礫多量入る　しまり悪い　鉄分沈着　（第６層中層）
13)灰白色～黄灰色　2.5Y7/1-5/1　細砂～粗砂　径2cm未満の礫多量入る　水平方向の弱いラミナあり　（第６層中層）
14)黄灰色　2.5Y6/1-5/1　細砂～粗砂　径1cm未満の礫多量入る　しまり悪い　斜め方向のラミナあり　下位に礫の流入あり　（第６層上層）
15)灰色　10Y4/1　粘土　しまり良い　軟質　コバルト入る　黒色化した植物遺体筋状に入る　（第７層）
16)灰色　10Y5/1　微砂～微砂まじりシルト　ラミナあり　（第７層）
17)暗オリーブ灰色　5GY4/1　粘土　しまり良い　軟質　コバルト入る　（第７層）
18)暗オリーブ灰色　2.5GY4/1　粘土　軟質　コバルト入る　上位より植物遺体少量入る　（第８－２層）
19)暗オリーブ灰色　5GY4/1　粘土　軟質　コバルト粒入る　植物遺体僅かに入る　（第８－３層）
20)暗緑灰色　7.5GY4/1　粘土　軟質　コバルト粒入る　（第９層）
21)暗オリーブ灰色　5GY3/1　粘土　非常に軟質　コバルト粒入る　カルシウム塊入る　（第９層）
22)暗緑灰色　10GY3/1　粘土
　オリーブ黒色　7.5Y3/1　粘土ブロック30%程度入る　カルシウム塊多く入る
23)暗オリーブ灰色　5GY4/1　粘土
　オリーブ灰色　2.5GY6/1　粘土ブロック10%程度入る
　オリーブ黒色　7.5Y3/1　粘土ブロック5%程度入る　軟質　カルシウム塊入る　（第10－１層）
24)暗緑灰色　10GY4/1　粘土　25)層ブロック30%程度入る
25)オリーブ黒色　5Y3/1　粘土　カルシウム塊多く入る
　灰色　5Y4/1　粘土ブロック20%程度入る
　灰オリーブ色　5Y5/3　粘土ブロック5%程度入る　ややしまる　軟質　（第10－２層）
26)オリーブ黒色　10Y3/1　粘土
　暗オリーブ灰色　5GY4/1　粘土ブロック30%程度入る　右岸に比して黒色味が薄い　（第10－２層）
27)暗緑灰色　10GY3/1　粘土　25）層粘土ブロック10%程度柱状に入る　（第11－１層）

0　(1:80)　4m

第９図　08－１－２区　壁断面図

なお、08－1－1区では、第6層上層を除去した段階で、設計深度に達したため、掘削を終了した。

第7層　古墳時代前期と推定される湿地状の堆積である。しまりの良い灰色粘土であるが、非常に軟質で、コバルトや黒色化した植物遺体を多く含む。層厚は0.15 m程度である。層洪水砂の削り込みにより、上面には鱗状の凹凸が目立つ。包含する植物遺体の多少により上下2層に分層した。遺物の出土は上下層ともに少ない。08－1－2－2区からは、ウマの足骨が1点出土した。

第8層　古墳時代初頭～前期の包含層である。暗オリーブ灰色細砂まじり粘土を主体とする。土質により、計3層に細分できる。但し、出土遺物に時期差はほとんど認められない。

第8－1層は、細砂を多く含む暗オリーブ灰色粘土であり、08－1－2－1区西辺で層厚0.1 m程度を測る。東へ向かって徐々に薄くなり、08－1－2－2区までは続かない。遺物を多く含む。

第8－2層は、やや軟質で細砂の混じり込みが少ない。08－1－2区全体に広く堆積する。植物遺体を少量含んでいる。上層と同じく遺物を多く含む。

第8－3層は、しまりが良い粘土層で、上層に比べて硬質である。調査区中央付近より東に堆積するため、08－1－2－1区では認められない。東半部へむかって徐々に層厚を増し、08－1－2－2区北西端では、0.15 m程度を測る。コバルトの含有量が多い。下位には、下層（第9層）が斑点状に混じる様相が顕著に認められる。遺物の出土は希少である。

第8層からの出土遺物は、調査区西半部に集中する。土師器（庄内式後半～布留式前半段階）の壺、甕、高杯、鉢等のほか、獣歯（イノシシ）、桃核等が出土した。なお、植松遺跡05－1の調査では、この層に相当する包含層は、確認されていない。

第9層　弥生時代中期～後期包含層であるが、遺物の出土量は希少である。暗オリーブ灰色を呈する粘土層である。非常に軟質で、直径1～2 cmを測るカルシウム塊を含有する。層厚は、調査区西半部で0.1 m程度、東半部では0.2 m程度を測る。下位に向かって徐々に土色が濃く、軟質になる。層内からは、弥生時代中期後半段階の壺片が1点出土した。

第10層　弥生時代前期包含層である。土色の違いから、上下2層（第10－1層・第10－2層）に細分できる。

第10－1層は、緑色がかった暗オリーブ灰色粘土である。オリーブ灰色粘土をブロック状に含んでおり、撹拌された痕跡を留める。層厚は、西半部では0.15 m程度を測るが、東に向かって徐々に薄くなり、東辺では断続的となる。調査区西半部ではより緑色味が強く、東半部では黒色味が強い。層の上位からは、サヌカイト製石剣（石槍）が出土した。また層内からは、弥生土器の壺破片（弥生時代前期新段階）のほか、緑泥片岩製石庖丁の破片が出土した。

第10－2層は、オリーブ黒色粘土ブロックを含む暗オリーブ灰色粘土である。層内には、植物茎根の繁茂した痕跡が顕著に認められる。08－1－2－1区では、堆積層として確認できておらず、遺構埋土（小畦畔）としてのみ残存する。08－1－2－2区西辺（08－1－2区中央部）では、層厚0.1 m程度、東辺では0.15 m程度を測る。第10－2層上面では、畦畔をもつ水田遺構を確認した。このため、第10－2層は水田耕作土として捉えることができる。層内からは、弥生土器壺破片（弥生時代前期中段階）、甕底部、ミニチュア壺形土器、投弾状土製品が出土した。

第11層　08－1－2－1区の西辺と、08－1－2－2区中央に設置した下層掘削トレンチにおいて確認した土層である。暗緑灰色粘土を主体とする無遺物層で、時期は確定できていない。東へ向かい、徐々に層厚を増すものと推測される。08－1－2－1区に設定した下層掘削トレンチでは、0.2 m程度の

層厚を確認した。下位に向かって徐々に砂質化する。土質はほぼ均質で、自然堆積層と推測される。

第 12 層　08 － 1 － 2 － 1 区の下層トレンチにおいて確認した土層である。灰オリーブ色を呈する粗砂～細砂を主体とする洪水砂層で、水平方向のラミナが認められる。層厚は、0.6 m以上である。下位に向かって徐々に粒子が粗くなり、T.P.5.2 m以下では、直径 1 cm 未満の円礫を多く含む砂礫層となる。砂礫層からは、縄文時代後～晩期の遺物が出土した。但し、遺存状態は悪く、摩滅が顕著である。

第２節　遺構と遺物

１．第 1 遺構面（近世）

第 1 遺構面は、中世末～近世包含層である第 1 層を除去して検出した遺構面である（第10図）。標高は、T.P.+8.8 ～ 9.0 mを測る。08 － 1 － 1 区では、高まり（島畠？）や溝、段状に整形された水田跡等を検出した。08 － 1 － 2 区は、撹乱をうけた箇所が多いものの、遺構面残存部分では溝や段を検出した。また調査区中央部東辺では、高まり（島畠？）を確認した。

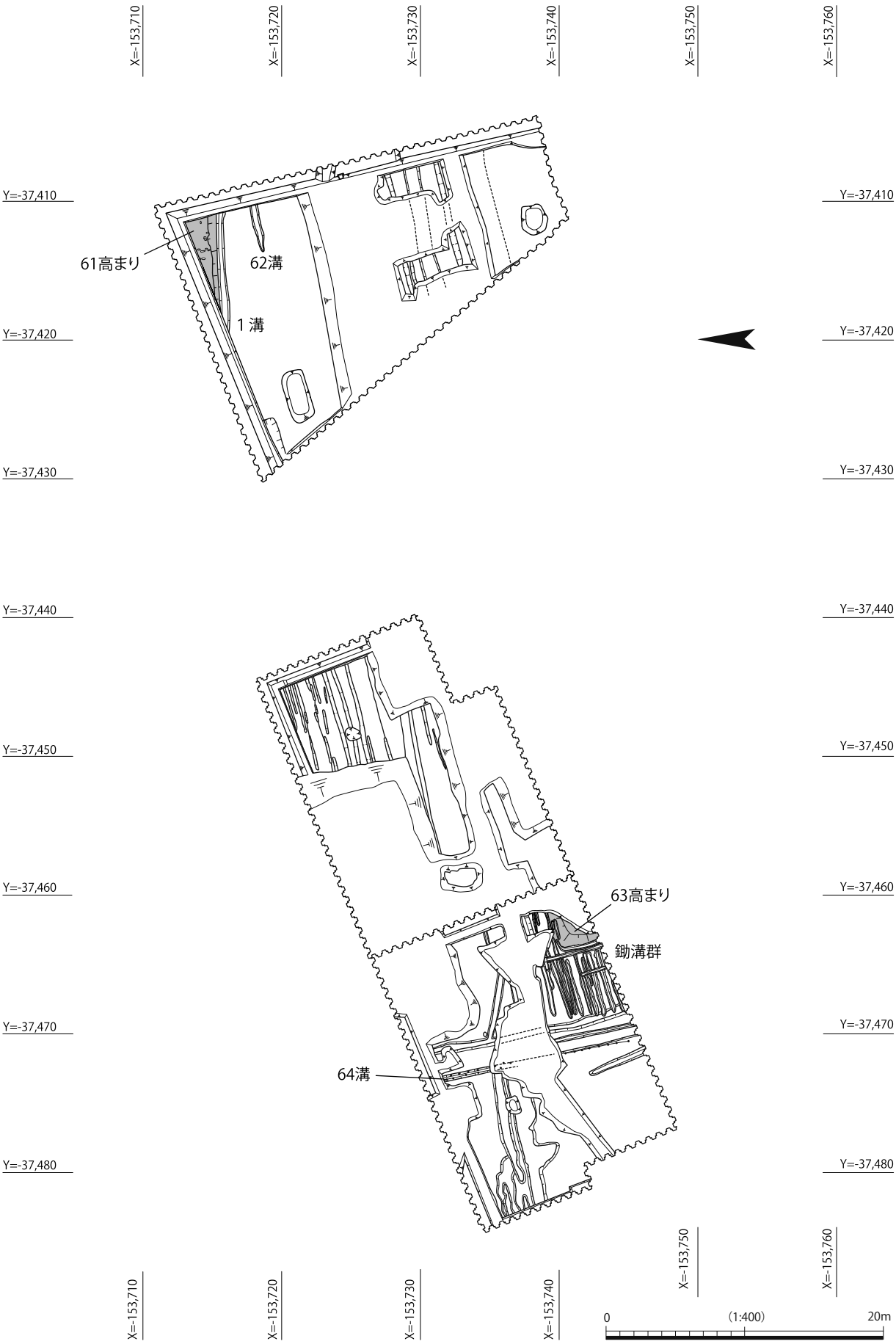
検出した遺構群は、場所によって方向軸を違えている。08 － 1 － 1 区の東半部と 08 － 1 － 2 区では、方位東に対して 12 ～ 15 度北へ振った角度と、これに直交する方向を基軸とする。一方、08 － 1 － 1 区の北西隅において検出した 61 高まり、62 溝は、ほぼ東西方向にのびている。下層にあたる第 2 遺構面では、すべての遺構が同じ方向軸をもつことから、この相違は第 1 遺構面の土地利用の特徴として捉えることができる。なお、現代の地割は、方位東に対して 15 ～ 20 度の角度をもっており、やはり地点ごとに方向軸を違えている。

第 1 遺構面直上層である第 1 － 2 層からは、須恵器、土師器、瓦器類のほか、内面無釉の染付碗や素焼きの焙烙、常滑焼の壺・土瓶・擂鉢、瀬戸美濃焼の碗、白磁碗、青磁碗、平瓦、井戸瓦、煙管（きせる）等が出土した。第 1 遺構面は、近世以降の耕作地跡として位置づけられる。

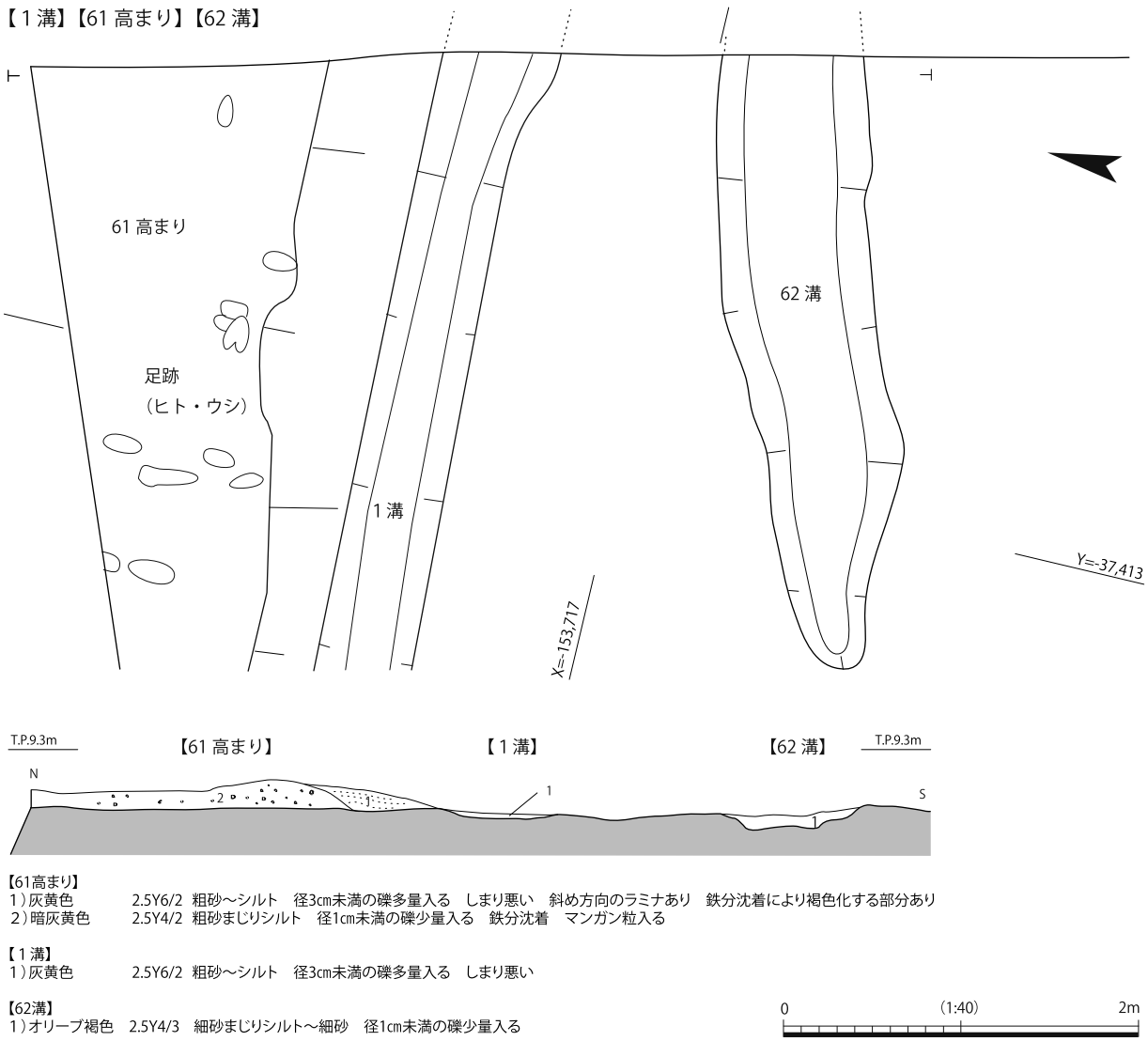
1 溝　08 － 1 － 1 区北東部において検出した溝である（第 10 図･第 11 図）。検出した長さは 8.05 m、最大幅は 0.64 m、最大深度は 0.04 mを測る。調査区の壁断面においても確認できることから、さらに東西へのびると考えられる。埋土は、北側に隣接する 61 高まりを覆っていたとみられる灰黄色粗砂～シルトを主体とする。このため、ほぼ同時期に埋没した可能性が高い。耕作に伴う遺構であると考えられるが、具体的な機能は不明である。埋土からは、土師器皿の小片が 1 点出土した。

61 高まり（島畠？）　08 － 1 － 1 区北西端において確認した高まりである（第 10 図・第 11 図）。検出した範囲は、長さ 7.10 m、幅 2.30 m程度の三角形であるが、断面観察からはさらに東西へのびることが推測される。残存する高さは 0.15 m程度、暗灰黄色を呈する粗砂まじりシルトを主体とし、部分的に灰黄色の粗砂～シルトを被る。土のしまりは悪く、撹拌痕跡を残すこと、また高まりの上面では、ヒトおよびウシの足跡や杭跡を検出したことから、耕作に伴う遺構であると考えている。隣接する植松遺跡 05 － 1 － 1 区（位置は第 2 図参照）の調査では、対応する遺構面において、ほぼ東西方向にのびる島畠が確認されていることから、この高まりも島畠の一部であった可能性が考えられる。

62 溝　1 溝の南側において検出した遺構である（第 10 図・第 11 図）。検出長は 3.43 mと短いが、さらに東へ続くようである。最大幅は 0.95 m、最大深度は 0.10 mを測る。埋土は、オリーブ褐色細砂まじりシルトを主体とする。その長軸は、方位東に対して北へ 15 度振る方向性をもつ。このため、隣接する 1 溝、61 高まりとは基軸を違えている。遺構の性格は掴めていない。埋土から遺物の出土は認



第 10 図　第 1 遺構面　全体図



第 11 図　第 1 遺構面　遺構平面断面図

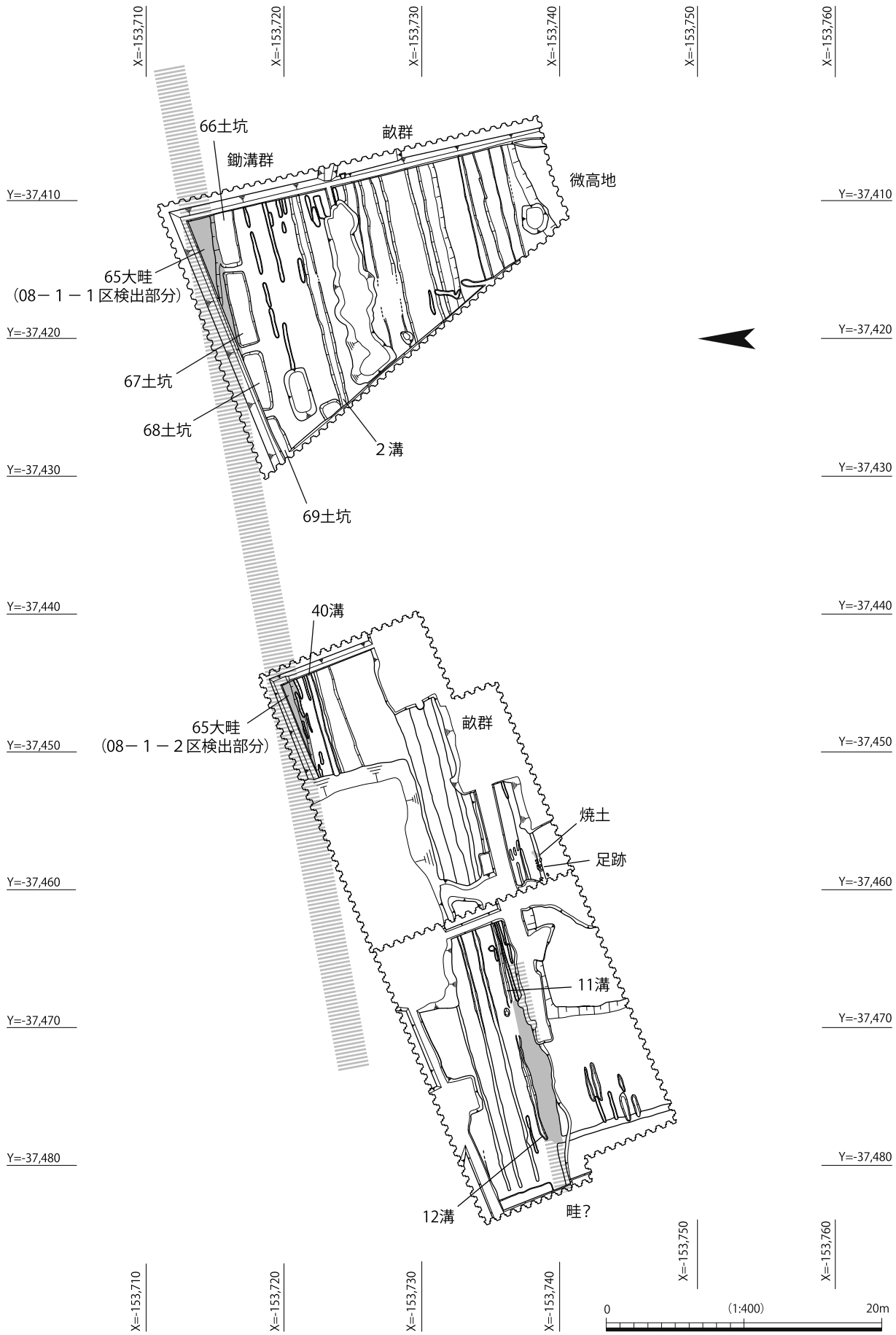
められなかった。

63 高まり（島畠？）　08 － 1 － 2 区中央部南辺において検出した高まりである（第 10 図）。61 高まり同様、基底部となる粘土質シルトの上に細砂～粗砂の集積が認められる。撹乱のため僅かな部分の検出にとどまるが、盛り上がりは顕著である。高まりの北側と西側には、これを囲むように鋤溝が密集する。但し、鋤溝は高まりの上面には及んでいない。盛土内から遺物の出土はなかった。

64 溝　08 － 1 － 2 － 1 区中央において確認した水田の段落ち溝である（第 10 図）。この溝を境として東が高く、西が低い。調査区南側では西側の削平が著しく、東側の段のみを検出した。検出長は 14.22 m、最大幅 0.40 m、最大深度は 0.11 mを測る。溝の中央に直径 3 cm 程度の杭列を伴うことから、段際に土留めが施されていたと考えられる。埋土からは土師質焙烙、染付碗、施釉陶器の破片等が出土した。

2．第 2 遺構面（中世末～近世初頭）

第 2 遺構面は、中世後期包含層である第 2 層を除去して検出した遺構面である（第 12 図）。ほぼ平坦な第 1 遺構面に比べて、地形の起伏が目立つ。08 － 1 － 1 区・08 － 1 － 2 区ともに調査区の北東



第 12 図　第２遺構面　全体図

部が高く、南と西に向かって緩やかに下がる。但し、08－1－1区では南端に微高地を有するため、中央部分が最も低い。標高は、08－1－1区南端の微高地上でT.P.+8.92 m、中央部でT.P.+8.72 m、08－1－2－2区東辺でT.P.+8.95 m、08－1－2－1区西辺でT.P.+8.40 mである。

08－1－1区及び08－1－2－2区の北辺では、大畦と解される連続する高まりを確認した（65大畦）。また、調査区全域において畝群や鋤溝群を検出した。広く耕作地として利用されていたことが窺える。検出された遺構群は、方位東に対して北へ17～20度振った方向を基軸としており、上位遺構面とは様相が異なる。

第2層からは、須恵器杯・甕・東播系鉢、土師器皿・羽釜・杯、瓦器椀のほか、備前焼壺・鉢、白磁碗、瓦質土器鉢、平瓦、丸瓦、陶器碗等が出土した。概ね14～16世紀に製作時期をもつ遺物を下限とする。このため、第2遺構面は、中世末期に形成された耕作地跡と位置づけられる。

2溝　08－1－1区において検出した溝である（第12図・第13図）。調査区東端から西端まで連続してのびており、調査区外へと続く。のびる方向軸は、方位東に対して北へ17～18度の角度である。検出長は15.5 m、最大幅は0.45 m、最大深度は0.15 mを測る。断面形状は歪ながら方形に近い。埋土は、暗灰黄色を呈するシルト～砂質シルトを主体とする。他の畝溝よりも掘り方が明確であることから、耕作地の区画や給排水のための溝として機能した可能性がある。遺構内から遺物の出土はなかった。

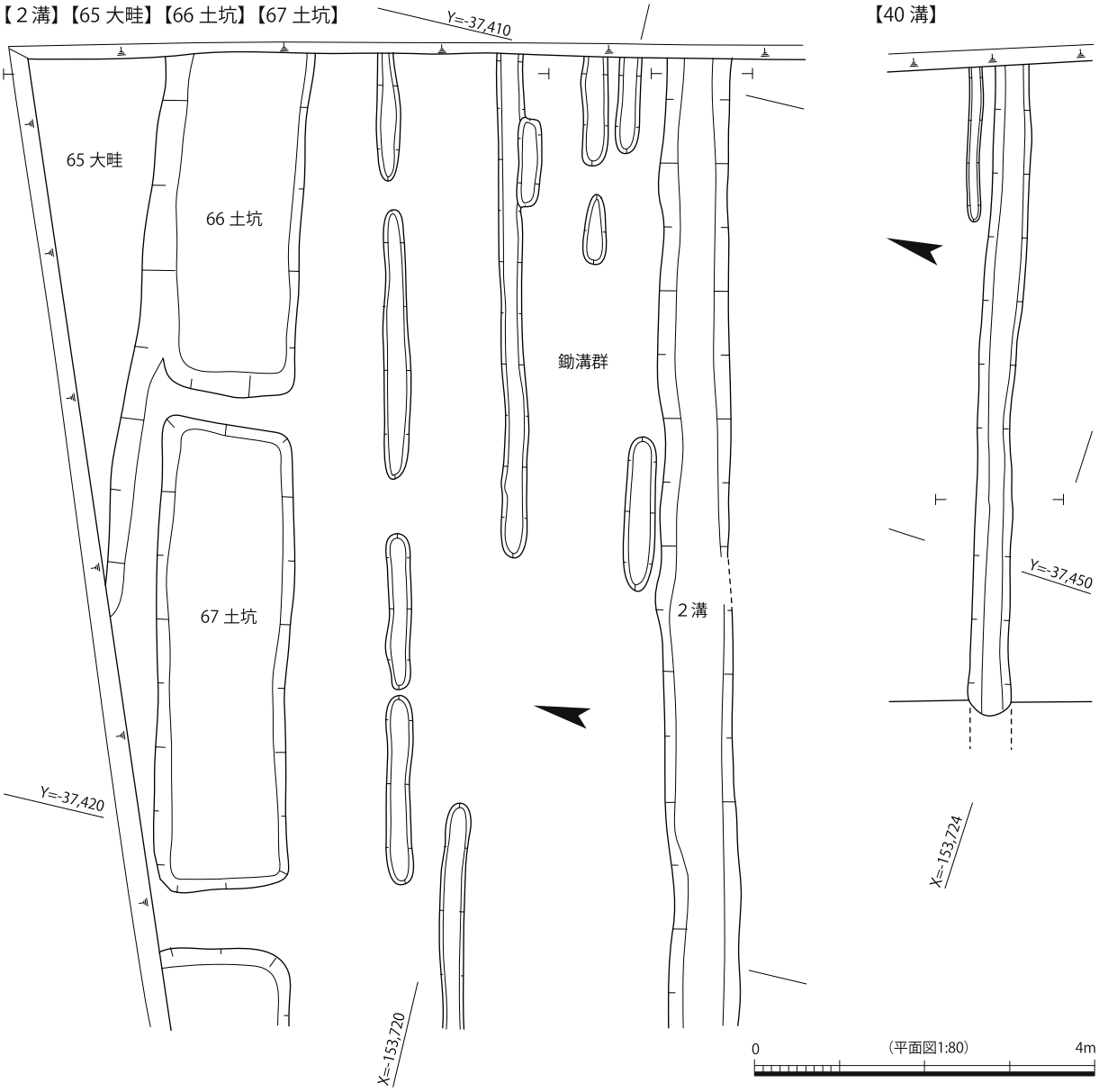
11溝・12溝　08－1－2－1区において検出した溝である（第12図）。現地調査では2条の溝として検出したが、連続する可能性がある。11溝の検出長は6.20 m、最大幅0.41 m、最大深度0.11 mである。12溝は、最大長7.8 m、最大幅0.39 m、最大深度0.12 mを測る。ともに方位東に対して20度北へ振った方向軸をもつ。埋土は、第2層である暗灰黄色細砂まじりシルトを主体とする。埋土からは土師器甕と平瓦の破片が出土した。

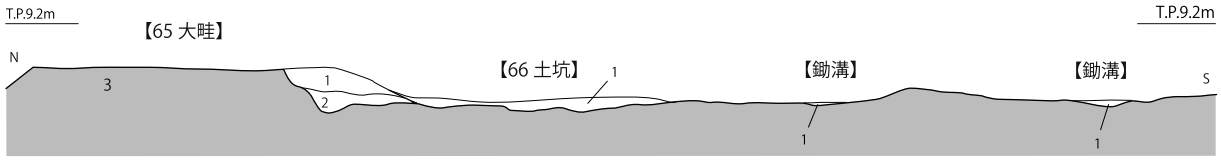
11溝及び12溝の南側には、畦が設けられていたと考えられる。削平および撹乱を受けるため手がかりに乏しいが、この付近より南側が一段下がること、南側では水田畦畔が、北側では畑の畝溝が検出されており、土地利用に明確な差が認められることから、その可能性は高い。そうであれば、11溝・12溝は、畦脇に設けられた溝として機能したと推測できる。

40溝　08－1－2区の北東部において検出した溝である（第12図・第13図）。検出長は7.60 m、最大幅は0.44 m、最大深度は0.15 mを測る。方位東に対して18～20度北へ振る方向軸をもつ。断面形状は、底面に凹凸があるため不定形である。埋土は黄灰色粗砂まじりシルトを主体とする。65大畦に平行してのびており、耕作に伴う遺構である可能性が高い。埋土からは、備前焼甕小片のほか、須恵器甕と土師器皿の破片が出土した。

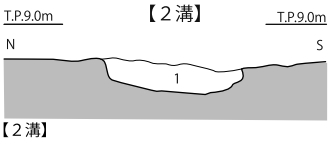
65大畦　08－1－1区北辺において検出した大畦の一部である（第12図・第13図）。検出長は11 m程度であるが、08－1－2－2区において確認した範囲までを含めると、約40 mにわたって連続することとなる。盛土はすでに削平されており、基盤層であるしまりの良い粘土質シルト層が20cm程度の盛り上がりをみせるにとどまる。なお、肩部斜面にはシルト層の残存が認められるため、本来は同質の盛土を伴っていた可能性が高い。

この大畦の基盤層以下を見ると、旧来の地形は、今とは逆に調査区中央付近から北へ向かって下がっていたようである。周辺は窪地であったため湿潤な粘土層が蓄積し、これ以前の遺構面では水田として利用されていたと考えられる。同じく、08－1－2－2区の下層の状況を見ると、やはり調査区中央から北へ向かって下がるため、65大畦の周辺地盤は低い状況にある。つまりこの大畦は、地形に即し

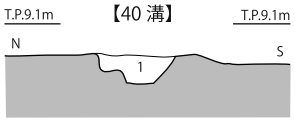




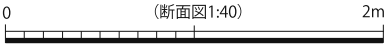
【65大畦】	1）オリーブ褐色	2.5Y4/4	シルト～粘土質シルト　鉄分沈着　マンガン粒入る
	黄灰色	2.5Y5/1	シルトブロック10%程度入る
	2）オリーブ褐色	2.5Y4/4	シルト　1）層に近似　より砂質度高い　径1cm未満の礫少量入る
	3）オリーブ褐色	2.5Y4/3	細砂まじり粘土質シルト　径1cm未満の礫少量入る　ややしまる　上位に鉄分沈着（大畦基盤層）
【66土坑】	1）暗灰黄色	2.5Y5/2	粗砂まじりシルト　径1cm未満の礫少量入る　ややしまる
【鋤溝】	1）暗灰黄色	2.5Y4/2	シルト～砂質シルト　径1cm未満の礫少量入る　しまり悪い　鉄分沈着



【２溝】
1）暗灰黄色　2.5Y4/2　　シルト～砂質シルト
径1cm未満の礫少量入る
しまり悪い　管状斑鉄形成



【40溝】
1）黄灰色　2.5Y5/1　　粗砂まじりシルト
しまり悪い　鉄分沈着



第 13 図　第２遺構面　遺構平面断面図

て設けられていたとは考えにくい。

上述のとおり、この遺構面では 65 大畦と同方向に畝や溝の軸が揃う。おそらく 65 大畦を基軸として区画整理が行われたと推測される。調査地周辺は旧平野川の氾濫原にあたるため、歴史的な地割の復元が進んでいない地域である。65 大畦は、当該時期の地割を復元する上で、注目される遺構である。

66 土坑　65 大畦の南側に隣接する遺構である（第 12 図・第 13 図）。平面形状は隅丸方形を呈しており、長辺は 4.0 m以上、短辺は 1.6 mを測る。掘り方は脆弱で、最大深度は 0.1 mに満たない。底面には凹凸が認められる。西側に同形状の土坑２基が並んでおり、大畦に付随する施設もしくは水田に関わる遺構と推測される。埋土は、ややしまる暗灰黄色粗砂まじりシルトを主体とする。遺構内からは、土師質土器の羽釜や土師器皿、須恵器甕の破片が出土した。

67 土坑　同じく 65 大畦の南側にあり、66 土坑の西側に位置する遺構である（第 12 図・第 13 図）。66 土坑同様、平面は隅丸方形を呈する。長辺は 5.4 m、短辺は 1.6 m、最大深度は 0.1 mを測る。埋土、状況ともに 66 土坑に類似する。埋土から遺物の出土はなかった。

68 土坑　同じく 65 大畦の南側にあり、67 土坑の西側に位置する遺構である（第 12 図・断面形状は第８図上段を参照）。長辺 4.75 m、最大幅 1.7 m、最大深度は浅く 0.05 ～ 0.08 mを測る。断面形状は浅い皿形、埋土は暗灰黄色粗砂まじりシルトを主体とする。遺構内からの遺物の出土はなかった。

69 土坑　08 － 1 － 1 区北西端において検出した遺構である。北と西が側溝および調査区ラインにかかるため、全体的な法量は不明であるが、67 土坑・68 土坑とほぼ同サイズと推測される。確認できた検出長は 2.8 m、検出幅は 0.8 m、最大深度は 0.15 mである。断面形状及び埋土は 68 土坑に類似する。遺構内からの遺物出土はなかった。

66 ～ 69 土坑の性格は不明であるが、65 大畦に伴う水田遺構の一部であると考えられる。すべて深度が浅いこと、また土坑と土坑の間の盛り上がりが小畦に見えることから、小さく区画した水田と考えることもできる。

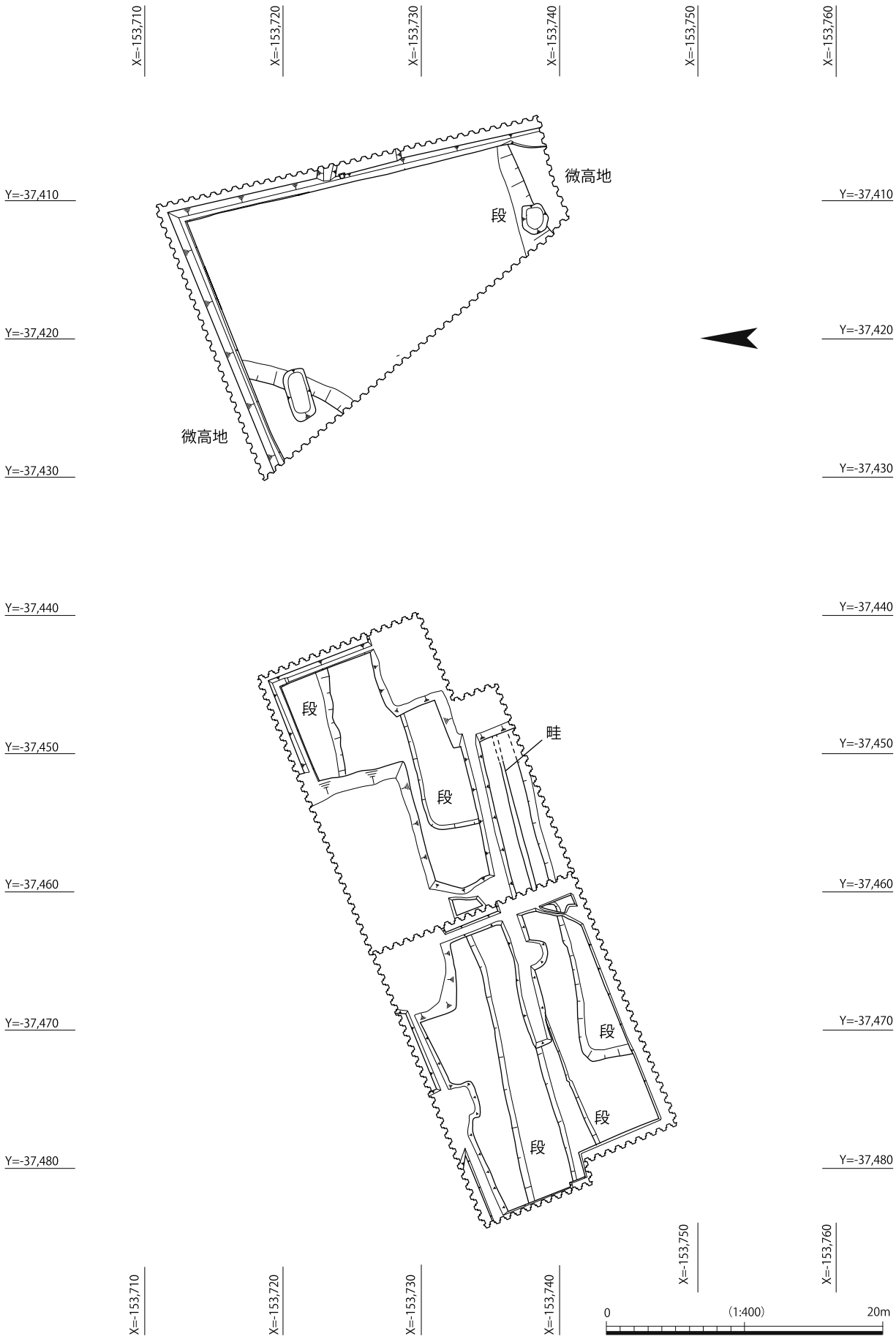
３．第３遺構面（中世後期）

第３遺構面は、中世包含層である第３層を除去して検出した遺構面である（第 14 図）。上面に比べてさらに微高地が盛り上がり、斜面には段の構築が顕著となる。

08 － 1 － 1 区の南端および北西端の微高地上では、基盤層となる第４層・第５層が堆積しないため、すでに第６層である古代粗砂層が露出する。遺構面のレベルは、最も高い調査区南端が T.P.+8.88 m、最も低い中央部が T.P.+8.50 m、若干盛り上がる北東端部が T.P.+8.64 m、北西端部の微高地が T.P.+8.80 mを測る。

08 － 1 － 2 区も 08 － 1 － 1 区同様、遺構面の起伏が顕著である。調査区の中央部が最も高く、北及び南に向かって段を経ながら徐々に下がる。遺構面のレベルは、最も高い 08 － 1 － 2 － 2 区中央部で T.P.+8.82 m、最も低い 08 － 1 － 2 － 1 区南辺中央部で T.P.+8.42 mを測る。検出された段は水田区画のために設けられたものと推測されるが、その方向軸は後世ほど厳密ではなく、概ね北東－南西方向を指しながら、地形に沿って変局する。

第３層からは、須恵器壺・甕・東播系擂鉢、土師器皿・羽釜・鍋把手、瓦器椀、白磁、平瓦、獣歯（ウマ）、付木等が出土した。遺物は 13 ～ 14 世紀の製品が多く、15 世紀を下限とする。このため、第３遺構面は中世後期に形成された耕作地跡であると位置づけられる。



第 14 図　第 3 遺構面　全体図

４．第４遺構面（中世）

第４遺構面は、中世包含層である第４層を除去して検出した遺構面である（第 15 図）。第４層は、低地のみに残存する軟質な粘土層であり、微高地上には存在しない。このため、基本的に微高地上では第４遺構面を検出することができていない。

08 － 1 － 1 区の第４遺構面は、北東端にあった微高地が消え、南端と北西隅の微高地がさらに際立つ様相を見せる。微高地上のレベル値は、上面と同じく T.P.+8.80 ～ 8.88 m、中央部と北東端は一段下がって T.P.+8.50 m程度を測る。南端の微高地裾では溝を２条、中央部東辺では、土坑１基を確認した。

08 － 1 － 2 区では、北辺部と南半部において、第４層の堆積が認められる。特に南半部では、厚さ 0.2 m程度の層厚をもって広がり、湿潤な環境を作る。この範囲では、畦畔をもつ水田を検出した。一方、微高地上である調査区中央部では、古代洪水砂（第６層）が露出する乾いた環境にある。遺構面のレベルは、最も高い中央部で T.P.+8.70 m、最も低い南半部で T.P.+8.38 mを測る。

第４層からは、須恵器甕・杯・壺・鉢、土師器甕・皿、平瓦、黒色土器椀、瓦器皿・椀、白磁碗・皿が出土した。遺物の生産時期は 12 ～ 13 世紀を主体とする。このため、第４遺構面は、中世前期に形成された耕作地跡であると位置づけられる。

なお、08 － 1 － 2 － 2 区中央部（微高地）より採取した土壌について自然科学分析を実施したところ、少量のイネ科とともにソバ属の花粉が検出された。当該地域では、湿潤な低地で稲作（水田）が、砂質度の高い微高地ではソバ等を作る畑作が行われていた可能性がある。

３溝　08 － 1 － 1 区南端微高地の裾において検出した遺構である（第 14 図）。調査区東より西へ向かって流れており、撹乱付近で削平のため消滅する。検出長 6.35 m、最大幅 0.30 m、最大深度 0.15 mを測る。断面形状はレンズ形、埋土は灰色微砂～細砂まじりシルトを主体とする。方位東に対して北へ 19 度振る方向で直伸する。遺構内からは、須恵器杯蓋・甕、土師器甕、皿の破片が出土した。遺物の下限年代は 13 世紀である。遺構の性格は明確ではないが、微高地縁辺に設けられていることから、斜面下へ水を供給する機能を備えていた可能性が高い。

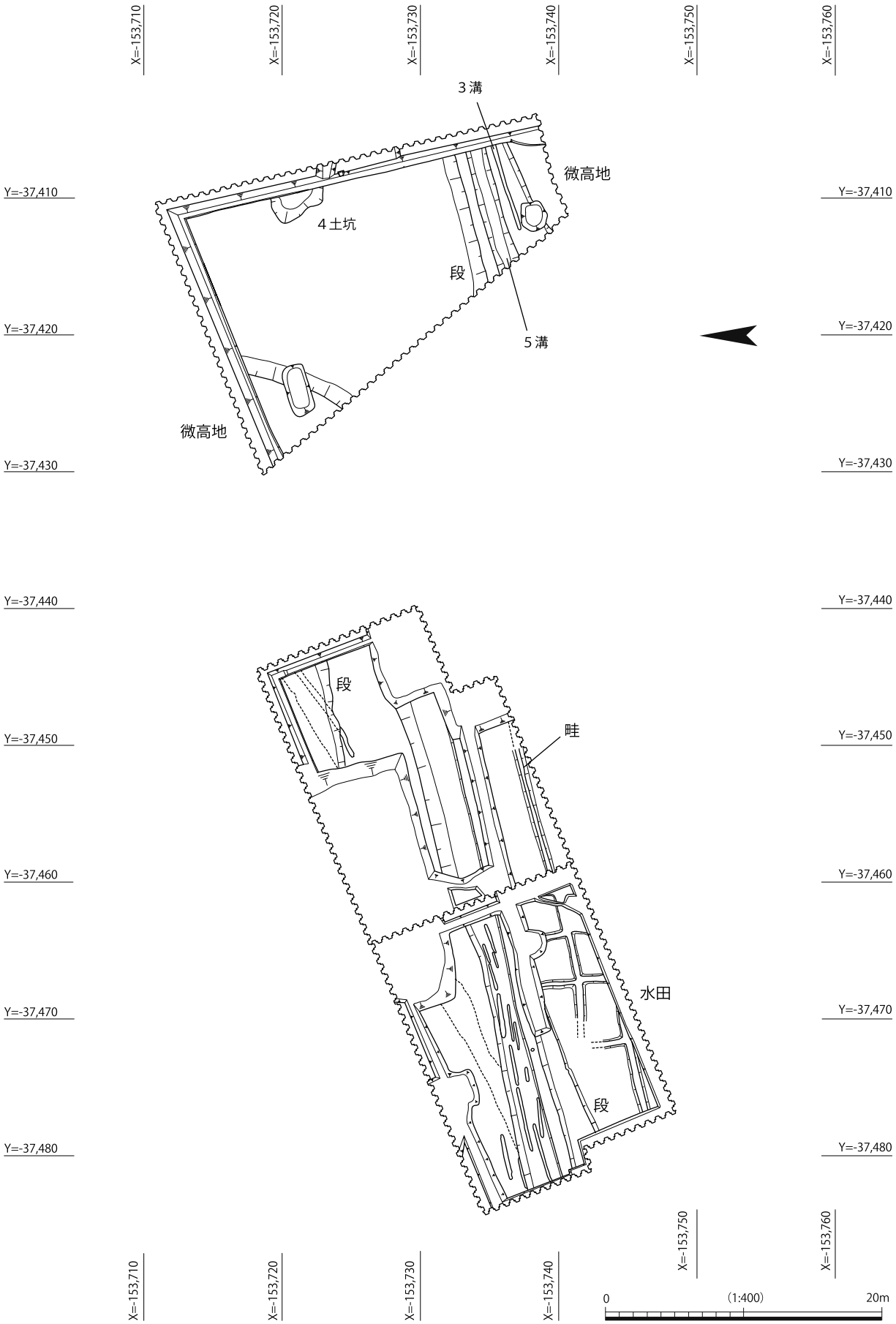
４土坑　08 － 1 － 1 区中央東辺において検出した遺構である（第 14 図・断面形状は第８図下段参照）。平面形状は不定形であるが、壁断面においても確認できることから、相応の広がりをもつ遺構であると推測される。検出した南北長は 3.70 m、東西長は 1.90 m、最大深度は 0.26 mを測る。埋土は、上層に第４層である灰色細砂まじりシルト、中層に黄灰色細砂まじりシルト、下層に灰色細砂～粗砂が溜まる。遺構の性格は明らかではないが、砂の混じりこみが多いことから井戸や水溜であった可能性がある。遺物の出土はなかった。

５溝　08 － 1 － 1 区南半部において検出した遺構である。３溝の北側にあたり、南端の微高地から続く斜面の下端に設けられた溝状遺構である。調査区を貫いて進み、さらに東西へ続く。検出長は 9.90 m、最大幅は 1.50 m、最大深度は 0.22 mを測る。断面形状はレンズ形、埋土は暗灰黄色粗砂まじりシルトを主体とする。埋土からは土師器皿と瓦器椀の破片が出土した。遺物の下限年代は、13 世紀である。３溝と同じく給排水を目的とした溝であったと推測される。

５．第５遺構面（古代末～中世初頭）・遺構内出土遺物

第５遺構面は、古代末～中世初頭の包含層である第５層を除去して検出した遺構面である（第 16 図）。

08 － 1 － 1 区では遺構面の高低差がさらに大きくなり、調査区南端及び北西隅の微高地が目立つよ



第15図　第4遺構面　全体図

うになる。

遺構は、低地である中央部から北東範囲において集中的に検出した。調査区中央部では格子状に掘り込まれた小溝を多数検出した。また、中央部東辺では、落込みを確認した。遺構の方向軸は、地形の影響が顕著となり、定まってはいない。遺構面のレベルは、調査区南端部の微高地上で T.P.+8.87 m、調査区北西端の微高地上で T.P.+8.56 m、最も低い調査区北東部で T.P.+8.29 mを測る。

08 － 1 － 2 区でも、08 － 1 － 1 区同様、北半部の微高地と南半部の低地の比高差がさらに目立つようになる。微高地の範囲は段形成が為された上面に比べて狭まり、傾斜をもって低地へ続く様相を見せる。遺構面のレベルは最も高い微高地上で T.P.+8.67 m、最も低い南西部では T.P.+8.34 mである。

微高地上では、北西－東南方向にのびる溝と土坑を検出した。また南半部の低地部では、鉤形に曲がる溝群と井戸を検出した。溝群のうち 20 溝と 43 井戸は切り合い関係にあり、20 溝の方が新しい。微高地上の 13 溝と低地の溝群とは、明らかに方向性を違えているが、出土遺物の比較からは、13 溝と 43 井戸の設置が古く、これらが埋没した後に溝群が形成されたと推測される。

第 5 層からは、須恵器甕・杯蓋、瓦器椀、土師器鍋・杯・皿が出土した。遺物の下限年代は、12 世紀の範囲におさまることから、第 5 遺構面の存続時期は、古代末～中世初頭と捉えられる。

6 溝　08 － 1 － 1 区南半部において検出した遺構である（第 16 図・断面形状は第 8 図下段参照）。調査区を縦断し、東西へと続く。検出長は 10.70 m、最大幅 3.80 m、最大深度 0.08 mを測る。方向軸は、方位東に対して 18 ～ 20 度北へ振る。埋土は暗灰黄色粗砂まじりシルトを主体とするが、端部には細砂の流入によって弱いラミナが形成されている。遺構の性格は不明であるが、溝幅に比べて浅いこと、またラミナの形成も僅かであることから、水田区画のひとつであった可能性もある。埋土からは、土師器皿・甕、楠葉型瓦器椀、須恵器杯身、杯蓋、甕、高杯（いずれも小片）が出土した。遺物の下限年代は、12 世紀初頭であることから、中世初頭頃には埋没したと推測される。

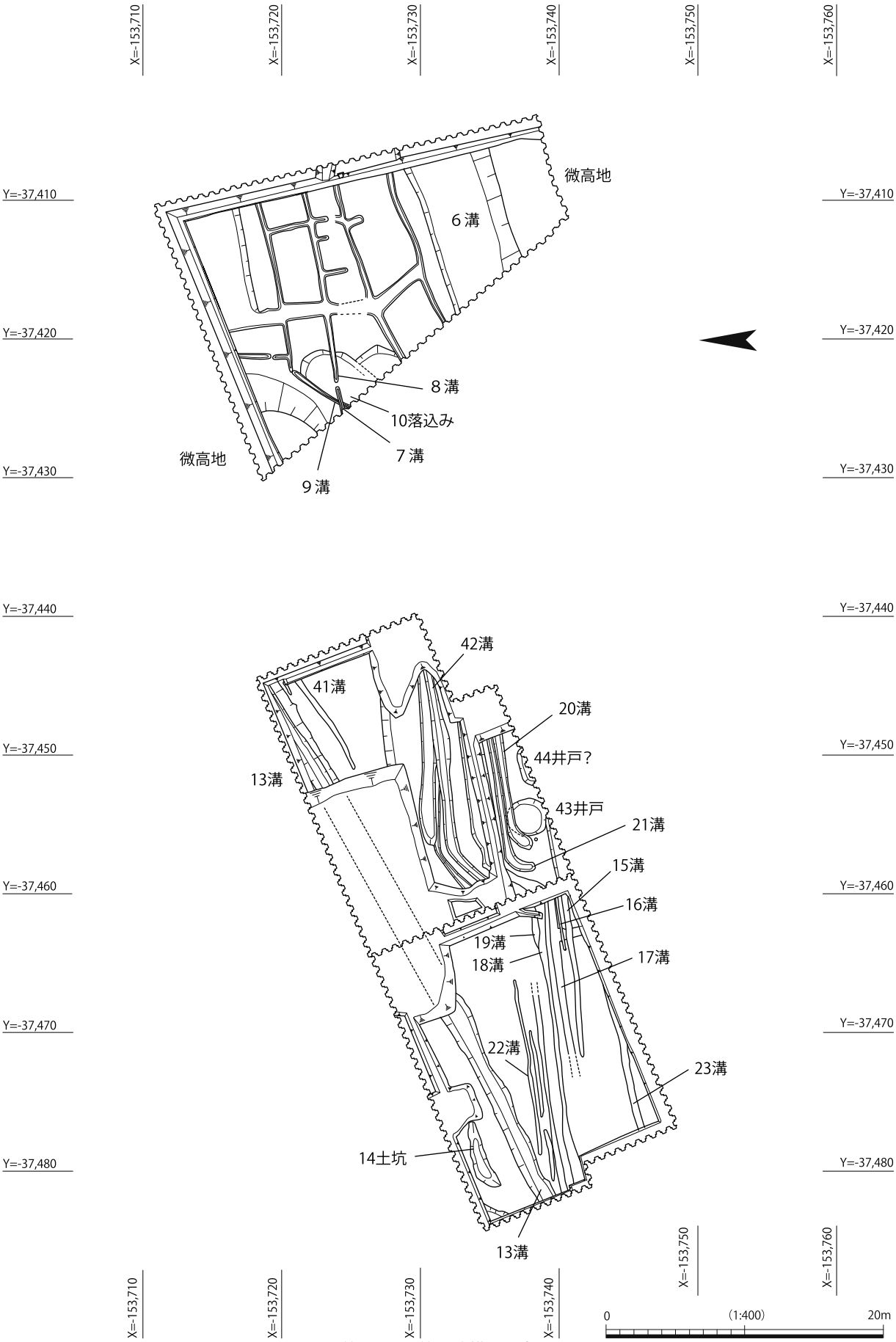
7 溝　10 落込みの上を縦断する小溝である（第 16 図・第 17 図）。検出長 2.20 m、最大幅 0.30 m、最大深度 0.10 mを測る。方位東より北へ 12 度振った方向を基軸とする。断面形状は椀形、埋土は灰色粗砂まじり粘土を主体とする。砂上面での検出であるが、明確な掘り方をもつ。

隣接する 8 溝とは方向軸を同じくするが、連続はしない。耕作もしくは開発に伴う遺構であると推測されるものの、具体的な機能は不明である。埋土から遺物の出土はなかった。

8 溝　7 溝と同様、10 落込みの上を走る小溝である（第 16 図・第 17 図）。東へ向かって連続し、枝分かれを繰り返しながら調査区外へと続く。交差する他溝とは切り合い関係が見えないことから、同時期に掘削され、同様の機能を備えていたと解釈される。検出長は、13.5 m、最大幅 0.44 m、最大深度 0.15 mを測る。方位東より北へ 10 ～ 15 度振った方向を基軸とする。埋土は、7 溝と同質である。遺構内から遺物の出土はなかった。

9 溝　7 溝と同様､調査区外から 10 落込みの上位を切り込んでのびる小溝である（第 16 図･第 17 図）。検出長 4.8 m、最大幅 0.36 m、最大深度 0.1 mを測る。若干湾曲するものの、方位東に対して 60 度北へ振った基軸をもつ。平面形状は椀形、埋土は灰色粗砂まじりシルトを主体とする。埋土から遺物の出土はなかった。

10 落込み　08 － 1 － 1 区の北西部において検出した遺構である（第 16 図・第 17 図）。7 溝、8 溝、9 溝に切られており、比較的早い段階で埋没したと考えられる。平面検出時には 2 基の土坑が隣接する遺構群として捉えたが、掘削を進めたところ、同一遺構であることが判明した。このため、ここでは不



第 16 図　第 5 遺構面　全体図

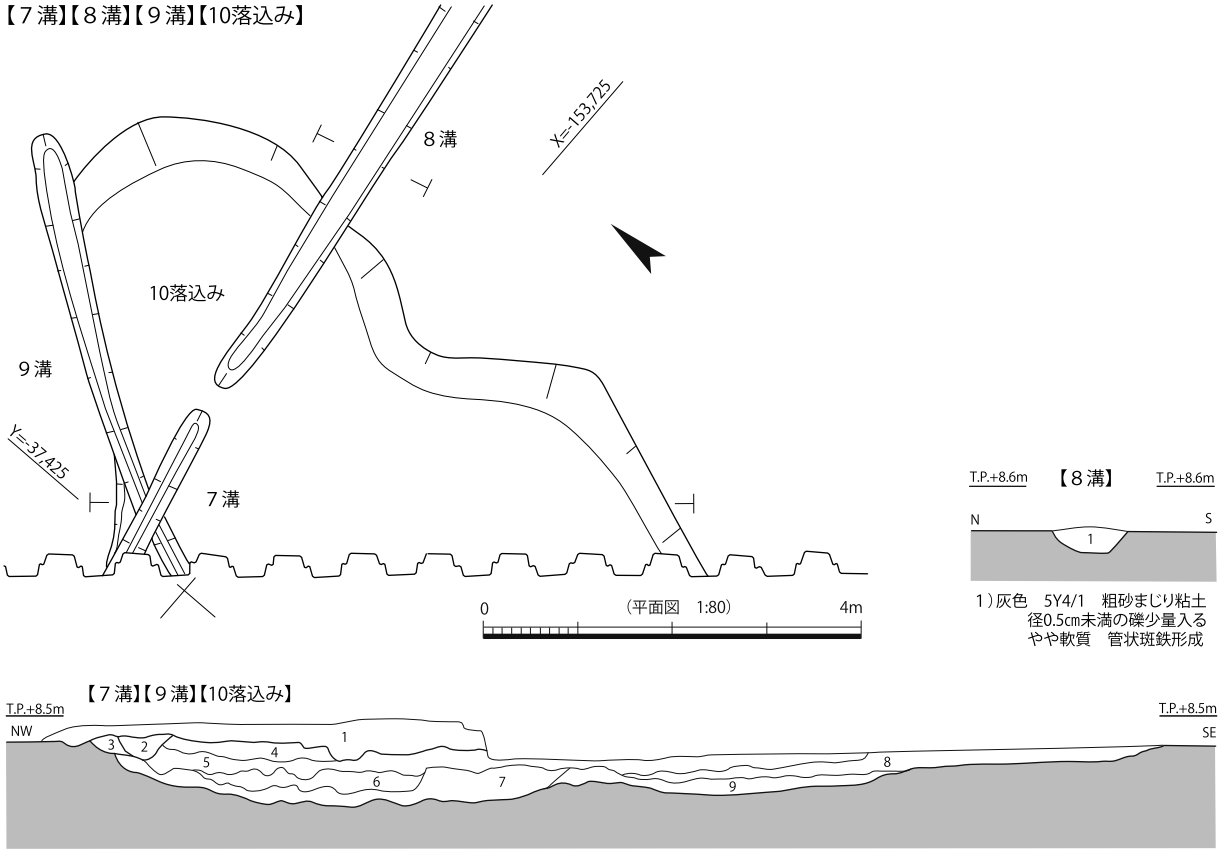
定形な落込みとして報告する。

南北長は 5.00 m、東西幅は 3.40 ～ 4.00 m、最大深度は 0.45 mを測る。埋土は軟質で、黒色味の強い粗砂まじり粘土を主体とする。底面には凹凸があり、人為的な造作は認めがたい。この周辺は、08 － 1 － 1 区の中で最も標高が低い地点であることから、窪みに土壌が堆積し、形成された落込みであると推測する。埋土からは須恵器甕、土師器甕・鍋・皿、黒色土器 A 類が出土した。遺構の埋没時期は 11 世紀後半と推測される。

遺構内からの出土遺物を第 21 図に示した。第 21 図 1 は黒色土器椀の底部である。内面のみを黒色化させた A 類で、底部内面にはミガキが認められる。底部外面には高さのある貼付け高台をもつ。第５層内から出土した一片と接合した。生産時期は、10 世紀後半期と推測される。

第 21 図 2 は、土師器皿である。口縁部を外反させた後、同端部を内側に折り曲げて玉縁状とする「ての字状口縁」をもつ。10 世紀後半～ 11 世紀の遺物である。このため、10 落込みは、古代末の遺構であると推測される。

13 溝　08 － 1 － 2 区の北半部において検出した溝である（第 16 図・第 18 図・第 19 図）。途中、撹

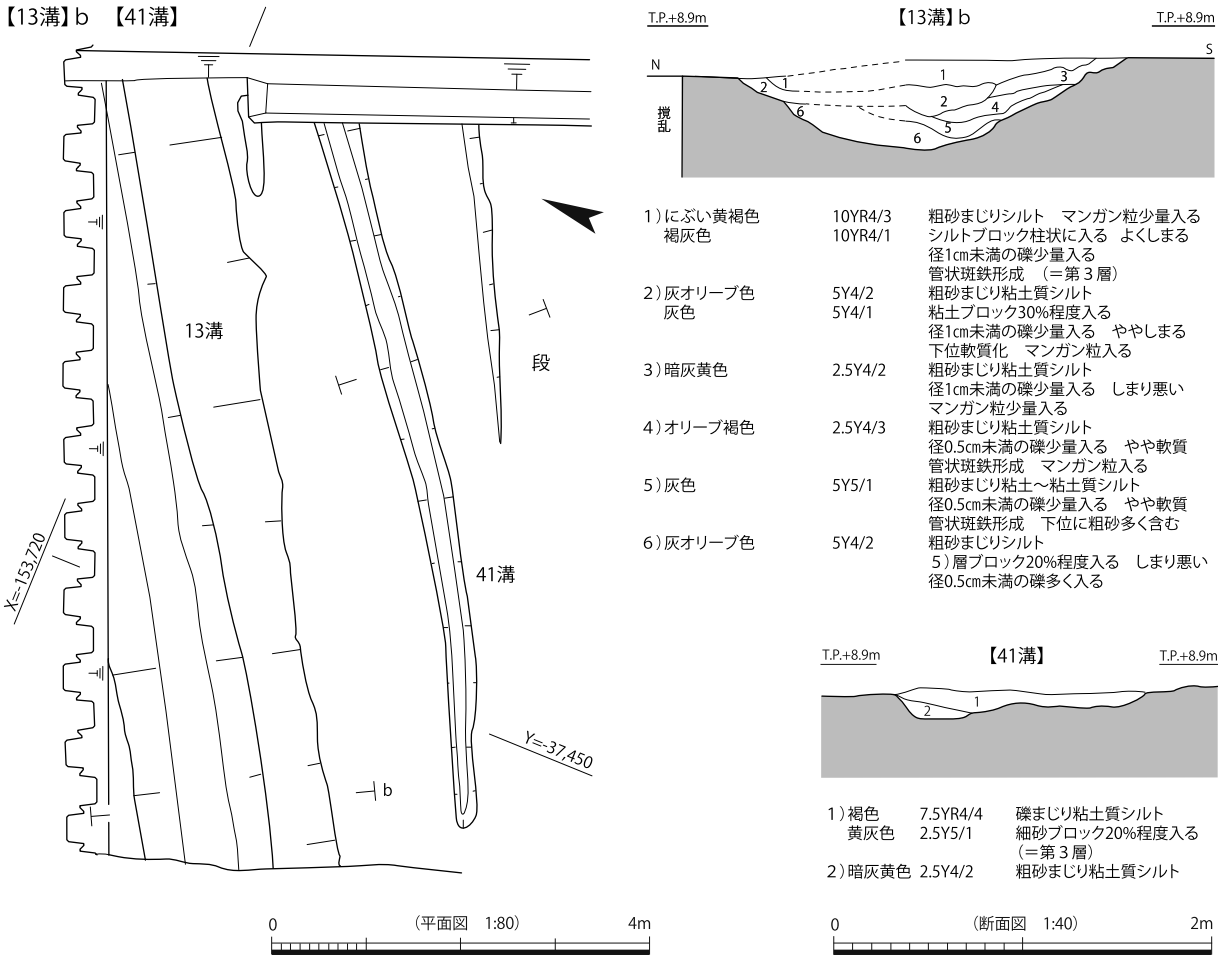


【７溝】【９溝】【10落込み】

1）灰オリーブ色	7.5Y4/2	粗砂まじり粘土　径2㎝未満の礫少量入る
灰色	7.5Y4/1	粘土ブロック20%程度入る
灰オリーブ色	5Y4/2	粗砂まじりシルトブロック40%程度入る 管状斑鉄形成　（＝第５層）
2）灰色	5Y4/1	粗砂まじり粘土　径0.5㎝未満の礫入る
灰色	5Y4/1	粗砂～シルトブロック40%程度入る やや軟質　管状斑鉄形成　（７溝埋土）
3）灰オリーブ色	5Y4/2	粗砂～シルト　径1㎝未満の礫少量入る
灰オリーブ色	5Y4/2	粗砂まじり粘土ブロック10%程度入る しまり悪い　管状斑鉄形成　（９溝埋土）
4）灰色	5Y4/1	粘土　径0.5㎝未満の礫少量入る
灰色	5Y4/1	粗砂ブロック　上位に20%程度入る 軟質　管状斑鉄形成
5）オリーブ黒色	5Y3/1	粗砂まじり粘土　軟質　管状斑鉄形成
6）黒褐色	2.5Y3/1	粘土～粗砂まじり粘土　非常に軟質 径0.3㎝未満の礫少量入る　管状斑鉄形成
7）オリーブ黒色	5Y3/1	粗砂まじり粘土　径2㎝未満の礫少量入る 軟質
8）オリーブ黒色	5Y3/1	粗砂まじり粘土　径2㎝未満の礫少量入る
灰色	5Y4/1	粘土ブロック30%程度入る　軟質
9）灰色	7.5Y4/1	細砂まじりシルト
灰色	5Y4/1	粘土ブロック10%程度入る　軟質

0　（断面図　1:40）　2m

第 17 図　第５遺構面　遺構平面断面図（1）



第 18 図　第５遺構面　遺構平面断面図（２）

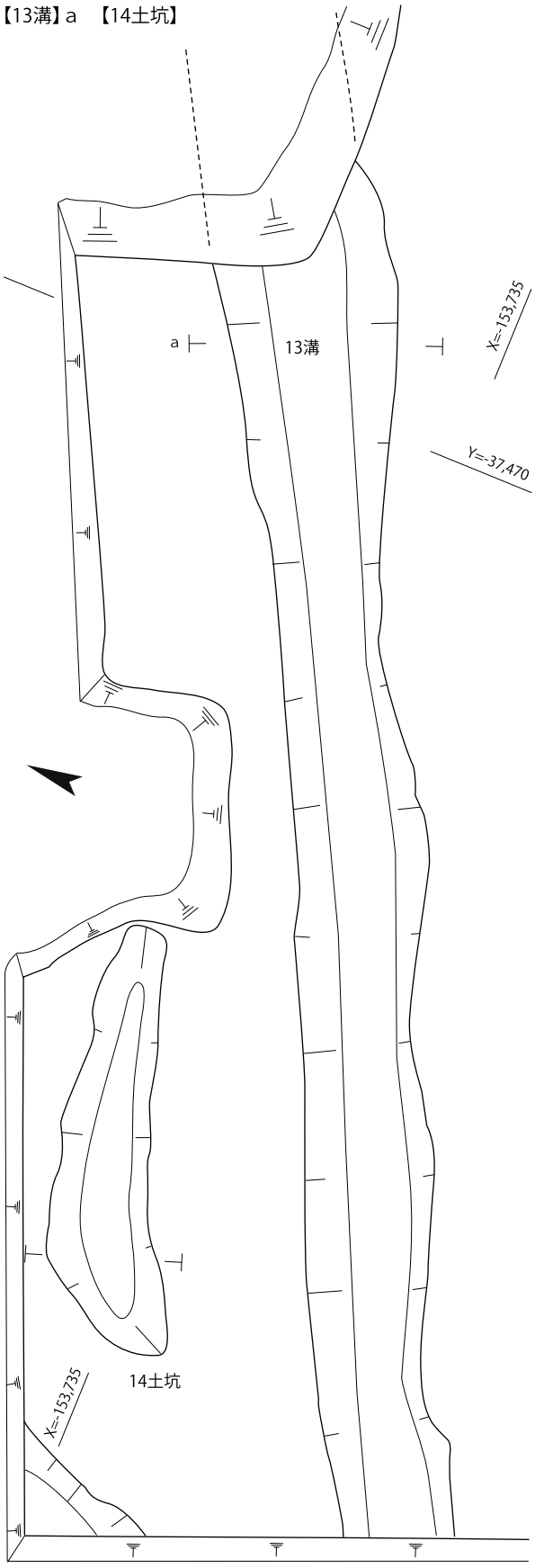
乱によって寸断されるが、連続する一条の溝であったと考えられる。08 － 1 － 2 － 1 区での検出長は 16.32 m、08 － 1 － 2 － 2 区での検出長は 8.40 mを測り、両者をつなぐと 42 mを超える長さとなる。最大幅は 2.00 m、最大深度は 0.36 mである。方位東に対して 20 度北へ振った方向軸をとり、ほぼ直線状にのびて調査区外へと続く。

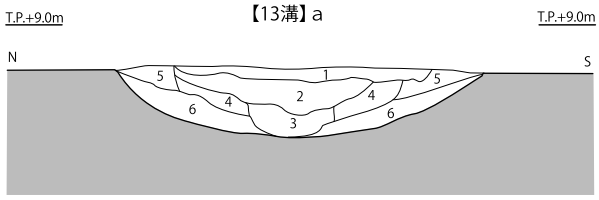
断面形状は、遺構の西部と東部とでは、若干異なっている。遺構西部（第 18 図右上）では、その断面は緩やかに窪むレンズ形を呈しており、底面にも極端な凹凸は認められない。一方、遺構東部（第 19 図右上）では、溝斜面に段があり、中央を一段低く作る逆凸形を呈する。土層断面の観察からは、はじめに中央部が掘り込まれ、これが一定程度埋没した後、溝の芯が南にずれ、溝幅が広がった様子を確認することができる。

溝底面のレベルは、08 － 1 － 2 － 1 区西端で T.P.8.35 m、08 － 1 － 2 － 2 区の東端で T.P.8.14 m を測り、その比高差は検出長 42 mに対して 0.2 mとごく僅かである。埋土は底面に粗砂～細砂の堆積があるものの中位以上は粘土質シルトを主体とし、明確なラミナは認められない。以上のことから、この溝は、西から東へ向かって水を流すことを目的として設けられたものではあるが、その流れは比較的緩やかであったことがわかる。

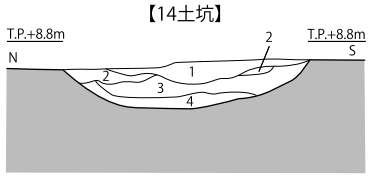
遺構埋土からは、須恵器甕・杯身、土師器羽釜・甕・鍋把手・高杯が出土した。遺物の下限年代は 12 世紀である。このため、13 溝は、中世初頭頃までには埋没したと考えられる。

14 土坑　08 － 1 － 2 － 1 区の北西部において検出した土坑である（第 16 図･第 19 図）。13 溝の北側、

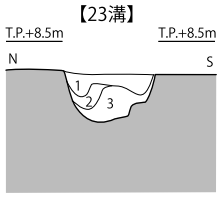




1）暗灰黄色	2.5Y4/2	礫まじり粘土質シルト　鉄分沈着 径1㎝未満の礫多量入る　しまり良い
2）オリーブ褐色	2.5Y4/3	粘土質シルト　ややしまる　やや軟質
黄灰色	2.5Y4/1	粗砂まじり粘土ブロック20%程度入る
3）黄灰色	2.5Y4/1	粗砂まじり粘土ブロック30%程度入る
オリーブ褐色	2.5Y4/3	粘土質シルト　やや軟質　鉄分沈着
4）オリーブ褐色	2.5Y4/3	粘土質シルト　2）層に近似　しまり悪い 鉄分沈着
5）暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	シルト質粗砂　径1㎝未満の礫少量入る 鉄分沈着
6）黄灰色～暗灰黄色	2.5Y5/-5/2	細砂～粗砂
暗灰黄色	2.5Y4/2	シルトブロック10%入る　しまり悪い 径1㎝未満の礫少量入る



1）黄灰色	2.5Y4/1	粗砂まじり粘土 やや軟質
灰色	7.5Y4/1	粗砂まじりシルト ブロック10%程度入る 細かい管状斑鉄形成 径0.3㎝未満の礫微量入る
2）灰色	10Y4/1	粗砂まじり粘土　軟質 管状斑鉄沈着
3）灰色	10Y4/1	粗砂まじりシルト 鉄分・管状斑鉄形成
4）灰色～灰オリーブ色	10Y4/1-4/2	シルト質粗砂 しまり悪い　管状斑鉄形成



1）オリーブ黒色～灰色
7.5Y3/1～4/1
粗砂まじり粘土質シルト
径0.5㎝未満の礫少量入る
しまり悪い　軟質
管状斑鉄形成
2）オリーブ黒色　7.5Y3/1
粗砂まじり粘土
灰色　7.5Y6/1
細砂ブロック10%程度入る
3）灰色　7.5Y4/1
シルトまじり粗砂
灰色　7.5Y4/1
シルトブロック30%程度入る

0　（断面図　1:40）　1m

第 19 図　第 5 遺構面　遺構平面断面図（3）

微高地が緩やかに下がる斜面上に位置している。平面形状は不定形、ほぼ東西方向に長軸があり、最大長 5.00 m、最大幅 1.25 m、最大深度 0.24 mを測る。断面形状は薄いレンズ形を呈しており、埋土は灰色粗砂まじりシルトを主体とする。遺構の性格は不明である。埋土からは須恵器甕・土師器甕の小片が出土した。

15 溝　08 － 1 － 2 区中央部南辺において検出した溝である（第 16 図）。検出長は 17.5 m、最大幅 0.35 m、最大深度は 0.08 mを測る。断面形状は薄いレンズ形を呈する。基軸は、方位東に対して北へ 16 ～ 18 度振った方向を指す。埋土は灰色粗砂まじりシルトに灰オリーブ色粗砂ブロックを含む。管状斑鉄の沈着があり、炭化物を少量含んでいる。土のしまりは悪い。17 溝とは切り合い関係にあり、15 溝の方が新しい。耕作に伴う溝と考えられる。埋土からは土師器鍋把手・甕の小片、須恵器杯が出土した。

16 溝　15 溝の北側に位置する小溝である（第 16 図）。検出長は 3.80 m、最大幅は 0.18 m、最大深度は 0.05 mを測る。断面形状は薄いレンズ形を呈する。方位軸、埋土ともに 15 溝に近似する。埋土からは土師器皿の小片が出土した。中世の遺構である。

17 溝　08 － 1 － 2 － 1 区南半部にあり、15 溝、16 溝に切られる形で検出された遺構である（第 16 図）。基軸は方位東に対して北へ 10 ～ 15 度振った方向を指す。途中、枝分かれして南へ向かう箇所がある。基軸方向の残存長は 11.2 m、最大幅は 0.45 m、最大深度は 0.08 mを測る。断面形状は、薄いレンズ形である。埋土はオリーブ黒色粗砂まじり粘土質シルトに灰オリーブ色粗砂ブロックを含む。管状斑鉄の沈着があり、炭化物を少量含み、やや軟質である。埋土からは、土師器長胴甕の破片が出土した。

18 溝　08 － 1 － 2 － 2 区から 08 － 1 － 2 － 1 区にかけて連続する溝である（第 16 図）。途中、鉤状に屈曲しながら存続し、調査区外へと続く。総検出長は 42.0 m、最大幅は 0.65 m、最大深度は 0.1 mを測る。基軸は方位東に対して北へ 10 ～ 15 度振る方向を指す。断面形状は、薄いレンズ形で、上下 2 層に分層できる。上層は、灰オリーブ色シルト質粗砂に灰色粘土ブロックが 5 %程度入る。下層は灰色粗砂を主体とする。ともに炭化物を僅かに含む。溝の底面は T.P.+8.30 m前後であり、顕著な勾配は認められない。

08 － 1 － 2 － 1 区では、この溝より北側が微高地となる。このため、この 18 溝を含む 20・21・22・42 の一連の溝群は、水田の縁を整形しながら耕作をおこなった際に残された痕跡ではないかと考えている。18 溝の埋土からは、土師器皿・甕のほか、底面内部に格子状暗文をもつ和泉型瓦器椀の破片が出土した。遺物の生産時期から、11 世紀末～ 12 世紀初頭に埋没した遺構と推測される。

19 溝　18 溝の北側に隣接する小遺構である（第 16 図）。検出長 2.0 m、最大幅 0.38 m、最大深度 0.1 mを測る。方向性及び埋土の堆積状況は、18 溝に類似する。埋土からは須恵器杯、土師器杯・甕の破片が出土した。

20 溝　08 － 1 － 2 － 2 区南半部において検出した溝である（第 16 図）。調査区東端から直線状にのび、43 井戸付近で屈曲する。43 井戸とは切り合う関係にあり、20 溝の方が新しい。検出長は 8.00 m、最大幅は 0.9 m、最大深度は 0.1 m程度である。基軸は、方位東から北へ 10 ～ 12 度振る方向を示す。断面形状は薄いレンズ形、埋土の堆積状況は 18 溝に類似する。埋土からは須恵器杯、土師器甕・皿が出土した。中世の遺構である。

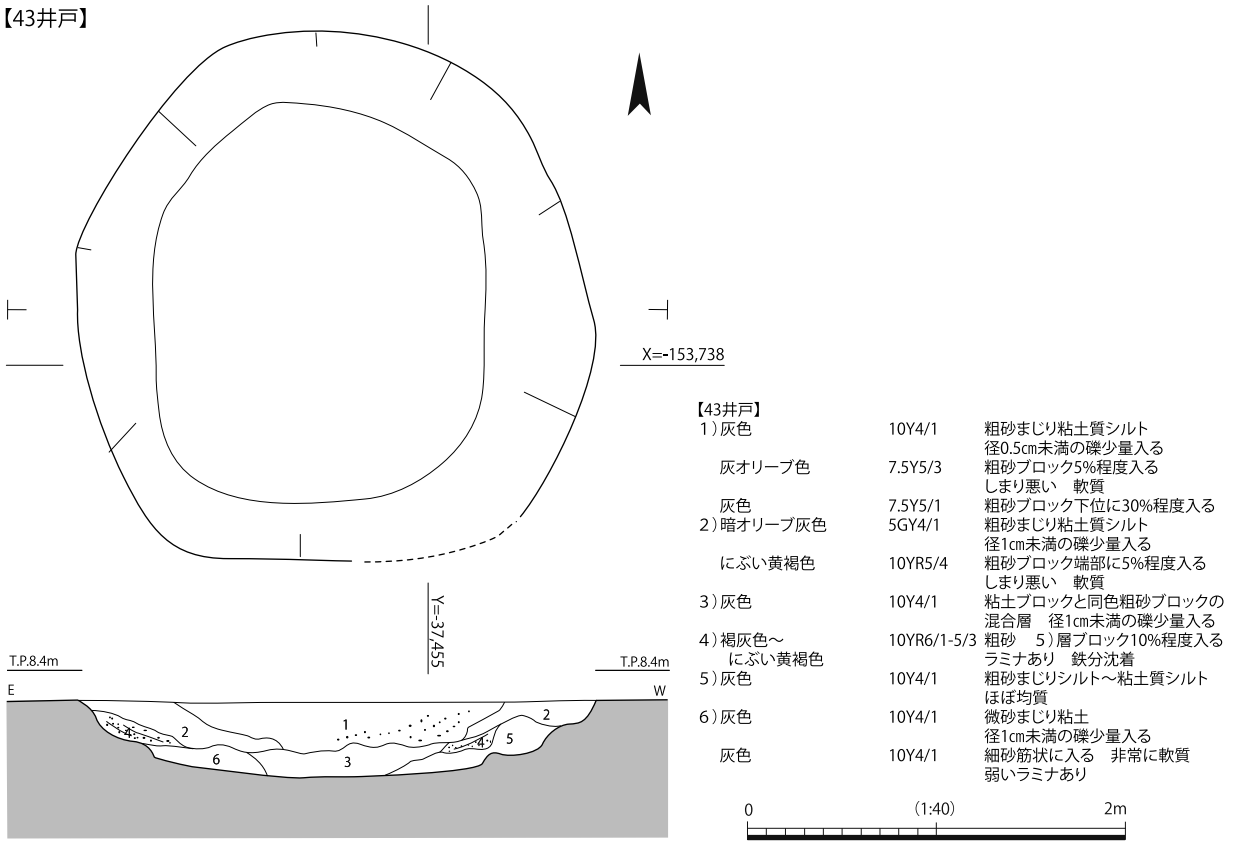
21 溝　20 溝の北側に位置する遺構である（第 16 図）。20 溝と同様、調査区外から西へのび、43 井戸を過ぎた付近で鉤状に屈曲する。検出長 10.2 m、最大幅 0.9 m、最大深度は 0.1 mを測る。基軸の方向性及び断面形状、埋土の状況は、20 溝に近似する。埋土からは須恵器杯蓋、土師器甕・杯が出土した。

22 溝　08 － 1 － 2 － 2 区中央部付近において検出した遺構である（第 16 図）。微高地から南側の低地へ下がる斜面上に位置している。ほぼ東西に方向軸を持ち、若干湾曲しながらのびる。検出長は 12.75 m、最大幅は 1.20 m、最大深度は 0.05 mを測る。断面形状は浅いレンズ形を呈する。埋土は粗砂まじり粘土質シルトを主体とするが、他の溝群より砂を含む割合が高い。埋土からは、土師器甕の小片が出土した。

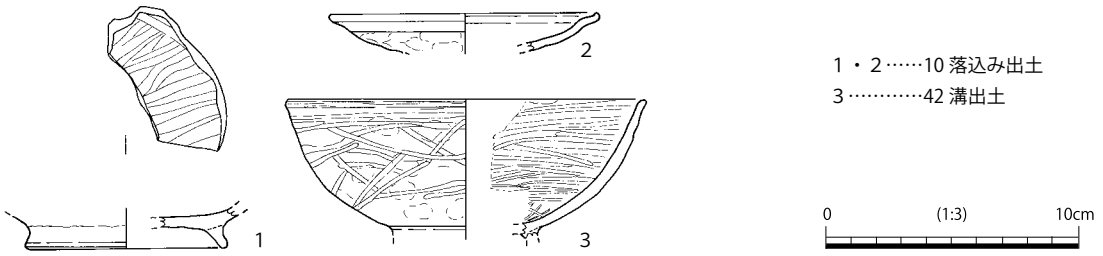
23 溝　08 － 1 － 2 － 1 区の南西端において検出した遺構である（第 16 図・第 18 図右下）。検出長 10.6 m、最大幅 0.5 m、最大深度 0.25 mを測る。溝の基軸は、方位東に対して北へ 15 ～ 20 度振った方向を指す。溝底面のレベルは、T.P.+8.19 ～ 8.21 mを測り、傾斜は認められない。掘り方は明確で、断面形状は不定形な椀形を呈する。埋土はオリーブ黒色粘土～粘土質シルトを主体とする。埋土からは、須恵器および土師器の小片が出土した。

41 溝　08 － 1 － 2 － 2 区北東端において検出した遺構である（第 16 図・第 18 図）。微高地が北側へ下がる斜面上に位置しており、北側の 13 溝に隣接する。検出長 7.20 m、最大幅 0.42 m、最大深度 0.10 mを測る。西端部は削平を受けて消滅するが、本来はさらに東西へのびていた可能性が高い。若干湾曲するものの、13 溝とほぼ平行する方向性をもつ。断面形状は皿形、埋土は暗灰黄色粗砂まじり粘土質シルトを主体とする。遺構内からの遺物の出土はなかった。

この周辺では基本的に第 4 層が存在せず、第 5 層の堆積も希薄である。そのため、41 溝の直上に堆積するのは、第 3 層（中世包含層）である。41 溝埋土には遺物が含まれていないため、遺構の存続時期は、第 3 遺構面（中世後期）～第 5 遺構面（古代末～中世初頭）までに帰属する可能性があり、その判断が難しい。ここでは、隣接する 13 溝とほぼ同方向を基軸とする観点から、13 溝と同時期の遺構



第 20 図　第 5 遺構面　遺構平面断面図（4）



第 21 図　第 5 遺構面　検出遺構内出土遺物実測図

として扱った。なお、第 19 図右下の断面図は、第 3 遺構面形成時に整えられた段とともに図示したものである。

42 溝　08 － 1 － 2 － 2 区南半部において検出した遺構である（第 16 図）。19 溝の北側に位置し、屈曲して 08 － 1 － 2 － 1 区へと続く。ほぼ同じ方向軸をもつ小溝が 08 － 1 － 2 － 1 区で確認されており、19 溝のように連続する可能性がある。検出長は 16.0 m、最大幅 1.10 m、最大深度 0.08 mを測る。基軸は方位東に対して 8 ～ 10 度北へ振る。断面形状は歪んだ皿型を呈する。徐々に立ち上がる南壁に比べて、北壁は角度をもつ。埋土は、灰色粗砂まじり粘土質シルト～粘土を主体とし、灰オリーブ色細砂ブロックを筋状に含む。土質はやや軟質で、上位に堆積した水田耕作土壌（第 5 層）に近似する。埋土からは須恵器甕片のほか、土師器皿、和泉型瓦器椀が出土した。遺物の生産時期により、この溝の埋没時期は、11 世紀末～ 12 世紀初頭頃と推測される。

出土遺物のうち実測が可能な遺物を第 21 図に掲げた。第 21 図 3 は和泉型瓦器椀である。やや丸味のある器形をもち、内外面ともにミガキ調整を行う。器壁内面のミガキは密であり、底部には格子状の暗文を施す。12 世紀初頭の遺物である。このため、42 溝は古代末の遺構であると推測される。

43 井戸　08 － 1 － 2 － 2 区南半部中央において検出された遺構である（第 16 図・第 20 図）。平面形状はいびつな円形を呈している。20 溝とは切り合い関係にあることから、この遺構群の中では、比較的早い段階に掘削され、埋没した遺構であると考えられる。直径は 2.7 ～ 2.8 m、最大深度は 0.3 mを測る。底面は平滑、壁面には細かい凹凸が認められる。浅い遺構であるが、埋土にはラミナが認められること、また調査中にも湧水が多く認められたことなどから、井戸としての機能を備えていたことを窺わせる。埋土からは、土師器皿と甕の小片が出土した。

44 井戸　43 井戸の南東に隣接する遺構である（第 16 図）。遺構の一部のみの検出であるため、その性格を判断することは難しいが、43 井戸と埋土の状況が近似することから、井戸である可能性を窺わせる。検出した範囲は、長さ 2.40 m、幅 0.50 m程度である。埋土から遺物の出土はなかった。

6．第 1 ～第 5 層出土遺物

今回の調査では、第 1 層～第 5 層より古代末～中世以降の遺物が出土した。このうち、実測が可能である遺物のうち、08 － 1 － 1 区より出土したものを第 22 図に、08 － 1 － 2 区より出土したものを第 23 図に図示した。

08 － 1 － 1 区包含層出土遺物（第 22 図・写真図版 15 － 1）　第 22 図 1 は瓦質土器の捏鉢または擂鉢である。外面はヘラ状工具によるナデ、内面は粗いハケ調整の後、指ナデを施す。第 2 層より出土した。14 ～ 15 世紀の遺物である。

第 22 図 2 は白磁碗である。僅かに内湾する器壁と厚い口縁端部をもつ。内面及び外面の体部半ばま

でを施釉する。内面底部付近に円刻が認められる。12 世紀の遺物である。第３遺構面精査時に出土した。

第22図３は円筒埴輪の破片である。タガの貼付け部分にハケメを残すが、全体的に摩滅が顕著である。円筒埴輪の破片は、05 － 1 － 2 区の調査区においても古墳時代～古代洪水砂の中から出土が報告されている。周辺地域における古墳の発見は、今のところ特に報告されていない。第３層より出土した。

第 22 図４は、平瓦の一部である。凸面は縄目が、凹面は布目の圧痕が残る。第３層より出土した。

第 22 図５～９は瓦器椀である。第 22 図５は、内面にミガキを僅かに残す。口縁外面は一段ナデ、それより下半は指オサエを施す。調査区壁面（第１層～第３層）より出土した。14 世紀の遺物である。

第 22 図６は、内面調整が摩滅のため不明、口縁外面にはナデを一段施す。器高の低い和泉型の遺物である。生産時期は 14 世紀と推測される。調査区南端の微高地上に堆積する第３層より出土した。

第 22 図７も同じく、器高の低い和泉型の遺物で、口縁外面は指ナデ、内面にはミガキを施す。底部外面には高台が認められない。14 世紀前半の遺物である。第３層より出土した。

第 22 図８は、低い高台を有する底部である。高台の断面形状は薄い方形を呈する。内面には僅かにミガキ、外面には指オサエが残る。第４層より出土した。13 世紀の遺物である。

第 22 図９も同じく底部であるが、こちらは断面三角形の高台を有する。内面には格子状の暗文が認められる。12 世紀後半期の和泉型の遺物である。第４層より出土した。

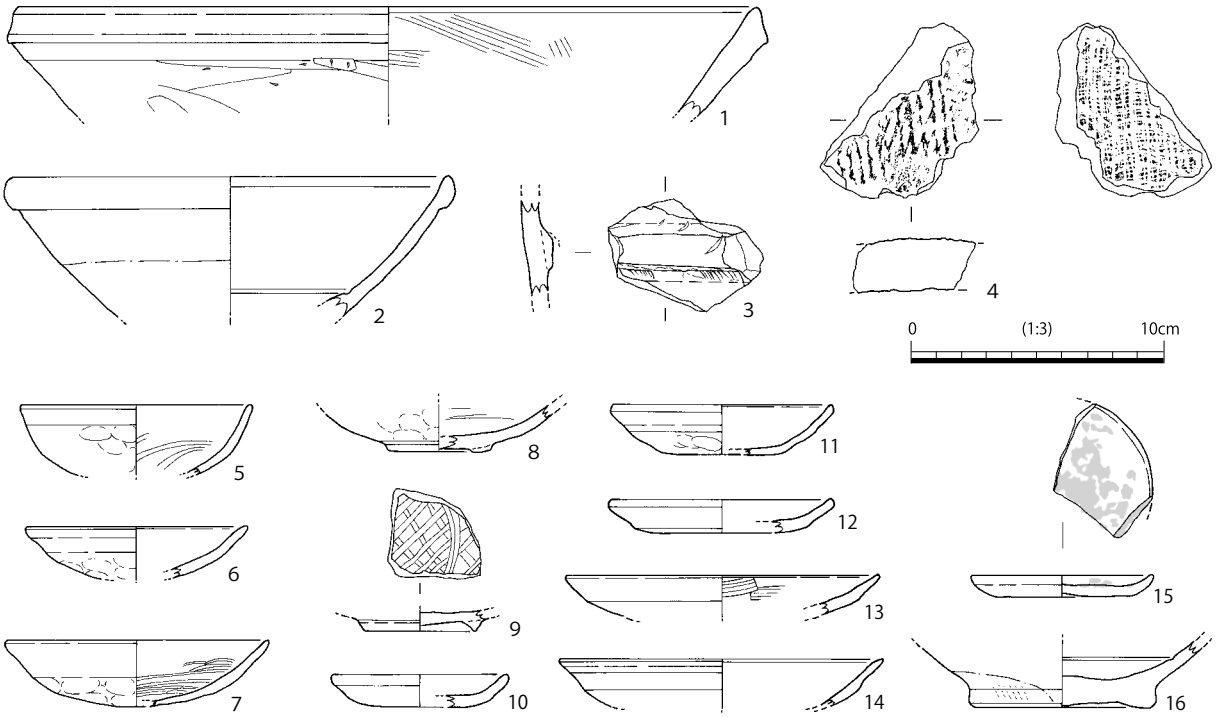
第 22 図 10 ～ 15 は土師器皿である。第 22 図 10 は、厚手の小型皿で、口縁端部を丸く作る。第４層より出土した。13 世紀の遺物である。

第 22 図 11 は、やや深みのある器形で、口縁外面に一段のナデを施す。底部内面外面ともに指オサエが顕著に残る。

第 22 図 12 は、器高が低く、器壁は厚い遺物で、口縁外面に強い指ナデを一段廻らせている。

第 22 図 13 は、尖らせた口縁端部が特徴的である。口縁外面は一段ナデ、内面にはハケメを残す。

第 22 図 14 は、口縁外面に２段のナデを施す。第５層より出土した。12 世紀以前の遺物である。



第 22 図　08 － 1 － 1 区　第１～５層出土遺物実測図

第 22 図 15 は、小型品で器高は低い。外面は一段ナデ、底面にはやや凹凸が認められる。内面に炭化物が付着すること、また口縁外面に一部黒色化が認められることから、灯明皿として用いられたものと推測される。

第 22 図 16 は、白磁碗の底部である。内面は施釉、外面の一部に露胎が認められる。胎土表面には平行するタタキ状の調整痕が残る。底部内面には円刻が認められる。第 5 層より出土した。12 世紀の遺物である。

08 － 1 － 2 区包含層出土遺物（第 23 図・写真図版 15-2・16-1） 第 23 図 1 は、白磁紅皿である。器壁外面を菊花状に作る。内面と外面口縁部に施釉し、底面及び外面下半部は露胎する。中近世の遺物である。第 1 層より出土した。

第 23 図 2 は、染付碗である。内外面とも施釉、外面には紋様（梅か？）を描く。見込部には蛇の目釉剥ぎが、高台端部には離れ砂の付着が認められる。第 1 － 1 層より出土した。近世後期の遺物である。

第 23 図 3 は青磁碗の底部である。厚い器壁と断面方形の高台を有する。底部内面には陰刻にて牡丹の花を描く。内外面ともに施釉、高台内は輪状に釉掻きが為されている。第 1 － 2 層より出土した。15 ～ 16 世紀の遺物である。

第 23 図 4 ・ 6 ・ 8 は、土師器皿である。ともに口縁外部に一段ナデを施す。第 23 図 4 は、底部外面の指オサエや、器壁内面の指ナデ痕が顕著に残る。15 世紀以降の遺物である。第 3 層より出土した。

第 23 図 6 は、深みがある器形で、器壁内面にハケ状工具の痕跡を残す。第 3 遺構面より出土した。

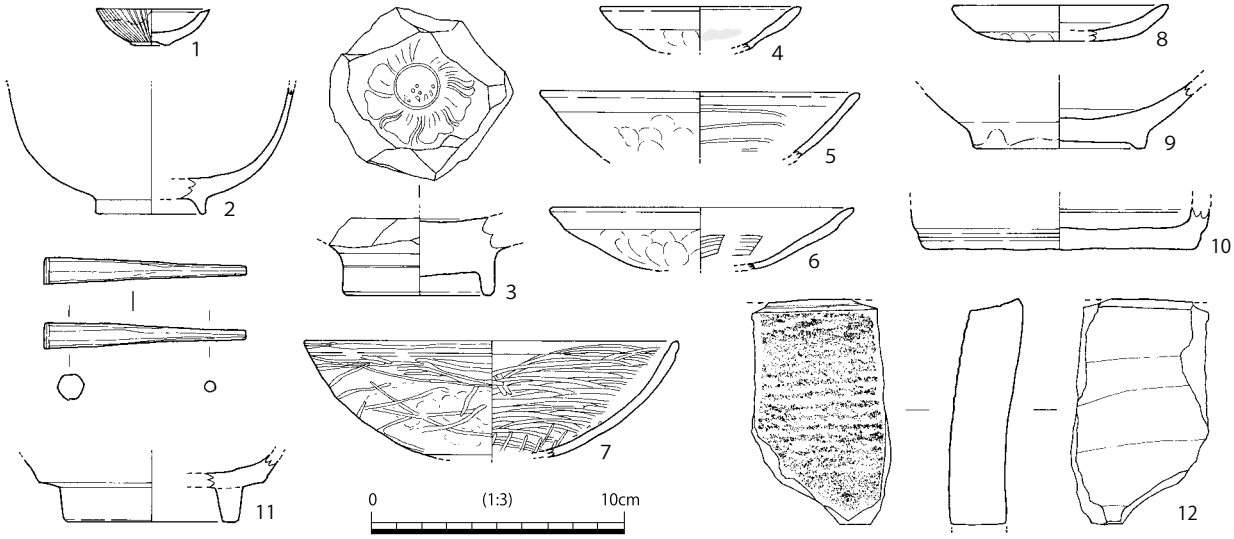
第 23 図 8 は、器壁が厚く浅い小型品である。13 世紀以降の遺物である。第 4 層より出土した。

第 23 図 5・7 は、瓦器椀である。第 23 図 5 は、口縁外面に一段のナデ、内面には疎らなミガキを施す。13 世紀に作られた和泉型の遺物である。第 3 層より出土した。

第 23 図 7 は、同じく和泉型の遺物であるが、内外面ともにミガキ調整が為されており、内面底部には格子状の暗文を施す。12 世紀中葉の遺物である。第 5 遺構面検出時に出土した。

第 23 図 9 は、白磁碗である。低く細い高台をもち、底面の中央が若干盛り上がる。高台及び高台内は露胎する。11 世紀～ 12 世紀初頭の遺物である。第 5 層より出土した

第 23 図 10 は、須恵器壺の底部である。平底で、底部外面には指ナデ痕が残る。底部に近い器壁外



第 23 図　08 － 1 － 2 区　第 1 ～ 5 層出土遺物実測図

面には一条の沈線を廻らせる。底部内面には自然釉が薄く付着する。古代の遺物である。

第 23 図 11 は、施釉陶器碗の底部である。胎土は須恵質で、内面に褐色の鉄釉を施す。見込部には離れ砂の付着とともに蛇ノ目釉剥ぎが認められる。外面底部は露胎し、工具による整形が鋭い。第１－２層より出土した。近世の遺物である。

第 23 図 12 は、平瓦の破片である。凸面に縄目、凹面にはナデ痕が薄く残る。第３層より出土した。

第 23 図 13 は、真鍮製の煙管である。金属板を筒状に丸めて作成する。吸口部分であると推測されるが他の部品の出土はない。第１－１層より出土した。

７．第６遺構面（古墳時代後期～平安時代初頭）

第６遺構面は、古代の洪水砂である第６層を除去して検出した遺構面である。既述の通り、これ以下の遺構面は、08 －１－２区のみでの検出となる。

08 －１－２区中央部では、北東から南西へ向かう流路を確認した。旧平野川が氾濫する初段階の流れの一枝と推測される自然流路である。第６遺構面の地形は、西半部が微高地状に盛り上がるほか、東半部は比較的平坦であり、南へ向かって緩やかに下がる。このため、流路上端から下端までの比高差は西岸の方が大きく、東岸は緩やかである。流路は、微高地の裾をめぐるよう避け、調査区外へと続く。流路の岸斜面には、鱗状を呈する流水痕跡が明確に刻まれていた。

遺構面のレベルは、最も高い西部の微高地上で T.P.+7.10 m、最も低い南東部で T.P.+6.70 mを測る。流路の底面は、T.P.+6.80 ～ 6.60 mであり、流れの傾斜度は小さい。

遺構面の基盤層である第７層上位には、葦類と思われる植物遺体が多数含まれていたことから、調査地周辺は洪水砂が到達する段階ではすでに湿地化し、水辺に植物が繁茂する景観を呈していたことがわかる。

第６層からは、弥生土器壺・甕、土師器鉢・甕・杯・皿・甑・羽釜、須恵器甕・杯身・杯蓋・壺・高杯・提瓶・鼎、円筒埴輪、製塩土器、砥石、サヌカイト切片が出土した。遺物の下限時期は、概ね９世紀初頭であるが、特に７世紀末～８世紀中葉までの遺物が多く含まれている。

第６層は、「第１節　基本層序」に示したとおり、ラミナの方向性や砂粒の大小によって計３層に大別できるが、必ずしも明確な時期差を示してはいない。但し、流路の底面付近では、古墳時代後期の遺物を含む割合が高いこと、また基盤土壌である第７層には古墳時代後期の遺物が含まれていないことを考慮すると、第６層の堆積時期は６世紀～９世紀（古墳時代後期～平安時代初頭）のスパンで捉えることができる。その間、約 400 年に渡って旧平野川はこの周辺を流走し、大規模な氾濫を繰り返しながら、大量の土砂とともに、周辺集落の遺物を調査区内へ運び込んだと考えられる。

８．第６層出土遺物

第６層から出土した遺物を、調査区ごとに第 25 図～第 29 図に示した。

08 －１－１区包含層出土遺物（第 25 図）　第 25 図１は、弥生土器甕の底部である。外面は底部までタタキ調整を施す。内面にはヘラ状工具で上方へナデ上げた痕跡が残る。弥生時代後期の遺物である。第６層中層より出土した。

第 25 図２・３は、土師器鉢の口縁部である。第 25 図２は、丸味をおびた体部から口縁部を短く外反させる。内外面ともに丁寧なナデ調整を施している。第６層上層より出土した。

第 25 図３は、第 25 図２よりも若干肩部が張る器形を持つ。内面は工具を用いて斜め上方へナデ上げている。ともに古墳時代前期（庄内式後期）の遺物である。第６層上層より出土した。

第 25 図４は、土師器の杯である。内面の壁面には放射暗文、底面には螺旋暗文を施す。口縁端部は丁寧なナデにより内面に段を作る。口縁部外面には、整形時に付された爪痕が一定間隔で残る。その上を指ナデし、さらに数条のミガキを施している。器壁外面下半部は指頭圧痕が残るため、細かい凹凸が目出つ。また、底部外面には大きく黒斑が残る。８世紀前半の遺物である。第６層上層より出土した。

第 25 図５は、須恵器杯蓋である。外面は口縁部をヨコナデ、天井部にヘラケズリを施す。胎土が粗く、一辺 0.3㎝程度の礫を含むため、器壁外面にひび割れが生じている。内面はヨコナデの後、縦方向のナデを施す。６世紀末～７世紀初頭の遺物である。第６層上層より出土した。

第 25 図６・７は、須恵器杯身である。第 25 図６の口縁部は、やや内傾しながら立ち上がり、口縁端部内面に浅い段を作る。底部外面には融着痕跡が弧状に認められる。また、蓋受端部にも融着痕跡が残る。このことから、この遺物が蓋をかぶせた状態で、他の遺物の上に積上げて焼成されたことが想像

第 24 図　第６遺構面　全体図

される。６世紀中葉の遺物である。第６層上層より出土した。

第 25 図７は、杯椀とも称される遺物である。内面は丁寧なヨコナデの後、底部中央に縦方向のナデを施す。底部外面は回転ヘラ切りのため、中央に粘土塊と工具の掻痕を残す。７世紀の遺物である。第６層中層より出土した。

第 25 図８は、全体的に摩滅が著しいものの、内面底部に僅かにヨコナデ調整を認める。底面には低い高台を貼りつけている。８世紀の遺物である。第６層上層より出土した。

第 25 図９・10 は、須恵器壺の底部である。９は平底で、外面底部の縁辺部に工具の掻痕を残す。内面には自然釉が薄く付着する。８世紀の遺物であろう。第６層上層より出土した。

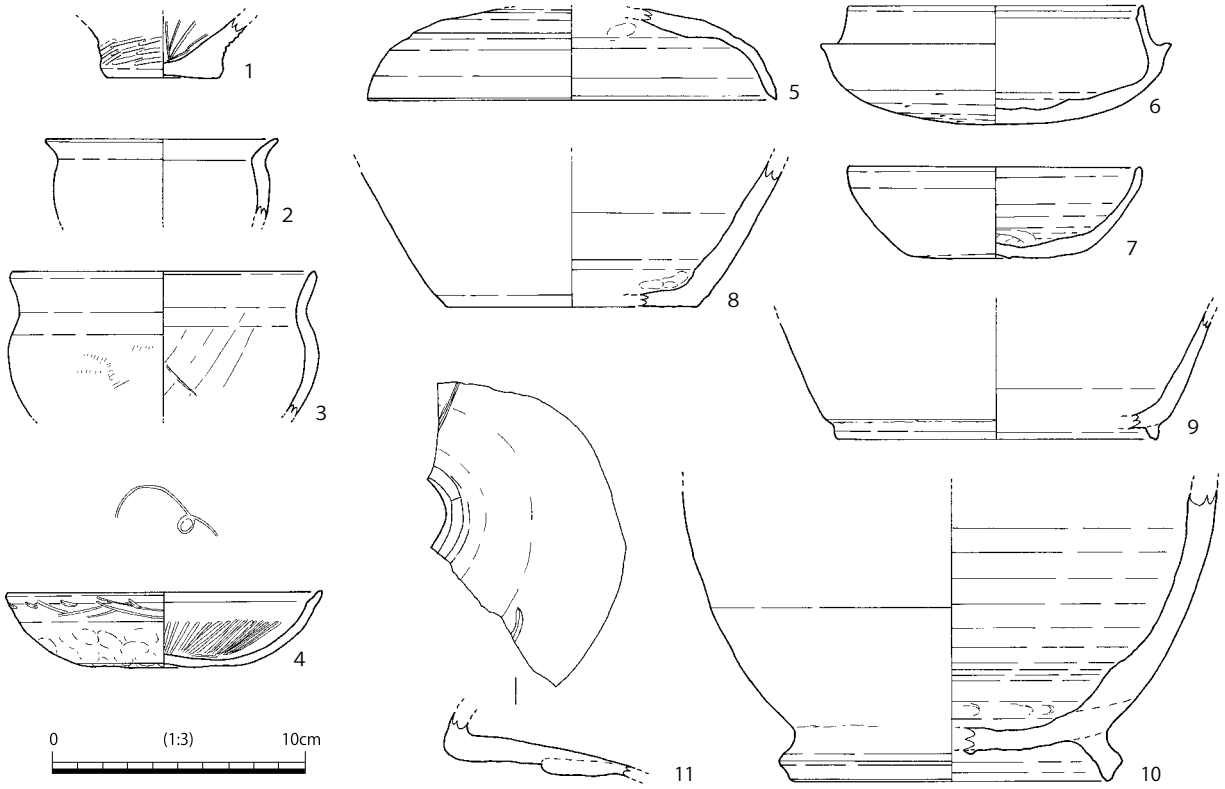
第 25 図 10 は、高さのある高台を貼りつける大型品である。器壁は内外ともにナデ調整、高台内には小さく粘土塊を残す。外面の一部に自然釉が付着する。８世紀前半の遺物である。第６層上層より出土した。

第 25 図 11 は、須恵器平瓶の肩部である。内面には、粘土板の充填痕跡が明確に残る。外面はナデ調整の後、ヘラ記号と思われる線刻を２箇所に施す。７世紀の遺物である。第６層上層より出土した。

このほか、出土遺物の中には、融着痕跡を残す須恵器甕体部の破片が２点含まれていた（写真図版 17 上段）。その痕跡が円弧を描くことから、杯類と一緒に焼成されたことがわかる。ともに古墳時代後期の遺物である。第６層上層より出土した。

08 － 1 － 2 － 1 区包含層出土遺物（第 26 図・第 27 図・写真図版 18 ～ 21 － 1 ）　第 26 図１は、弥生土器壺の底部である。摩滅が著しく調整等は不明である。第６層下層より出土した。

第 26 図２～４は、土師器高杯である。第 26 図２は杯部の小片である。口縁部が緩やかに外反する。摩滅は著しいが、外面に縦方向のハケメを認めることができる。古墳時代前期（布留式？）の遺物であ



第 25 図　08 － 1 － 1 区　第６層出土遺物実測図

る。第６層下層より出土した。

第 26 図３は脚部のみの出土である。外面調整は、縦方向のハケ後ミガキを施す。ミガキの程度は粗略である。裾端部はナデにより、端面を作る。脚部内面はヘラ状工具によるヨコ方向のナデを行う。古墳時代前期（布留式）の遺物である。第６層下層より出土した。

第 26 図４は、杯部と脚部の接着復元が可能な遺物である。大きく外反する杯部外面には斜め方向のハケが施されている。口縁端部はさらにつまみ上げてヨコナデし、端面を作る。端面には、凹線状の段が一条認められる。杯部外面下半部には、稜を持つ段を作る。杯部内面は丁寧なヨコナデを施し、内面中央部に細かい指頭圧痕を残す。脚部は太く短く続き、屈曲させて裾部との変化点とする。脚部・裾部ともに外面は縦方向のハケを密に施す。脚部内面は横方向のヘラケズリ、裾部内面は工具の角度を変えながら短くハケを施す。杯部との接着は、指ナデにより丁寧に仕上げられている。古墳時代前期（布留式時後半）の遺物である。第６層下層より出土した。

第 26 図５は、土師器小型器台である。杯部の口縁は緩やかに立ち上がり、内部底面中央部は僅かに盛り上がる。内面は、平滑に仕上げられているためミガキ調整が施されていたと考えられるが、その痕跡を見出すことができなかった。杯部外面は粗いナデ調整で、指頭圧痕や工具の圧痕を残す。古墳時代前期（庄内式後半）の遺物である。第６層下層より出土した。

第 26 図６・７は、土師器小型壺である。第 26 図６は、丸い底部と稜のある肩、直線的に広がる口縁を持つ。外面は、肩より上位はハケ後ナデ、肩より下位はヘラナデを施す。第６層下層より出土した。

第 26 図７は、尖り気味の底部と丸味のある肩を持つ。肩部以上には縦方向のハケ、肩部以下はヘラケズリを施す。器壁が厚く、無骨な印象が強い。ともに古墳時代前期（布留式後半）の遺物である。第６層下層より出土した。

第 26 図８～ 15 は、土師器杯である。第 26 図８は、内湾気味に立ち上がる口縁部と、僅かに外反させる口縁端部を持つ。口縁部外面には一段の指ナデを施す。内面は指ナデの後、粗く放射暗文を描く。底部外面に大きく黒斑が認められる。７世紀末～８世紀初頭の遺物である。第６層上層より出土した。

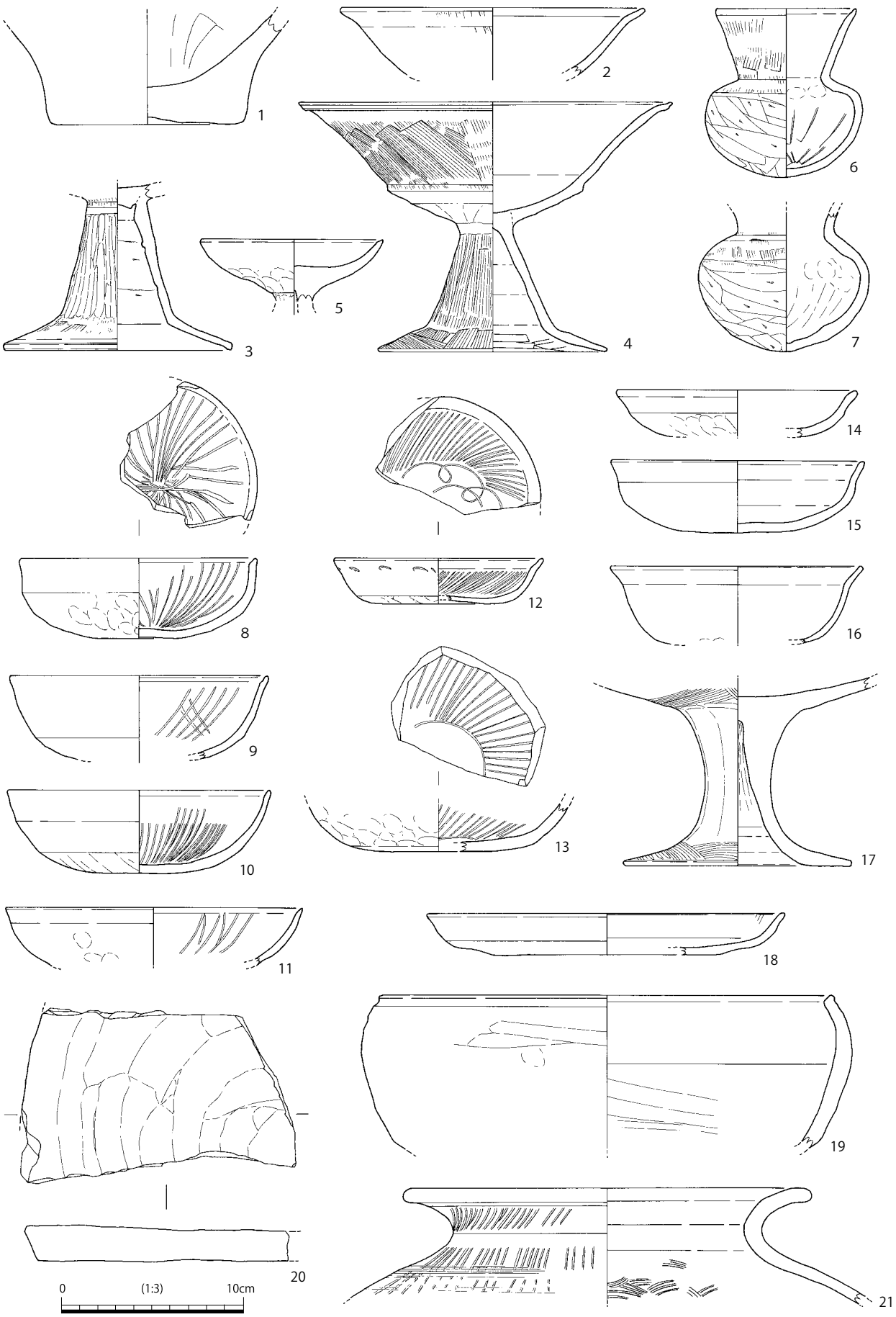
第 26 図９は、やや外へ開く口縁を持つ。口縁端部は、短くつまみ上げてヨコナデを行い、内側に弱い段を作る。器壁内面の摩滅は著しいが、放射暗文を僅かに認めることができる。口縁外面には、二段のヨコナデ調整を施す。同じく８世紀の遺物である。第６層下層より出土した。

第 26 図 10 は、底面から丸味をおびて立ち上がる器壁と外へ開く口縁を持つ。口縁端部は指ナデにより、僅かに外反させる。口縁部外面には２段のヨコナデ調整を行う。内面は横及び斜め方向の指ナデの後、放射暗文を施す。８世紀の遺物である。第６層下層より出土した。

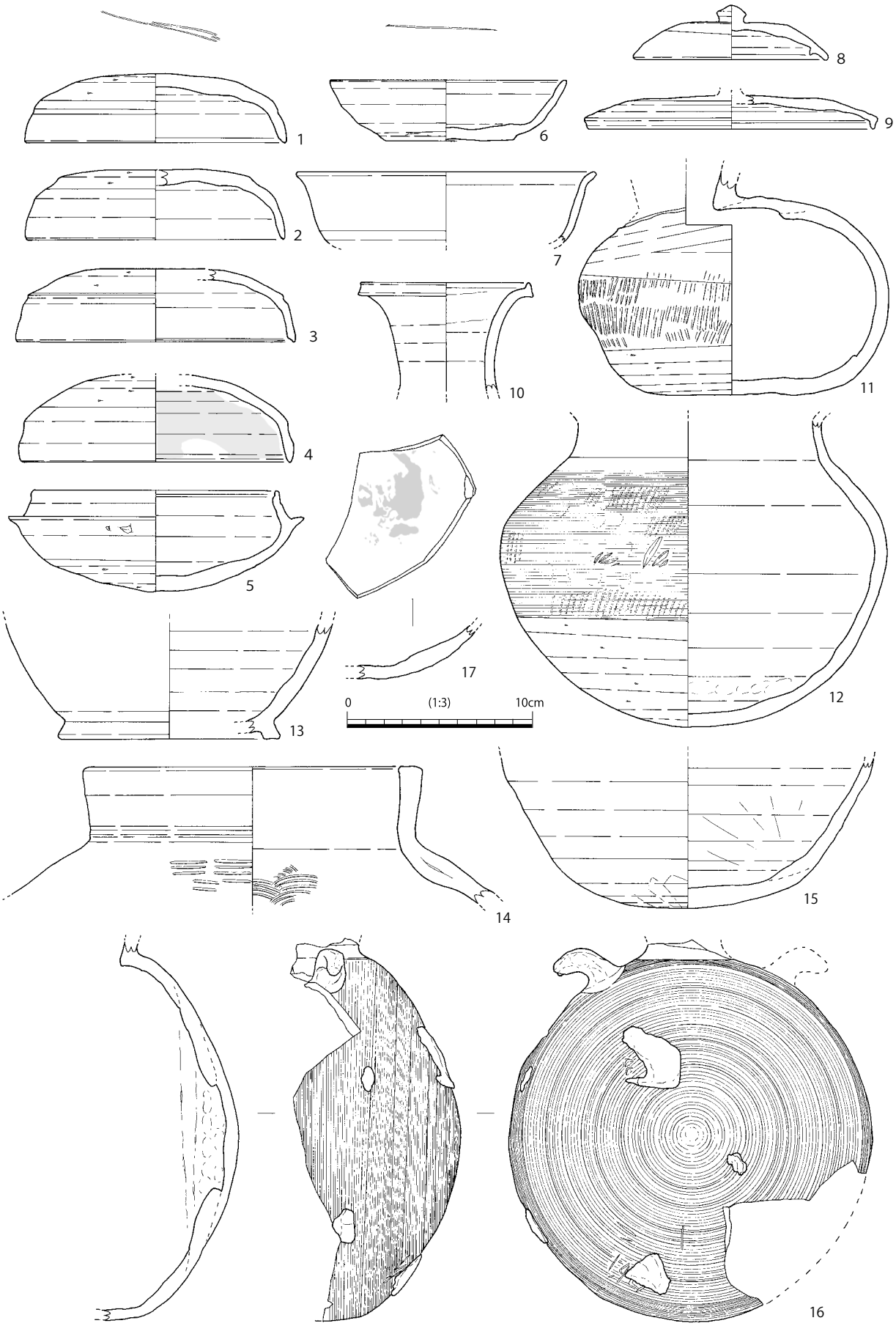
第 26 図 11 は、杯の口縁部である。浅い器高と外へ開く口縁を持つ。口縁部外面に一段のヨコナデを施す。口縁端部はつまみ上げて尖らせる。器壁内面にはヨコナデの後、粗い放射暗文を施す。８世紀中頃の遺物である。第６層下層より出土した。

第 26 図 12 は、他の遺物に比べて精良品である。底面から直線的に開く器壁と、ヨコナデにより外反させた口縁部を持つ。口縁外面に、一段のヨコナデを施すが、整形段階の爪痕が一定間隔で残る。内面はヨコナデの後、器壁に細かい放射暗文と底面に螺旋暗文を施す。８世紀中頃の遺物である。第６層下層より出土した。

第26図13は、杯の底部である。底部から器壁へ緩やかに立ち上がる器形を持つ。器壁内面に放射暗文、底部内面に輪状暗文を描く。底部外面には細かい凹凸が残る。８世紀前半の遺物である。第６層中層よ



第 26 図　08 － 1 － 2 － 1 区　第 6 層出土遺物実測図（1）



第 27 図　08 － 1 － 2 － 1 区　第 6 層出土遺物実測図（2）

り出土した。

第 26 図 14 は、杯の口縁部である。口縁外面に一段のヨコナデを施す。内面はナデ調整を行うのみであり、暗文は認められない。口縁部の一部が黒色化しており、焦痕もしくは墨痕と思われる。８世紀後半の遺物である。第６層下層より出土した。

第 26 図 15 は、残存部位が大きく、全体復元が可能である。14 と同じく、器壁内面はナデ調整で、暗文は認められない。口縁部外面は一段ナデを施す。８世紀後半の遺物である。第６層下層より出土した。

第 26 図 16 は、土師器鉢である。丸味をもって立ち上がる器壁は、口縁部で屈曲して外反する。外面はナデ調整を行うため、内面ほど屈曲が明確ではない。内面は平滑に仕上げられており、ミガキが為されていたと考えられるが、その痕跡を見出すことができない。古墳時代前期（布留式）の遺物である。第６層下層より出土した。

第 26 図 17 は、土師器高杯である。面取りを施した脚柱と水平方向に開く杯部を持つ。杯部は摩滅が著しいが、脚部外面のヘラケズリと、裾部外面のハケ調整は明瞭に残る。脚部内面はヨコ方向のヘラケズリを行い、絞り目を隠す。８世紀中頃の遺物である。第６層中層より出土した。

第 26 図 18 は、土師器皿である。広い口径と浅い器高を持つ。口縁部外面には一段のヨコナデを施し、口縁端部を丸くおさめる。内部底面には暗文の痕跡を残す。底面縁部には、指頭圧痕が明瞭に残る。口縁の一部に炭化物が付着し、黒色化が認められる。８世紀中頃の遺物である。第６層下層より出土した。

第 26 図 19 は、土師器鉢である。大型品で、口径 25cm 前後に復元できる。体部は内湾し、口縁端部はナデによって端面を作る。内外面ともにヨコナデを施す。内面の下半部は器壁が荒れており、使用痕と推測される。８世紀前半の遺物である。第６層中層より出土した。

第 26 図 20 は、板状に加工された石製品の一部である。材質は片麻岩である。表面を細かく敲打して平面を作り出しており、特に図示した面には鑿状工具等による加工の単位が認められる。残存する左辺を延伸させると平たい円形に復元できるものの、器種は不明である。第６層下層より出土した。

第 26 図 21 は須恵器甕の口縁部である。頸部外面は平行タタキ後ヨコナデ、肩部はタタキ後カキ目が施されている。体部内面は同心円状タタキが残る。内面頸部に工具の痕跡かと思われる縦方向のキズがある。古代の遺物である。第６層下層より出土した。

第 27 図１～４は、須恵器杯蓋である。第 27 図１は、砂粒が多く入る粗製品である。天井部の回転ヘラケズリは比較的広範囲に及ぶ。口縁部の稜は退化して丸味を帯びるため、稜下の凹線のみが目立つ。外面中央に、長短３本の線刻を焼成後に施す。６世紀の遺物である。第６層下層より出土した。

第 27 図２は、杯蓋の破片である。天井部の回転ヘラケズリは狭い。口縁部はユビナデ痕による凹凸が目立つ。６世紀末～７世紀初頭の遺物である。第６層下層より出土した。

第 27 図３は、小片であるが胎土・焼成ともに良好である。口縁部の稜が明瞭に残る。口縁端面には段を作る。６世紀前半期の遺物である。第６層下層より出土した。

第 27 図４は、内面に広く煤もしくは墨痕跡を残す。６世紀末～７世紀初頭の遺物である。第６層下層より出土した。

第 27 図５～７は、須恵器杯身である。第 27 図５は、残存状態が良好でほぼ完存する。胎土が粗く、径 0.7㎝未満の白色礫と細かい黒色粒を多く含む。口縁の受部や立ち上がりは丁寧にナデ調整が為されるが、シャープさを欠く。内面はヨコナデ後、中央に縦方向のナデを加える。外面底部はヘラケズリ調整、一部に自然釉が付着する。６世紀の遺物である。第６層下層より出土した。

第27図６は、外面底部のヘラケズリ範囲の周辺をユビナデし、高台状に段を作る。内面はヨコナデ後、底部中央を縦方向にユビナデし、これと同方向に一条の線刻を記す。７世紀の遺物である。第６層下層より出土した。

第27図７は、口縁部のみの小片である。丁寧なナデにより、口縁部を薄く緩やかに外反させる。器壁の下半部には、ヘラケズリによる砂粒の移動が認められる。８世紀後半の遺物である。第６層中層より出土した。

第27図８・９は、須恵器杯蓋のうち、頂部に摘みを持つ器種である。第27図８は、小型蓋の完形品である。口径10㎝程度の小型品で、頂部に低い乳頭状の摘みを持つ。内面口縁部では、かえりを短く、シャープに作り出す。内面の調整はヨコナデ後、中央部に縦方向のナデを施す。外面に薄く自然釉がかかる。７世紀中葉の遺物である。第６層下層より出土した。

第27図９は蓋の口縁部である。外面中央部はヘラケズリ、その他はヨコナデを施す。８世紀前半の遺物である。第６層下層より出土した。

第27図10・13は壺である。第27図10は、長頸壺の頸部である。細く延びた口縁の端部を受け口状につまみ上げ、その外部をなでて端面を作る。８世紀末～９世紀初頭の遺物である。

第27図13は、高台を持つ壺の底部である。おそらく長頸壺の一部であると推測される。内外ともにユビナデ調整を行う。内面の底部には、僅かに自然釉が付着する。８世紀の遺物である。第６層下層より出土した。

第27図11は、平瓶である。丸い器形をもち、口縁部を欠く。外面胴部は平行タタキ、底面はヘラケズリを施す。肩より上位は丁寧なユビナデによって仕上げられている。内面には粘土板の充填痕跡が残る。７世紀の遺物である。第６層下層より出土した。

第27図12・14・15は甕である。第27図12の体部はほぼ完存するものの、口縁部は全周を欠く。体部は縦方向の平行タタキ後、カキメを施す。底部には広くヘラケズリが為される。胴部には、焼成前につけられた工具痕跡が認められるが、故意によるものか、キズであるのかは判断が難しい。内面調整はヨコナデ、底面には指頭圧痕による凹凸が残る。７～８世紀の遺物である。第６層下層より出土した。

第27図14は、大型の短頸壺の口縁部である。肩部から口縁が直線的に立ち上がる器形を持つ。口縁端部は、ナデにより広く端面を作り出す。器壁の内面は同心円状タタキ、外面肩部は平行タタキを施すが、自然釉の付着により必ずしも明瞭ではない。７世紀後半の遺物である。第６層上層より出土した。

第27図15は、甕の底部または横瓶の側面である。外面は、ヘラケズリによって粗く整形する。体部の随所に火襷状の黒斑が数条走る。内面器壁はヨコナデ、中央には縦方向のナデを施す。７～８世紀の遺物である。第６層上層より出土した。

第27図16は提瓶である。体部の４割程度と一方の紐掛けのみが残存し、口縁部を欠く。体部は、渦巻状のカキ目が綿密に施されている。体部下半部には、焼成前の線刻が認められる。また体部上半部には、オリーブ色の自然釉が濃厚に付着する。体部の５箇所には、須恵器の破片が融着する。焼成時に焼台として須恵器の破片が用いられたか、あるいは窯内に隙間なく土器が詰め込まれた結果、他製品と接触したものと思われる。内面の調整はユビナデ、粘土板の充填痕跡が顕著であり、一部に粘土塊が付着する。焼成は甘く、断面セピア色を呈する。６世紀後半の遺物である。第６層下層より出土した。

第27図17は、内面に墨痕が残る須恵器の破片である。杯の一部と解されるが、時期の推定は難しい。ヘラケズリを施す底部外面には、短い線刻が残る。第６層下層より出土した。

08－1－2－2区包含層出土遺物（第28図・第29図・写真図版21-2～24）　第28図1・2は、土師器杯である。第28図1は、丸味をもって立ち上がる口縁部と、僅かに外反させる口縁端部を持つ。口縁部外面には一段の指ナデを施す。内面は摩滅が著しいものの、僅かに放射暗文が残る。第6層中層より出土した。

第28図2は、口縁部の破片である。1より器壁が薄く、口縁端部が尖る。口縁部外面には、幅狭の指ナデを一段施す。内面には横方向及び斜め方向へのユビナデの後、放射暗文を描く。ともに8世紀前半の遺物である。第6層下層より出土した。

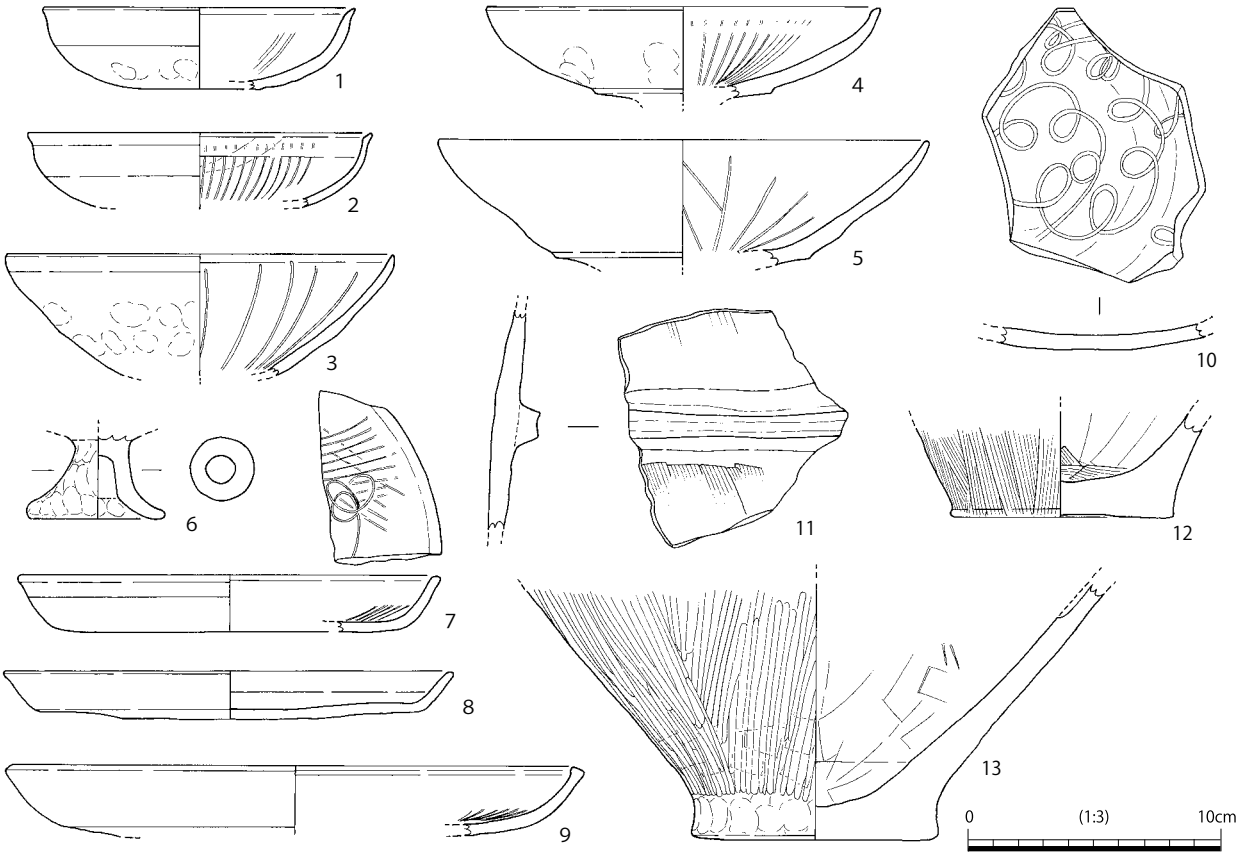
第28図3～5は、土師器高杯である。第28図3は、杯部の破片である。外面は摩滅が著しいが、口縁部にヨコナデの痕跡をとどめる。内面は、横及び斜め方向のユビナデの後、放射暗文が施されている。暗文は間隔は広く、疎らである。6世紀末～7世紀の遺物と考えられる。第6層中層より出土した。

第28図4は、杯部が浅く、器壁が厚い。内面には放射暗文が僅かに残る。杯部下半部に段を有する。7世紀前半の遺物である。第6層下層より出土した。

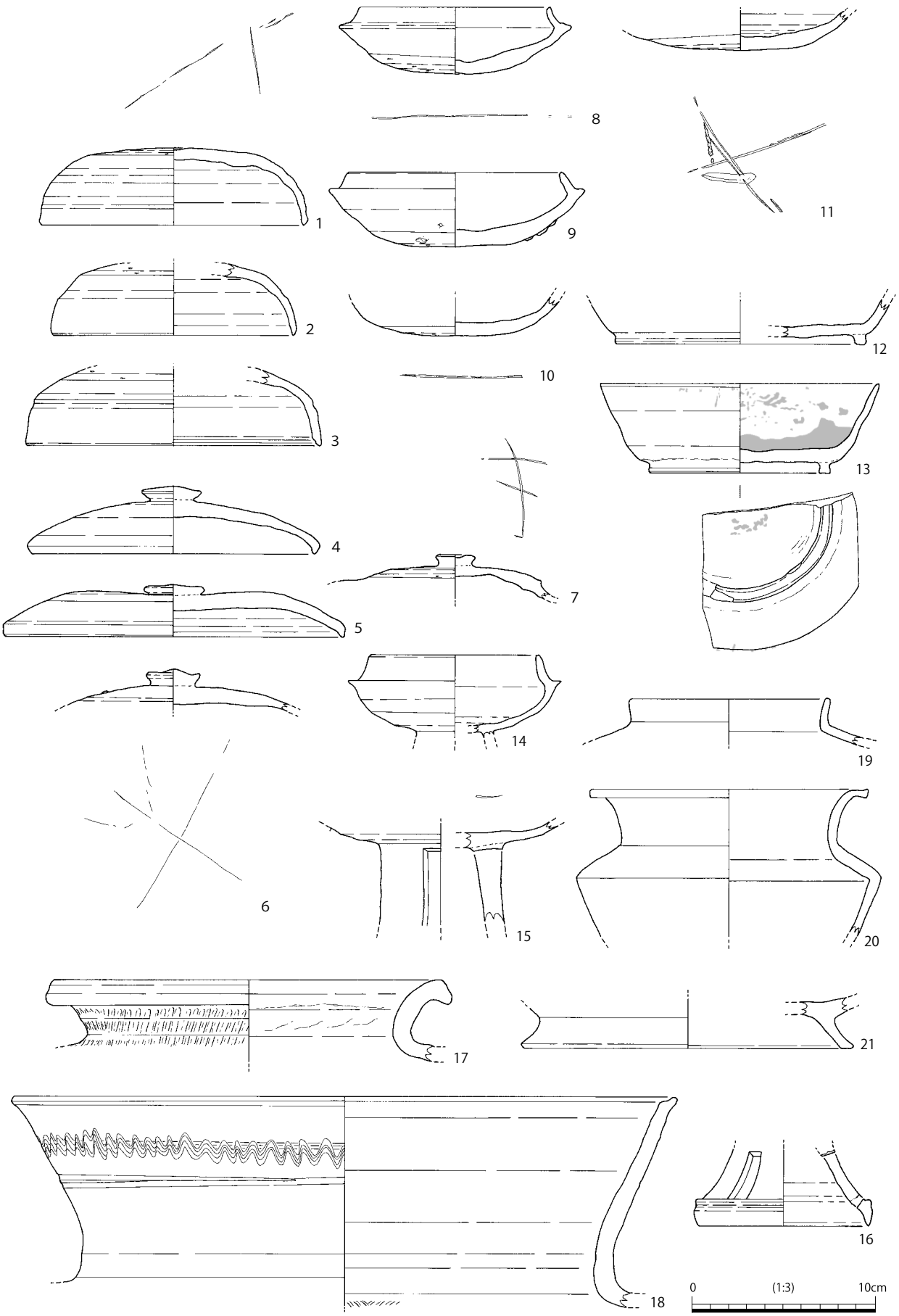
第28図5も同じく杯部の破片である。外面は膨らみをもって広がるが、内面は平滑に仕上げられている。外面下半部の段はごく簡略化され、僅かに稜を保つ程度である。内面の調整は、横及び斜め上方へのユビナデの後、疎らな放射暗文を施す。6世紀末～7世紀の遺物である。第6層中層より出土した。

第28図6は、土師質のミニチュア土器である。高杯（脚部）を表したものと推測される。脚部は中空に作られている。手捏ねで作られており、指頭圧痕が随所に残る。その形状から、8世紀中葉以前の高杯をモチーフとして作られた可能性が高い。第6層下層より出土した。

第28図7～10は、土師器皿である。第28図7は、内面に器壁内面に放射暗文、底面に螺旋暗文



第28図　08－1－2－2区　第6層出土遺物実測図（1）



第 29 図　08 － 1 － 2 － 2 区　第 6 層出土遺物実測図（2）

を施している。内面から口縁端部にかけて、黒色化が顕著である。煤等が付着したものと解される。８世紀前半の遺物である。第６層中層より出土した。

第28図８は、浅く、底部から屈曲して口縁部が立ち上がる器形を持つ。口縁端部は丸くおさめており、特別な加工は認められない。内外面ともに暗文は認められない。底部外面は指頭圧痕に拠る凹凸が顕著である。８世紀中頃の遺物であると考えられる。第６層中層より出土した。

第28図９は、同じく浅い器形であるが、底面からの立ち上がりは丸味を帯びる。口縁端部は内側に折り返されて厚みをもち、上部に端面を作る。内面の調整はヨコナデ及び斜め方向の放射暗文、外面は口縁部にヨコナデを一段施す。８世紀前半の遺物である。第６層下層より出土した。

第28図10は、大型の皿で、内部底面に螺旋暗文が明瞭に残る。８世紀前半の遺物である。第６層下層より出土した。

第28図11は、円筒埴輪である。タガの突出が明瞭である。外面には、斜め方向のハケメが認められる。古墳時代後期の遺物である。

第28図12・13は、弥生土器である。第28図12は、甕の底部である。内面にはヘラケズリ、外面には底部から体部にかけて、縦方向の細かいハケメ調整が確認できる。底部外面は、煤が付着して黒色味を増す。第６層下層より出土した。

第28図13は、壺の底部である。内面はヘラケズリ、外面は縦方向のミガキが顕著である。生駒西麓産の製品である。弥生時代中期の遺物と推測される。第６層下層より出土した。

第29図１～３は、須恵器杯蓋である。第29図１の天井部は、回転ヘラケズリの後、頂点よりずれた箇所に「×」の線刻を記す。但し、その刻みは弱く、途切れる箇所がある。内面はヨコナデの後、中央部に縦方向のナデを施す。６世紀末の遺物である。第６層下層より出土した。

第29図２は、胎土は粗いが焼成は堅緻である。内面はヨコナデ、外面天井部にはヘラケズリを施す。７世紀初頭の遺物である。第６層中層より出土した。

第29図３は、ヨコナデにより口縁上部に稜を作る。口縁端部内面には段を廻らせる。６世紀の遺物である。第６層下層より出土した。

第29図４～７は、須恵器蓋のうち、摘みを持つ器形である。第29図４の外面中央には、黒色の曲線が一条あり、これと交差する摘みの端を一部欠損する。この曲線は、焼成時に他の遺物と接触した際の軽い融着痕と考えられることから、摘みの欠損も焼成時に生じたものと思われる。口縁部は返しを持たず、端部を折り曲げる。内面の調整はヨコナデ後、中央部に縦方向のナデを加える。８世紀初頭の遺物である。第６層中層より出土した。

第29図５も同じく扁平な摘みを持つ遺物で、器壁の厚い大型品である。器高は低く、口縁端部の折り返しが甘い。８世紀前半の遺物である。第６層下層より出土した。

第29図６も同じく扁平な摘みを持つが、その側辺を突出させ、シャープな印象に作る。内面は広く墨痕が認められ、転用硯として使用されたことを示している。内面には、その墨痕の上から、「×」の掻傷を付している。口縁部の一部断面にも墨痕が認められることから、転用硯として使用する際には、すでに口縁部を欠いていた可能性がある。８世紀中～後半の遺物である。第６層下層より出土した。

第29図７の摘みは、中央部をへこませて作る。天井部はヘラケズリ、内面はヨコナデ後、中央部に縦方向のナデを施す。天井部の側辺には、「キ」形のヘラ記号を刻む。８世紀後半～９世紀前半の遺物である。第６層中層より出土した。

第 29 図８～ 13 は、須恵器杯身である。第 29 図８は、短い蓋受部と立ち上がりを持つ。底部外面にはヘラケズリ後、「－」の線刻を焼成後に施す。６世紀末～７世紀初頭の遺物である。第６層下層より出土した。

第 29 図９は、厚みのある器壁を有する。内外面ともに自然釉の付着が著しい。底部外面には、２箇所の融着痕跡があり、それぞれ石片と土器片の付着がある。胎土が粗く、器壁にひび割れが見える。６世紀末～７世紀初頭の遺物である。第６層下層より出土した。

第 29 図 10 は、底部のみの出土である。内面はヨコナデ後中央部に縦方向のナデを残す。外面はヘラケズリを施した天井部中央に「－」の線刻を焼成後に付す。胎土が粗く、角礫の脱落により、器壁に孔が認められる。第６層下層より出土した。

第 29 図 11 も同じく底部のみの出土であるが、10 に比べて胎土は精良である。底部外面中央に「×」の焼成前線刻がある。その上から、指または工具による「－」の刻痕と融着痕跡がある。内面調整はヨコナデのみである。第６層下層より出土した。

第 29 図 12 は、低い高台を持つ底部の破片である。内面の調整は、ヨコナデ後の縦方向のナデが顕著である。８世紀の遺物である。第６層中層より出土した。

第 29 図 13 は、同じく低い高台を持つ器種であるが、内面に黒漆の付着が顕著に認められる。漆は底部外面の高台内に若干、底部内面及び器壁内面に多く付着し、特に底部内面のものが最も厚く残存する。外面器壁には認められないことから、杯そのものに塗布されのではなく、漆皿に転用されたものと推測される。須恵器杯身を漆皿に転用する例は少ない。近隣に漆器を扱った人々が起居した可能性を窺うことができる。８世紀の遺物である。第６層上層より出土した。

第 29 図 14 ～ 16 は、須恵器高杯である。第 29 図 14 は、高杯の杯部破片である。蓋受部の突出は短く、立ち上がりは内傾する。杯部底面は回転ヘラケズリによって調整される。脚部との接合部が僅かに残っており、スカシを切り込んだ工具痕が認められる。その形状から、３箇所ないし４箇所の方形スカシを持つ長脚高杯であることがわかる。６世紀の遺物である。第６層下層より出土した。

第 29 図 15 は、同じく長脚高杯の杯部及び脚部の破片である。杯部内面はヨコナデ後縦方向のナデを施し、中央付近に焼成前線刻を付す。杯部外面の中央部には、同心円状タタキが一部に残存する。脚部のスカシは方形で、３箇所に設けられていたと推測される。粘土の切り欠きが粗く、スカシの一部に粘土塊が残されている。杯部外面及び脚部内面に自然釉が付着することから、逆位置で焼成されたと推測される。６世紀の遺物である。第６層下層（側溝内）より出土した。

第 29 図 16 は、無蓋高杯の脚部である。内外面ともユビナデを施す。方形のスカシを４箇所に持つと推測される。６世紀の遺物である。第６層下層より出土した。

第 29 図 17・18 は、須恵器甕である。第 29 図 17 は、胎土が粗く、焼成も不良である。口縁部外面に平行タタキ後ユビナデを施す。口縁端部は外方へ折り曲げており、ユビナデにより端面を作る。端面中央には凹線状に窪みを残す。古墳時代後期の遺物である。第６層中層より出土した。

第 29 図 18 は、大甕の口縁部である。直線的に広がる口縁とユビナデによって外方へ尖らせる口縁端部を持つ。端面には、凹線状の窪みを一条残す。口縁外面の中央に、凹線状の浅い沈線を一条ないし二条めぐらせ、その上位に波状文を描く。波状文原体は小さく、１㎝未満の幅に３本の突起を持つ工具であると推測される。内面全体及び外面の一部に自然釉が付着する。古墳時代後期の遺物である。第６層下層より出土した。

第 29 図 19 ～ 21 は、須恵器壺である。第 29 図 19 は、短頸壺の口縁部である。丁寧なユビナデで仕上げられている。肩部に自然釉の付着が認められる。第６層中層より出土した。

第 29 図 20 は、屈曲する肩部に稜を有する器形を持つ。口縁部は大きく外反し、端部を上方へつまみ上げて整形する。内外面ともに精緻なユビナデによって仕上げている。ともに８世紀前半の遺物である。第６層上層より出土した。

第 29 図 21 は、須恵器の脚部である。鉢または盤、壺の一部と考えられる。器壁は灰黄色を呈するため、須恵器の器形を模した土師器の可能性もある。高さのある高台は丁寧なヨコナデで仕上げられており、盤との接合も違和感がない。盤上面は摩滅が著しい。８世紀前半の遺物であると推測される。６層中層より出土した。

このほか、実測図の作成を行わなかったもののうち、特徴的である遺物を写真図版に掲げた。写真図版 24 ①は、須恵器甕の体部であるが、焼成時に杯身または杯蓋と接触した痕跡が、顕著に残る例である。底部外面には、少なくとも５個体の痕跡が釉着する。内面には灰オリーブ色を呈する自然釉がガラス質の層となって濃厚に認められる。６世紀の遺物である。第６層下層より出土した。

９．第７遺構面（古墳時代前期）・第７層出土遺物

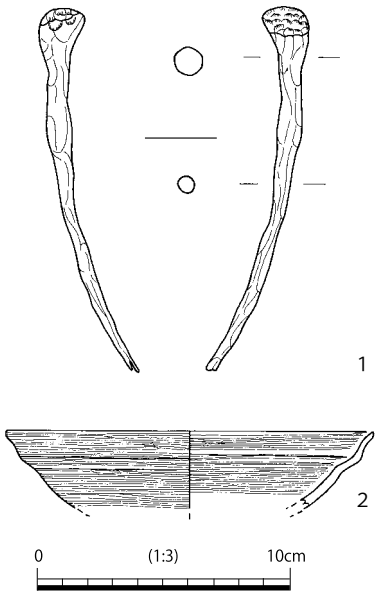
第７遺構面は、古墳時代前期の包含層である第７層（第７－２層）を除去して検出した遺構面である。第７層は、既述の通り、植物遺体を多く含む軟質土壌で、湿地状の堆積と見られる。第７遺構面は、遺物を多く含む第８－１層を基盤とするため、遺構面の検出段階から下層の随所に土器片が点在する様子を捉えることができた。但し、第７遺構面としては、遺構の検出はなかった。

調査区の地形は、西から東へ向かって僅かに下がる。検出レベルは、最も高い調査区西辺で T.P.+7.00 m、最も低い調査区東辺では T.P.+6.70 mを測る。

第７層からの遺物の出土は僅かである。古墳時代前期（布留式）の土師器のほか、ウマの骨と見られる動物遺存体が出土した（第 30 図）。

第 30 図１は、ウマの足骨の一部と推測される遺物である。ウマは奇蹄類であるため、前肢の爪先は１本の骨によって保持されている。この骨は、第３中手骨（人間の指でいうところの中指）が大きく発達した結果であり、第２・第４中手骨（同人差し指・薬指）は小さく退化、第１・第５中手骨（同親指・小指）は消滅してしまっている。第 30 図１は、退化した第２・第４中手骨のどちらかであろうと推測される。後肢も前肢とまったく同様の構造であるため、第 30 図１は、４本の足のうち、計８本を数える第２・第４中手骨のいずれかと考えられる。

現在のところ、朝鮮半島から河内地域にウマが搬入されたのは、古墳時代中期以降と考えられている〔岩瀬 2006〕。しかし、植松遺跡の南に位置する木の本遺跡では、古墳時代前期に遡る馬鍬の出土があることから、農耕馬が騎馬に先駆けて搬入された可能性がある。今後の研究動向が、注目される。08－２－２区の第７－２層（古墳時代前期包含層）より出土した。



第 30 図　08－１－２－２区
第７層出土遺物実測図

第 30 図２は、土師器有段鉢の口縁部である。外反する口縁部に緩い段が設けられている。調整は、内外面ともに横方向の緻密なミガキである。古墳時代前期（布留式前半期中葉）の製品である。

10. 第８－１遺構面（古墳時代前期）

第８－１遺構面は、古墳時代前期の包含層である第８－１層及び第８－２層を除去して検出した遺構面である（第 31 図）。第８層は既述の通り、第８－１層～第８－３層に細分できるが、第８－１層・第８－２層を除去した面を第８－１面、第８－３層を除去して検出した面を第８－２面とする（第３章第１節　基本層序参照）。第８－１遺構面の地形は、上層と同じく西半部が高く、東に向かって緩やかに下がる。西半部の中でも南西隅部が最も高く T.P.+6.90 m、北西隅部が T.P.+6.79 mを測る。逆に最も低いのは南西部で T.P.+6.60 m、次いで南東部が T.P.+6.70 mである。

第８－１層は、土器類を多く含む包含層であるが、このうち特に遺物が集約する箇所を土器だまりとして遺構番号を付した（土器だまり１～５）。なお、調査区の南西隅では溝を検出したが、断面観察で

第 31 図　第８－１遺構面　全体図

は下層遺構面からの掘り込みが確認できたため、次々項にて詳述する。

第８－１層からは、弥生土器壺・甕・土師器甕・壺・高杯・鉢・器台・小型丸底壺、板状木製品、種子等が出土した。遺物の時期は、古墳時代前期（庄内式～布留式前半期）である。

11．第８－１層・第８－２層出土遺物

土器だまり１（第 32 図・第 33 図） 土器だまり１は、08－１－２－１区中央部南西寄りの地点において検出した土器の集積である。30 溝の東側に位置する。南北 1.0 m、東西 1.5 mの範囲に、土師器小型丸底壺、直口壺、広口壺、二重口縁壺口縁部、高杯脚部、甕等が散乱する。また、やや離れた北側からは、甕が２点重なって出土した（写真３参照）。出土遺物の破片は比較的大きい。

第 33 図１は、土師器小型丸底壺である。口縁部の一部及び体部の一部を欠く。丸く仕上げられた体部から外方へ大きく開く口縁部を持つ。口縁部の外面は、丁寧なユビナデと緻密なミガキに覆われているが、一部に整形段階の指頭圧痕が残る。体部外面は、ヘラケズリ後、僅かにミガキを施す。内

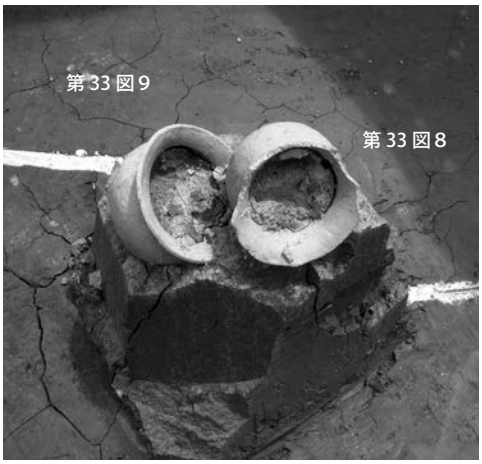
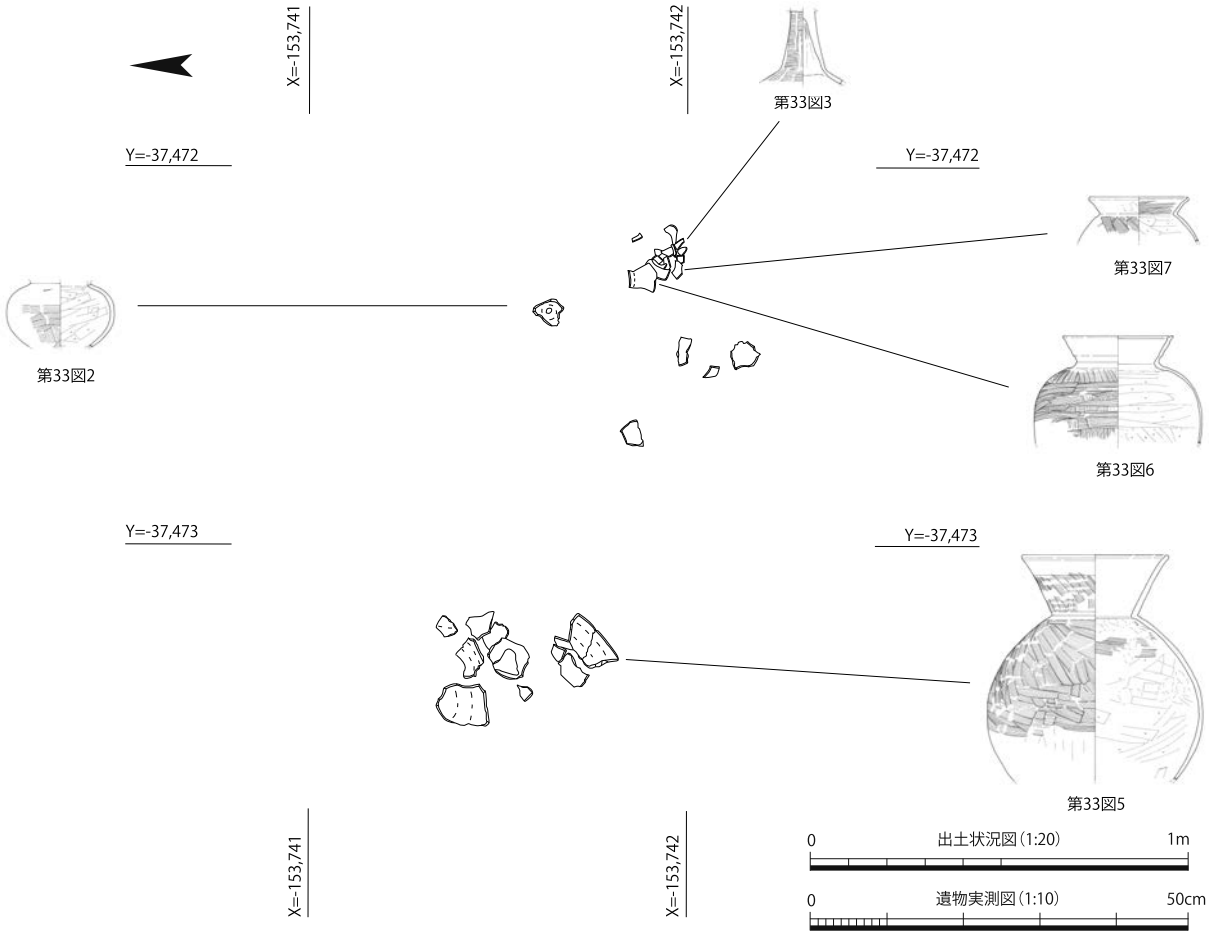


写真３　第８－１遺構面
土器だまり１周辺遺物出土状況

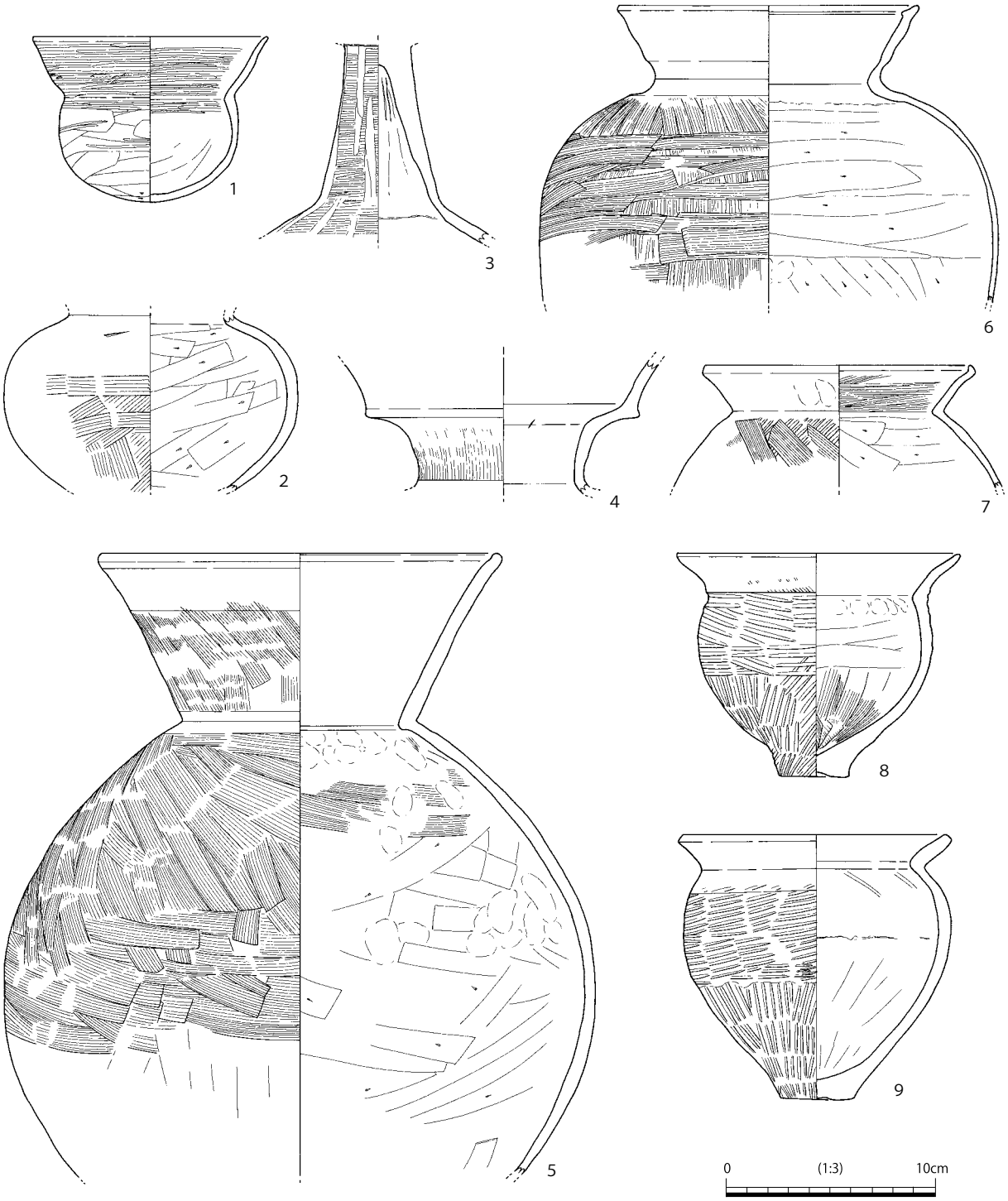


第 32 図　第８－１遺構面　土器だまり１遺物出土状況図

面は頸部より１㎝程度下位まで緻密なミガキ、内面底部には斜め～横方向のユビナデが残る。布留式前半期前葉の遺物である。

第 33 図２は、土師器壺体部の破片である。口縁部及び底部を欠く。胴部より上半部は粗いユビナデ、下半部は斜め方向のハケ調整を施し、胴部の最も張り出した箇所に横方向のハケメを廻らせる。内面はヘラケズリが認められる。布留式前半期後葉の遺物である。

第 33 図３は、土師器高杯の脚部である。杯部すべてと裾部を欠損する。脚部外面は、縦方向のヘラケズリの後、横方向の緻密なミガキが施されており、さらにその上に縦方向のミガキが為されている。



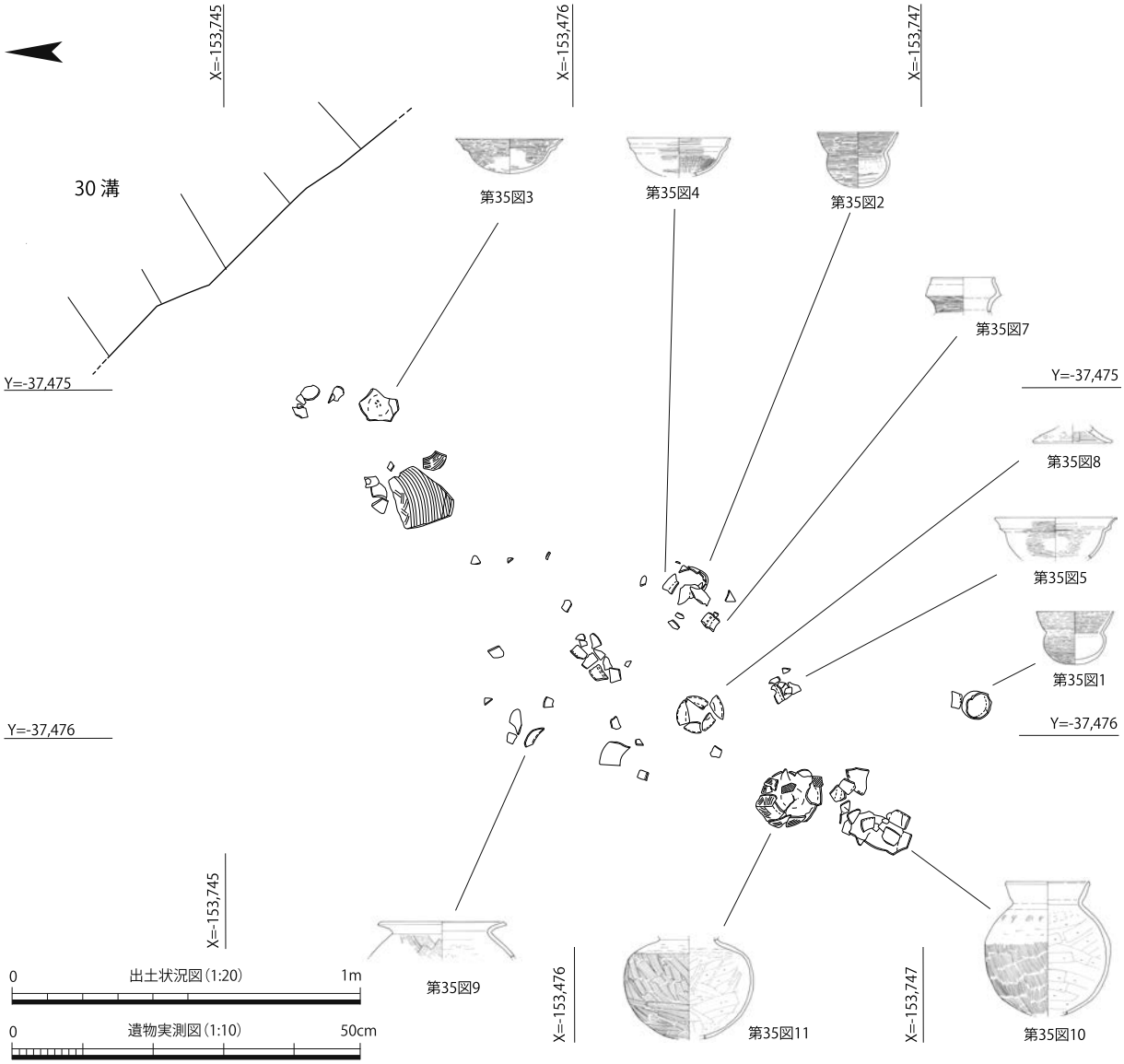
第 33 図　第８－１遺構面　土器だまり１・土器だまり１付近出土遺物実測図

裾部内面は横方向のミガキが一部に認められる。脚部内面は僅かにユビナデを施すのみであり、胎土の絞り目が明瞭に残る。布留式初頭の遺物である。

第 33 図 4 は、土師器二重口縁壺の口縁部である。口縁端部は残存しない。頸部外面は縦方向のハケメ後ヨコナデ、口縁部及び内面はヨコナデのみを施す。ナデによって、稜線が鋭く作り出されている。布留式前半期の遺物である。

第 33 図 5 は、土師器広口壺である。口縁及び体部の残存状況が良く、全体復元がほぼ可能である。若干縦に伸びた球形を呈する体部と、屈曲して外方へ直線的に開く口縁を持つ。口縁端部は、さらに角度をつけて外へ開き、先端部は丸くおさめられている。体部・口縁部ともに斜め方向のハケメが認められるが、頸部及び口縁端部付近では、ヨコナデをさらに重ねるため、ハケメの痕跡を僅かにとどめる程度である。布留式初頭の遺物である。

第 33 図 6 ・ 7 は、土師器甕である。ともに口縁部から肩部にかけて残存する。第 33 図 6 は、やや肩の張る体部と高さのある口縁部を持つ。口縁端部は内側に端面が作られている。体部外面は、縦方向のハケ後、横方向にハケメが廻る。体部外面下半部には煤が付着する。布留式の遺物である。



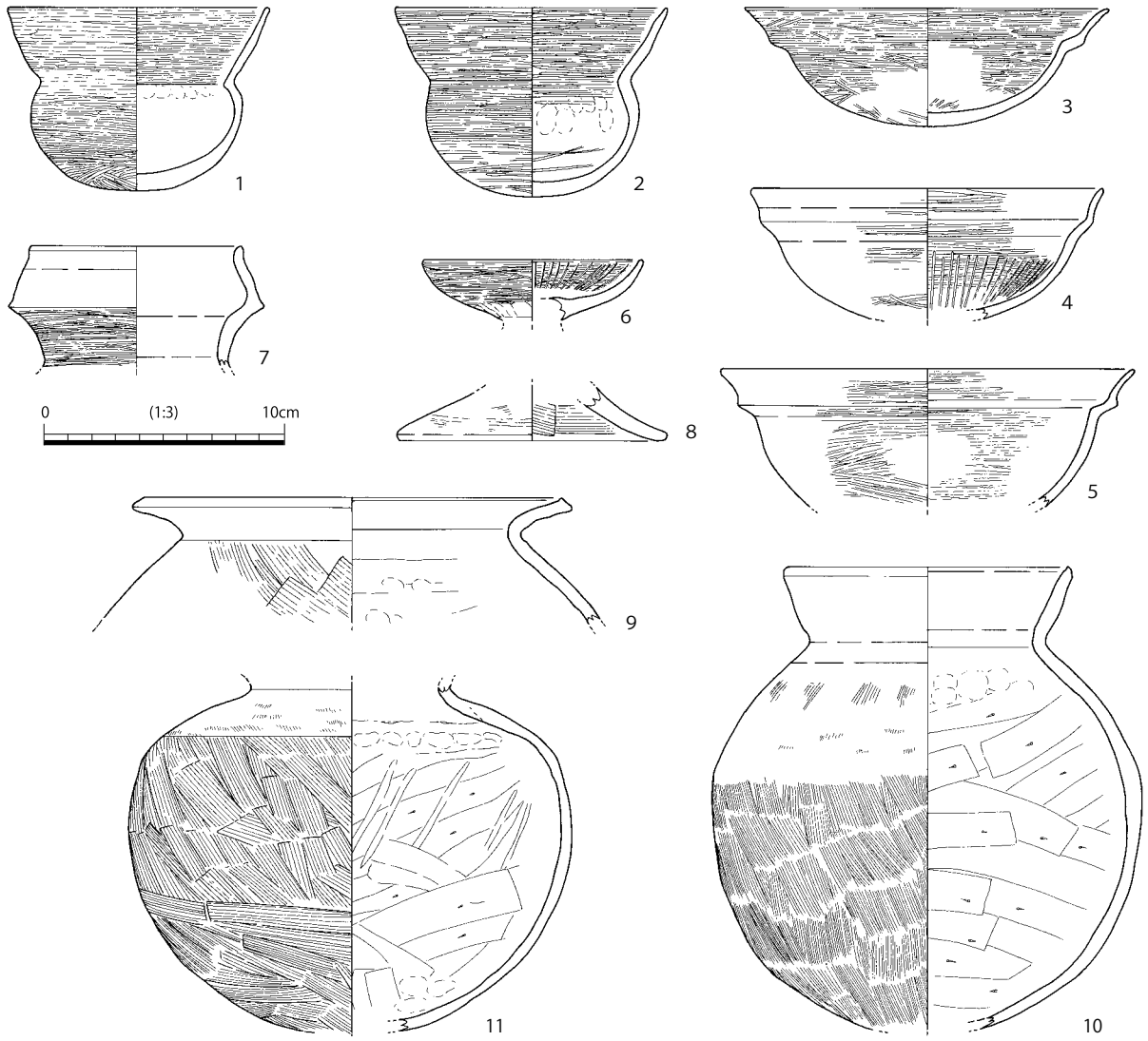
第 34 図　第８－１遺構面　土器だまり２遺物出土状況図

第 33 図７は、口縁部から肩部にかけての出土である。肩は張らず、口縁部の立ち上がりも小さい。口縁端部は上方への摘み上げが認められる。体部上位にはタタキ後斜め方向のハケが施されている。口縁部の外面はヨコナデ、内面は、ハケメが廻る。庄内式後半期の遺物である。

第 33 図８・９は､弥生土器の小型甕である。ほぼ同じ地点から､重なり合って出土した（写真３参照）。

第 33 図８は、口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形品である。底部の接地面には凹みがあり、ドーナツ状を呈する。短く高さのある底部から、膨らみを持つ体部、短く外反する口縁部へと続く。器高が低く、体部の最大径は、ほぼ胴部中央にある。体部の外面調整は、下半部が斜め方向のタタキ、上半部が横方向のタタキである。口縁部は縦方向のハケの後、ヨコナデによって整形される。但し、口縁端部の整形処理は曖昧で、一部波打つ。内面調整は、ヘラケズリとヨコナデである。底部内面に黒斑が認められる。弥生時代後期末の遺物である。

第 33 図９は同じく弥生土器の小型甕であるが、８に比べて器高があり、胴部よりも肩部が張るプロポーションを持つ。底部の接地面は僅かであるが中央付近に窪みが認められる。外面調整は８と同じく、斜め及び横方向のタタキ、内面はヘラケズリ、頸部付近にハケ状の掻傷が認められる。口縁部はヨコナデ、口縁端部には端面を作る。体部外面に黒斑、底部外面付近に煤の付着が輪状に認められる。弥生時



第 35 図　第８－１遺構面　土器だまり２出土遺物実測図

代後期末の遺物である。

土器だまり２（第 34 図・第 35 図） 土器だまり２は、08 － 1 － 2 － 1 区南西隅において確認した土器の集積である。30 溝の西側のうち、より南側に位置する一帯を指す。南北 2.0 m、東西 1.5 mの範囲内に土器の分布はおさまるが、遺物は北東－南西の方向に連なる様相を見せる。この土器だまりからは、土師器小型丸底壺、壺口縁部、高杯脚部、小型器台杯部、甕類が出土した。

土器だまり２の遺物は、一個体がそのまま潰れたような状態で出土したものが多い。特に甕や壺類にその傾向が顕著である。なお、隣接する土器だまり４付近まで、破片が飛散するものもある。

第 35 図１・２は、土師器小型丸底壺である。ともに布留式前半期前葉の遺物である。第 35 図１は、口縁部の大半を欠くものの、全体復元が可能である。丸い体部から外へ開く口縁部を持つ。体部から口縁部への屈曲は鋭く、内面には明確な稜線を作る。外面調整は、体部・口縁部ともに緻密なミガキ、内面にはユビナデを施す。

第 35 図２は、口縁部の一部を欠くが、同じく全体復元が可能である。丸く仕上げられた体部から外方へ開く口縁部を持つ。ユビナデと緻密なミガキが外面全体に施されている。内面は頸部より１㎝程度下位まで緻密なミガキ、内面底部には斜め～横方向のユビナデが残る。底部外面には黒斑が認められる。布留式前半期前葉の遺物である。

第 35 図３～５は、口縁部に段を持つ有段鉢である。第 35 図３は、口縁部から底部まで残存する。丸底から上方へ丸味をもって立ち上がり、屈曲を繰り返し、段を作りながら口縁部へ達する。口縁端部は薄く仕上げられている。内外面ともに緻密なヘラミガキが施されている。底部内面に「－」形の黒色痕跡が残るが、文字とは考えにくい。布留式前半期前葉の遺物である。

第 35 図４は、口縁部の立ち上がりが短く、段の屈曲も甘い。外面は底部から段下にかけてミガキを施すが、口縁部付近は、ユビナデとミガキで仕上げている。内面には、横方向のミガキの後、縦方向のミガキを疎らに施す。内外面とも、一部に摩滅が認められる。布留式前期中葉の遺物であるが、第 35 図３・５に比べて、段の退化やミガキの省略など、やや新しい要素を持つ。

第 35 図５は、口縁部のみであるが、高さのある器形と明瞭な段を持つ。段の屈曲は特に凸部が鋭い。調整は、内外面ともに細かいミガキが施されている。布留式前期中葉の遺物である。

第 35 図６は、小型器台の杯部である。外面のうち、脚部との接着部付近は縦方向のナデの後、横方向にミガキを加える。内面は横方向のミガキの後、放射状にミガキを入れる。横方向のミガキが密であるため、口縁端部の胎土は圧縮されて内側に丸く突出する。杯部内面の底部器壁が荒れており、使用痕と認識される。布留式初頭の遺物である。

第 35 図７は、土師器壺口縁の一部である。「く」の字形の口縁部を作り、口縁端部を僅かに外反させる。屈曲部分は、内面をユビナデにより緩やかに作るのに比べて、外面は突出させて稜を成す。内面の調整はすべてナデ、外面は稜より下位が横方向の細かいミガキ、稜より上位が横方向のハケ後ユビナデを施す。瀬戸内系の要素を備えることから、外来系土器であると推測される。布留式初頭の遺物であろう。

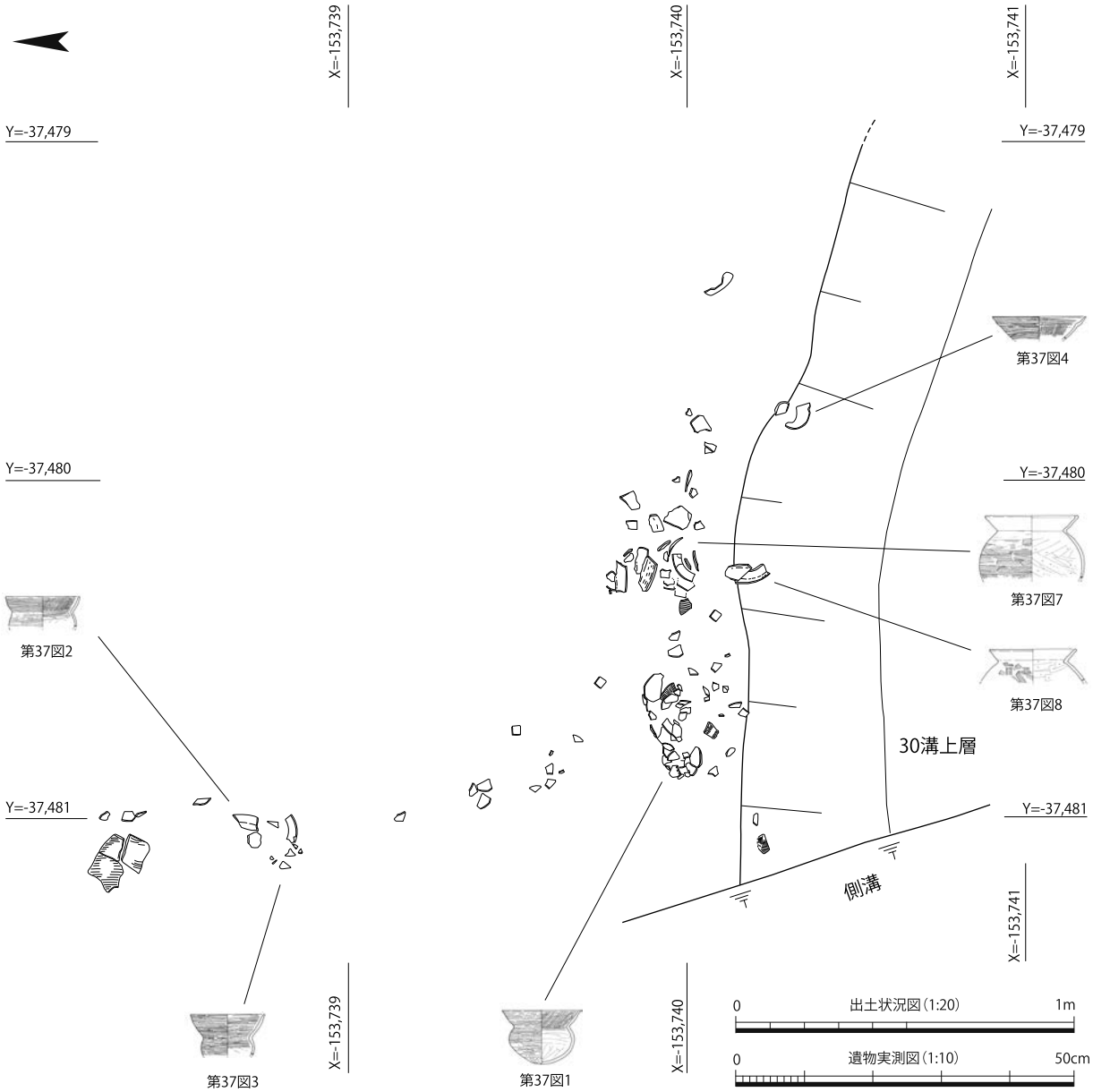
第 35 図８は、土師器高杯脚の裾部である。裾部端面は、ユビナデによって丸く作られている。外面は横方向のハケ後、ユビナデで調整するが、指頭圧痕が随所に認められるため凹凸を残す。内面には、ハケの痕跡及び粘土塊の付着が認められる。布留式の遺物であると推測される。

第 35 図９・10 は、土師器甕である。第 35 図９は、口縁部である。肩部から広く外反して口縁部を作る。体部外面は斜め方向の細かいハケ、口縁部はユビナデ調整を施す。口縁端部は短く上方へ摘み上

げる。外面頸部には煤の付着が認められる。また、口縁部内面には、摩滅する箇所が帯状に続くことから、蓋を用いた煮沸行為があったものと推測される。庄内式末期～布留式初頭の遺物である。

第 35 図 10 は、体部から口縁部までの復元が可能である。やや長胴気味の体部と短く直線的に外反する口縁部を持つ。体部外面は縦方向のハケを施すが、その痕跡は明瞭ではない。体部上位はユビナデを加えるため、さらに不明瞭である。口縁部は厚く、外面はヨコナデによって仕上げられている。口縁端部は僅かに尖らせるが、摘み上げは行わない。口縁部内面の調整はヨコナデ、体部内面はヘラケズリである。外面口縁から体部にかけて、広範囲に黒斑が認められる。庄内式末～布留式初頭の遺物である。

第 35 図 11 は、土師器壺の体部である。底面及び口縁部を欠くが、丸底で、口縁部に段を持つ二重口縁壺に類される遺物であると推測される。丸い体部をもち、肩部から角度をつけて内傾し、頸部へと続く。底部外面の調整は横方向のハケ、胴部は斜め方向のハケ、肩部は縦方向のハケ後ユビナデを施す。内面はヘラケズリ後、ユビナデが顕著に残る。布留式前半期中葉の遺物である。



第 36 図　第８－１遺構面　土器だまり３遺物出土状況図

土器だまり３（第 36 図・第 37 図） 土器だまり３は、08 － 1 － 2 － 1 区西辺中央部付近において検出した土器の集積である。30 溝の北側に位置する。この範囲は、下面において検出された 31 溝の上位にあたる。南北約 2.0 m、東西約 1.5 mの範囲に、土師器小型丸底壺、甕類、有段鉢、弥生土器等の破片が散在する。出土遺物は細片が多く、完形復元できるものが少ない。

第 37 図 1 ～ 3 は、土師器小型丸底壺である。第 37 図 1 は、底部から口縁部までの復元が可能である。やや尖り気味の底部と張り出した肩を持つ。大きく開く口縁部は、根元付近に僅かに稜を作る。口縁端部は緻密なミガキによる胎土圧縮のため、小さく玉縁状を呈している。内外面ともに横方向のミガキが顕著であるが、底部外面には縦方向のミガキが、口縁部内面には斜め方向のミガキが付される。内面はユビナデによって仕上げられている。布留式前半期中葉の遺物である。

第 37 図 2 は、頸部から口縁にかけての部位である。立ち上がりは短く、やや内湾する。調整は、外面が横方向のミガキ、内面が横方向及び斜め方向のミガキである。体部外面には煤の付着がある。布留式前半期前葉の遺物である。

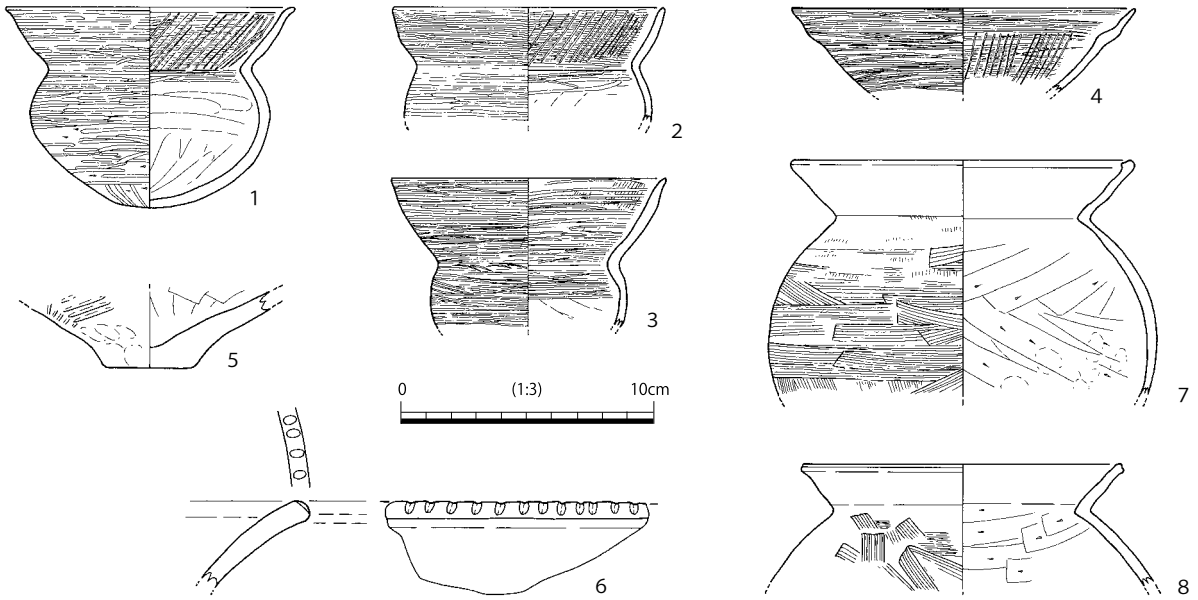
第 37 図 3 は、小ぶりな体部に比べて大きく開く口縁部が特徴的である。口縁部は、やや内湾しながら立ち上がり、口縁端部を上方へ尖らせる。調整は、外面が横方向の緻密なミガキ、内面は、縦方向のハケメ後横方向のミガキである。外面の調整は、一部摩滅により消滅する。布留式前半期前葉の遺物である。

第 37 図 4 は、土師器有段鉢の口縁部である。器壁の立ち上がりは直線的であり、やや扁平な印象を与える。口縁部の立ち上がりは低く、段の稜線も甘い。調整は、横方向のミガキが密に施されており、内面には、さらに斜め方向のミガキを加える。布留式前半期中葉の遺物である。

第 37 図 5 は、土師器甕の底部である。平底から大きく開く体部を持つ。体部外面には平行タタキが施されている。庄内式前半期の遺物である。

第 37 図 6 は、弥生土器甕の口縁部である。摩滅が著しく、調整痕跡は不明である。口縁端部には、ビーンズ形の刻目を付す。弥生時代中期前葉の遺物であると推測される。

第 37 図 7・8 は土師器甕である。第 37 図 7 は、丸味を持った体部と屈曲して外反する口縁部を持つ。



第 37 図　第８－１遺構面　土器だまり３出土遺物実測図

口縁端部は内側へ折り曲げ、ユビナデにより端面を作る。体部外面は、斜め方向のハケ調整の後、胴部の中央に横方向のハケメを廻らせる。布留式前半期前葉の小型甕である。

第 37 図 8 も同じく小型の甕であるが、布留式祖形甕と称される類であると考えられる。口縁部は鋭く外反させ、口縁端部に端面を作る。端面には、凹線状の沈線を一条付す。頸部から肩部の外面調整は、斜め方向のハケ後、幅広のヨコナデを施し、さらにハケメをジグザグ状に走らせる。内外面ともに煤の付着が認められる。庄内式後半期の遺物である。

土器だまり 4（第 38 図・第 39 図） 土器だまり 4 は、08 － 1 － 2 － 1 区南西端において検出した土器の集積である。土器だまり 2 の北側にあたる。掘削当初、土器だまり 2 の範疇としたが、遺物の集積が顕著となったため、別に遺構番号を付した。南北約 1.2 m、東西約 1.2 mの範囲から、土師器小型丸底壺、甕、製塩土器、高杯杯部、有段鉢等が出土した。土器だまり 2 同様、個体ごとに破片がまとまって出土しており、接合復元できるものが多い。

第39図 1 は～ 3 は土師器小型丸底壺である。第39図 1 は張り出した肩から角度をもって頸部を窄め、外方へ立ち上がる口縁部を持つ。全体的にミガキ調整を行うが、粗略化する傾向が認められる。肩部には、ミガキの前段階である縦方向のハケメが、口縁部にはユビナデの痕跡が目立つ。体部内面はユビナデ調整を行う。底部付近には工具によるキズが残る。口縁部から体部にかけて、広く煤の付着が認められる。布留式前半期前葉の遺物である。

第 39 図 2 は、さらに粗略化が進んだ段階の遺物である。丸底で肩が張る器形を持つ。肩部から頸部へは、角度をもって内傾させ、稜を作る。頸部は、ある程度の長さをもち、緩く上方へ開いて口縁部とする。肩部以下はハケ及びヘラケズリ、肩部以上は縦方向のハケ後、横方向のユビナデを施す。布留式前半期後葉の遺物である。

第 39 図 3 は、口縁部のみの出土である。頸部から緩い段をもって短く立ち上がり、口縁端部へと続く。外面は、斜め方向のハケ後横方向のミガキ、内面は、横方向のミガキ後斜め方向のミガキを施す。布留式前半期前葉の遺物である。

第 39 図 4 は、土師器の有段鉢である。丸味のある体部から大きく開く口縁部へと続く。口縁部に幅はあるが、段の屈曲は甘い。内外面ともに摩滅を受けており、僅かにミガキが認められるのみである。布留式前半期前葉の遺物である。

第 39 図 5 は、土師器高杯の杯部である。底部付近に段を持つ有稜高杯である。杯部は大きく開き、口縁端部に至る。外面は横方向のハケ後、横・斜め方向のミガキ、内面は横方向のミガキ後放射状にミガキを施す。外面の一部に煤が付着する。庄内式末～布留式初頭の遺物である。

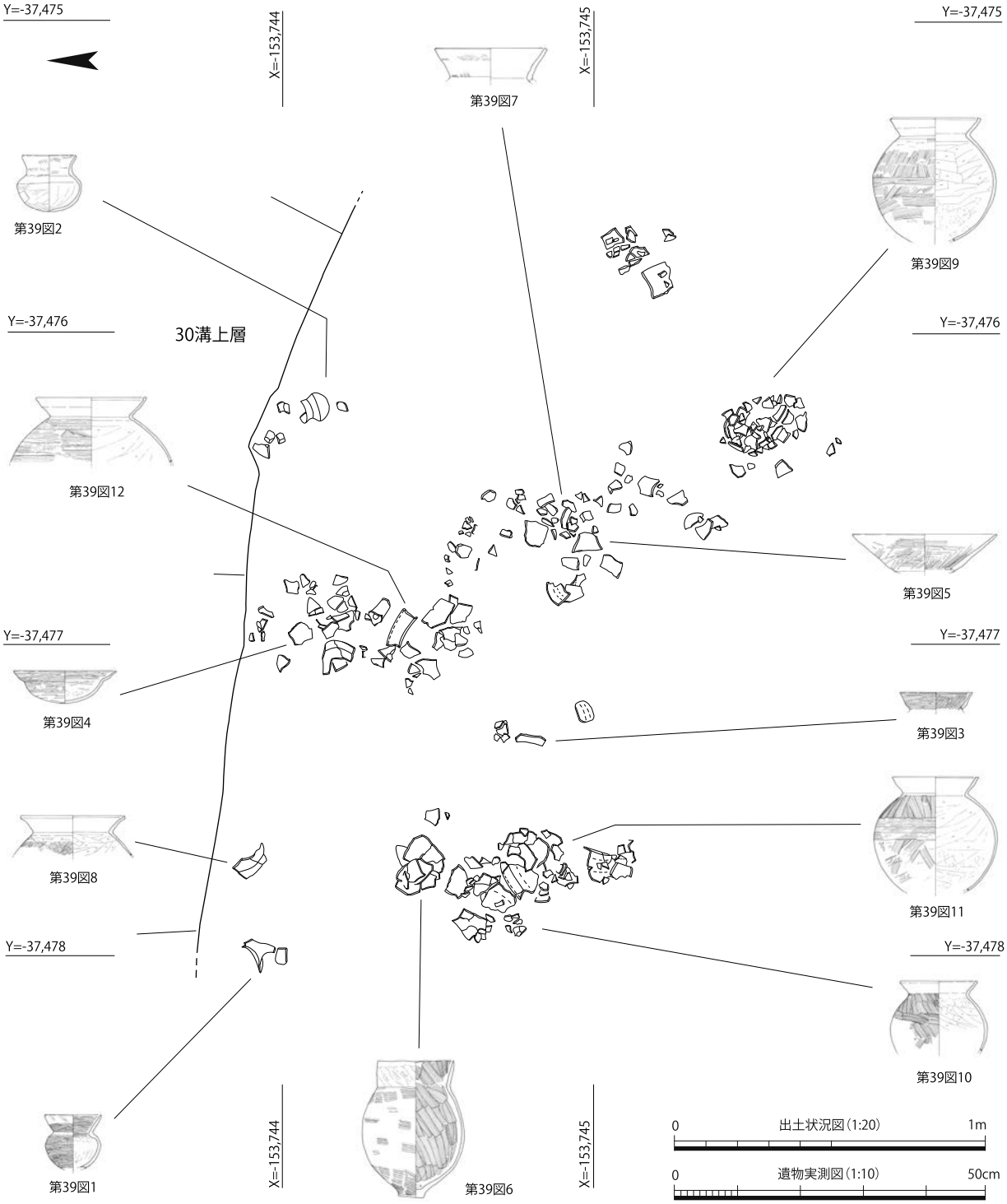
第 39 図 6 は、甕形製塩土器である。小さな平底から丸味をもって立ち上がり、卵形に膨らむ体部を作る。頸の絞りは緩く、上方へ立ち上げて口縁部とする。口縁端部は手捏ねで薄く作られており、秩序なく波打つ。体部外面は、平行タタキ、口縁部は斜め方向のユビナデと指頭圧痕が残る。内面はハケによるナデ上げが全体に施されている。

この遺物について、最も注目されるのは、外面器壁が被熱し、灰色ないし白色化する点である。器形が他の甕に比べて明らかに異なること、また被熱痕跡が顕著であることから、この遺物は、製塩土器として用いられたものと解釈した。従来、古墳時代の製塩土器は小型品が主体であり、大型品は製塩土器として認識されていなかった。このため類例は、甕または短頸壺として報告されてきたが〔阪田 1984〕〔前田 2006〕、近年では、新たに「製塩壺」または「甕形製塩土器」の用語で紹介されるに至っ

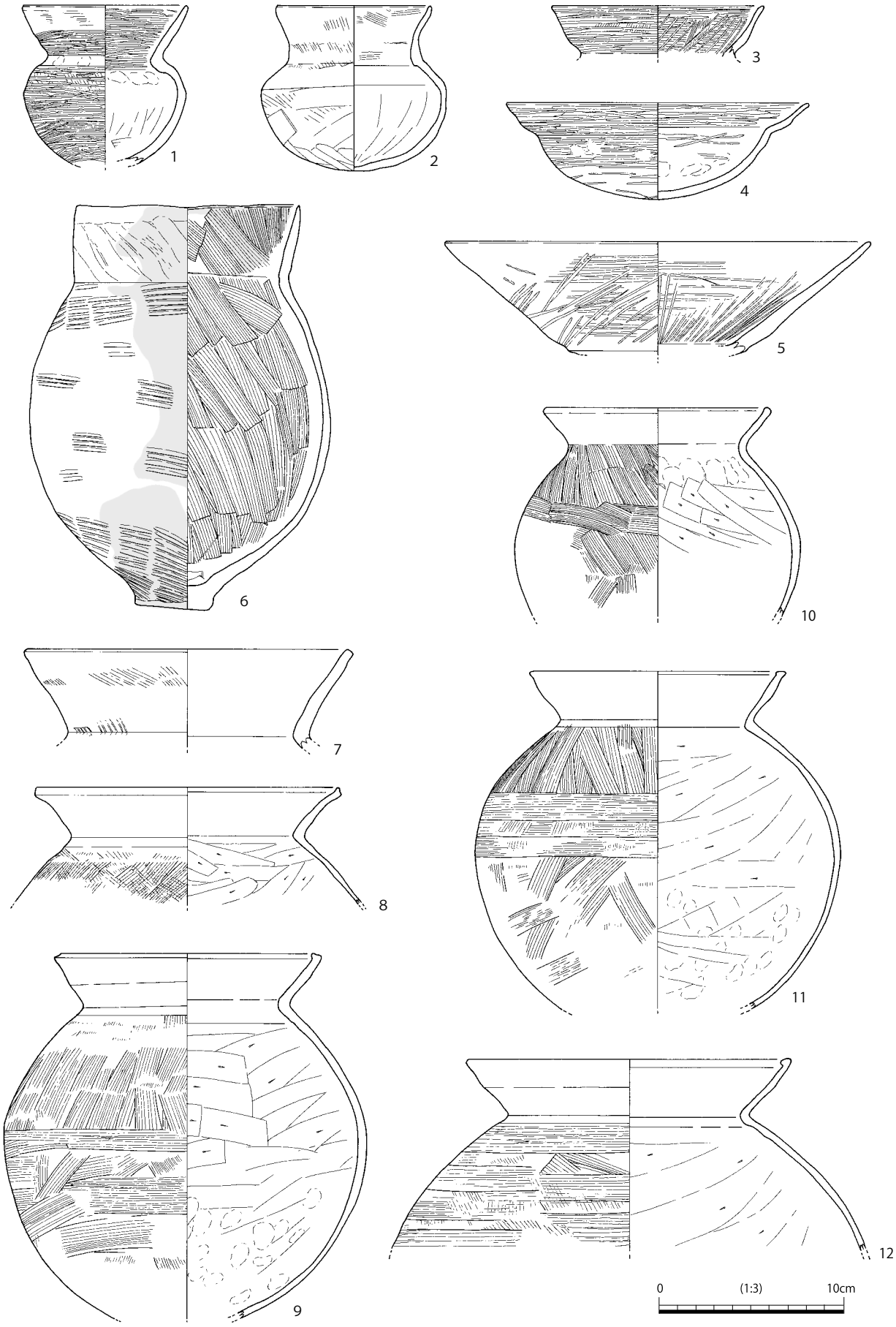
ている〔青木 2006〕〔西村 2006〕。ここでは貯蔵具ではなく、煮沸具としての用途を想定できること、また甕や壺を製塩用に転用したものではなく、製作段階から他の遺物とは異なる器形を意図して作られていることなどから、甕形製塩土器の語を用いることとした。

甕形製塩土器のうち、外面にタタキを施す類例は、庄内式後半～布留式初頭に集中する。おそらく第39図6も、その時期に製作・使用されたと考えられる。

第39図7は、土師器壺の口縁部であるが、内面が被熱し、ピンク色を呈することから、第39図6



第38図　第８－１遺構面　土器だまり４遺物出土状況図



第 39 図　第８－１遺構面　土器だまり４出土遺物実測図

と同様、製塩土器の可能性がある遺物である。但し、口縁端部はナデによって端面が作り出されており、広口壺の形態に似る。口縁部外面はハケ後ヨコナデ、内面はヨコナデの痕跡を残すものの、器壁表面の剥落が著しい。直口広口壺の口縁としては、庄内式末～布留式初頭の遺物に類される。

第 39 図 8 ～ 12 は、土師器甕である。第 39 図 8 は、口縁部である。薄い器壁を持つ。外面の調整は斜め方向のハケメを重ねるため、格子状の条痕を成す。頸部付近は、ハケ後に横方向のユビナデを加える。口縁端部は上方に摘み上げ、端面に一条の凹線状の沈線を付す。外面には広く煤の付着が認められる。庄内式末の遺物である。

第 39 図 9 は、体部及び口縁部にかけて残存する。球状の体部は頸部で屈曲して外反し、口縁部へ続く。口縁部は中央にやや厚みを持たせており、布留式甕特有の形状を示す。口縁端部は内側に折り曲げて端面を作る。外面調整は、縦方向のハケメを主体とし、胴部より下半は横方向のハケメを加える。内面の調整はヘラケズリであるが、底面付近には指頭圧痕が明確に残る。外面は、全体的に煤が付着し、胴部より以下は煤とともに器壁表面の剥落が認められる。内面も底部付近に黒色化が認められる。布留式の遺物である。

第 39 図 10 は、小型甕の体部及び口縁部である。球状を呈する体部と外反する口縁部を持つ。但し、頸部の屈曲や口縁部の整形は甘い。口縁端部は内側に折り曲げる意匠が認められるものの、明確な端面を作り出すまでには至っていない。外面調整は、縦方向及び横方向のハケメが細かく明瞭に残る。内面はヘラケズリが施されており、頸部内面付近では指頭圧痕の残存が顕著である。外面は全体的に煤が付着し、一部器壁の剥落がある。口縁部内面は、端部を廻るように煤が輪状に付着する。布留式の遺物である。

第 38 図 11 も同じく布留式甕である。頸部の屈曲や口縁端部のナデが顕著である。口縁部中央に厚みを持つ。体部外面の調整は縦方向のハケメを主体とし、胴部上位に横方向のハケメを数回廻らせる。内面はヘラケズリを施し、底部付近に指頭圧痕を残す、外面には煤が付着する。口縁部内面の端部にも煤が輪状に付着する。

第 38 図 12 は、大型甕の肩及び口縁部である。やや内湾しながら外方へ開く口縁部を持つ。口縁端部は内側に肥厚する。外面調整は、斜め方向のハケメの後、横方向のハケメが頸部直下にまで為される。内面はヘラケズリである。煤の付着は外面の一部に認められる。布留式の遺物である。

土器だまり 5（第 40 図・第 41 図） 土器だまり 5 は、08 － 1 － 2 － 1 区南辺中央部付近において検出した土器の集積である。南北約 1.2 m、東西約 1.0 mの範囲に、土師器小型丸底壺、甕、壺、有段鉢、高杯等の破片がまとまって出土した。なお、遺物は側溝内からも認められることから、さらに調査区外へと続く可能性が高い。

第 41 図 1 ～ 4 は、土師器小型丸底壺である。すべて布留式前期前葉の遺物である。第 41 図 1 は、残存状態が良く、底部から口縁部までの復元が可能な遺物である。張り出した肩を持ち、その肩部には緩い稜線を持つ。口縁部は、やや内湾しながら上方へ開き、端部を丸くおさめる。外面の調整は、胴部より上位は密なミガキ、下位はヘラケズリの上から疎らなミガキを施す。口縁部は、内外面ともに緻密なミガキを施す。底部内面は、ヘラケズリ後ユビナデを行う。

第 41 図 2 は、胴部から口縁部にかけての部位である。体部の最大径は胴部にあり、やや内湾しながら開く口縁部を持つ。口縁端部は、薄く尖らせている。外面には緻密なミガキが施されており、光沢を放つ。内面口縁部はミガキ、内面体部はユビナデを施す。外面及び口縁部、体部の一部に煤の付着が認

められる。

第 41 図３は、口縁部のみの出土である。薄い器壁を持つ遺物で、頸部の屈曲は鋭い。外面はやや摩滅を受けるものの、口縁端部の形状から、緻密なミガキが施されていたと推測される。

第 41 図４は、胴部から口縁部にかけて残存し、口縁端部を欠く。肩が張る器形で、肩部に緩い稜線を持つ。体部外面は斜め方向のハケメの後､横方向のミガキを施す。口縁部外面は横方向のミガキのみ、口縁部内面は、横方向にハケメを残す。体部内面はユビナデによる調整を行う。

第 41 図５・６は、土師器有段鉢である。ともに口縁部のみの出土である。第 41 図５は、口縁部の段が退化する段階の遺物で、ユビナデの強弱により、その形骸を僅かにとどめる。内外面ともにほとんどミガキは認め得ない。布留式前半期前葉の遺物である。

第 41 図６は、口縁部に段を残すが、器高は低く、体部の立ち上がりも直線的である。内外面ともに横方向にミガキを施している。布留式前期中葉の遺物である。

第 41 図７は、土師器高杯の杯部である。脚部付近の稜は不明瞭で鈍く、突出しない。外面は、斜め方向のミガキ、内面は横方向のミガキの後に斜め方向のミガキを施す。口縁端部は内外面ともにユビナデを行う。底部内面には器壁の剥離が認められる。布留式初頭の遺物である。

第 41 図８は､土師器小型器台の脚部である。円形のスカシが認められる。外面は摩滅が著しいものの、僅かにミガキの痕跡をとどめる。内面には粗いハケメとユビナデを残す。庄内式末期～布留式前半期前葉の遺物である。

第 41 図９・10 は、土師器高杯の脚部である。第 41 図９は、器壁が厚く、重厚な印象を与える。外面には縦方向の細かいハケメと横方向のミガキが施されている。内面には粘土の絞り目が残る。杯部との接合部には、細い未貫通の穴が残る。庄内式末期～布留式前期前葉の遺物である。

第 41 図 10 は、器壁が薄く、脚も低い。外面は、縦方向のハケメ後横方向のミガキが施される。内面は、胎土の絞り目を、ヘラケズリによって調整する。杯部との接合部には浅い未貫通の穴が残されている。内外面の一部に煤が付着する。庄内式末期～布留式前期前葉の遺物である。

第 41 図 11・12 は、土師器直口壺の口縁部である。第 41 図 11 は、頸部及び口縁部が残存する。細く窄まった頸部から、上方へ大きく開く口縁を持つ。外面は横方向のミガキ後縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキを施す。口縁部内面に摩滅帯があり、これが輪状に続くことから、蓋等を用いた使用状況が想像される。庄内式末期～布留式前期前葉の遺物である。

第 41 図 12 は､口縁部のみの出土である。上方へ開く口縁部は､中央部がやや膨らむ。外面はユビナデ、内面には横方向のハケメを残す。庄内式後半期の遺物であると考えられる。

第 41 図 13 は、土師器短頸壺の肩から口縁にかけての部位である。丸味のある体部から短く垂直に立ち上がる口縁を持つ。頸部外面は、縦方向の細かいハケの後、横方向のミガキが密に施されている。体部外面は、横方向または斜め方向の細かいハケメの後、横方向に疎らなミガキを施す。ハケ原体の幅が５～６㎜程度と細く、他に例を見ない。内面頸部以下は摩滅が著しく、器壁は灰色を呈する。外来系土器の可能性がある。

第 41 図 14 は、土師器広口壺の口縁部である。肩部から屈曲し、ほぼ垂直に立ち上がる頸部と、大きく開く口縁を持つ。口縁端部は端面を作り、上位を摘み上げて尖らせている。端面には、計３条の沈線を廻らせる。口縁部の器壁は厚いが頸部が薄く作られている。頸部外面は縦方向のハケ後、横方向のユビナデ、内面は横方向のユビナデもしくはミガキを施す。口縁部内面には、摩滅帯が輪状に認められ

る。阿波系の外来土器である。庄内式後半併行期の遺物である。

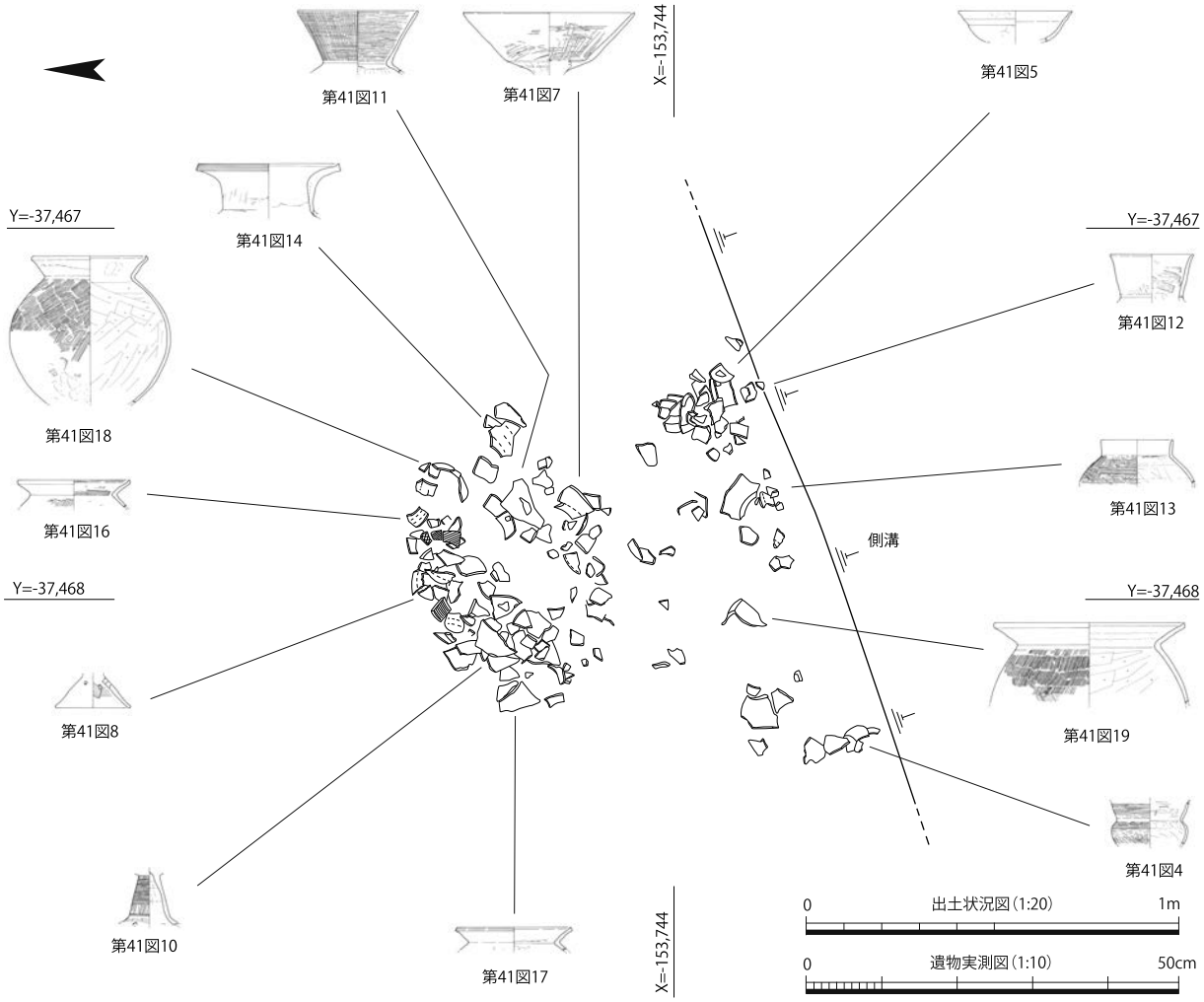
第 41 図 15 ～ 19 は、土師器甕の口縁部である。

第 41 図 15 は、屈曲して短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は、上方へ僅かに摘み上げる。体部外面は斜め方向のハケ後ユビナデ、口縁部外面はナデを施す。口縁部内面には粗いハケが認められる。体部内面は黒色化が認められる。庄内式末期の遺物である。

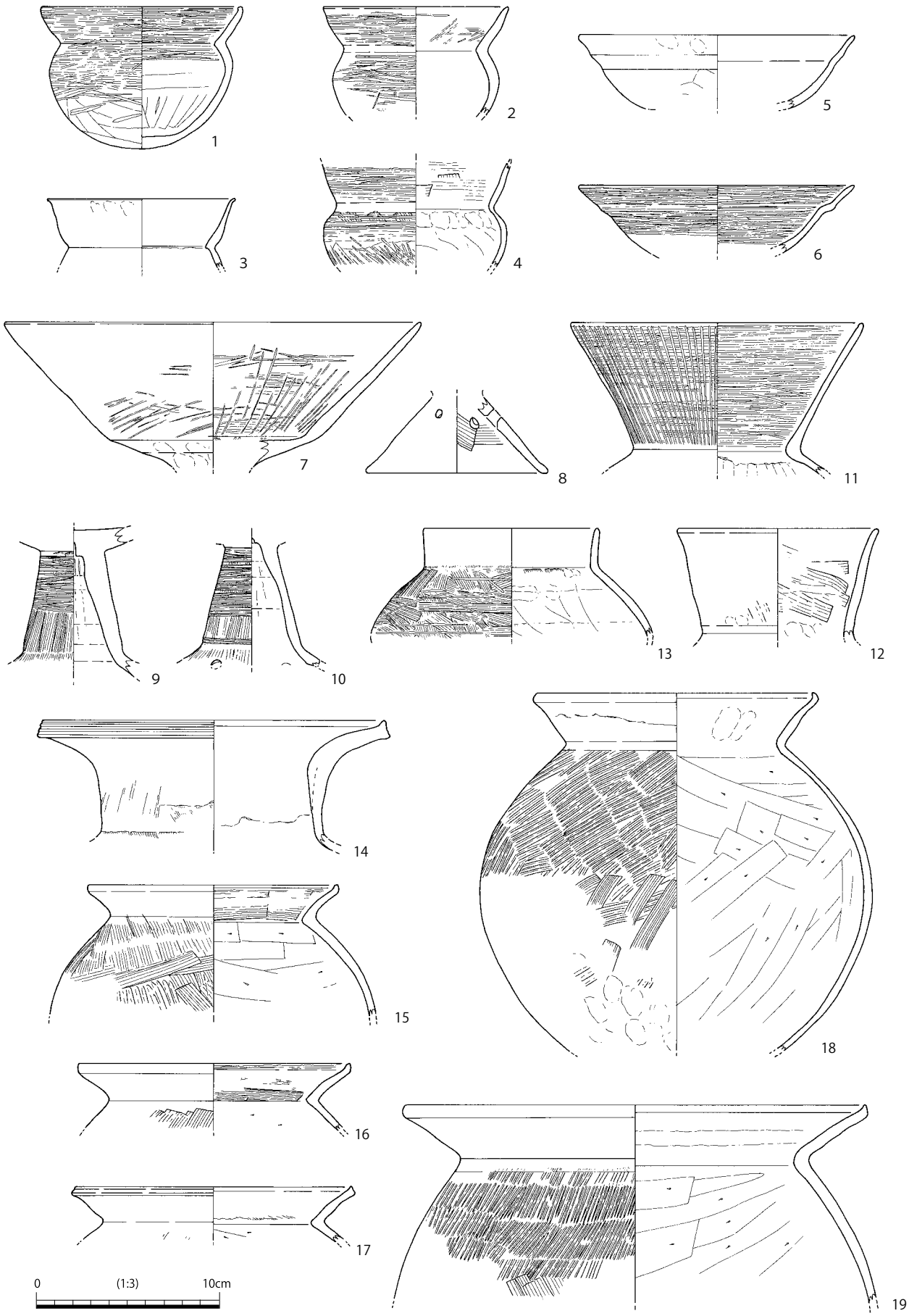
第 41 図 16 は、口縁部から頸部にかけての部位である。同じく屈曲して外反する口縁部を持つ。口縁端部は、内側上方へ緩く摘み上げる。体部外面は斜め方向のハケ、口縁部外面はナデを施す。口縁部内面には摩滅痕跡が認められる。庄内式末期～布留式初頭の遺物である

第 41 図 17 も同じく、屈曲して外反する口縁部である。口縁端部の摘み上げが顕著である。口縁端部内面に煤の付着が認められる。庄内式末期の遺物である。

第 41 図 18 は、体部及び口縁部が残存する例である。体部上半は細かい斜め方向のタタキが密に施されている。体部下半はタタキの上に斜め方向のハケメを施す。口縁部は内外ともにユビナデを施す。口縁部外面には、粘土の継ぎ目や指頭圧痕が顕著に残る。口縁端部はやや内方へ向けて摘み上げを行う。体部内面は、ヘラケズリによって調整される。体部外面には煤が付着する。内面底部にも黒色化が認められる。庄内式後半の遺物である。



第 40 図　第８－１遺構面　土器だまり５遺物出土状況図



第 41 図　第８－１遺構面　土器だまり５出土遺物実測図

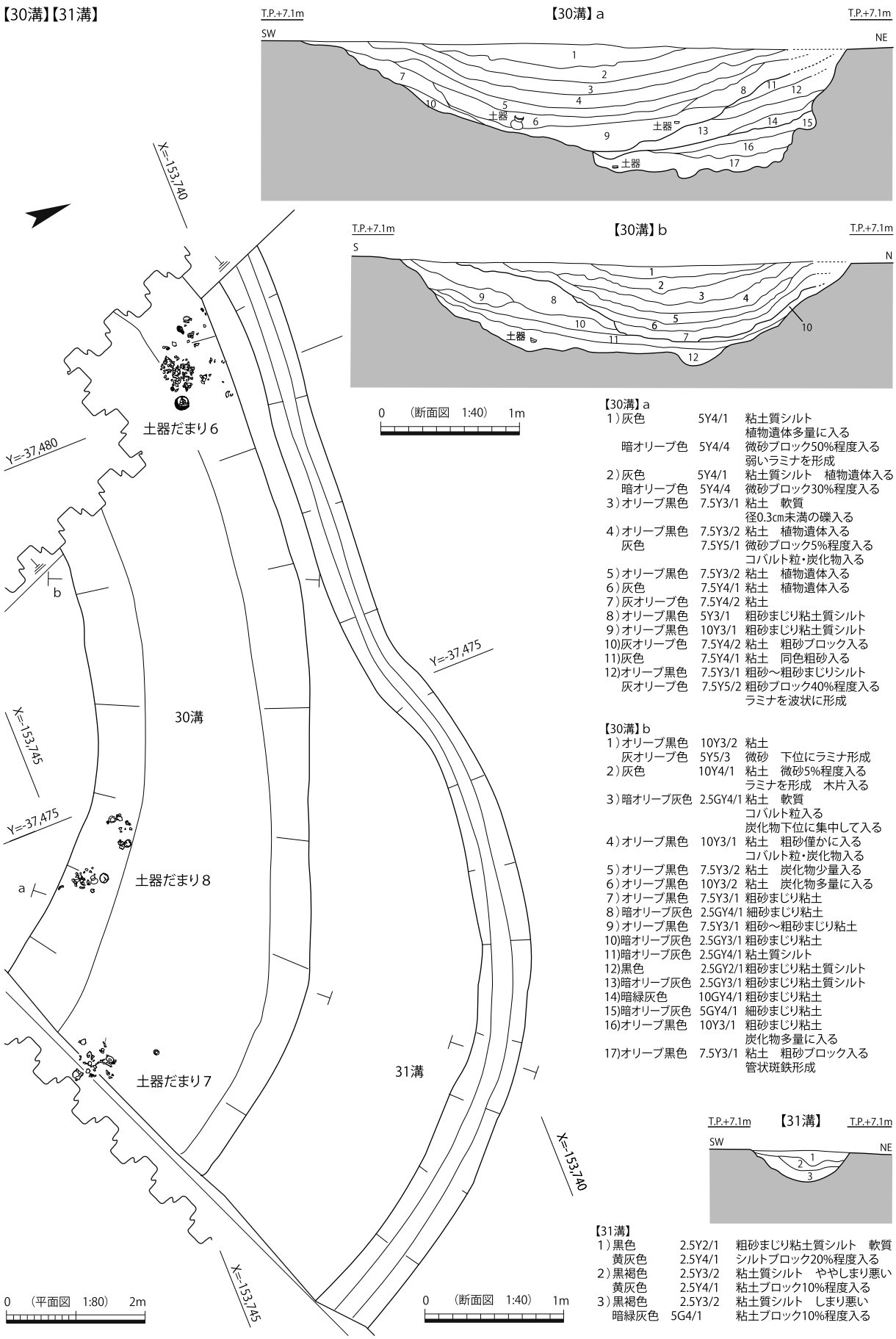
第 41 図 19 は、大型の甕である。肩部から口縁部が残存する。肩部はあまり張りを持たず、頸部で屈曲し、大きな角度で開く口縁へと続く。口縁端部は、上方への摘み上げが顕著である。体部外面は、細かい斜め方向のタタキが密に施されている。頸部は、タタキの上にユビナデを施す。肩部の下にはハケメが僅かに認められる。口縁部内面の中位には、器壁の剥離が帯状に認められる。口縁部外面に煤が付着する。庄内式後半の遺物である。

12. 第８－２遺構面（古墳時代前期）

第８－２遺構面は、古墳時代前期包含層である第８－３層を除去して検出した遺構面である（第 42 図）。第８層は計３層に細分できるが、すべて古墳時代前期の範疇におさまる包含層である。このため、第８－２遺構面と上面である第８－１遺構面との間には、ほんど時期差が認められない。

遺構面の起伏は、上面と同じく調査区南西部が微高地となり、東に向かって徐々に下がる。但し、上面よりもさらに傾斜は緩く、微高地が僅かに高い程度である。最も高い調査区南西部で T.P.+6.6 m、

第 42 図　第８－２遺構面　全体図



【30溝】a

1）灰色	5Y4/1	粘土質シルト 植物遺体多量に入る
暗オリーブ色	5Y4/4	微砂ブロック50%程度入る 弱いラミナを形成
2）灰色	5Y4/1	粘土質シルト　植物遺体入る
暗オリーブ色	5Y4/4	微砂ブロック30%程度入る
3）オリーブ黒色	7.5Y3/1	粘土　軟質 径0.3㎝未満の礫入る
4）オリーブ黒色	7.5Y3/2	粘土　植物遺体入る
灰色	7.5Y5/1	微砂ブロック5%程度入る コバルト粒・炭化物入る
5）オリーブ黒色	7.5Y3/2	粘土　植物遺体入る
6）灰色	7.5Y4/1	粘土　植物遺体入る
7）灰オリーブ色	7.5Y4/2	粘土
8）オリーブ黒色	5Y3/1	粗砂まじり粘土質シルト
9）オリーブ黒色	10Y3/1	粗砂まじり粘土質シルト
10)灰オリーブ色	7.5Y4/2	粘土　粗砂ブロック入る
11)灰色	7.5Y4/1	粘土　同色粗砂入る
12)オリーブ黒色	7.5Y3/1	粗砂～粗砂まじりシルト
灰オリーブ色	7.5Y5/2	粗砂ブロック40%程度入る ラミナを波状に形成

【30溝】b

1）オリーブ黒色	10Y3/2	粘土
灰オリーブ色	5Y5/3	微砂　下位にラミナ形成
2）灰色	10Y4/1	粘土　微砂5%程度入る ラミナを形成　木片入る
3）暗オリーブ灰色	2.5GY4/1	粘土　軟質 コバルト粒入る 炭化物下位に集中して入る
4）オリーブ黒色	10Y3/1	粘土　粗砂僅かに入る コバルト粒・炭化物入る
5）オリーブ黒色	7.5Y3/2	粘土　炭化物少量入る
6）オリーブ黒色	10Y3/2	粘土　炭化物多量に入る
7）オリーブ黒色	7.5Y3/1	粗砂まじり粘土
8）暗オリーブ灰色	2.5GY4/1	細砂まじり粘土
9）オリーブ黒色	7.5Y3/1	粗砂～粗砂まじり粘土
10)暗オリーブ灰色	2.5GY3/1	粗砂まじり粘土
11)暗オリーブ灰色	2.5GY4/1	粘土質シルト
12)黒色	2.5GY2/1	粗砂まじり粘土質シルト
13)暗オリーブ灰色	2.5GY3/1	粗砂まじり粘土質シルト
14)暗緑灰色	10GY4/1	粗砂まじり粘土
15)暗オリーブ灰色	5GY4/1	細砂まじり粘土
16)オリーブ黒色	10Y3/1	粗砂まじり粘土 炭化物多量に入る
17)オリーブ黒色	7.5Y3/1	粘土　粗砂ブロック入る 管状斑鉄形成

【31溝】

1）黒色	2.5Y2/1	粗砂まじり粘土質シルト　軟質
黄灰色	2.5Y4/1	シルトブロック20%程度入る
2）黒褐色	2.5Y3/2	粘土質シルト　ややしまり悪い
黄灰色	2.5Y4/1	粘土ブロック10%程度入る
3）黒褐色	2.5Y3/2	粘土質シルト　しまり悪い
暗緑灰色	5G4/1	粘土ブロック10%程度入る

第 43 図　第８－２遺構面　遺構平面断面図（１）

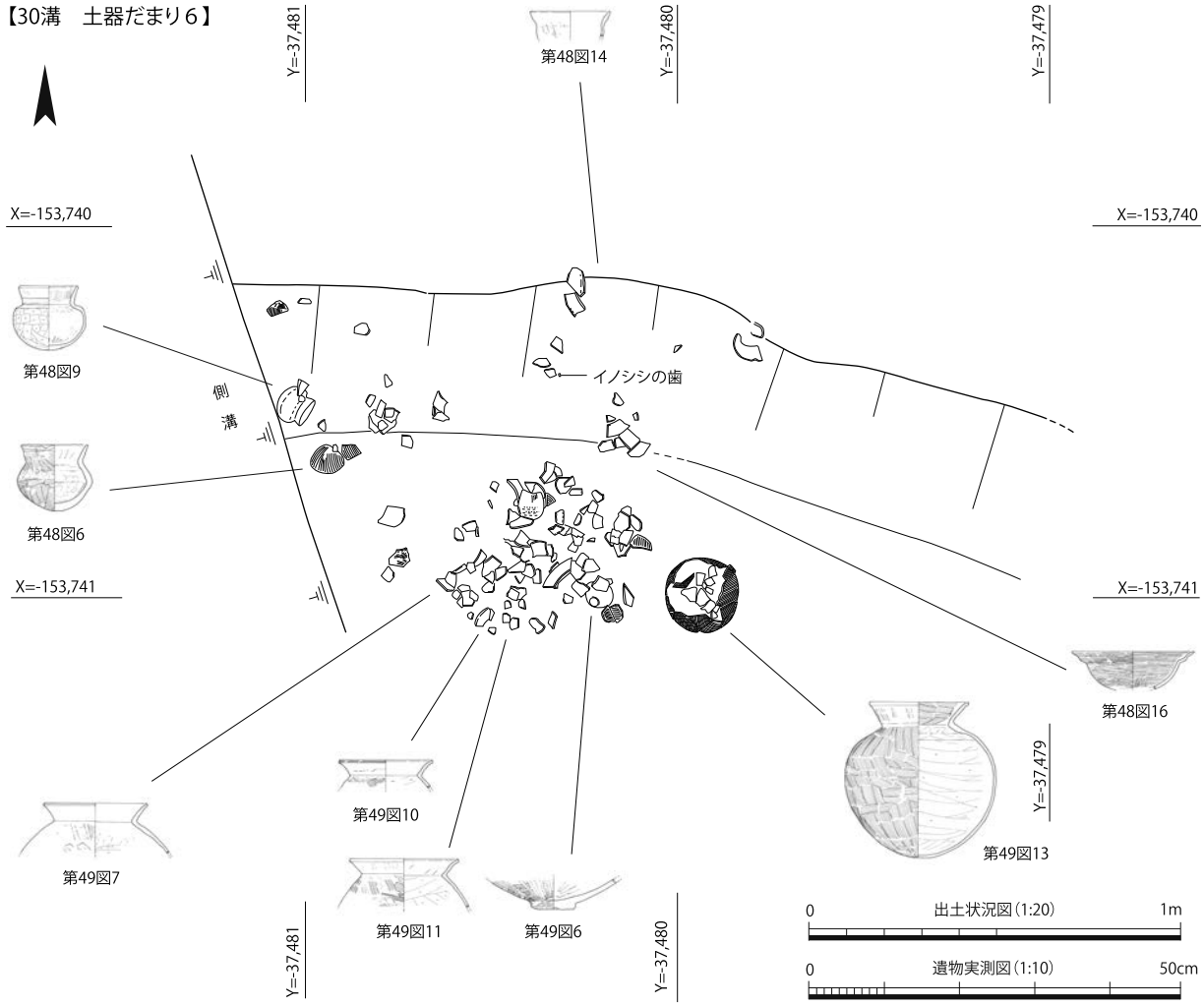
最も低い南東部でT.P.+6.35 mを測る。

この遺構面では、08－2－1区内において土坑及び溝を検出した。このうち、37土坑は、竪穴建物であった可能性が考えられる。

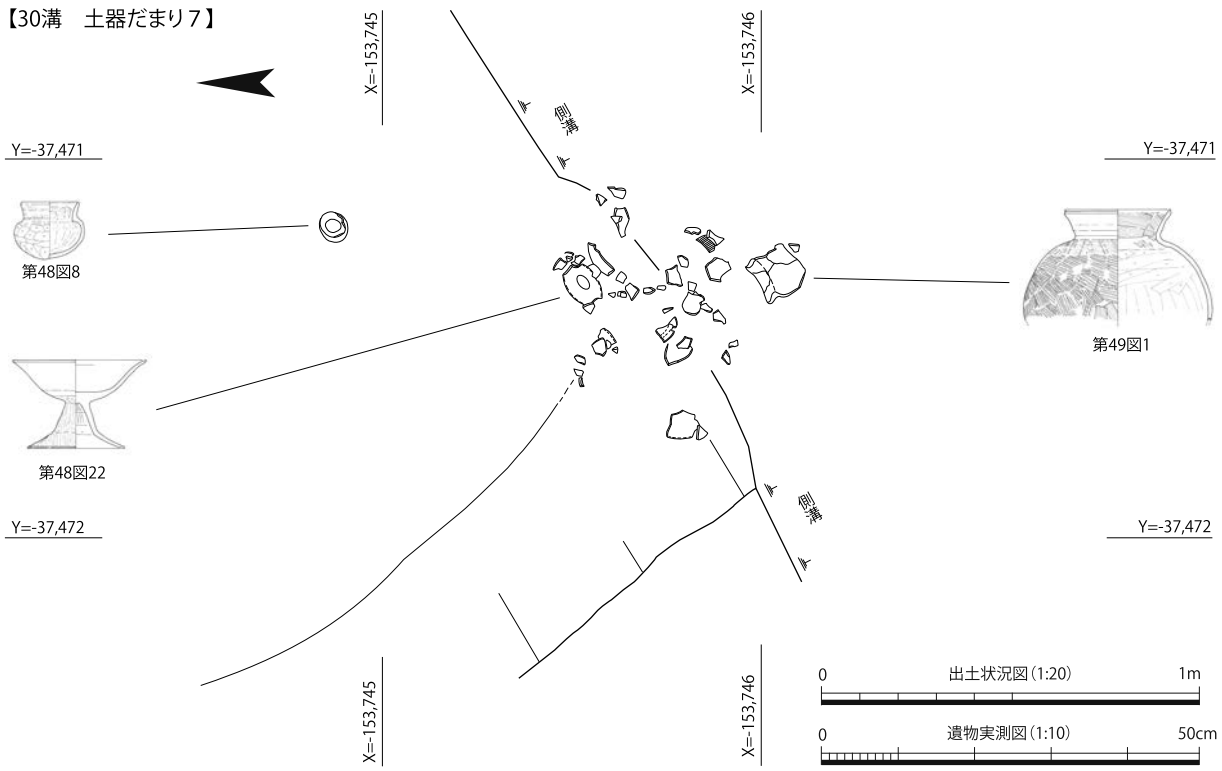
第8－3層からは、土師器高杯、椀形高杯、甕等が出土した。層内から出土した遺物量は少ないが、遺構内からは、古式土師器を主体とする多くの遺物が出土している。出土遺物及び遺構が調査区南西部に集中すること、またこれらを取り巻くように30溝が廻ることなどから、第8－3遺構面は古墳時代前期に構築された集落の基盤層であり、その集落の居住域を限る境界として、30溝が機能していた可能性が高い。おそらく、集落の居住域は調査区西側へと続く微高地上に展開すると考えられるのであり、今回検出した遺構群は、居住域の北東縁辺部であると考えられる。

なお、自然科学分析（次章詳述）では、08 1－2－2区において採取した第8－3層からイネ科の花粉が検出された。このため、居住域の外側には水田が営まれていた可能性がある。30溝及び31溝は、集落内の居住域と生産域を限る溝であると同時に、生産域に関するなんらかの施設であった可能性も考慮される。

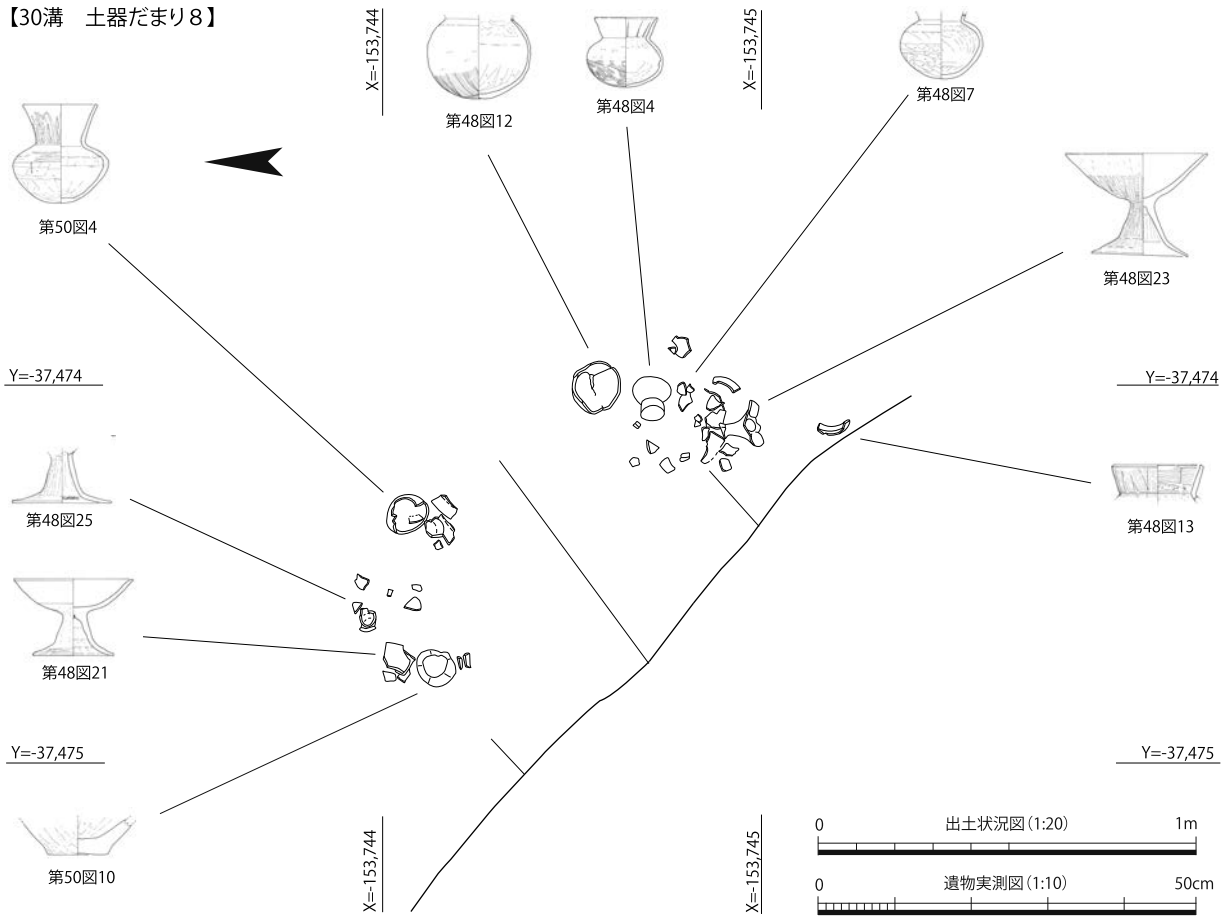
30溝　08－1－2－1区南西部において検出した溝である（第42図・第43図）。調査区西壁から南壁に向かって、弧を描いてのび、調査区外へと続く。検出長11.25 m、最大幅3.90 m、最大深度0.95 mを測る。底面のレベルは上流にあたる調査区西辺でT.P.+6.03 m、下流にあたる調査区南辺でT.P.+5.94



第44図　第8－2遺構面　30溝土器だまり6遺物出土状況図



第 45 図　第８－２遺構面　30 溝土器だまり７遺物出土状況図



第 46 図　第８－２遺構面　30 溝土器だまり８遺物出土状況図

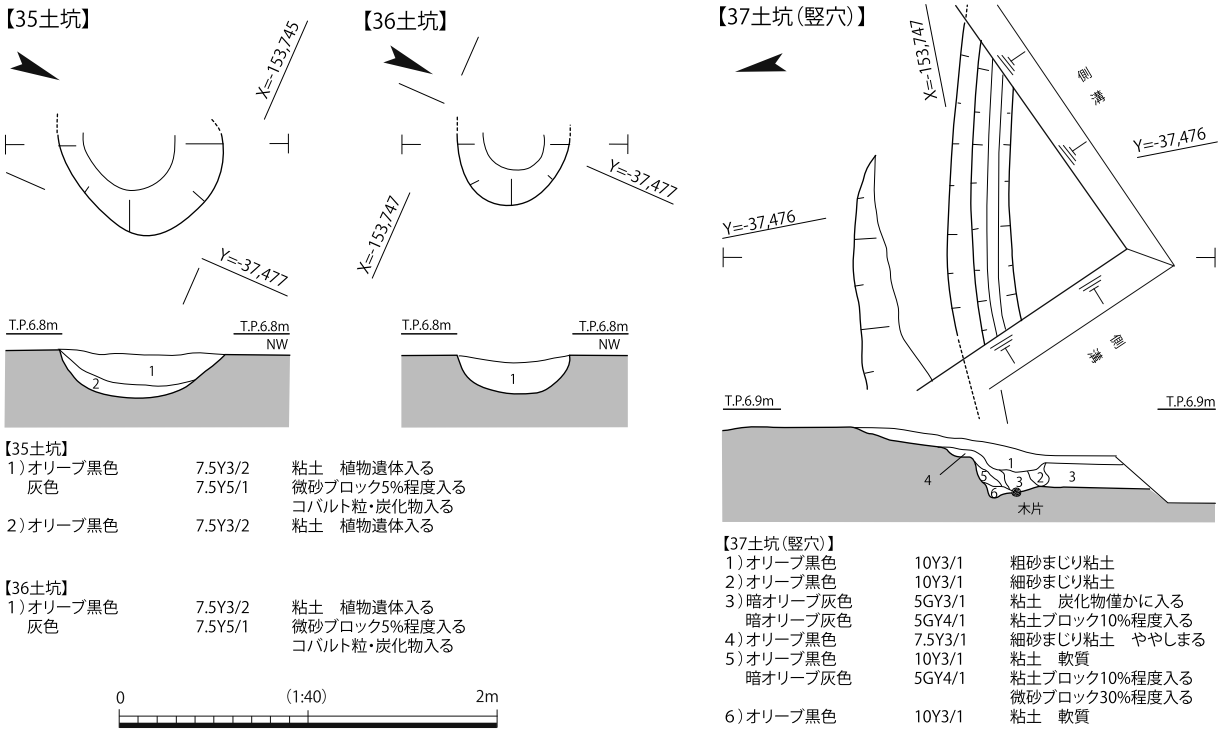
mである。

断面観察からは、この溝の掘削に段階差を認めることができる。南側の断面（断面ａ）では、中心より南東寄りに、西側の断面（断面ｂ）では北寄りに古段階の掘り方がある。この古段階掘り方のラインを結ぶと、弧状にのびる新段階の溝に比べて、東西方向に近い直線軸をもち、調査区南片付近で相当の角度をもって南へ曲がる進路を指す。溝の断面形状は、古段階が逆台形～皿形、新段階が浅い椀形を呈する。

埋土は、古段階の溝が粗砂や粗砂を含む粘土質シルトを主体としラミナを形成するのに比べて、新段階の溝は、炭化物を含む黒色層と軟質な灰色粘土層が交互に堆積する。下層には流水痕跡が認められることから、溝の掘削当初は、給水または排水を行う溝として機能していたことがわかる。ある程度、古段階の溝が埋まった時点で、再掘削され、形状や方向軸を変えた新段階の溝となったが、こちらはあまり流水した痕跡なく、埋没も徐々に進んだものと推定される。炭化物を含む層が数次にわたって堆積する状況は、集落内で形成された土の流入と自然土壌の堆積が交互にあったことを示すのであろう。この間に大きな撹乱を受けていないことからも、新段階の溝は、比較的静かな環境下において埋没したと推測される。

遺構内からは、小型丸底壺、高杯、鉢、小型器台、甕、直口壺、二重口縁壺等の土師器類のほか、木片や桃の実、イノシシの歯などが出土した。なお、30溝内には、計３箇所に遺物の集積が認められたため、土器だまり６～８の名称を付した（第44～46図）。

出土遺物の時期は、古墳時代前期である。このうち、ピークは庄内式後半期～布留式前半期中葉に求められる。溝内の遺物は、下層から出土したものに、より布留式前半期前葉までの要素が強い傾向を見ることができる。しかし、上層及び下層の境界が不明瞭な箇所もあり、明確に遺物を峻別するまでには至っていない。ここでは、上層及び下層の掘削に段階差は認められるものの、時期はともに古墳時代前



【35土坑】

1）オリーブ黒色	7.5Y3/2	粘土　植物遺体入る
灰色	7.5Y5/1	微砂ブロック5%程度入る コバルト粒・炭化物入る
2）オリーブ黒色	7.5Y3/2	粘土　植物遺体入る

【36土坑】

1）オリーブ黒色	7.5Y3/2	粘土　植物遺体入る
灰色	7.5Y5/1	微砂ブロック5%程度入る コバルト粒・炭化物入る

【37土坑（竪穴）】

1）オリーブ黒色	10Y3/1	粗砂まじり粘土
2）オリーブ黒色	10Y3/1	細砂まじり粘土
3）暗オリーブ灰色	5GY3/1	粘土　炭化物僅かに入る
暗オリーブ灰色	5GY4/1	粘土ブロック10%程度入る
4）オリーブ黒色	7.5Y3/1	細砂まじり粘土　ややしまる
5）オリーブ黒色	10Y3/1	粘土　軟質
暗オリーブ灰色	5GY4/1	粘土ブロック10%程度入る 微砂ブロック30%程度入る
6）オリーブ黒色	10Y3/1	粘土　軟質

第47図　第８－２遺構面　遺構平面断面図（２）

期としておきたい。

31 溝　30 溝の北～東側に位置する遺構である（第 42 図・第 43 図）。30 溝と同様に湾曲するが、より大きく膨らんでのび、調査区外へと続く。検出長は 16.75 m、最大幅 0.80 m、最大深度 0.21 mを測る。底面のレベルは、上流である調査区西辺で T.P.+6.45 m、下流にあたる調査区西辺で T.P.+6.26 mを測る。断面形状は椀形で、埋土は粘土質シルトを主体とする。給排水を目的とした溝であったと想像されるものの、明確な流水痕跡は残っていない。埋土からは、土師器有段鉢（第 50 図 12）と庄内式甕の口縁部が出土した。古墳時代前期の遺構である。

35 土坑　08 － 1 － 2 － 1 区南西隅の微高地上において検出した遺構である（第 42 図・第 47 図）。調査区外へ続くため全体の平面形状は不明である。検出部位は長径 0.86 m、短径 0.50 m、最大深度は 0.22 mである。断面形状は椀形、埋土は、第８－３層であるオリーブ黒色粘土を主体とする。埋土からは、土師器甕口縁部（第 50 図 13）の一部が出土した。

36 土坑　同じく 08 － 1 － 2 － 1 区南西隅の微高地上において検出した遺構である（第 42 図・第 47 図）。検出できた法量は、長径 0.60 m、短径 0.34 m、最大深度 0.15 mである。断面形状・埋土ともに 35 土坑に近似する。埋土から土師器甕の口縁部が出土したが、これも 35 土坑から出土した遺物と接合した。

35 土坑・36 土坑ともに性格は不明であるが、掘り方は明確であり、人為的な遺構であると認識される。

37 土坑（竪穴）　同じく 08 － 1 － 2 － 1 区南西隅微高地上において検出した遺構である（第 42 図・第 47 図）。調査区のコーナーを掠めるように延びており、全体形状は不明である。但し、遺構縁辺に一段下がる小溝が廻ること、またこの小溝の埋土に若干炭化物が混じることから、竪穴建物の一部ではないかと推測される。埋土からは、弥生土器（中期後半）壺口縁部、庄内式甕口縁部の破片が出土した。古墳時代前期の遺構である。

13. 第８－２遺構面（古墳時代前期）・遺構内出土遺物

30 溝出土遺物（第 48 図・第 49 図・第 50 図）　第 48 図 1 ～ 11 は、土師器小型丸底壺である。第 48 図 1 は、底部を欠く。器高があり、体部が大きく口縁部が小さい。最大径は、肩部にある。体部外面は横方向の緻密なミガキの上に、斜め方向のミガキを施す。短く開く口縁部の外面は横方向のミガキ、内面は横方向のミガキの後、斜め方向のミガキを加える。斜め方向のミガキは、一定の間隔を保ちながら全周する。布留式前半期前葉の遺物である。30 溝上層より出土した。

第 48 図 2 も同じく底部を欠く。張り出した肩部と大きく外方へ開く口縁部をもつ。摩滅を受けているが、外面には横方向のミガキが残る。口縁部内面も横方向のミガキ、体部内面はユビナデが施されている。布留式前半期前葉の遺物である。30 溝上層より出土した。

第 48 図 3 は、頸から口縁にかけての部位である。高さのある口縁部が外方へ開く器形をもつ。口縁部の根元には、段が認められる。内面は摩滅が著しいものの、横方向にミガキの痕跡をとどめる。布留式初頭の遺物である。30 溝上層より出土した。

第 48 図 4 は、口縁端部を僅かに欠損するものの、ほぼ完形品である。やや歪ながら、丸い底部と張り出した胴部、なだらかな肩部をもち、頸部から屈曲して外反し、口縁部へ続く。口縁端部は薄く、やや尖らせて作る。器壁の調整は、底部外面に多方向からのハケメを入れる。肩部外面が縦方向のハケ後ヨコナデ、口縁部外面は横方向のナデを施す。口縁部内面は横方向のハケメの後、ヨコナデを行う。体部内面は、ユビナデを施すが、調整は粗雑で、指頭圧痕や粘土塊を随所に残す。肩及び口縁の一部に黒

斑が認められる。底部外面には、焼成前線刻が一条、8.5cm の長さにわたり付されている。布留式前半期前葉の遺物であるが、外面にミガキを施す上述の遺物（第 48 図 1 ～ 3 ）の後代に位置づけられる。30 溝南半部の土器だまり 8 より出土した。

第 48 図 5 は、頸から口縁にかけての部位である。焼成が甘く、胎土に細かい礫や雲母を多く含むため、他の小型丸底壺とは異なる印象を受ける。体部のうち、肩部が最も張る器形である。頸部で屈曲し、やや内湾しながら外方へ開く口縁部をもつ。体部外面は斜め方向のハケメ、肩部より上位では、ユビナデが優勢となる。口縁部内面はユビナデ、体部内面はヘラケズリである。体部外面の一部に黒色化が認められる。布留式前半期前葉の遺物である。30 溝上層より出土した。

第 48 図 6 は、口縁端部の一部を欠損するものの、ほぼ完形品である。胴部が突出する算盤玉形の体部を有し、内傾する肩部から上方へ開く口縁部をもつ。器壁は厚く、無骨な印象を与える。外面調整は縦方向のハケメで、胴部には横方向のハケメを加える。肩部から口縁部は、縦方向のハケメ後僅かにヨコナデを施す。口縁部はヨコナデがよく残る。口縁端部の整形は粗雑で、一部に波立ちと粘土塊の付着が認められる。口縁部外面には沈線が廻る。口縁部内面及び体部内面にはユビナデを施すが、指頭圧痕が顕著に残るため、器壁に凹凸が目立つ。体部外面の一部に黒斑、内面には炭化物の付着が認められる。布留式前半期後葉の遺物である。土器だまり 6 より出土した。

第 48 図 7 は、体部のみの残存である。丸味のある底部と張り出した胴部をもつ。底部外面はヘラケズリ、肩部と頸部にはユビナデを施す。内面は丁寧なユビナデが為されている。布留式前半期後葉の遺物である。土器だまり 8 より出土した。

第 48 図 8 は、口縁端部の一部を欠損するが、完形復元が可能である。器形が低く、丸い底部と張り出した胴部を有する。肩部から内傾して頸部へ至り、上方へ短く立ち上がる口縁部をもつ。肩部以下の外面は横方向または縦方向のヘラケズリ、肩部から口縁部は縦方向のハケメ後ユビナデを施す。口縁部の調整は甘く、口縁端部は波打つ。口縁部内面には横方向粗くハケメが廻る。体部内面はヘラケズリ及びユビナデが為される。口縁端部には煤が付着する。布留式前半期後葉の遺物である。土器だまり 7 より出土した。

第 48 図 9 も同じく、口縁端部を僅かに欠損するのみで、完形復元が可能である。丸い底部と胴部をもち、肩部から頸部にかけての屈曲が明確で、稜をもつ。口縁部は僅かに開きながら上方へのびる。口縁端部は内側へ折り曲げられており、肥厚する。外面調整は肩部以下が横及び縦・斜め方向のヘラケズリ、肩部以上は縦方向のハケメ後、横方向のユビナデを施す。口縁部中位には、一条の沈線が廻る。口縁部内面は横方向の粗いハケメが施されている。体部内面はヘラケズリ及びユビナデである。布留式前半期後葉の遺物である。土器だまり 6 より出土した。

第 48 図 10 は、球状に近い体部とやや外方に開く口縁部をもつ。肩の稜線はそれほど目立たず、丸味を帯びている。口縁部は歪で左右非対称、口縁端部も細かく波打つ。外面調整は、胴部以下が斜め方向のヘラケズリ、肩部及び口縁部には縦方向のハケメ後横方向にユビナデを施す。口縁部内面は横方向のハケ、体部内面はヘラケズリとユビナデで調整し、頸部付近に指頭圧痕を残す。外面体部から口縁の一部に黒斑が、内面の一部に炭化物の付着が認められる。布留式前半期後葉の遺物である。30 溝上層より出土した。

第 48 図 11 は、肩部以上が残存する。器壁が厚く、最大径も大きい。張り出した肩部と直立気味に立ち上がる口縁部をもつ。外面調整は、肩部以下に斜め方向のハケメがあり、さらに横方向のハケメを

加える。口縁部外面は横方向のハケメの後、ユビナデを施す。口縁部内面には、横方向のハケメが残る。他の遺物に比べて、ハケ原体の幅が広いようである。布留式前半期後葉の遺物である。土器だまり 8 より出土した。

第 48 図 12 は、土師器壺の体部である。ほぼ球形を呈するが、器壁表面には細かい凹凸が認められる。本来は直立する口縁部をもつ器形であったと推測される。外面は、摩滅が著しく、底部のハケメと頸部付近のヨコナデを僅かに認めるのみである。内面には、ヘラケズリ及びユビナデが施されている。布留式前半期後葉の遺物と推測される。土器だまり 8 より出土した。

第 48 図 13 は、土師器壺の口縁部である。外面は縦方向のハケ後ヨコナデ、内面には横方向のハケメを残す。口縁端部にはユビナデにより端面を作り、その中央部をやや窪ませて凹線状に作る。外面に煤の付着がある。布留式前半期後葉の遺物と推測される。土器だまり 8 より出土した。

第 48 図 14 ～ 16 は、土師器鉢である。第 48 図 14 は、肩から口縁部の出土である。外面は斜め方向の細かいハケ後ナデ、内面はヨコナデを施す。口縁部への屈曲は緩やかである。庄内後半期の遺物と推測される。土器だまり 6 より出土した。

第 48 図 15 は、第 48 図 14 より残存部位が大きい。外面下半部は工具または指による縦方向のナデ、外面上半部及び内面はユビナデによって調整する。口縁部内面は、ユビナデ前に横方向にハケを用いた形跡が残る。庄内式後半期の遺物と推測される。30 溝下層より出土した。

第 48 図 16 は、有段鉢である。丸味のある体部から屈曲して段を作り、口縁部へと続く。器壁が薄く、段は明瞭な稜を成す。内外面ともに横方向の緻密なミガキを施す。布留式前半期前葉の遺物と推測される。土器だまり 6 より出土した。

第 48 図 17 ～ 19 は、小型器台である。第 48 図 17 は裾部を欠損するが、中空で、上下に大きく開く器形をもつと考えられる遺物である。外面は細かい横方向のミガキ、内面は斜め方向のハケメ後横方向にミガキを施す。布留式初頭の遺物である。30 溝上層より出土した。

第 48 図 18 は、脚部の裾を欠損する。厚みのある器壁をもち、直線的に内傾する脚部とやや丸味をもって立ち上がる杯部をもつ。口縁端部は丸くおさめられている。脚部外面は横方向の細かいミガキ、杯部外面は、口縁部にナデを加える。杯部内面は、器壁の剥落が著しく、調整痕跡をとどめていない。布留式前半期前葉の遺物である。30 溝上層より出土した。

第 48 図 19 は、脚部のみの出土である。中位に円形スカシが認められる。残存部位が小さいため、スカシの総数は復元できない。外面の調整は縦方向のミガキを主体とし、横方向の細いミガキを上位に施す。布留式前半期前葉の遺物である。30 溝上層より出土した。

第 48 図 20 は、高杯形ミニチュア土器の脚部と考えられる遺物である。手捏ねで作られており、随所に指頭圧痕が残る。但し、脚部内面には工具に拠るナデが横方向に廻る。また杯部内面にもヘラケズリの痕跡が残る。30 溝上層より出土した。

第 48 図 21 ～ 25 は、土師器高杯である。第 48 図 21 は、杯部と脚部が実際には接合できないため、図上復元を行った。短く太い脚部と外方へ開く杯部をもつ。全体的に摩滅が進んでおり、調整は不明瞭である。裾部に横方向のミガキ、脚部には縦方向のミガキまたはナデ、杯部に横方向のナデを僅かに認めることができる。脚部内面はヨコナデによって整えられており、裾部に一条の線刻を施す。脚部と杯部の接合部には細い未貫通の孔を認めるが、その周囲に亀裂が入る。布留式前半期前葉の遺物である。土器だまり 8 より出土した。

第 48 図 22 は、杯の一部を欠損するものの、全体復元が可能な遺物である。太く短い脚部とやや外湾しながら大きく開く杯部をもつ。脚部及び裾部は縦方向のミガキ、杯部は横方向のユビナデが施されている。杯部と脚部の接合部は、入念なヘラケズリを行う。杯部内面は摩滅が著しいものの、口縁部はナデ及びミガキ調整が僅かに残る。杯部内面の摩滅は使用痕の可能性がある。脚部内面には絞り目が残るが、ヘラケズリによって滑らかに調整されている。布留式前半期前葉の遺物である。土器だまり 7 より出土した。

第 48 図 23 は、裾及び杯の一部を欠損するものの、全体復元が可能である。短く太い脚部と直線的に開く杯部をもつ。杯部は不正円で、一方に大きく開く形状をもつ。脚部外面は縦方向の密なミガキ、杯部は横方向のミガキ後、縦方向のミガキを施す。杯の口縁には、さらにヨコナデを施す。杯部内面は、器壁の剥落が著しいが、残存部位にはヨコナデ調整が残る。脚部内面はヘラケズリによって丁寧に加工されている。布留式前半期前葉の遺物である。土器だまり 8 より出土した。

第 48 図 24 は、杯部のみの出土である。杯部は丸味をもち、口縁端部をユビナデによってさらに外方へ開く。外面は縦方向のミガキと横方向のユビナデ、内面に横方向のミガキを施す。布留式前半期前葉の遺物である。30 溝下層より出土した。

第 48 図 25 は、脚部のみの出土である。若干細目の脚部と、開く裾部をもつ。裾端部はナデにより、端面を作る。脚部は縦方向のミガキ、裾部は横方向のナデを施す。布留式前半期前葉の遺物である。土器だまり 8 より出土した。

第 48 図 26 は、脚台をもつ壺または鉢、甕類の脚部であると推測される。外面は縦方向の弱いミガキ、内面は横方向のヘラケズリとユビナデを施す。裾端部は内側に折り曲げて玉縁状に作るものの、その加工は雑である。裾の一部に黒斑が認められる。これらの特徴は、東海系の甕等に付随する脚部に近い。30 溝上層より出土した。

第 49 図 1 ～ 13 は、土師器甕である。第 49 図 1 は、胴部以上の部位が出土した。丸い体部と胴部に比して径が小さい頸部、高さのある口縁部をもつ。体部外面は斜め方向のタタキが全周し、頸部付近には縦方向のハケを加える。胴部付近には線刻状のキズが縦方向に付されている。頸部及び口縁部はヨコナデ、口縁端部は摘み上げて先端を尖らせる。口縁端面には凹線状の窪みを作る。口縁部内面は横方向のハケ、体部内面はヘラケズリを行う。体部内面は黒色化、体部及び口縁部外面には煤が付着する。庄内式後半期の遺物である。土器だまり 7 より出土した。

第 49 図 2 は、肩部以上の出土である。なだらかに窄まる肩と大きく外反する口縁部をもつ。口縁端部は、上方への摘み上げを行う。体部外面は細かいタタキ後斜め方向のハケメ、頸部付近にはナデを加える。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面は横方向のハケメ後ユビナデを施す。体部内面はヘラケズリを為す。外面体部及び口縁部に煤が付着する。庄内式後半期の遺物である。30 溝下層より出土した。

第 49 図 3 も同じく肩部以上の出土である。明るい色調をもち、焼成は堅緻である。なだらかに窄まる肩部と屈曲して外反する口縁部をもつ。頸部内面の屈曲は鋭く、明確な稜を作る。体部外面は細かいタタキ、その後交差する角度でハケメを加える。頸部及び口縁部はヨコナデを施す。口縁端部は上方に摘み上げ、端面に凹線状の窪みを作る。体部外面の一部に黒斑が認められる。庄内式後半期の遺物である。30 溝下層より出土した。

第 49 図 4 は、頸部以上の出土である。頸部付近は細かいタタキ後ヨコナデ、口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。口縁端部は上方への摘み上げを行う。体部内面はヘラケズリを行い、頸部の屈曲を際

立たせる。庄内式後半期の遺物である。30 溝下層より出土した。

第 49 図 5 は、肩部以上の出土である。薄い器壁をもつ。体部外面は細かいタタキ、頸部及び口縁部はユビナデによって調整する。体部内面は横方向のヘラケズリを施す。口縁端部は上方へ摘み上げ、鋭く尖らせている。体部外面及び口縁部内面に煤の付着が認められる。庄内式後半期の遺物である。30 溝土器だまり 7 より出土した。

第 49 図 6 は、底部のみの出土である。平底と、大きく開く体部をもつ。底部外面の中央部分は、小さく窪む。体部外面は粗いタタキ後縦方向にミガキを施す。内面はヘラケズリ及びユビナデを為す。庄内式前半期の遺物である。土器だまり 6 より出土した。

第 49 図 7 は、肩部以上の出土である。摩滅が著しく、外面に縦方向のハケ、内面にヘラケズリの痕跡を僅かにとどめる。口縁端部は摘み上げにより、外側に端面を作る。庄内式後半期の遺物である。土器だまり 6 より出土した。

第 49 図 8 は、肩部以上の出土である。肩部はやや丸味を持ち、屈曲する頸部と外反する口縁部へ続く。口縁端部は摘み上げを行うが、ユビナデが甘く突出しない。体部外面はハケメ、口縁部は内外面ともにユビナデを施す。体部内面は、上位に横方向のヘラケズリ、下位にハケメとユビナデを施す。体部外面に、僅かに煤が付着する。庄内式後半期～布留式初頭の遺物である。30 溝上層より出土した。

第 49 図 9 は、胴部以上の出土である。体部外面は縦方向のハケメを施した後、胴部に斜め～横方向のハケメを加える。胴部下位は、ユビナデによってハケメをすり消す。頸部と口縁部は、横方向のナデを施す。口縁端部は内側に短く折り曲げ、口縁部端面に凹線状の窪みを作る。体部内面は斜め方向のヘラケズリを行う。布留式前半期の遺物である。30 溝上層より出土した。

第 49 図 10 は、頸部及び口縁部の出土である。外面はハケメ後ユビナデ、口縁部外面はユビナデのみを施す。口縁端部の摘み上げは緩いが、外側の端面は明確に作られており、微かに 2 条の沈線を付す。内面は黒色化と摩滅が著しい。布留式前半期の遺物である。土器だまり 6 より出土した。

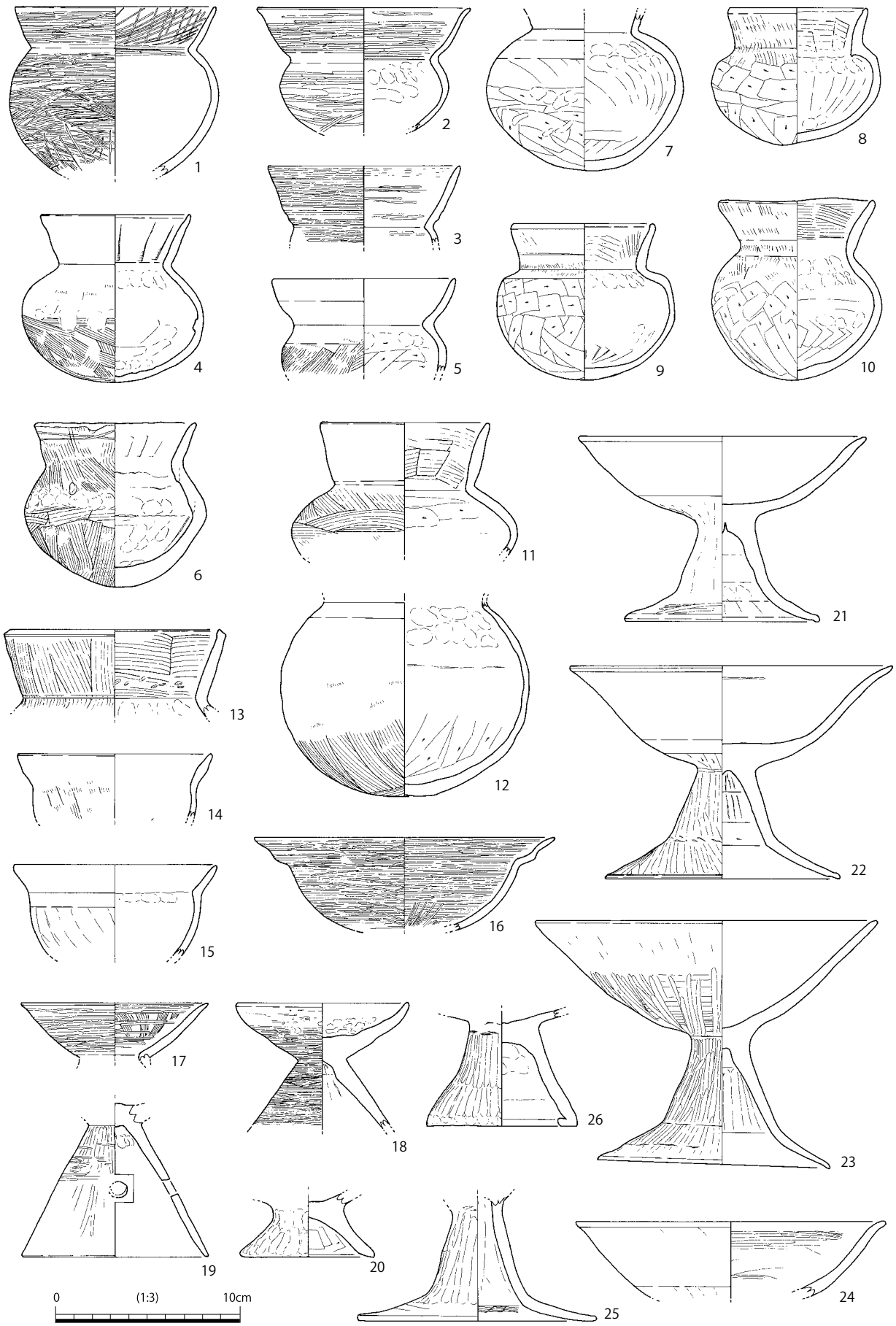
第 49 図 11 は、肩部以上の出土である。体部外面は縦及び斜め方向のハケメ、口縁部は内外面ともにヨコナデ、体部内面はヘラケズリを施す。口縁端部は摘み上げるが端部形状は丸く、鋭さがない。外面に煤の付着が認められる。布留式前半期の遺物である。土器だまり 6 より出土した。

第 49 図 12 も同じく肩部以上の出土である。外面は摩滅が著しく、僅かにハケメを認めるのみである。口縁部の整形が粗雑で、粘土帯の継ぎ目が明瞭に残る。口縁端部の摘み上げは甘い。口縁部内面はヨコナデ、体部内面にはヘラケズリを施す。布留式前半期の遺物である。30 溝上層より出土した。

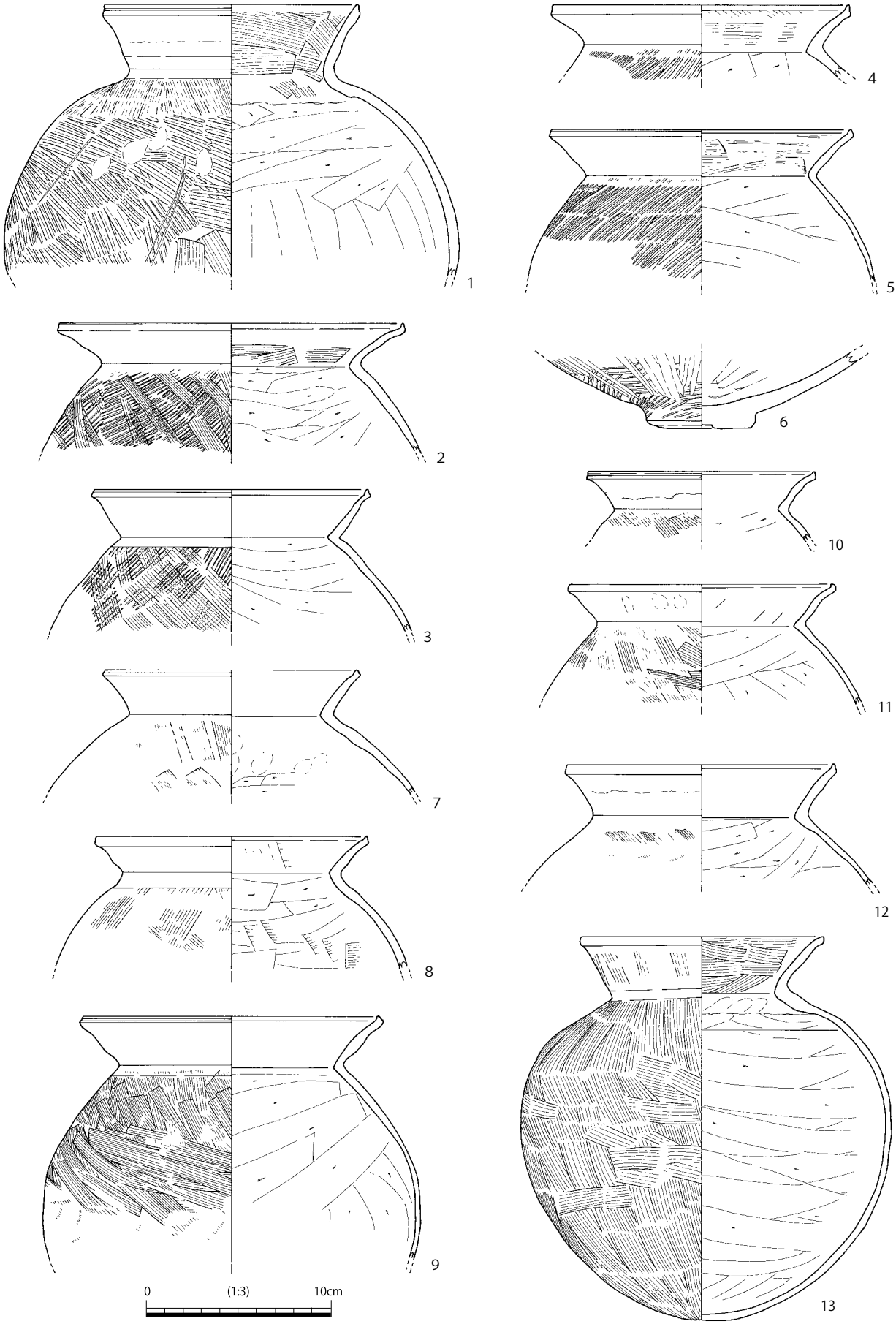
第 49 図 13 は、残存状態が良好で、完全復元が可能な遺物である。体部外面は縦方向のハケメを主体とし、胴部に横方向のハケメを短く付す。口縁部外面は縦方向のハケメ後ユビナデ、口縁部内面には横方向のハケメを施す。体部内面はヘラケズリを重ねるが、頸部付近の加工が粗く、粘土塊を残す。胴部に黒斑、底部外面の一部と体部から口縁部にかけた広い範囲に煤が付着する。内部底面も黒色化が認められる。布留式前半期の遺物である。土器だまり 6 より出土した。

第 50 図 1 ・ 2 は、土師器甕である。第 50 図 1 は、肩部以上の出土である。やや丸味をもって立ち上がる口縁部と、肥厚させて玉縁状に作る口縁端部をもつ。体部外面は縦方向のハケメ後ユビナデ、口縁部は内外面ともにユビナデ、体部内面はヘラケズリを施す。外面口縁部及び肩部に煤が付着する。布留式前半期の遺物である。30 溝上層より出土した。

第 50 図 2 は、胴部以上の出土である。外面は縦方向ハケメ後肩部に横方向のハケメが入る。外面頸



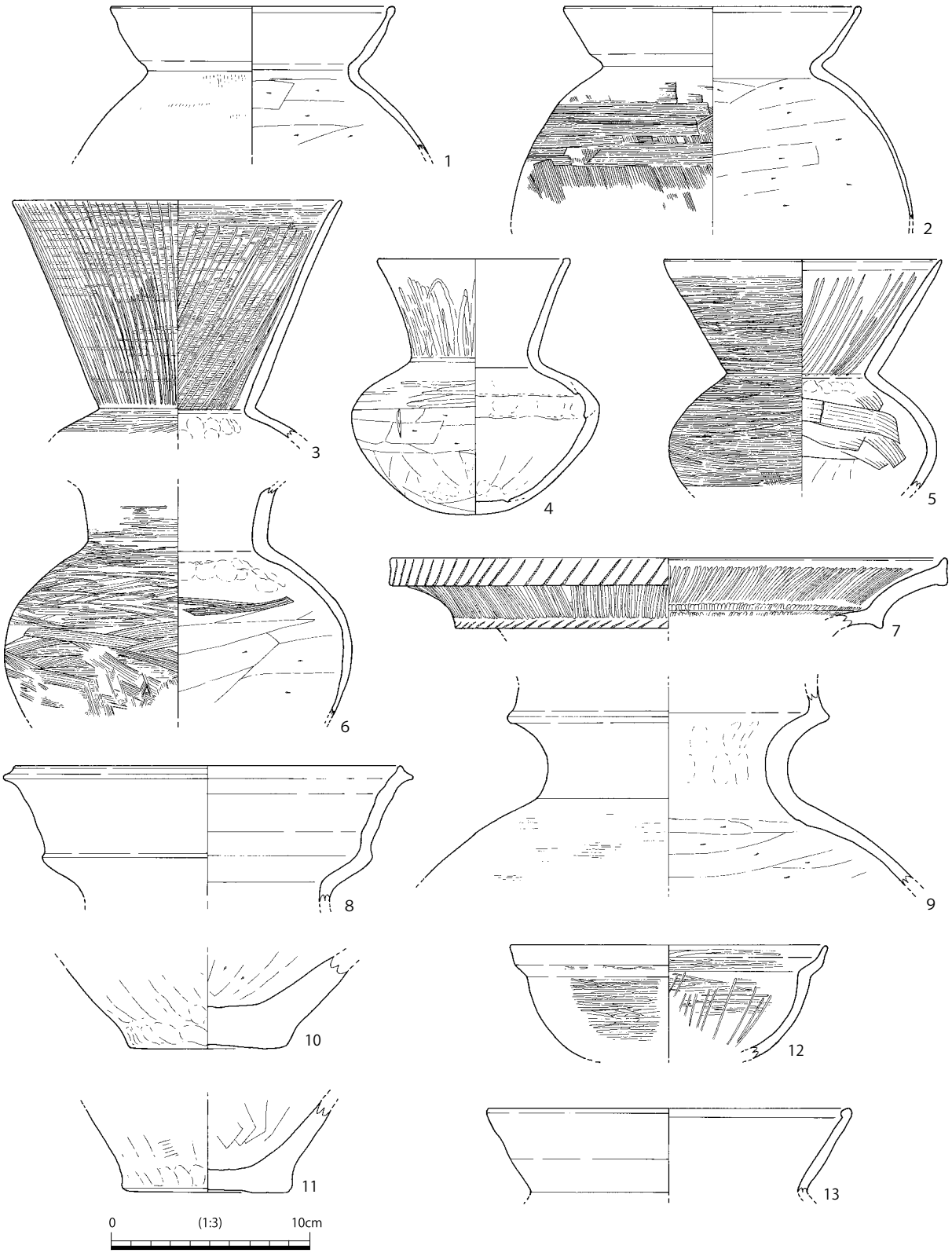
第 48 図　第８－２遺構面　30 溝出土遺物実測図（１）



第 49 図　第８－２遺構面　30 溝出土遺物実測図（２）

部及び口縁部内外面は横方向のユビナデ、体部内面は横方向のヘラケズリを施す。外面に広く煤が付着する。また内面の胴部以下に黒色化が認められる。布留式前半期の遺物である。土器だまり７より出土した。

第 50 図３～５は、土師器直口壺の口縁部である。第 50 図３は、丸味を帯びた肩部から外方へ直線



第 50 図　第８－２遺構面　30 溝・31 溝・35 土坑・36 土坑出土遺物実測図

的に開く口縁部をもつ。肩部の調整は横方向のミガキ、口縁部は横方向のミガキ後、縦方向のミガキを施す。内面も同じく横方向のミガキ後、縦方向にミガキを加えるが、口縁端部付近には縦方向のミガキは及んでいない。庄内式後半～布留式前半期の遺物である。30 溝上層より出土した。

第 50 図 4 は、口縁部の一部を欠くが、完全復元が可能な遺物である。丸い底と張り出した胴部、やや外湾気味に立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部はユビナデによって丸くおさめる。外面は胴部以下をヘラケズリ及びユビナデによって加工する。胴部から頸部にかけては横方向のミガキ、口縁部は横方向のユビナデ後、縦方向にミガキを施す。口縁部内面はヨコナデ、底部内面にはヘラケズリの痕跡が認められる。胴部内面には粘土帯の継ぎ目と指頭圧痕が残る。外面及び口縁部端部内面に煤が付着する。古墳時代前期の遺物と推測されるが、同時期の直口壺に比べて胴部の張りが強い。土器だまり 8 より出土した。

第 50 図 5 も同じく、胴部が強く張り出す器形をもつ。口縁部は直線的に外反し、端部をやや尖らせる。体部外面及び口縁部は横方向のミガキ、口縁部内面は横方向のミガキ後縦方向のミガキを施す。体部内面はハケ状工具によるケズリ、頸部付近には指頭圧痕を残す。古墳時代前期の遺物であろう。土器だまり 6 付近の斜面より出土した。

第 50 図 6 ～ 9 は、二重口縁壺である。第 50 図 6 は、胴及び頸部の出土である。胴部に最大径をもち、やや外傾しながら立ち上がる口頸部をもつ。肩部には横方向のミガキ、胴部以下には斜め方向のハケメを施す。口頸部外面は僅かに横方向のミガキが残る。体部内面はヘラケズリを施すが、一部にハケ状工具の条痕が残る。体部外面に黒斑が認められる。布留式前半期の遺物である。30 溝下層より出土した。

第 50 図 7 は、口縁部のみの出土である。突出した稜をもつ二重口縁部であり、内外面ともに縦方向の細かいミガキを施す。稜上及び口縁部端面に列点文を付す。丁寧なつくりである。布留式前半期の遺物である。土器だまり 7 付近の東側斜面より出土した。

第 50 図 8 も同じく口縁部の出土である。高さのある口縁部に、緩い段を作る。口縁端部はユビナデによって端面を作る。表面調整は、内外ともにヨコナデである。布留式前半期の遺物である。上層より出土した。

第 50 図 9 は、肩部及び口頸部の出土である。体部外面は摩滅が著しく、僅かにミガキの痕跡をとどめる。口頸部は、内外面ともにヨコナデを施す。体部内面は、横方向のヘラケズリである。布留式前半期前葉の遺物である。30 溝底面付近より出土した。

第 50 図 10 は、弥生土器壺の底部である。内外面ともに摩滅が著しい。外面には指頭圧痕、内面にはヘラケズリの痕跡をとどめる。底部外面には黒斑が認められる。土器だまり 8 より出土した。

第 50 図 11 は、弥生土器甕の底部である。外面には指頭圧痕のほか、僅かにハケメの痕跡が残る。内面はヘラケズリを行う。土器だまり 7 付近の、西側斜面より出土したが、後に第 10 － 1 層より出土した一片と接合した。このため、下層からの混入品である可能性が高い。

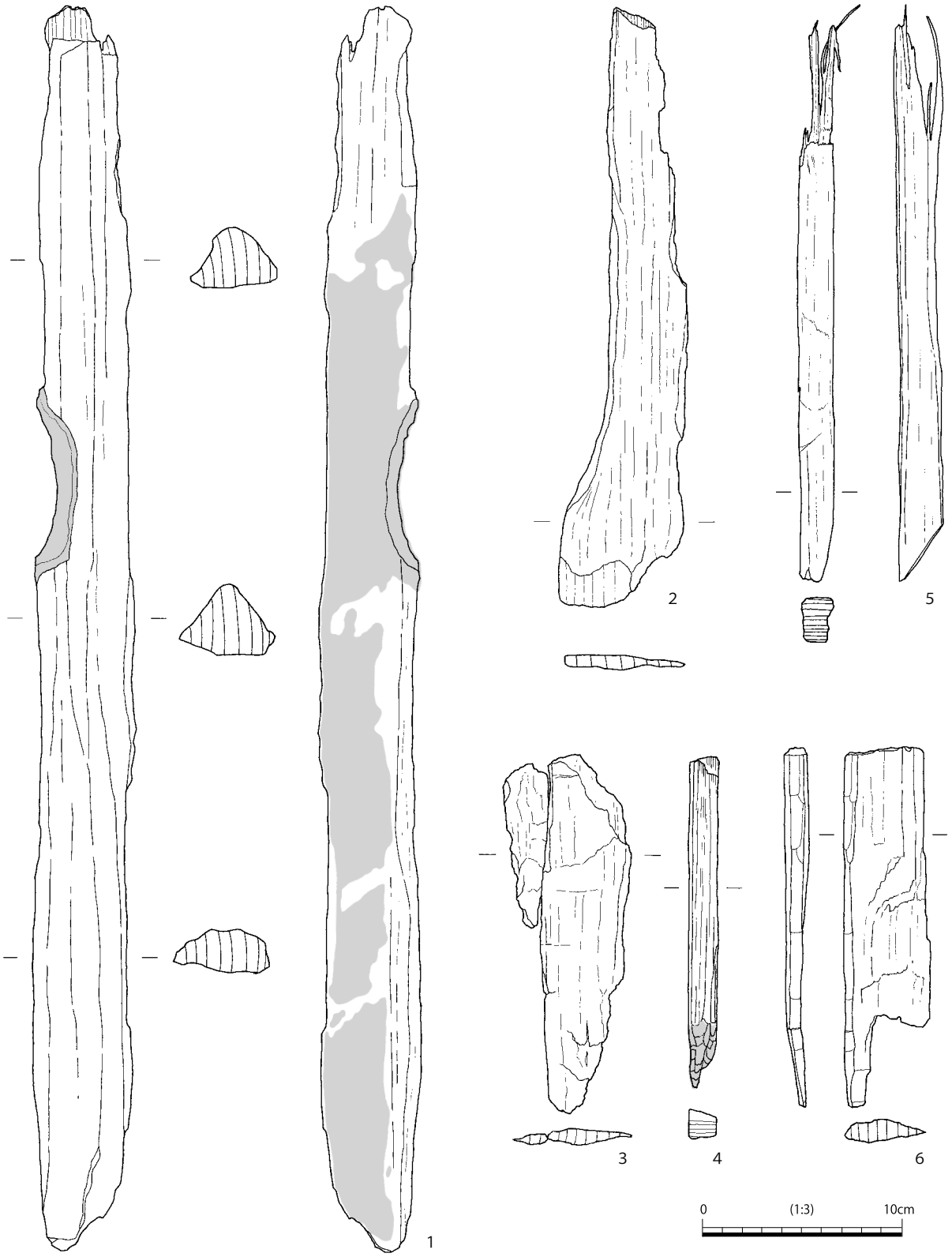
第 51 図 1 は、断面三角形を呈する割材である。両端は欠損する。一部に炭化が認められる。用材はスギである。30 溝上層より出土した。

第 51 図 2 は、同じく板状を呈する材である。側面に加工は認められない。表面劣化が著しい。用材はヒノキの柾目材である。30 溝上層より出土した。

第 51 図 3 も同じく板状を呈する割材であるが、樹種はアカガシ亜属である。表面には僅かであるが加工痕跡が認められる。30 溝上層より出土した。

第 51 図 4 は、断面四角形を呈する角材の小片である。一方が炭化することから、付木として用いられたものと推測する。用材はスギである。30 溝上層より出土した。

第 51 図 5 は、断面逆台形を呈する角棒状の遺物である。図示した上方は折損する。下方は加工面である。用材はスギである。机脚のうち、天板に差し込む部位が折損したものではないかと推測する。



第 51 図　第８－２遺構面　30 溝出土遺物実測図（３）

30 下層より出土した。なお、蟻加工をもつ天板と脚板から成る机は、古墳時代前期に出現すると考えられている。

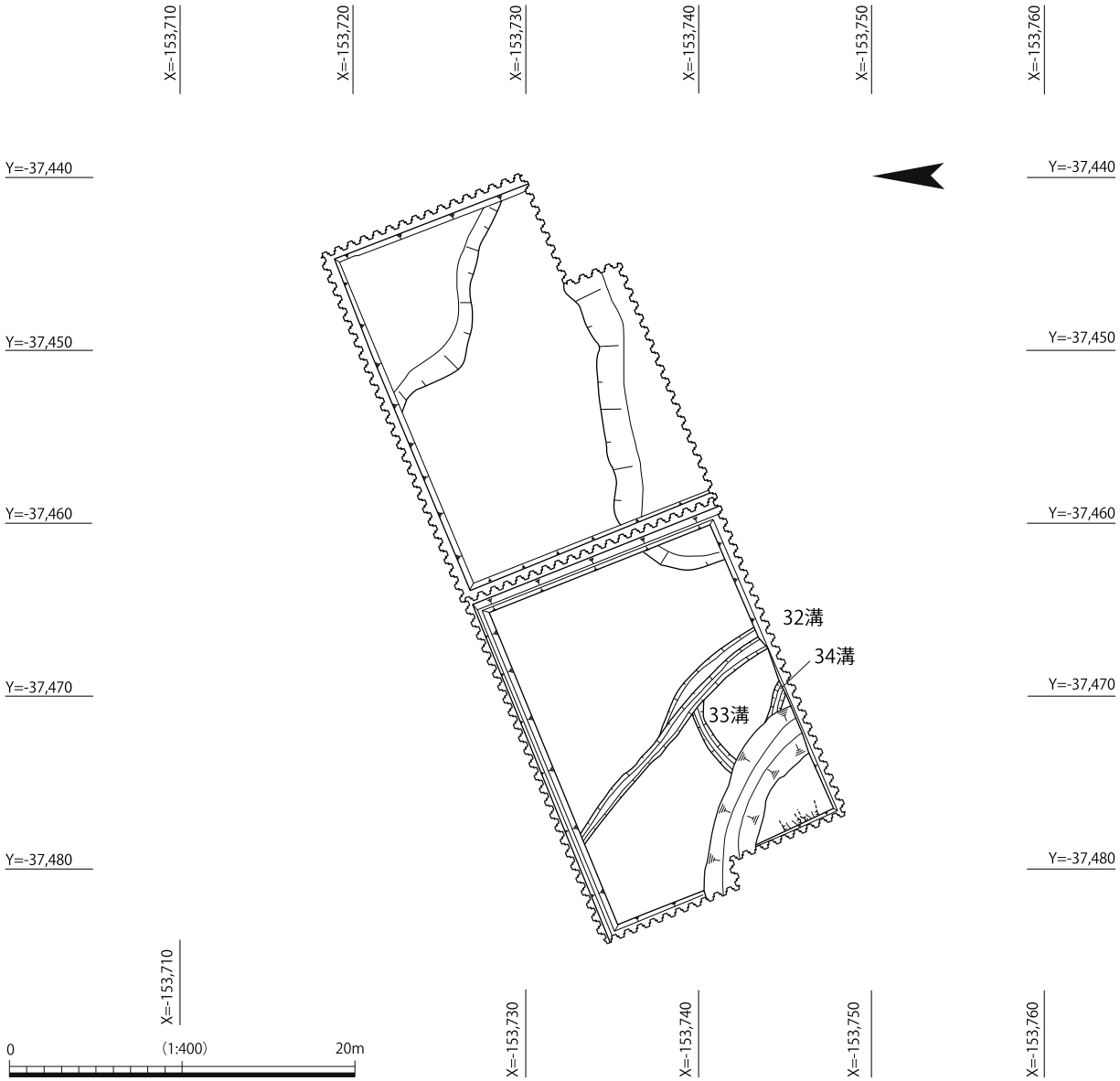
第 51 図 6 は、板状を呈する割材である。折損箇所が大きいが、上辺と表面の一部を加工する。用材はヒノキである。30 溝下層より出土した。

31 溝　第 50 図 12 は、土師器有段鉢である。丸味をもつ体部と低い段をもつ。内外面ともに横方向の細かいミガキを施す。体部内面にはさらに縦方向のミガキを加える。口縁部外面の一部と内面に煤の付着が認められる。布留式前半期の遺物である。

35 土坑・36 土坑　第 50 図 13 は、土師器甕の口縁である。破片がそれぞれの土坑より出土し、接合した遺物である。口縁端部は内側に折り曲げ、肥厚させる。布留式前半期の遺物である。

14. 第９遺構面（弥生時代中期）・第９層出土遺物

第９遺構面は、弥生時代中期包含層と目される第９層を除去して検出した遺構面である（第 52 図）。

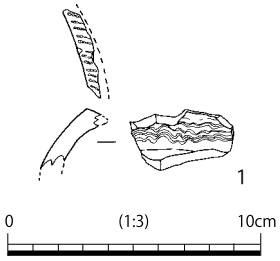


第 52 図　第９遺構面　全体図

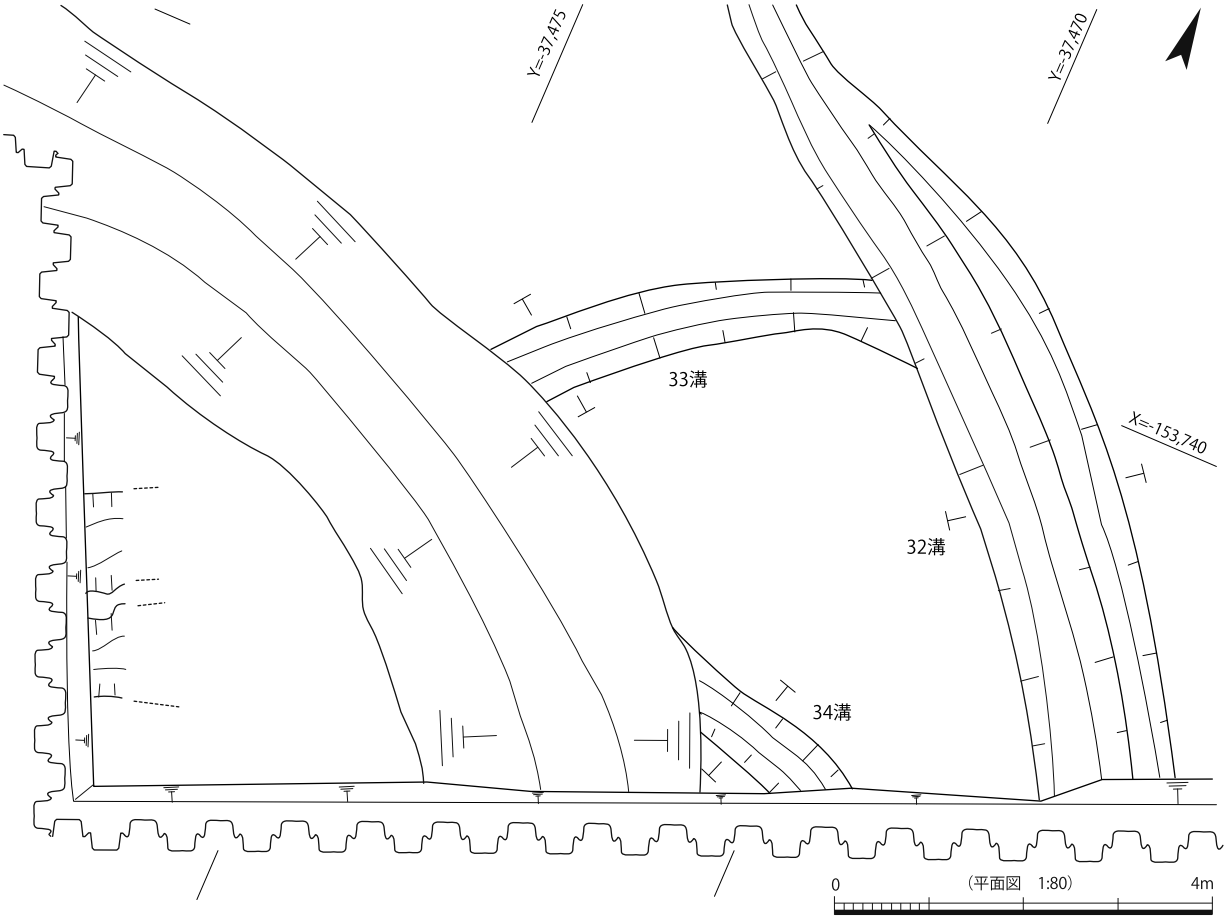
遺構面の起伏は、調査区北西部が微高地となり、東及び南に向かって徐々に下がる。特に北東と南東部分が低い。このため、第９層は、調査区北西隅では薄く、東へ向かって徐々に層厚を増す。遺構面のうち、最も高い調査区北西隅は T.P.+6.40 m、最も低い南東部は T.P.+6.15 mを測る。

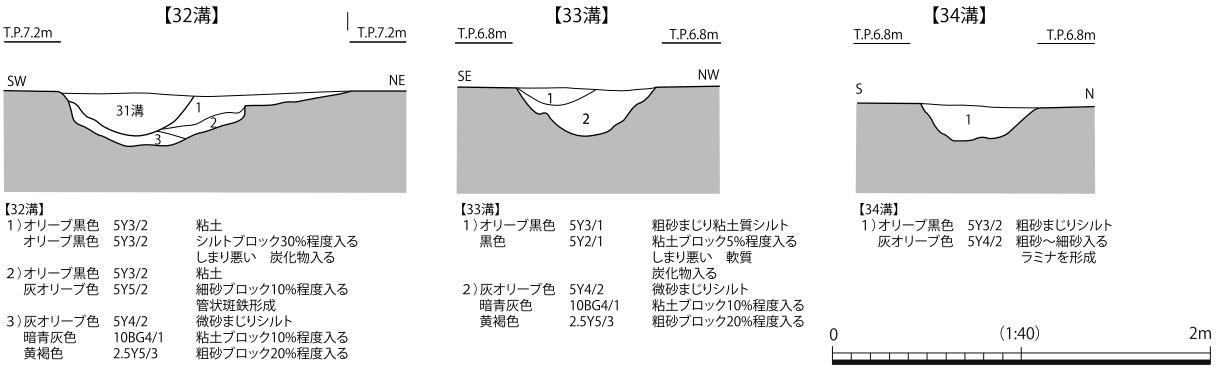
第９層からの遺物出土は僅か１点のみである（第 53 図）。第 53 図１は、弥生土器壺の口縁部である。外面にはミガキを施した後、波状文を付す。口縁端部はナデにより面を作り、列点文を施す。弥生時代中期の製品である。この遺物の出土により、第９層を弥生時代中期の包含層として位置づけた。

第９遺構面では、08 － １ － ２ － １区内において溝を検出したが、遺物・



第 53 図
08 － １ － ２ － ２区
第９層出土遺物実測図





第 54 図　第９遺構面　遺構平面断面図

遺構ともに寡少であることから、周辺で活発な人的関与があったとは考えにくい。

32 溝　調査区北辺より緩やかにカーブしながら調査区南辺へと続く溝である（第 52 図・第 54 図）。検出長 15.5 m、最大幅 1.53 m、最大深度 0.28 mを測る。底面のレベルは北辺部が T.P.+6.30 m、南辺部が T.P.+6.23 mで、北から南に向かって僅かに傾斜する。断面形状は不定形で、流末では溝幅が広く、東側斜面に段を作る。埋土はオリーブ黒色粘土を主体とする。遺構の性格は不明である。遺物の出土はなかった。

33 溝　調査区南西部において検出した遺構である（第 52 図・第 54 図）。東西方向にのびており、西端は 32 溝に切られて消滅する。東端は上層遺構の撹乱にぶつかり、その後は続く遺構が見出せない。検出長は 4.0 m、最大幅 0.72 m、最大深度 0.25 mを測る。断面形状は椀形を呈するが、一部底面に凹凸が認められる。埋土はオリーブ黒色粘土を主体とし、炭化物を含む。埋土から遺物の出土はなかった。

34 溝　調査区南西部において検出した遺構である（第 52 図・第 54 図）。調査区ラインおよび上層遺構に切られており、検出範囲は僅かである。検出長 1.45 m、最大幅 0.70 m、最大深度 0.20 mを測る。断面形状は不定形で、底面には凹凸が顕著に認められる。埋土はオリーブ黒色シルトを主体とし、粗砂の流入によってラミナを形成する。埋土から遺物の出土はなかった。

15．第 10 遺構面（弥生時代前期）

第 10 遺構面は、弥生時代前期包含層である第 10 － 1 層を除去して検出した遺構面である（第 55 図）。第 10 層は、既述のとおり、第 10 － 1 層と第 10 － 2 層に細分できるが、第 10 － 2 層が水田耕作土と目される土壌であり、第 10 － 1 層はそれを覆う層である。第 10 － 1 層は、主として調査区の中央部分に厚く堆積し、東西へ向かって徐々に薄くなる。一方、下層である第 10 － 2 層は、東部の 08 － 1 － 2 － 2 区に厚く堆積し、西部の 08 － 1 － 2 － 1 区ではほとんど認められず、僅かに遺構埋土として残存する状況である。

08 － 1 － 2 － 1 区では、第 9 層除去後、掘削設計深度である T.P.+6.29 mまで画一的に掘り下げをおこなった。調査区の地盤は西が高く東へ向かって下がるため、調査区西辺では、この段階で第 10 － 1 層が取り除かれ、第 11 層が露出した。一方、中央より東の範囲には、第 10 － 1 層が一定の層厚を持って残存した。

現地調査では、上位包含層や上面において検出した遺構内に一定量の弥生土器が含まれていたこと、また第 10 － 1 層がブロック土を含むこと、さらに近隣地の既往の調査では T.P.+5.5 ～ 6.6 mのレベルにおいて弥生時代前期の遺構面が確認されていることから、下位に弥生時代の遺構面が存在する可能性が疑われた。そこで、調査区西の微高地上に下層掘削トレンチを設定して深掘りを試みた（＝次々節に詳述・下層掘削トレンチ A）。

しかし、この時の掘削では、第 10 － 1 層の下位に第 11 層・第 12 層を確認したものの、断面観察ではどの層の境界線においても遺構面の存在を示唆するような起伏を認めるには至らなかった。また、第 10 － 1 層から遺物の出土もなかった。このため、第 10 － 1 層は弥生時代相当層と推測されるものの無遺物層であり、ほぼ均質な堆積を見せる第 11 層と洪水砂と見られる第 12 層は自然堆積層であると判断された。これらの結果から、この時点で 08 － 1 － 2 － 1 区の調査は終了となった。

その後、08 － 1 － 2 － 2 区の調査に至り、調査区中央において同様に下層確認トレンチ（＝次々節に詳述・下層掘削トレンチ B）を設定したところ、第 10 － 2 層の存在が明らかとなった。また、この

第 10 － 2 層から石庖丁や弥生土器の出土が確認された。このため急遽、第 10 － 1 層を掘削対象土壌とし、遺構面を検出することとなった。

第 10 遺構面では、08 － 1 － 2 － 2 区全域において水田跡を検出した。また 08 － 1 － 2 － 1 区西半部では水田畦畔と小溝を検出した。遺構面は、西から張り出した微高地が、調査区中央部を尾根上に通るため、調査区北西隅が最も高く、北東と南西に向かって徐々に下がる。

第 10 － 1 層からは、サヌカイト製石槍（石剣）が出土した（第 59 図）。また、第 10 － 2 層からは、弥生時代前期中段階～新段階に位置づけられる土器や土製品のほか、緑泥片岩製石庖丁が出土した（第 59 図・第 60 図）。このため、第 10 遺構面の存続時期は、弥生時代前期中葉～後葉に求められる。

水田　検出した水田は、溝（45 溝・46 溝・47 溝）を伴う大畦（畎畝）と、その間隙を埋めるように続く小畦畔によって構成されている。08 － 1 － 2 － 2 区の地形を細かく見ると、北東部－南東の方向へ微高地が尾根状に張り出すため、調査区北西部から中央部分のレベルが高く、北と南に向かって徐々に下がることが確認できる（第 56 図参照）。水田内に設けられた溝は、中央の尾根状部から調査区外へと流れる方向性をもつことから、給水よりも寧ろ排水機能を目的とした施設であった可能性が高い。

水田は、尾根の斜面を階段状に整形する形で作られている。小畦畔で区画された水田面積は、一枚あたり 7 ～ 19㎡程度を測る。耕作土である第 10 － 2 層からは前期中段階の土器が、これを覆う第 10 － 1 層からは前期新段階（古相）の土器が出土すること、また上面にあたる第 9 遺構面（弥生時代中期相当面）では、明確な水田遺構が検出されなかったことから、弥生時代前期中段階に開削された水田は前期新段階まで存続したものの、中期以降へは続かず廃絶したと推測される。

なお、第 10 － 2 層を対象として実施した自然科学分析では、イネ科の植物珪酸体（プラントオパール）が検出されたことから、水田では稲作を行っていたと考えられる（第 4 章第 3 節参照）。

38 溝　08 － 1 － 2 － 1 区において検出した遺構である（第 55 図）。南北にのびる溝であるが、南端を上層遺構の撹乱によって失う。北端は、削平の為、浅く消滅する。検出長は 1.64 m、最大幅は 0.38 m、最大深度は 0.08 mを測る。断面形状は椀形、埋土は暗緑灰色粘土にオリーブ黒色粘土ブロックを 30％程度含んでおり、08 － 1 － 2 － 2 区において検出された他の溝群と近似する。地形の傾きから、北から南へと流れていたと推測される。

調査区西端の微高地にあたるこの周辺では、水田土壌である第 10 － 2 層はほとんど残存しない。このため、38 溝の用途も特定が難しい。但し、その埋没状況が、水田の給排水を目的とした他の溝と類似すること、加えて、38 溝の北側には小畦畔と目される黒色粘土の帯があり、38 溝の延長線上に水口状の切れ目が認められることから、08 － 1 － 2 － 2 区に見るような畦畔と小溝から成る水田がこの付近にも広がっていた可能性が高い。このため、38 溝も水田に伴う排水溝であったと考えられる。埋土から遺物の出土はなかった。

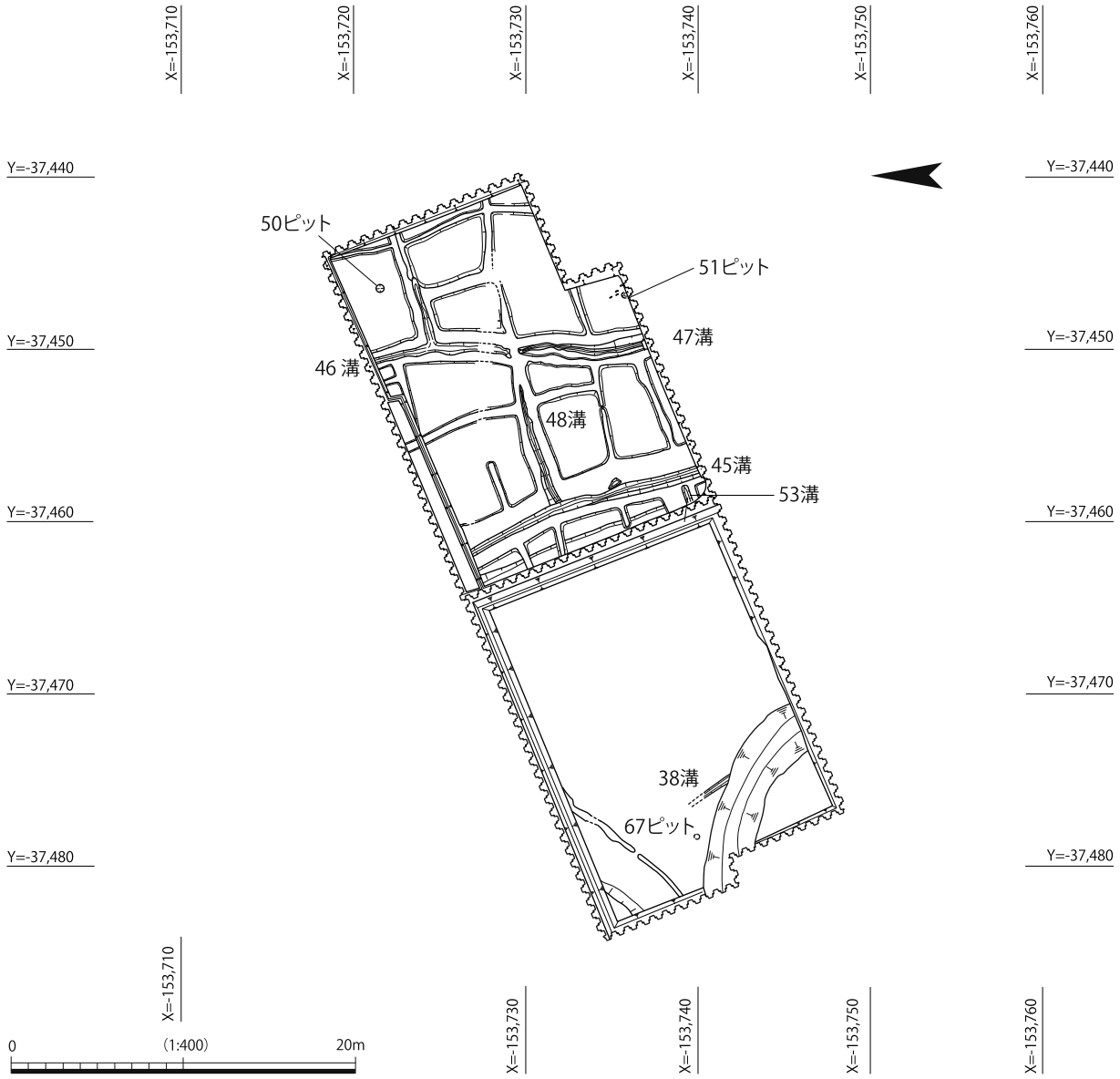
45 溝　08 － 1 － 2 － 2 区において検出した遺構である（第 55 図・第 57 図）。やや湾曲するものの北北西－南南東に方向軸をもち、調査区内を横断して南北へと続く。下流はやや拡幅し、西側斜面に段を作る。中央付近には東へ向かう一枝がある（48 溝）。検出長 13.9 m、最大幅 0.7 m、最大深度 0.14 m を測る。底面のレベルは、上流の調査区北辺で T.P.+6.20 m、下流の調査区南辺で T.P.+6.02 mを測る。断面形状は浅い椀形、埋土は暗緑灰色粘土にオリーブ黒色粘土ブロックを含む。遺構内からは、弥生土器甕の破片が出土した。

45 溝は、大畦と解される幅広の畦畔の中央に掘削されている。このため、二本の畦畔が両脇に沿っ

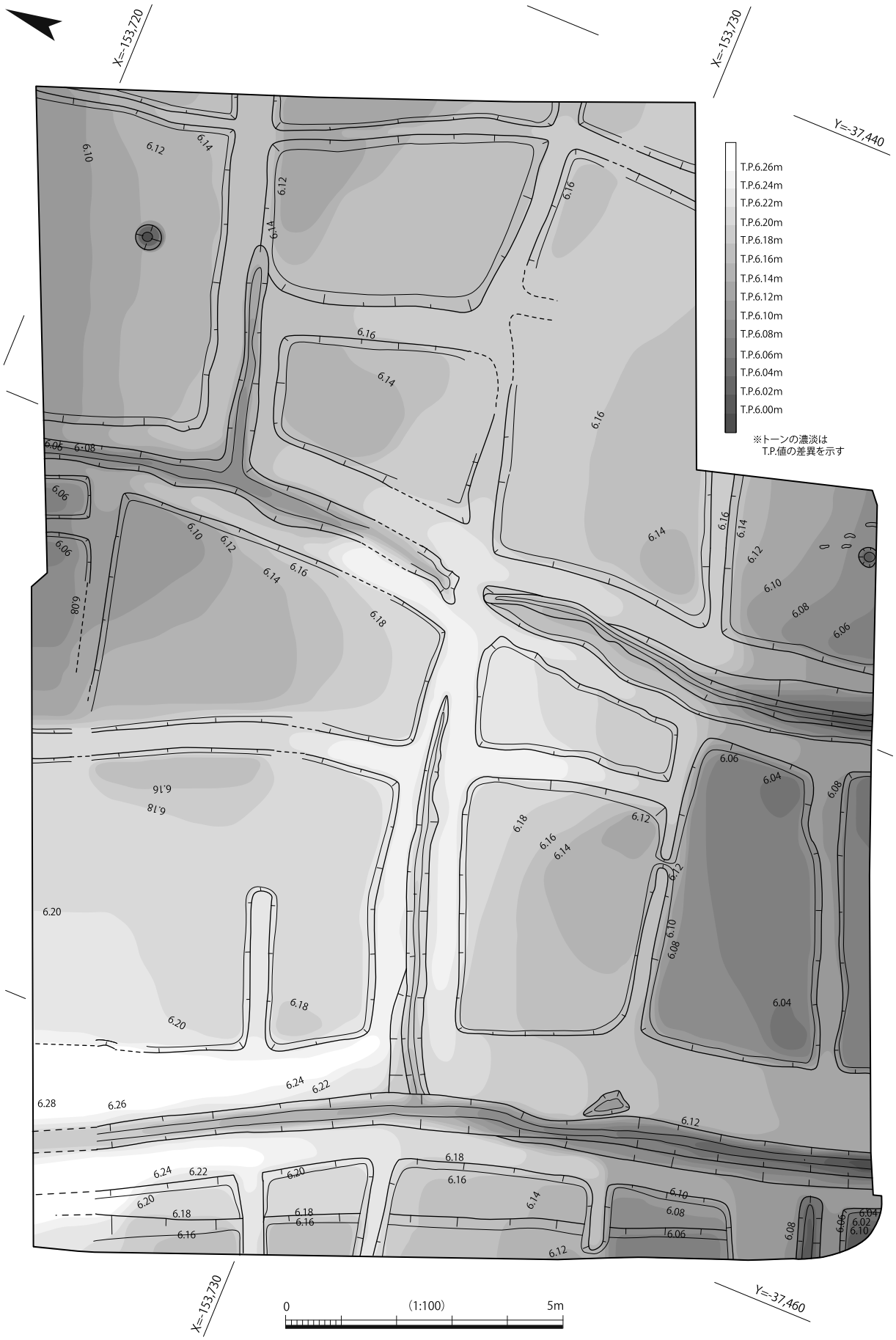
て続くように見える。畦畔はそれぞれ外方へ段をもって構築されており、ここから垂直に小畦畔をのばす。この畦畔と溝から成る遺構は「畎畝」と称されており、弥生時代前期の水田遺構に類例がある〔秋山ほか 2002〕〔井上ほか 2002〕。

46 溝　08 － 1 － 2 － 2 区北東部において検出した遺構である（第 55 図・第 57 図）。調査区中央の尾根上にて派生し、北へ向かって流れ、調査区外へと続く。中央付近で東から続く 49 溝と合流する。検出長は 7.8 m、最大幅 0.7 m、最大深度 0.1 mを測る。断面形状は淡い椀形、埋土は暗緑灰色粘土を主体とする。底面のレベルは上流が T.P.+6.14 m、下流の調査区北辺が T.P.+6.04 mを測る。幅 1.5 ～ 2.0 mを測る大畦の中央に設けられている。埋土から、削り出し突帯をもつ弥生土器壺の肩部を検出した（第 60 図 6）。

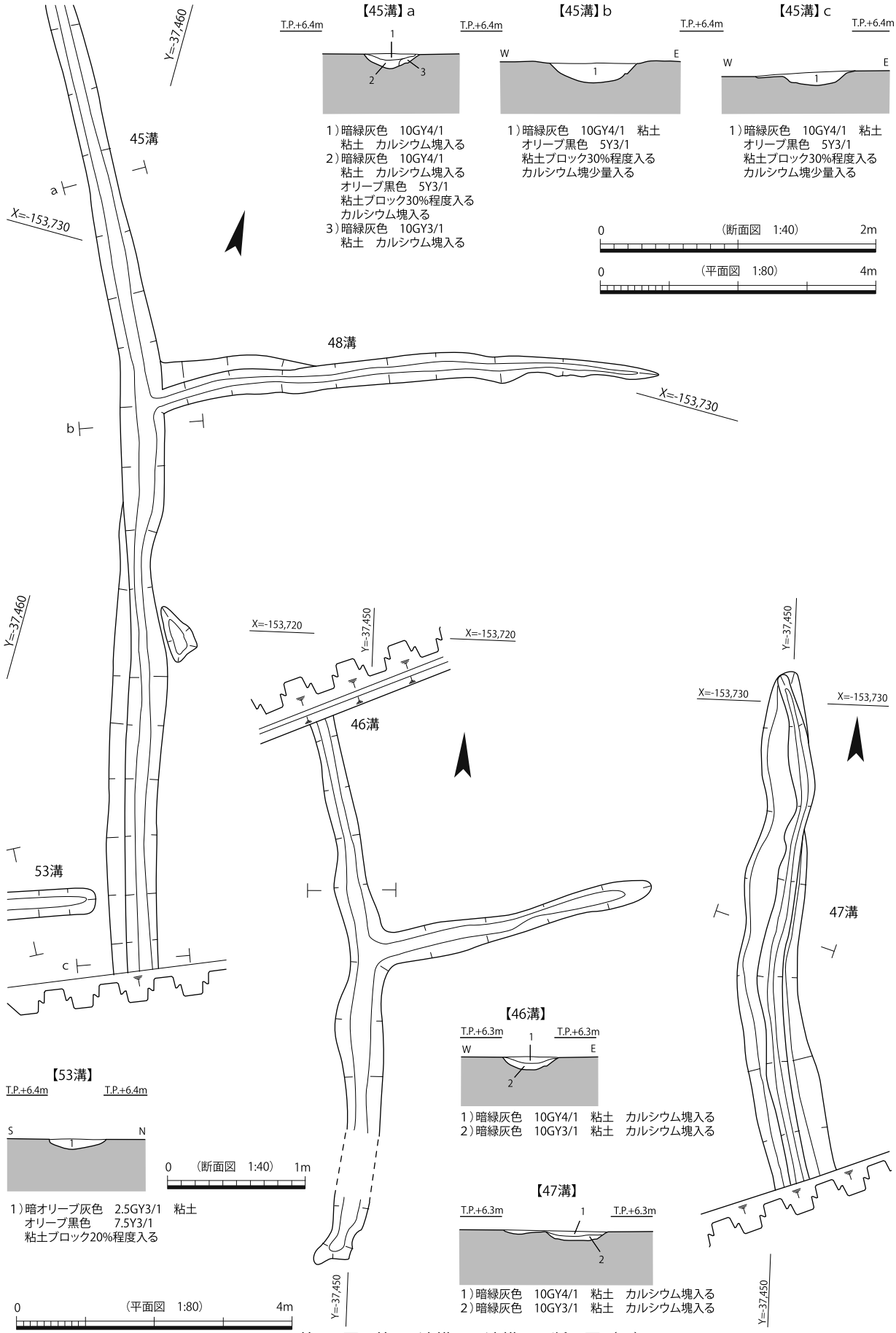
47 溝　08 － 1 － 2 － 2 区南半部において検出した遺構である（第 55 図・第 57 図）。調査区中央にて派生し、南へ向かって流れ、調査区外へと続く。46 溝が設けられた大畦の延長上にあり、相対する方向性をもつ。検出長は 7.40 m、最大幅 1.0 m、最大深度 0.08 mを測る。左右岸ともに段をもち、中



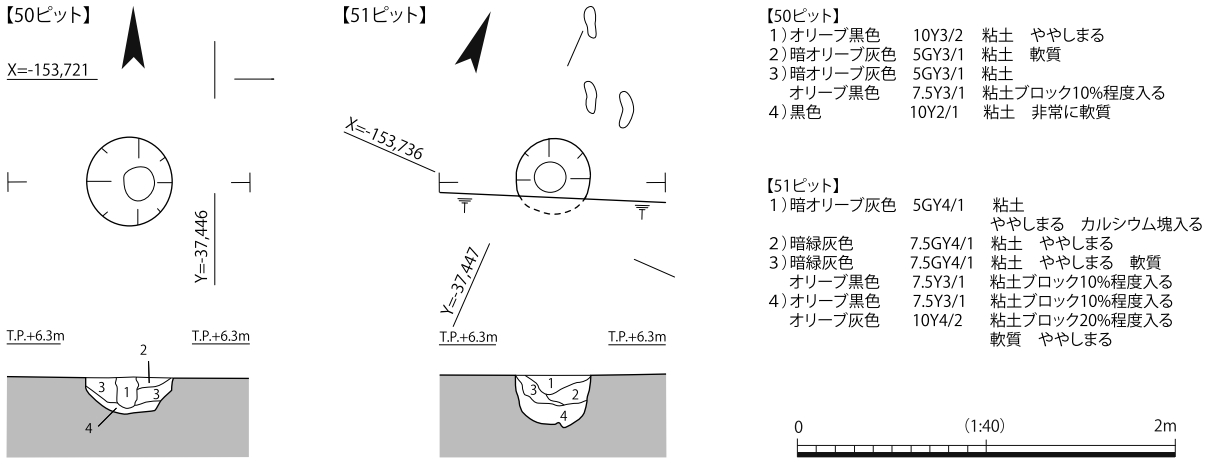
第 55 図　第 10 遺構面　全体図



第 56 図　第 10 遺構面　レベル諧調図



第 57 図　第 10 遺構面　遺構平面断面図（1）



第 58 図　第 10 遺構面　遺構平面断面図（２）

央部を一段深く作る。断面形状は、逆凸形を呈する。埋土は、埋土は暗緑灰色粘土を主体とする。底面レベルは上流が T.P.+6.15 m、下流が T.P.+5.99 mを測る。埋土から遺物の出土はなかった。

48 溝　08 － 1 － 2 － 2 区東半部において検出した遺構である（第 55 図・第 57 図）。調査区中央から西に向かって流れ、45 溝へと合流する。尾根のほぼ稜線上を通るが、底面の傾斜は尾根のそれとは逆である。検出長 7.16 m、最大幅 0.6 m、最大深度 0.10 mを測る。流末である 45 溝との合流付近で拡幅し、北側斜面に段を作る。底面のレベルは上流にあたる西端部が T.P.6.10 m、下流である 45 溝との合流点が T.P.+6.08 mを測る。埋土は暗緑灰色粘土を主体とする。埋土から遺物の出土はなかった。

49 溝　08 － 1 － 2 － 2 区北東部において検出した遺構である（第 55 図・第 57 図）。46 溝の支流として存在する。基盤層の傾斜に反し、東から西へ流れる。検出長 3.95 m、最大幅 0.50 m、最大深度 0.10 mを測る。断面形状は浅い椀形、埋土は暗緑灰色粘土を主体とする。底面のレベルは上流が T.P.+6.13 m、下流の調査区北辺が T.P.+6.07 mを測る。幅 1.5 m前後を測る畦の中央に設けられている。埋土から、遺物の出土はなかった。

50 ピット　08 － 1 － 2 － 2 区北東部において検出した遺構である（第 55 図・第 58 図）。小畦畔によって区画された水田の中ほどに位置する。平面形状は、直径 0.45 mを測る円形を呈する。最大深度は 0.20 mを測る。断面観察では、中央に柱状の土質変化が認められる。遺構であると解釈されるが用途は不明である。埋土から遺物の出土はなかった。

51 ピット　08 － 1 － 2 － 2 区南東部において検出した遺構である（第 55 図・第 58 図）。50 ピットと同様、小区画水田の中ほどに位置する。一部を調査区ラインに切られるが、平面形状は円形を呈していたと推測される。最大径は 0.44 m、最大深度は 0.28 mを測る。底面には凹凸が認められる。埋土は暗緑灰色及びオリーブ黒色粘土を主体とする。遺構の東側には、ヒトと思われる足跡が残されている。人為的な遺構であろうが、その性格は不明である。埋土から遺物の出土はなかった。

16. 第 10 層出土遺物

第 59 図 1 は、サヌカイト製打製石器である。石槍または石剣と呼称される製品である。基部及び刃部の先端を僅かに欠損する。下端より 3.5㎝を測る位置に最大幅が有り、これより以上の側縁に細かい刃が作り出されている。一方、それ以下の部位は徐々に幅を減じ、側縁に面を作る。この部分が柄もしくは着柄部になると推測される。断面はレンズ状で、斜め方向の押圧剥離によって身の中央に稜が作ら

れている。一部に階段状剥離が認められるが、全体的には精緻な印象を与える。第 10 － 1 層から出土した。類例は、弥生時代前期後半～中期初頭に多い。

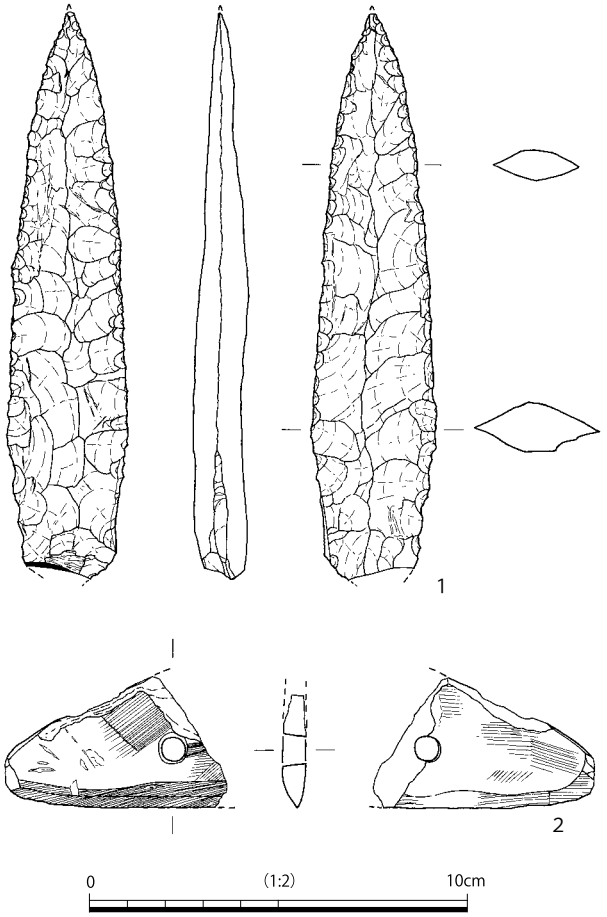
第 59 図 2 は、緑泥片岩製石庖丁の破片である。3 分の 2 程度を欠損する。表面には多方向からの摩擦により、平滑に仕上げられている。刃は、表裏両面から摩擦が加えられており、鋭く尖る。紐孔及び刃部には使用痕がほとんど認められない。08 － 1 － 2 － 2 区北側側溝内の第 10 － 2 層より出土した。

第 60 図 1 は、弥生土器壺の口縁部である。端部は摩滅を受けているが、やや肥厚させて端面を作る加工が認められる。内外面ともに横方向のミガキを施す。胎土には灰色～白色角礫を多く含む。第 10 － 1 層より出土した。

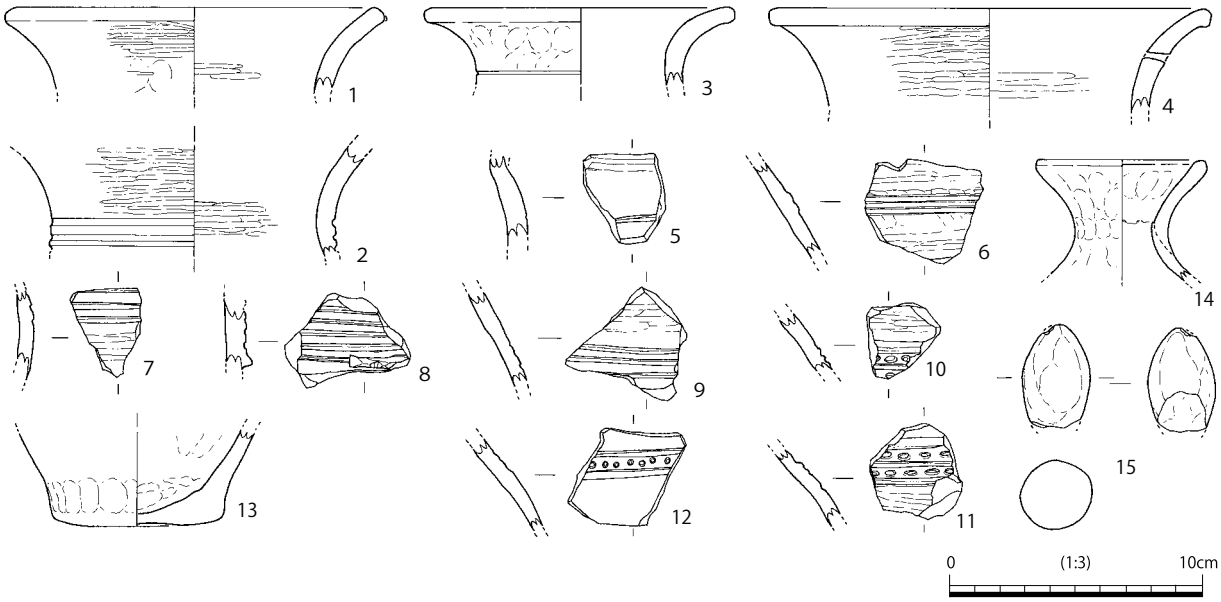
第 60 図 2 は、弥生土器壺の頸部である。外面の器壁は褐色、内面は黒色味が強い。胎土には白色礫を多く含む。内外面ともに横方向のミガキが顕著である。頸部外面には、3 条の削り出し突帯を設けている。第 10 － 1 層より出土した。

第 60 図 3 は、弥生土器壺の頸から口縁部にかけての部位である。頸部に 1 条の沈線を施す。外面にはユビナデ調整と指頭圧痕を残す。内面は摩滅が顕著である。北側側溝内の第 10 － 2 層より出土した。

第 60 図 4 は、弥生土器壺の口縁部である。



第 59 図　08 － 1 － 2 － 2 区　第 10 層出土遺物実測図（1）



第 60 図　08 － 1 － 2 － 2 区　第 10 層出土遺物実測図（2）

口縁部の中央部に穿孔を施す。穿孔は、内面より外面に向かって為されている。内外面ともに横方向のミガキを行う。第 10 － 2 層より出土した。

第 60 図 5 ～ 12 は、弥生土器壺体部の破片である。第 60 図 5 は、外面に 1 条の沈線を刻む。第 60 図 6 は、肩部外面に浅い削り出し突帯と、その上に 3 条の沈線を持つ。第 60 図 7 も同じく胴部外面に削り出し突帯とその上に 2 条の沈線を持つ。第 60 図 8 は、外面に 5 条の沈線を刻むが、その一部に刻み目を持つ貼付け突帯が付着する。第 60 図 9 は、外面に 3 条の沈線をめぐらせている。第 60 図 10・第 60 図 11 は、 2 条の削り出し突帯の上に米粒状の列点を施す。胎土・焼成ともに類似することから、同一個体と推測される。第 60 図 12 は、 1 条の削り出し突帯の上に円形の列点を為す。第 60 図 5 ・第 60 図 7 ・第 60 図 8 ・第 60 図 12 は、第 10 － 1 層より出土した。第 60 図 9 ・第 60 図 10・第 60 図 11 は、第 10 － 2 層より出土した。第 60 図 6 は、45 溝内より出土した。

第 60 図 13 は、弥生土器甕もしくは突帯文土器（長原式）の底部である。底部外面は中央がやや窪み、縁辺が接地面として機能する。体部にはユビナデと指頭圧痕が顕著に残る。内面は黒色化する。第 10 － 1 層より出土した。

第 60 図 14 は、壺形ミニチュア土器である。手捏ねで整形されるため、内外面ともに指頭圧痕が顕著に残る。頸部内面には粘土の継ぎ目が残る。第 10 － 2 層より出土した。

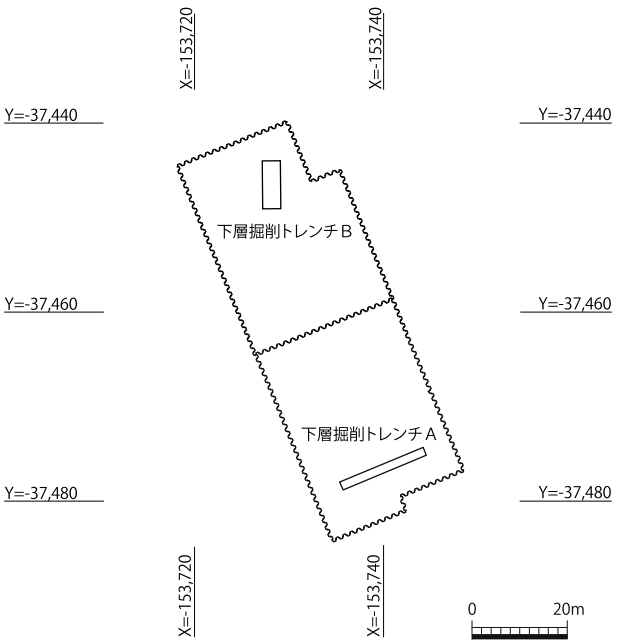
第 60 図 15 は、卵形を呈する土製品である。底部及び先端部を欠損する。表面は摩滅が顕著であり、オリジナルな器壁を残していない。径 1 ㎜未満の白色礫を多く含む。投弾として紹介される遺物であるが、その具体的な機能は解明されていない。第 10 － 2 層より出土した。

17. 下層掘削トレンチ調査状況

今回の調査では、08 － 1 － 2 － 1 区及び 08 － 1 － 2 － 2 区において、それぞれ下層掘削トレンチ A・B を設定し、設計深度以下の土層堆積を確認した（第 61 図参照）。

08 － 1 － 2 － 1 区では、微高地である調査区西部に、長さ 9.6 m×幅 1.0 m の規模のトレンチを設定した（トレンチ A　第 62 図参照）。掘削は、層序ごとに進め、遺構面の検出に努めた。しかし、このトレンチでは、既述のとおり第 10 － 1 層を除去した第 10 面において遺構を確認することができなかった。また、第 10 － 1 層の下に、厚さ 0.4 m を測る砂質シルト層（第 11 層）を確認したが、この層の除去面においても遺構を確認することができなかった。第 11 層の土質はきめ細かく均質で、下位に向かって徐々に砂質化する。層内からは、特に出土遺物を確認できなかった。

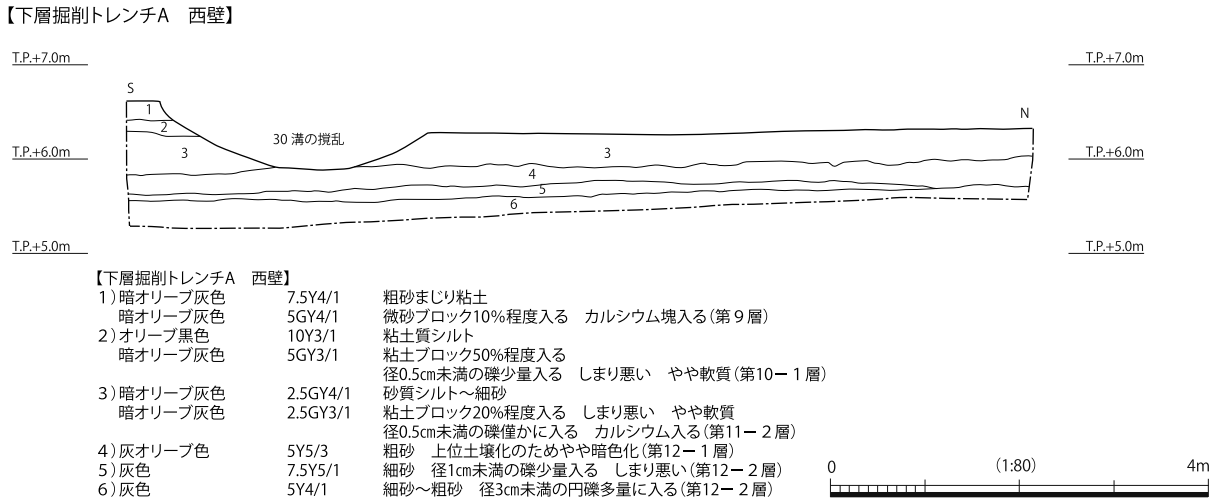
さらに下層を掘削したところ、第 11 層の下に、厚さ 0.6 m を測る粗砂層を確認した（第 12 層）。この層は、下位に向かって含む円礫の数を徐々に増して砂礫層となり、やがて礫層へと変化する。現地調査では上位の砂層を第 12 － 1 層、下位の



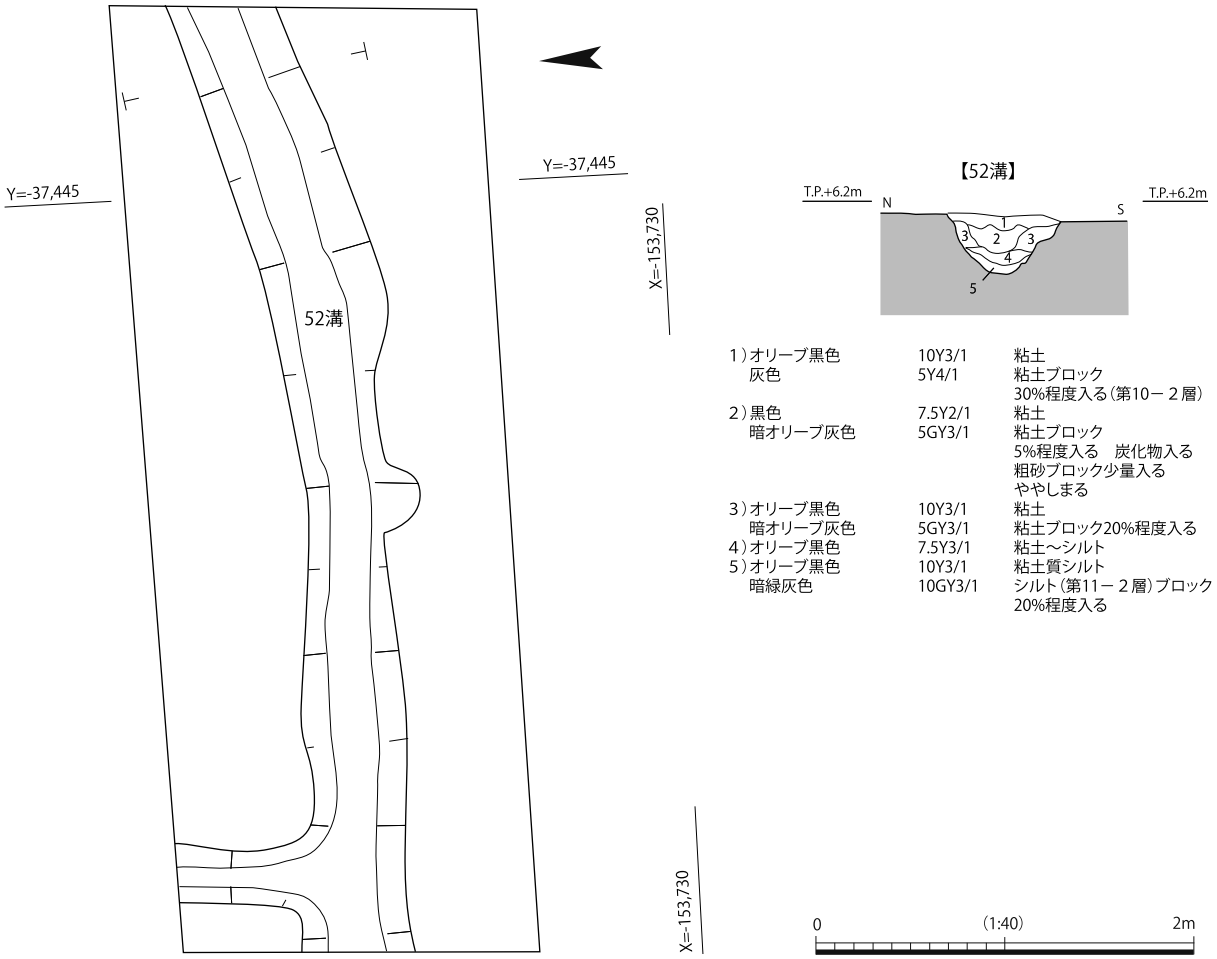
第 61 図　下層掘削トレンチ設定図

礫層を第 12 － 2 層としたが、この第 12 － 1 層から 12 － 2 層への変化するあたりの深度（T.P.+5.60 ～ 5.70 m）において、縄文土器の破片が 10 点出土した（写真図版 41 － 4）。

出土した土器は、縄文時代後期～晩期の深鉢・浅鉢・注口土器の破片と推測される。すべて著しく摩滅を受けており、器壁を残すものも僅かである。出土した層が砂礫層であり、周辺地域を埋める洪水砂



第 62 図　下層掘削トレンチ A　壁断面図



第 63 図　下層掘削トレンチ B　遺構平面断面図

であると推測されることから、これらの縄文土器は現地性をとどめていないと判断された。

このため、下層確認トレンチＡの掘削時点では、第 10 －１層以下は前述の通り、無遺物層・自然堆積層として捉えられた。しかし、 続く 08 －１－２－２区の調査では、既述のとおり、第 10 層が弥生時代の遺物包含層であり、遺構面を伴うことが確認された。

このため、08 －１－２－２区においてもトレンチを設定し、下層の堆積状況を確認することとなった（トレンチ B)。トレンチ B は、長さ 5.0 m×幅 1.9 mのサイズで、08 －１－２－２区の東半部に設定した。その結果、第 10 －２層を除去した面において、溝状遺構を確認した（第 63 図)。

また、このトレンチの一角において、さらに下層掘削を行ったところ、08 －１－２－２区では、第 10 －２層の下に厚さ 0.15 mを測る灰色粘土質シルト層の堆積があり、その下に厚さ 0.4 mを測る暗灰色砂質シルト層の堆積が認められた。後者の砂質シルト層は、色調や粒状、下位に向かって砂質化する状況など、トレンチＡにおいて確認した第 11 層と多くの共通項がみられた。このため、前者の粘土質シルト層を第 11 －１層、後者を第 11 －２層と付番し、さらに深掘りを行ったところ、トレンチＡにおいて確認した砂礫層（第 12 層）に到達することができた。

以上の下層掘削トレンチＡ・Ｂの調査により、第 10 －２層下面にも遺構面が存在すること、第 11 層以下は自然堆積層と考えられること、第 12 層は縄文時代晩期以降に形成された洪水砂層であることなどが確認された。

52 溝　下層掘削トレンチＢ内において検出された溝状遺構である。湾曲しながら東西方向にのび、一部分岐する箇所が認められる。検出長は、5.00 m、最大幅 30.36 m、最大深度 0.32 mを測る。底面レベルは、T.P.+5.80 ～ T.P.+5.90 mで、西から東へ向かって、緩やかに傾斜する。

断面形状は歪な椀形を呈する。埋土は、上位に第 10 －２層であるオリーブ黒色粘土、中位に炭化物を含む黒色粘土、下位に第 11 －２層をブロック状に巻き込むオリーブ黒色粘土質シルト等で構成される。埋土から遺物の出土はなかった。

【参考・引用文献】

青木　勘時　2006 「河内地域」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター

秋山浩三・本間元樹・西川寿勝・市村慎太郎ほか　2002 『志紀遺跡（その２・３・５・６） 大阪府営八尾志紀住宅建て替え事業に伴う発掘調査報告書』財団法人大阪府文化財調査研究センター

伊野　近富　1995 「１．土師器皿」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

井上智博・畑　暢子・廣瀬時習ほか　2002『池島・福万寺遺跡２ （福万寺Ｉ期地区） 一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書』財団法人大阪府文化財調査研究センター

岩瀬　透　　2006 「蔀屋北遺跡の調査成果」『発掘調査展日本列島 2006 地域展図録　河内湖周辺に定着した渡来人～５世紀の渡来人の足跡～』大阪府立近つ飛鳥博物館

合田　幸美　2000 「第２節　溝咋遺跡出土の外来系土器について」『(財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 49 集　溝咋遺跡（その１・２）～茨木･学園町地区埋蔵文化財発掘調査第１次･２次報告書～本文編』財団法人大阪府文化財調査研究センター

巽　淳一郎　1996 「近畿地方の８世紀前半の土器」「近畿地方の８世紀中頃の土器」「近畿地方の８世紀後半の土器」『日本土器事典』雄山閣出版

田辺　昭三　1981 「第２章　須恵器の製作技法」『須恵器大成』角川書店

阪田　育功　1984 「河内における布留式土器の一様相」『佐堂（その２）－Ｉ　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
杉本　厚典　2006「河内地域」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
関川　尚功　1996「近畿地方の４世紀前の土師器」「近畿地方の５世紀の土師器」『日本土器事典』雄山閣出版
西村　歩　　2006「和泉地域」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
前田　敬彦　2006「紀伊地域」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
森　　隆　　1995「２．黒色土器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
森島　康雄　1995「６．瓦器椀」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
米田　敏幸　1992「河内における庄内式土器の編年」『庄内式時研究Ⅶ』庄内式時研究会

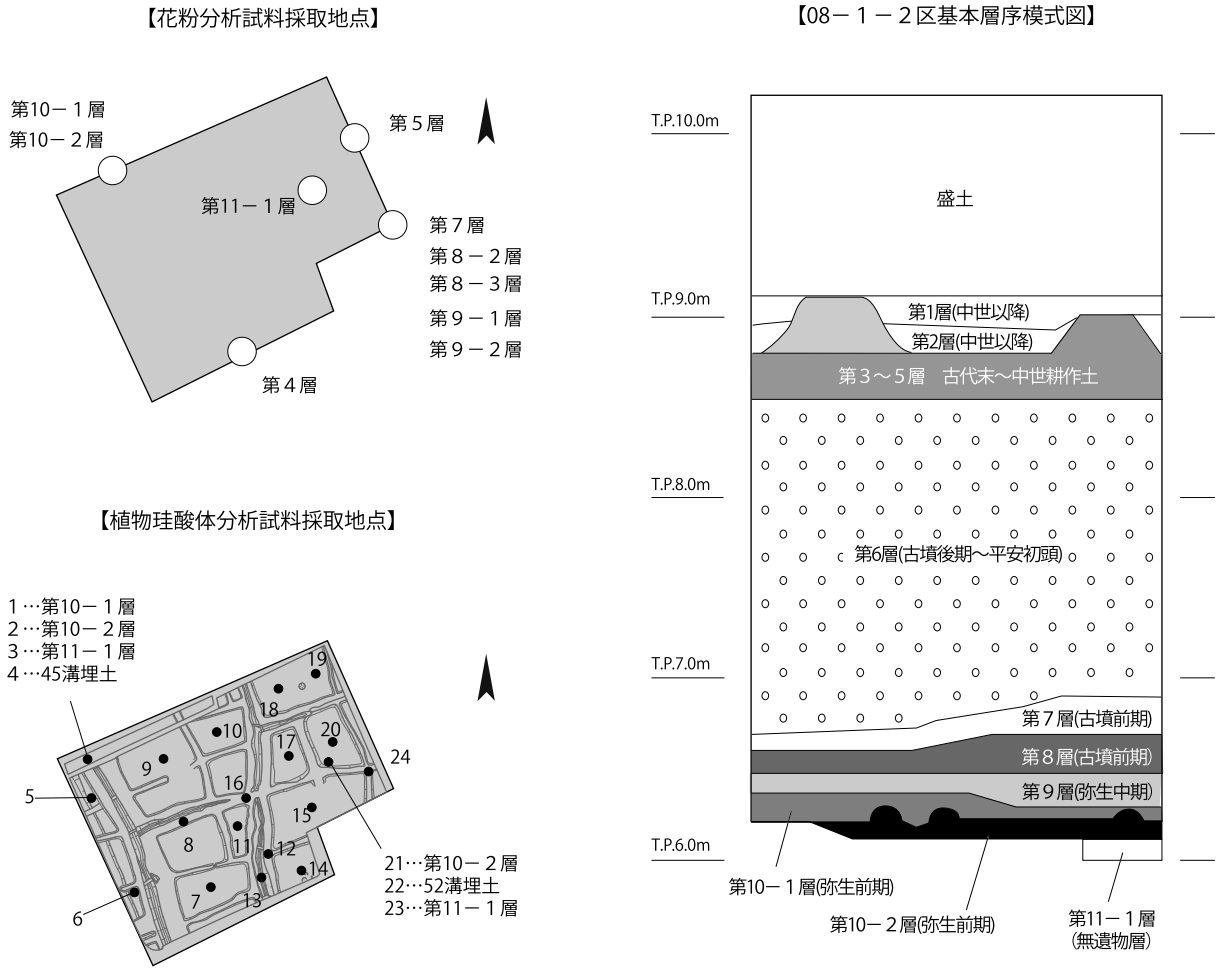
第４章　自然科学分析

第１節　自然科学分析の概要

１．自然科学分析の意義と既往の分析結果

植松遺跡 08 － 1 では、第 08 － 1 － 2 区おいて、弥生時代前期から近世に至るまでの遺構面（計 10 面）と、縄文時代後期から中世に至るまでの出土遺物を確認した。このうち、中近世包含層と古代洪水砂層は、隣接する植松遺跡 05 － 1 調査地点において確認された土層との対応関係が明らかである。植松遺跡 05 － 1 の調査では、採取土壌について、花粉分析・珪藻分析・植物珪酸体分析をそれぞれ行い、調査区及び調査区周辺の古環境を復元する手がかりとなるデータを得た。このため、植松遺跡 08 － 1 との対応関係が明確な土層については、その成果を援用することができる。しかし、これ以外の土層については、参照することが難しい。

このため今回は、新たに発見した土層について、花粉分析および植物珪酸体分析を実施し、当時の環境や土地利用の様相等に係わるデータを収集することとした。



第 64 図　分析試料採取地点・層位図

２．分析の経緯と経過

自然科学分析は、まず 08 －１－２－２区の各土層より採取した試料について、花粉分析をおこなった（第 64 図左上）。その結果、中世初頭包含層からは栽培種であるイネ科のほか、水湿地性植物（水田雑草）とソバ属の花粉化石が検出された。また、古墳時代前期包含層からは、同じくイネ科のほか、タンポポ亜科等の開けた場所を好む人里に自生する草本類の花粉化石が検出された。古墳時代前期遺構面では集落の縁辺部を検出しており、この周辺一体が人間の手によって広く開墾されていた可能性が高いという結果を得ることができた（第２節に詳述）。

しかし、ほぼ同じ地点で採取した弥生時代前期包含層からは、花粉化石がほとんど検出されず、解析を行うことができなかった。当該時期に植物が繁茂していなかったとは考えられないことから、土壌の性質が花粉化石の保存に適しておらず、化石そのものが分解されてしまったことが疑われた。

このため、弥生時代前期の水田土壌と目される試料については、さらに植物珪酸体分析を行うこととした。土壌内で分解される恐れのある花粉と違い、植物珪酸体は植物が枯れた後も微化石として半永久的に残ることが知られている。試料は、第 10 遺構面の基盤層である第 10 －２層と、その上下層を対象として広く採取した（第 64 図左下）。その結果、弥生時代前期遺構面において、稲作を行っていた可能性が高いことが明らかとなった(第３節に詳述)。以下､各々の分析について方法と結果を詳述する。

第２節　花粉分析

１．分析方法

はじめに、花粉分析について記述する。花粉分析の主な分析方法は以下のとおりである。

まず試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛，比重 2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸 9：濃硫酸 1 の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。

続いて残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類（分類群）について同定・計数する。

これらの工程を経て得られた分析結果は、同定・計数結果の一覧表（表１）、および花粉化石群集の層位分布図（第 65 図）に示した。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示した。

２．分析結果

第 11 －１層～第９－１層にかけては、花粉化石がほとんど検出されず、検出される化石の保存状態が悪かった。検出された種類は、木本花粉ではモミ属、ツガ属、マツ属、スギ属等が、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ナデシコ科、ヨモギ属等が認められる。また、シダ類胞子が多い傾向にあり、ヒカゲノカズラ属、イノモトソウ属、ミズワラビ属等が産出される。

第８－３層からは、花粉化石が検出されるものの産出状況は良好ではなく、保存状態もやや悪い。検出される種類をみると、木本花粉ではモミ属、ツガ属、マツ属、コウヤマキ属、コナラ属アカガシ亜属等が多く認められ、スギ属、コナラ属コナラ亜属等を伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科が多く産出し、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ナデシコ科、ヨモギ属、キク亜科等が認められる。また、

シダ類胞子が多産する。

第８－２層は、第８－３層よりやや産出状況・保存状態が良い。群集組成は第８－３層と類似しており、木本花粉ではモミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、アカガシ亜属等が、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、セリ科等が検出される。

第７層では木本花粉の割合が高く、アカガシ亜属が最も多く産出する。その他ではモミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属等を伴う。草本花粉ではイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、キク亜科等が認められる。

第５層は花粉化石の産出状況が悪く、木本花粉ではツガ属、マツ属が、草本花粉ではイネ科、ナデシコ科がわずかに認められるのみである。また、検出された花粉化石の保存状態も悪い。

第４層からは花粉化石が豊富に産出し、保存状態も良好である。木本花粉ではマツ属が多産し、モミ属、ツガ属、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属等を伴う。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、ソバ属、キカシグサ属、ヨモギ属等が認められる。また、オモダカ属、ホシクサ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ミズワラビ属等の水湿地生植物に由来する花粉･胞子も検出される。

なお、図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示している。また、木本花粉総数が 100 個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を＋で表示するにとどめた。

３．考察

弥生時代前期中段階古相以前とされる第 11 －１層から弥生時代中期～後期とされる第９－１層にかけては、花粉化石はほとんど検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことが出来なかった。一般的に、花粉やシダ類胞子の堆積した場所が常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている〔中村 1967〕〔徳永・山内 1971〕〔三宅・中越 1998 など〕。わずかに検出された花粉化石の保存状態は悪く、シダ類胞子も多産する傾向にある。花粉やシダ類胞子の腐蝕に対する抵抗性は種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている〔中村 1967〕〔徳永･山内 1971〕〔三宅･中越 1998 など〕。

また、第 10 －２層は、植物遺体を含まない黒色を呈する腐植に富む泥から成る。このため、植物遺体の分解が進行する、土壌発達する時期を挟在する後背湿地のような堆積環境で形成されたことが推定される。これらのことから、第 11 －１層から第９－１層では、土壌発達など、好気的環境にさらされていたことにより花粉化石が分解消失している可能性が高い。この点については、調査区の地形発達過程を踏まえた評価が今後必要である。なお、河内平野南東部に位置する池島・福万寺遺跡で検出されている、流路の充填堆積物からなる、沖積リッジ周縁部の土壌発達領域に構築されている弥生時代前期の水田耕作土でも同様な花粉化石の産状が確認されている〔辻本・辻 2002〕〔辻本ほか 2007〕。

庄内式後葉～布留式前葉とされる第８－３層・第７層にかけては、上記と同様にやや分解の影響も窺えるものの、定量解析を行えるだけの花粉個体数が検出された。木本花粉では、モミ属、ツガ属、マツ属、コウヤマキ属、スギ属等の針葉樹や、コナラ属アカガシ亜属等の常緑広葉樹、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属等の落葉広葉樹に由来する花粉が多く認められる。当時の周辺域には、モミ属、ツガ属等の温帯針葉樹やアカガシ亜属などの暖温帯性常緑広葉樹が生育していたと考えられる。また、コナ

表１　花粉分析結果一覧

	第４層	第５層	第７層	第8-2層	第8-3層	第9-1層	第9-2層	第10-1層	第10-2層	第11-1層
木本花粉										
マキ属	-	-	4	3	1	-	-	-	1	-
モミ属	7	-	49	28	13	-	-	-	2	-
ツガ属	20	1	14	22	19	1	-	-	2	-
トウヒ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	41	10	14	3	4	-	-	-	-	2
マツ属（不明）	136	16	35	34	20	3	-	1	2	2
コウヤマキ属	1	-	3	4	14	3	-	1	-	-
スギ属	29	-	13	38	8	2	1	2	-	1
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	1	-	-	1	-	-	1	-	-	-
サワグルミ属	-	-	5	4	-	-	-	-	-	-
クマシデ属－アサダ属	-	-	5	4	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	1	-	4	-	1	1	-	-	-	-
ブナ属	2	-	4	2	2	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	8	-	26	10	5	-	-	-	1	1
コナラ属アカガシ亜属	13	-	87	31	16	-	-	-	1	1
クリ属	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-
シイ属	1	-	5	3	-	2	-	-	-	-
ニレ属－ケヤキ属	5	-	10	4	1	-	-	-	-	-
エノキ属－ムクノキ属	1	-	2	-	1	-	-	-	-	-
フウ属	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-
キハダ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ツタ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
シナノキ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-
カキノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉										
ガマ属	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-
オモダカ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	220	4	61	42	61	4	2	5	4	2
カヤツリグサ科	25	-	14	36	95	9	2	1	1	2
ホシクサ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボクサ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	2	-	1	-	1	-	-	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	-	-	1	4	6	-	-	-	-	1
タデ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ソバ属	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科	3	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ナデシコ科	-	1	-	-	4	3	1	1	2	1
キンポウゲ科	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-
アブラナ科	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
フウロソウ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
キカシグサ属	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	1	-	-	45	-	-	-	-	-	-
ゴマ属？	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ゴキヅル属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	4	-	2	2	3	3	-	2	3	-
キク亜科	1	-	3	2	3	-	-	1	-	-
タンポポ亜科	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
不明花粉	7	-	22	7	3	1	-	1	1	-
シダ類胞子										
ヒカゲノカズラ属	-	-	4	1	16	4	1	9	1	-
イノモトソウ属	1	8	25	31	99	38	15	51	2	33
ミズワラビ属	8	8	-	-	1	1	-	2	4	1
他のシダ類胞子	181	86	137	198	438	112	41	147	68	74
合　計										
木本花粉	268	27	288	200	108	12	2	4	9	7
草本花粉	276	5	85	134	178	19	5	10	10	6
不明花粉	7	0	22	7	3	1	0	1	1	0
シダ類胞子	190	102	166	230	554	155	57	209	75	108
総計（不明を除く）	734	134	539	564	840	186	64	223	94	121

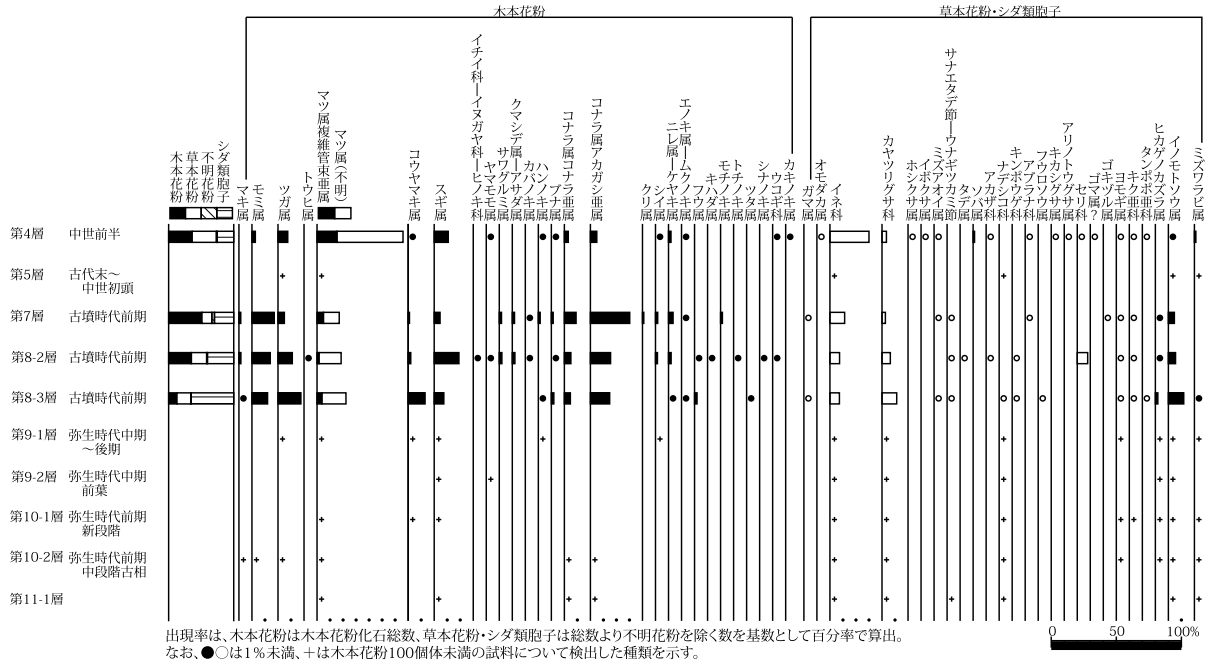
ラ亜属、ニレ属－ケヤキ属、サワグルミ属、クマシデ属－アサダ属、ハンノキ属、エノキ属－ムクノキ属、モチノキ属、トチノキ属、シナノキ属等は、河畔や低湿地等の適湿地に生育する種を含む分類群であり、当時も同様の場所に生育していたことも推定される。

大阪平野を含む近畿地方の太平洋側地域の花粉分析結果では、照葉樹林要素であるアカガシ亜属が5,000 ～ 4,000 年前頃に優勢となり、約 3,000 ～ 2,500 年前頃になるとスギ属とともにモミ属・ツガ属・コウヤマキ属などの温帯性針葉樹が増加することが確認されている〔古谷 1979〕〔前田 1984〕〔那須 1989 など〕。また、これらの結果から、標高 700m 以下の照葉樹林域において温帯性針葉樹類がかなり生育していたことも推定されている〔高原 1998〕。今回の花粉化石群集は、集水域の広い範囲からもたらされた化石群集であることから、広範囲の植生を反映していることになるが、分解の影響を考慮しても温帯針葉樹の割合が高いことから、古墳時代の頃も照葉樹林域において温帯性針葉樹類がかなり生育していたことが示唆される。

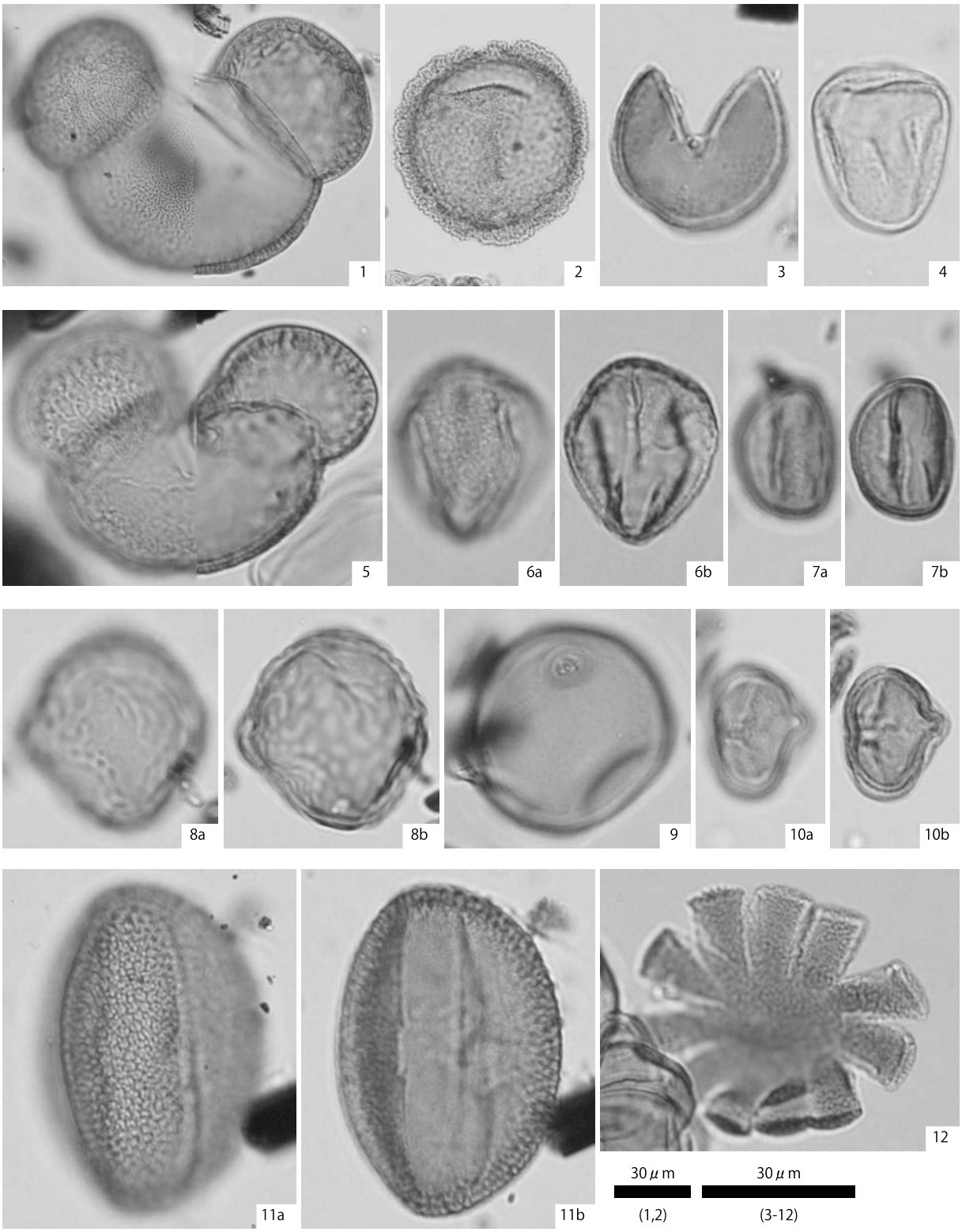
一方、草本植生をみると、イネ科、カヤツリグサ科が多く認められ、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ナデシコ科、セリ科、キク亜科、タンポポ亜科等を伴う。これらは、いずれも開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群であることから、当時の調査区内やその周囲の草地に生育していたものに由来すると推測される。また、ガマ属、ミズアオイ属、ゴキヅル属、ミズワラビ属等の水湿地生植物の花粉・胞子も検出される。調査所見では第 7 遺構面では調査区周辺に湿地が広がっていたと推測されていることから、先に述べた湿地林要素と共に、これらの草本類・シダ類も、周囲の湿地部に生育していたと考えられる。

古代末～中世初頭とされる第 5 層も花粉化石の産状が悪く、定量解析を行うことが出来なかった。本層においても第 11 － 1 層～第 9 － 1 層と同様の理由で花粉が分解・消失したと推測される。なお、得られた花粉化石から、ツガ属、マツ属等の木本類、イネ科、ナデシコ科等の草本類の生育が窺える。

中世前半とされる第 4 層では、花粉化石の保存状態が良好で、検出個体数も多い。群集組成をみると、



第 65 図　花粉化石層群の層位分布図



1．モミ属(東壁断面;第7層)
2．ツガ属(南半部;第4層)
3．スギ属(東壁断面;第7層)
4．カヤツリグサ科(東壁断面;第8-3層)
5．マツ属(東壁断面;第7層)
6．コナラ属コナラ亜属(東壁断面;第8-3層)
7．コナラ属アカガシ亜属(東壁断面;第7層)
8．ニレ属－ケヤキ属(東壁断面;第7層)
9．イネ科(東壁断面;第7層)
10．セリ科(東壁断面;第8-2層)
11．ソバ属(南半部;第4層)
12．ゴマ属?(南半部;第4層)

写真４　検出された花粉化石

木本類と草本類の割合がほぼ同等である。木本類をみると、マツ属が多産し、それまで多く認められたモミ属やアカガシ亜属等の割合が少なくなる。多産するマツ属のうち、亜属まで同定できたものは全て複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺、海岸砂丘上など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能である。また、極端な陽樹であり、やせた裸地などでもよく発芽し生育することから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。よって、中世前半頃には、代償植生としてのマツ属やイネ科をはじめとする草本類が生育する開けた空間が増加したと推測される。

なお、第４層の上面である第３遺構面は中世の水田とされており、調査区南半部では畝を持つ耕作地が検出されている。分析試料は南半部の畝付近より採取されており、多産するイネ科花粉中には栽培種であるイネ属に似た形態を示す個体も多く認められた。随伴するオモダカ属、ホシクサ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ミズワラビ属等の水湿地生植物は、いずれも水田雑草としても生育する種を含むことから、これらの草本類が耕作地内に生育していた可能性がある。この点については、植物珪酸体分析や大型植物化石分析等を併せて実施し、確認することが望まれる。それ以外の栽培種については、ソバ属の花粉が検出されること、本種類が虫媒性であり耕作地から離れた場所では極端に産出率が低くなること〔中村 1984〕を踏まえると、当時の調査地点近辺でソバ栽培が行われていた可能性も指摘される。

また、大阪平野におけるマツ属を主とする花粉化石群集の変遷パターンは、マツ属が増加傾向を示す時期（zone Ⅰ）、マツ属が急増・卓越するようになり温帯性針葉樹が減少する時期（zone Ⅱ）、マツ属が卓越すると同時に木本・草本群集組成が単調になる時期（zone Ⅲ）に区分できる〔辻本・辻 2008〕。このうち、zone ⅠからⅡへの変遷時期は、12 ～ 13 世紀頃に集中する場合が多く、今回の調査結果も同調的といえる。このような変化の背景には、調査地域の地形発達過程や人間活動と密接に関係していることが予測されることから、周辺の発掘調査成果を踏まえた評価が今後の課題として認識される。

第３節　植物珪酸体分析

１．分析方法

次に植物計三体分析の方法と結果について記述する。

植物珪酸体分析の試料は、弥生時代前期の水田遺構が検出された 08 － 1 － 2 － 2 区の第 10 － 1 遺構面およびその上下層などから採取された計 24 試料である。試料の採取箇所と層位を、第 64 図右下に示す。

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を 105℃で 24 時間乾燥（絶乾）
２）試料約 1 g に対し直径約 40 μ m のガラスビーズを約 0.02g 添加（0.1mg の精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散
５）沈底法による 20 μ m 以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位：10 － 5 g）をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる〔杉山 2000〕。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率およびメダケ率（メダケ属とササ属の比率）を求めた。

２．分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表２・３および第 66 図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示した（写真５）。

イネ科　イネ、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）

イネ科－タケ亜科　メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節・ヤダケ属）、ネザサ節型（主にメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

イネ科－その他　表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

樹木　ブナ科（シイ属）、クスノキ科、その他

３．考察

稲作跡の検討　水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料 1 g あたり 5,000 個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断されている〔杉山 2000〕。なお、密度が 3,000 個 /g 程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を 3,000 個 /g として検討を行った。

弥生時代前期の水田遺構が検出された第 10 － 1 遺構面では、№５、７、９、11、14、15、17、18、20 ～ 24、27 ～ 29、35 の計 17 試料について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、畦畔部（№ 11、18、23、35）を除く 13 試料では密度が 1,400 ～ 4,400 個 /g（平均 3,100 個 /g）と比較的高い値である。したがって、同遺構面では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

畦畔部（№ 11、18、23、35）では密度が 1,200 ～ 3,900 個 /g（平均 2,500 個 /g）と比較的低い値である。水田耕作面だけでなく畦畔部からもイネが検出されることから、畦畔の作り替えや畦塗りが行われていたことなどが想定される。

弥生時代前期末の第 10 － 1 層では、№ 1 の 1 試料について分析を行った。その結果、イネが検出されたが、密度は 700 個 /g と低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

表２　植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：× 100 個 /g）

分類群・学名	1	2	3	4	5	7	9	11	14	15	17	18	20	21	22	23	24	27	28	29	31	32	33	35
イネ科　*Gramineae*																								
イネ *Oryza sativa*	7	41	7	35	35	14	32	39	33	26	31	27	44	31	27	12	37	28	36	33	14	7	14	21
ヨシ属 *Phragmites*		7	26	14	28	7	32	13	33	26	25	14	13	19	27	30	25	43	29	39	36	51	7	42
キビ族型 *Paniceae type*			7	7	14		6	7						6			6	14		7	7		7	7
ススキ属型 *Miscanthus type*	7			7	14		13				6						6	7	7		7	7		
ウシクサ族Ａ *Andropogoneae A type*	21	21	7	14	21	14	32	26	13	19	19	7	6	19	20	18	19	14	7	13	14	29		
タケ亜科　*Bambusoideae*																								
メダケ節型 *Pleioblastus sect. Nipponocalamus*					7	14			7	6		7	6	6		6	19	7	7	13	7	7	14	14
ネザサ節型 *Pleioblastus sect. Nezasa*	62	48	85	70	99	28	32	72	60	26	25	34	38	31	13	54	44	36	51	52	51	58	36	42
チマキザサ節型 *Sasa sect. Sasa etc.*																						7		7
ミヤコザサ節型 *Sasa sect. Crassinodi*	14		7	7	14	21	13	33	7		25	14		6		6	12		7	13	14	15	7	21
未分類等 *Others*	55	48	98	21	84	49	25	65	40	32	50	34	38	31	27	18	44	21	44	26	43	44	36	42
その他のイネ科　*Others*																								
表皮毛起源 *Husk hair origin*	7	7	13	14	7		13		20	13	13	14		6	13		12	21	7	7	14	7		7
棒状珪酸体 *Rodshaped*	42	34	65	28	77	42	76	33	53	122	88	61	64	57	93	66	37	121	66	85	87	102	43	187
未分類等 *Others*	76	103	65	70	84	76	76	52	93	84	81	75	44	31	66	54	44	50	58	59	79	58	43	69
樹木起源　*Arboreal*																								
ブナ科 (シイ属) *Castanopsis*					7								6	6		6		7				7		
クスノキ科 *Lauraceae*				7	7			7	13	13		14	13	13		12	6	7	7	7	7	7		
その他 *Others*	14	7	13	28	21	7	13	7	13	32	19	20	25	44	13	12	19	21	22	33	22	7	7	7
(海綿骨針) *Sponge spicules*				7		7							13	6	7	6	12	7			7	7		
植物珪酸体総数 *Total*	305	316	393	323	521	270	359	352	383	400	382	319	299	308	299	295	330	398	350	386	405	416	215	464

表３　主な分類群の推定生産量

（単位：kg /㎡・㎝）：試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出

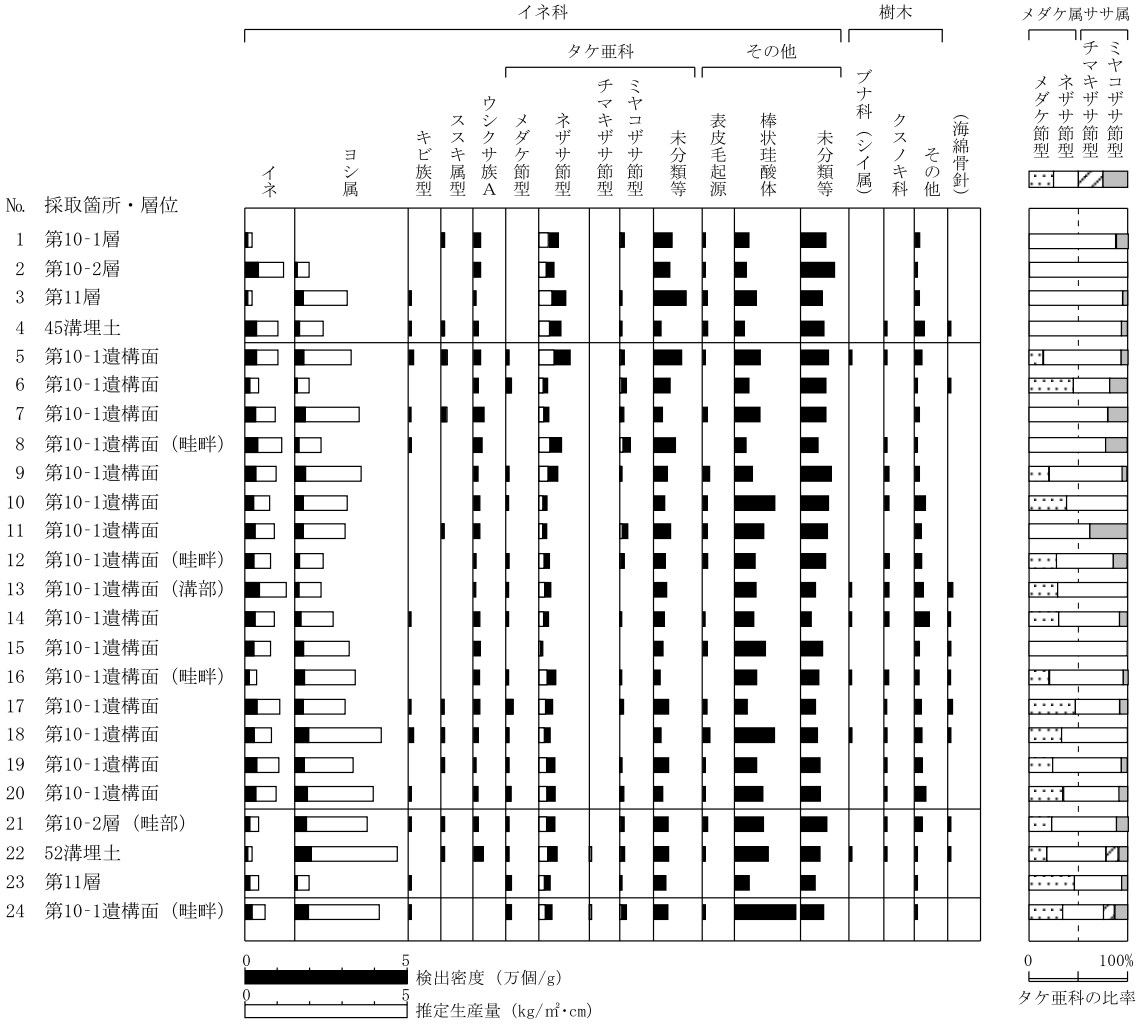
分類群	1	2	3	4	5	7	9	11	14	15	17	18	20	21	22	23	24	27	28	29	31	32	33	35
イネ	0.20	1.21	0.19	1.03	1.03	0.41	0.93	1.15	0.97	0.76	0.92	0.80	1.31	0.93	0.78	0.35	1.10	0.84	1.07	0.96	0.42	0.21	0.42	0.61
ヨシ属		0.43	1.65	0.89	1.78	0.44	1.99	0.82	2.09	1.63	1.58	0.86	0.80	1.19	1.68	1.90	1.57	2.69	1.84	2.47	2.28	3.22	0.45	2.62
ススキ属型	0.09			0.09	0.17		0.16				0.08						0.08	0.09	0.09		0.09	0.09		
メダケ節型					0.08	0.16			0.08	0.07		0.08	0.07	0.07		0.07	0.22	0.08	0.08	0.15	0.08	0.08	0.17	0.16
ネザサ節型	0.30	0.23	0.41	0.34	0.47	0.13	0.15	0.34	0.29	0.12	0.12	0.16	0.18	0.15	0.06	0.26	0.21	0.17	0.25	0.25	0.24	0.28	0.17	0.20
チマキザサ節型																						0.05		0.05
ミヤコザサ節型	0.04		0.02	0.02	0.04	0.06	0.04	0.10	0.02		0.08	0.04		0.02		0.02	0.04		0.02	0.04	0.04	0.04	0.02	0.06
タケ亜科の比率（%）																								
メダケ節型					14	45			20	38		28	29	30		20	47	33	24	34	23	18	46	34
ネザサ節型	88	100	95	94	79	37	80	78	75	62	62	58	71	62	100	75	45	67	70	57	66	60	48	42
チマキザサ節型																						12		11
ミヤコザサ節型	12		5	6	7	18	20	22	5		38	14		8		5	8		6	9	12	9	6	13
メダケ率	88	100	95	94	93	82	80	78	95	100	62	86	100	92	100	95	92	100	94	91	88	79	94	76

弥生時代前期の水田耕作土層である第 10 － 2 層では、№.2 と№.31（畦畔部）の 2 試料について分析を行った。その結果、両試料からイネが検出された。このうち、№.2 では密度が 4,100 個 /g と比較的高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。№.31（畦畔部）では密度が 1,400 個 /g と比較的低い値である。畦畔部からイネが検出されることから、前述と同様に畦畔の作り替えや畦塗りが行われていたことなどが想定される。

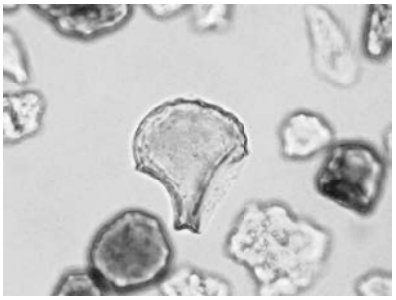
第 11 － 1 層（青灰色粘土層）では、№.3 と№.33 の 2 試料について分析を行った。その結果、両試料からイネが検出されたが、密度は 700 個 /g および 1,400 個 /g と比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

45 溝埋土（№.4）と 52 溝埋土（№.32：第 10 － 2 遺構面）について分析を行った。その結果、両試料からイネが検出された。このうち、前者では密度が 3,500 個 /g と比較的高い値であり、後者では 700 個 /g と低い値である。このことから、各層準の堆積当時は周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形で溝内にイネの植物珪酸体が混入したと考えられる。

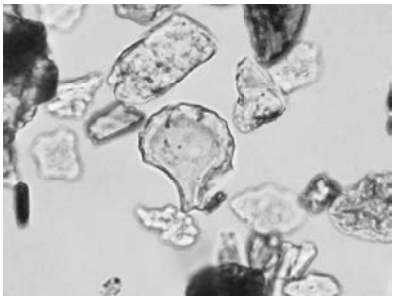
イネ科栽培植物の検討　植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、



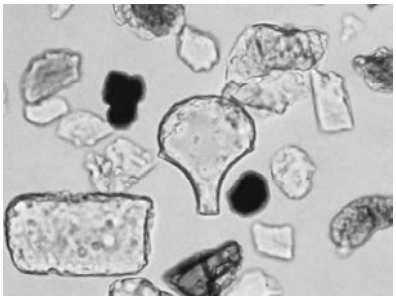
第 66 図　植物珪酸体抽出結果図



イネ
No. 4

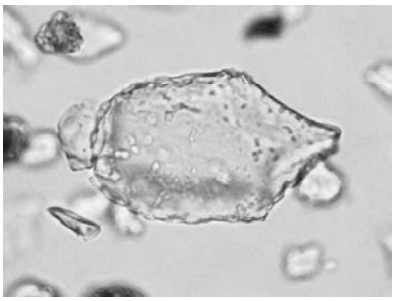


イネ
No. 4

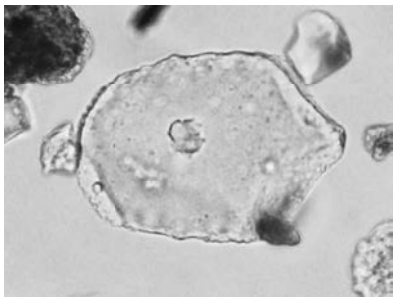


イネ
No.11

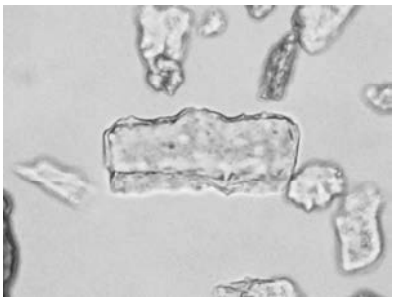
イネ（側面）
No. 20



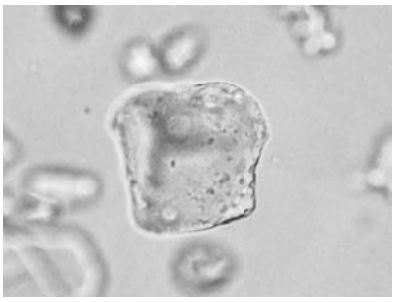
ヨシ属
No. 15



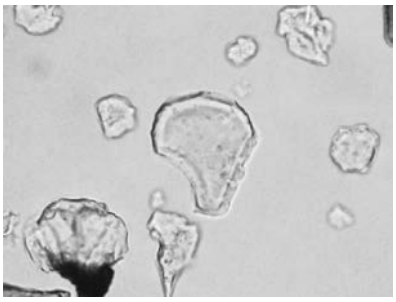
ヨシ属
No. 32



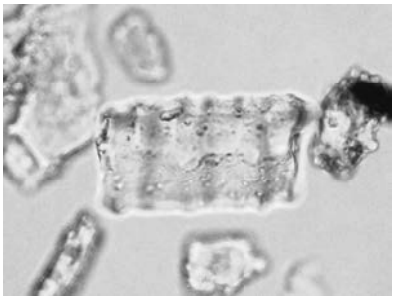
キビ族型
No. 3



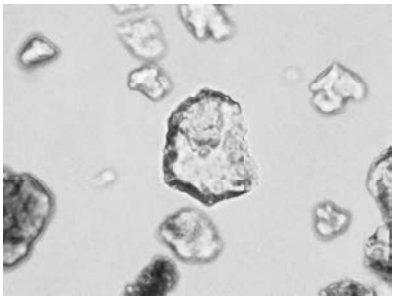
ススキ属型
No. 9



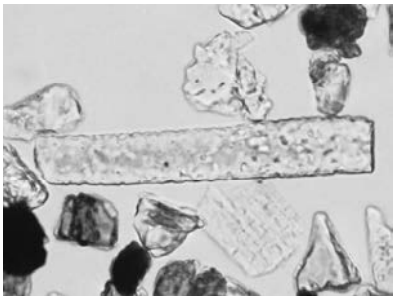
ススキ属型
No. 4



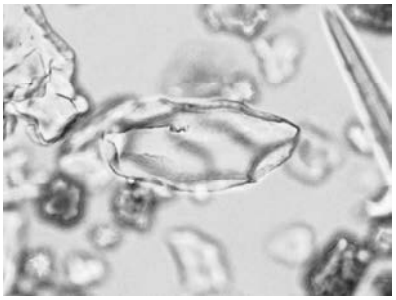
ネザサ節型
No. 33



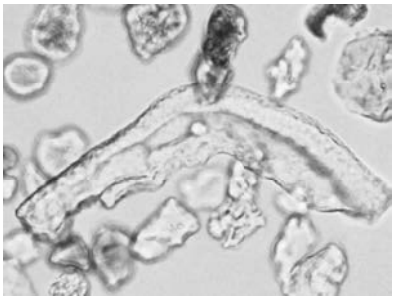
ミヤコザサ節型
No. 28



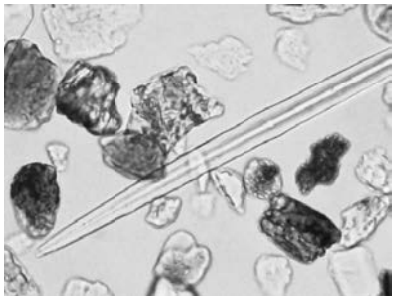
棒状珪酸体
No. 9



ブナ科（シイ属）
No. 20



クスノキ科
No. 14



海綿骨針
No. 20

写真５　検出された植物珪酸体

トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

なお、イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

植物珪酸体分析から推定される植生と環境　弥生時代前期の水田遺構が検出された第 10 － 1 遺構面では、イネと共にヨシ属やネザサ節型が比較的多く検出され、ススキ属型、ウシクサ族Ａ、メダケ節型、ミヤコザサ節型なども認められた。また、樹木（照葉樹）のクスノキ科、ブナ科（シイ属）なども検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある〔杉山 1999〕。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い〔近藤・佐瀬 1986〕。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねヨシ属が優勢であり、次いでイネが多くなっている。

以上の結果から、弥生時代前期の調査区周辺は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。なお、ヨシ属については、休閑期間中に繁茂していたことや､ヨシ属の茎葉が施肥などの目的で水田内に持ち込まれたことなども想定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属、メダケ属（おもにネザサ節）などの草本類が生育していたと考えられ、遺跡周辺にはクスノキ科、シイ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

以上の植物珪酸体分析の結果、弥生時代前期の水田遺構が検出された第 10- － 1 遺構面では、イネが比較的多量に検出され、同遺構で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、その下位の第 11 － 1 層や上位の第 10 － 1 層などでもイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。

弥生時代前期の調査区周辺は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属、メダケ属（おもにネザサ節）などの草本類が生育していたと考えられ、遺跡周辺にはクスノキ科、シイ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

【引用・参考文献】

近藤錬三・佐瀬　隆　1986 「植物珪酸体，その特性と応用」『第四紀研究』25　P.31-63.

杉山真二・藤原宏志　1986 「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－」『考古学と自然科学』19　P.69-84.

杉山　真二　1999　「植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史」『第四紀研究』38（2）　P.109-123.

杉山　真二　2000　「植物珪酸体（プラント・オパール）」『考古学と植物学』同成社　P.189-213.

高原　光　　1998　「近畿地方の植生史」 安田喜憲・三好教夫編『図説 日本列島植生史』朝倉書店　P.114-137.

辻本裕也・辻　康男　2002 「池島・福万寺遺跡の古環境復元」『池島・福万寺遺跡２（福万寺Ｉ期地区）一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書　分析･考察編』（財）大阪府文化財センター　P.361-410.

辻本裕也・辻　康男　2008 「生駒山北部の古墳時代以降の花粉化石群集の特徴と植生変遷」『日本花粉学会第 49 回大会講演要旨集』83

辻本裕也・辻　康男・伊藤良永・堀内誠示・田中義文・高橋　敦・松元美由紀・馬場健司　2007
「池島･福万寺遺跡の古環境変遷２」『(財）大阪府文化財センター調査報告書　第 158 集　池島･

福万寺遺跡３』（財）大阪府文化財センター　P.397-473.
徳永重元・山内輝子　1971「花粉・胞子」『化石の研究法』共立出版株式会社　P.50-73.
中村　純　　1967　『花粉分析』古今書院　P.232.
中村　純　　1984　「古代農耕とくに稲作の花粉分析学的研究」『古文化財の自然科学的研究』同朋社　P.582-602.
那須　孝悌　1989　「活動の舞台：概論」永井昌文・那須孝悌・金　関恕・佐原　真（編著）『弥生文化の研究１　弥生人とその環境』雄山閣出版　P.119-130.
藤原　宏志　1976　「プラント･オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9　P.15-29.
藤原宏志・杉山真二　1984「プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学』17　P.73-85.
古谷　正和　1979　「大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷」『第四紀研究』18　P.121-141.
前田　保夫　1984　「花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積（更新）世後期以降の植生変遷」　宮脇　昭（編･著）『日本植生誌　近畿』至文堂　P.87-99.
三宅　尚・中越信和　1998「森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』6　P.15-30.

第５章　総括

第１節　検出遺構面の変遷

以上、植松遺跡 08 － 1 の調査について、周辺環境、調査方法、調査成果、自然科学分析成果を順に記述した。この章では、今回、検出した遺構の変遷と周辺調査との関連についてまとめ、総括としたい。以下、時代を追って記述する。

縄文時代　調査地周辺では、まだ人間の生活痕跡を確認できていない時代である。今回の調査では T.P.+5.4 m～ +5.6 m付近において縄文時代後期～晩期の遺物が出土したが、摩滅が著しく、現地性を認めることができなかった。おそらく洪水等により、他所から運び込まれた遺物と推測される。このため、当該時期の調査地周辺は、海進や洪水等が繰り返される不安定な土地であったと考えられる。

弥生時代前期～中期　植松遺跡において、はじめて人的関与が認められる時期である。植松遺跡では、弥生時代前期中段階において水田耕作が始められた。この水田は、溝を伴う畎畝状の大畦を敷設し、その間を細かく小畦畔で区切って作る小区画水田である。畦の間に設けられた溝は、標高が高い場所から低い場所へと水を導く、排水を主体とした構造をもっており、小尾根状部の傾斜を利用して作られていた。この形態をもつ水田は、河内平野の初期水田のあり方を考える上で、参考となる事例である。

植松遺跡の周辺には、木の本遺跡、志紀遺跡などほぼ同時期に集落や水田開発が始まる遺跡があることから、この時期の当該地域に新たな土地開発の機運があったことは確実である。この動きは、河内平野の中でも比較的早い段階のものとして評価される。

なお、弥生時代中期になると、水田は廃絶し、軟弱土壌の堆積が進む。調査区内は、湿潤な環境にあったと考えられる。この時期には、溝などの敷設はあるものの、人間の起居や生産活動の痕跡は見出すことができない。

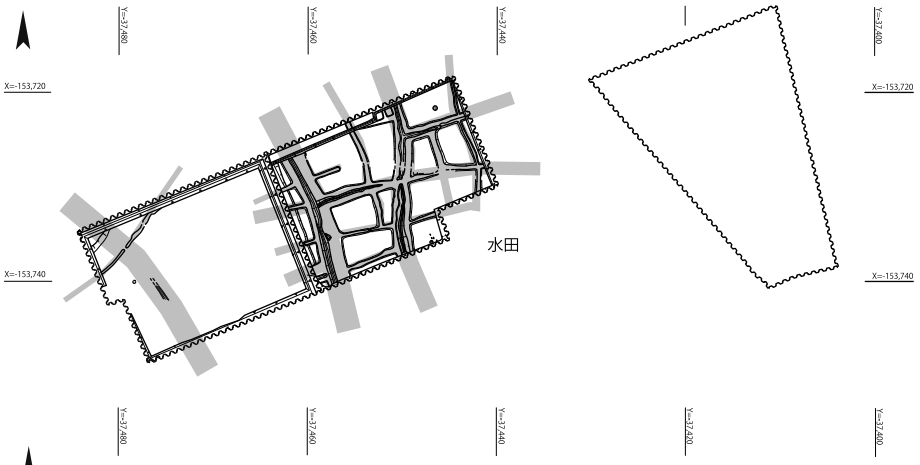
古墳時代前期　古墳時代になると、やや土壌が安定し、調査地西側の微高地上を中心として集落が展開した。今回の調査では、集落が調査区外へと続くため、その全体構成は不明である。しかし、出土遺物量からは一定規模以上の居住人口があったことを想像できる。一方、低地である集落の東側は、依然として湿潤な環境にあったが、人々は耕作地として利用したようである。

しかし、この集落の存続期間は、土器型式からみて、約 100 年程度であったと考えられる。集落は、古墳時代中期を待たずして廃絶し、古墳時代後期には、一面に葦類等が繁茂する湿地となった。この状況から見て、周辺地域の湿地化が顕著となり、住みにくい土地になったものと推測する。

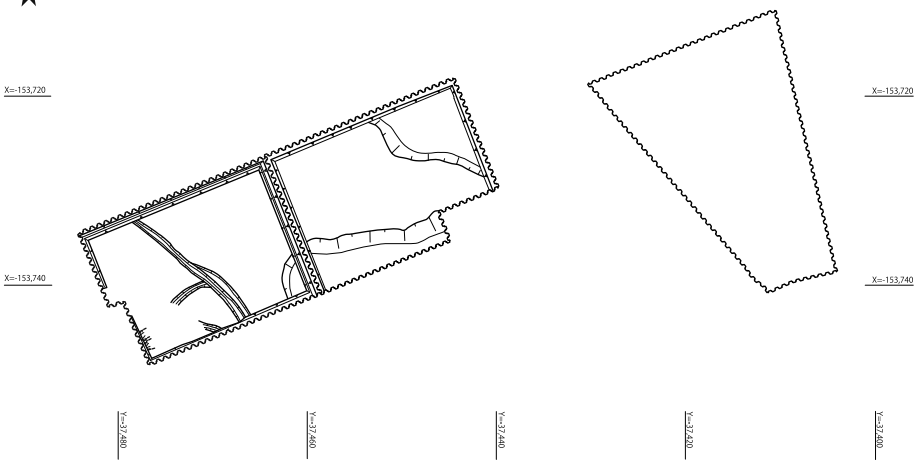
古代　古墳時代末になると、大規模な洪水がおこり、調査区一帯は河川内に埋没する。この状況は、平安時代まで続いたと考えられる。この河川は、時期によって川幅や通り道を変えつつ、概ね北東から南西へ向かって流れ続けた。古墳時代後期～古代初頭頃、川の北岸は調査区内にあったが、やがて川幅の拡張とともに洪水砂は調査区全域を覆うようになる。現在のところ、旧平野川がこの流路の候補として考えられている。

やがて、平安時代後期になると、河川の中心は調査地周辺から遠のき、周辺は徐々に乾燥し、安定した。なお、調査地周辺の地形は洪水砂の堆積により一変し、古墳時代以前にあった土地の起伏は影を潜め、代わって砂の起伏による凹凸を基盤とする微高地と低地が形成された。

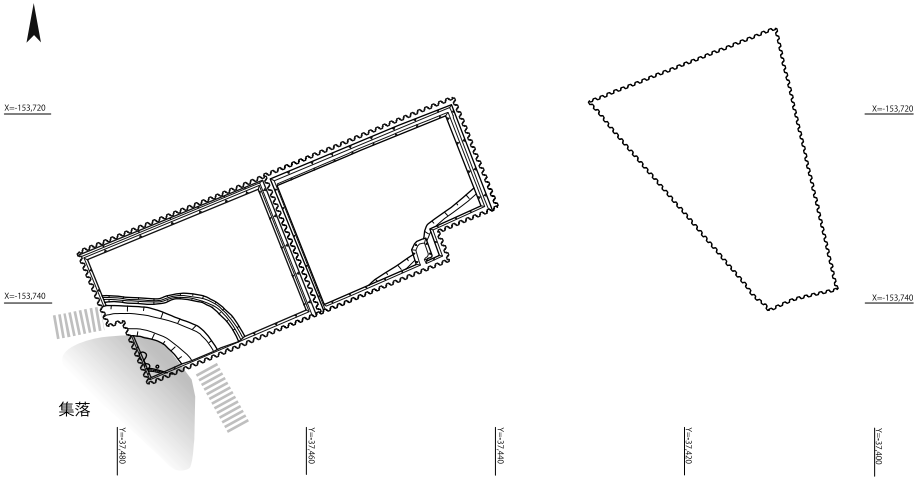
【弥生時代前期中葉～後葉】



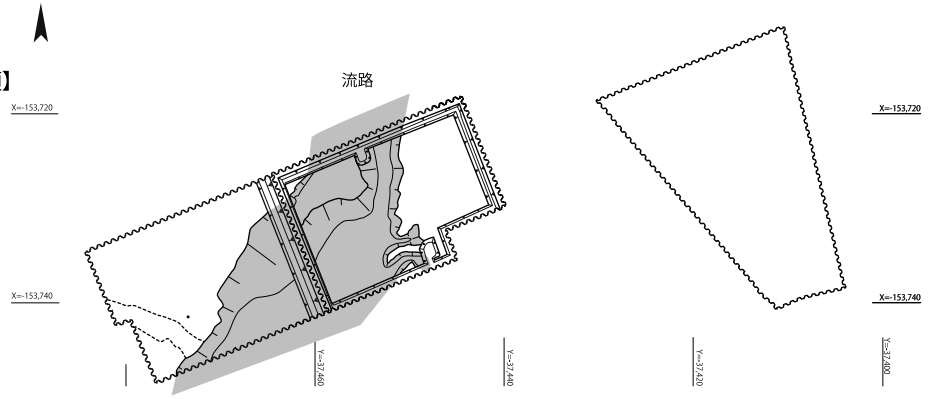
【弥生時代中期】



【古墳時代前期】



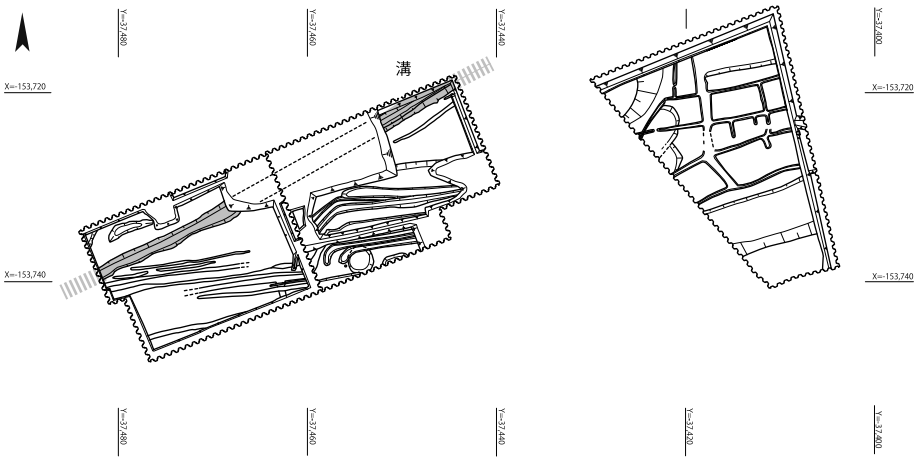
【古墳時代後期～平安時代初頭】



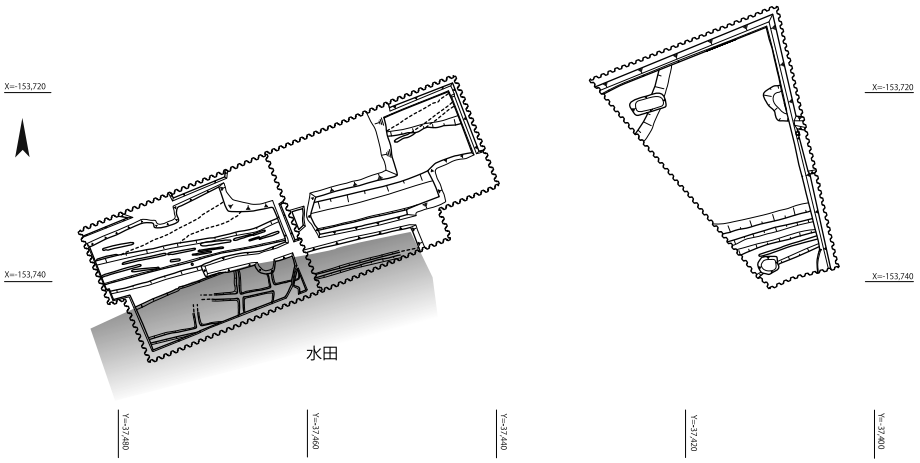
0 (1:800) 20m

第 67 図　植松遺跡 08 － 1　遺構面変遷図（1）

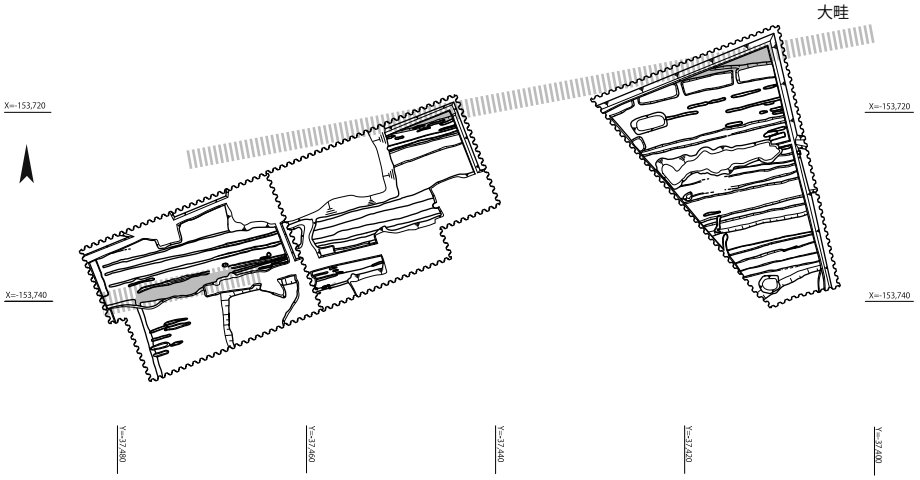
【古代末～中世初頭】



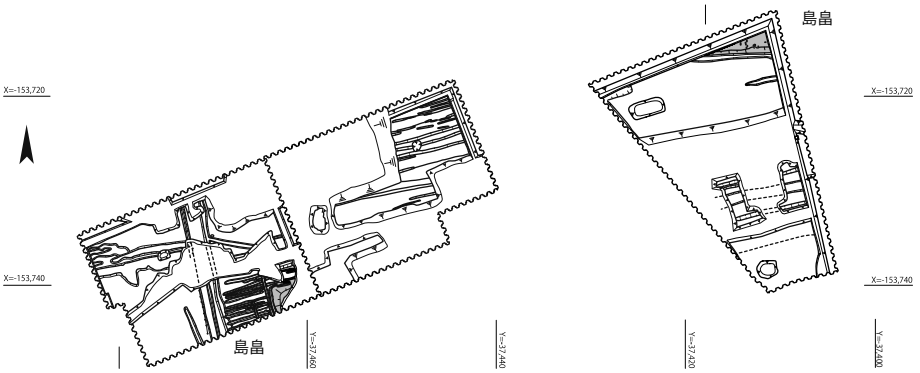
【中世前期】



【中世後期】



【中世末～近世初頭】



0 (1:800) 20m

第 68 図　植松遺跡 08 － 1　遺構面変遷図（2）

古代末～中世　調査区内に再び開発の手が入る時期である。調査区内では微高地上に大溝を設け、低地に給水する手法を用いて開墾が進められた。耕作は、微高地から低地を階段状に細かく区画し、砂質度の高い微高地では畑作が、湿潤な粘土土壌を有する低地では水田が営まれた。

中世後期には、一定の方向軸をもつ畦畔が築かれ、周辺地域を広く開墾する動きがあったようである。周辺では戦乱の火の手が上がり、この地域では村落の自立性が高まった。また、大阪では新田の開発が大きく進んだ時期でもあり、植松遺跡の土地利用の有り方も、このような世の中の大きな動きに連動するものと予想される。

なお、植松地域は、中世後期の段階で一時洪水に見舞われるようである。しかし、耕作の手はとどまらず、やがて島畠を作る近世水田へ発展したと推測される。

第２節　植松遺跡の動向

次に、植松遺跡 08 － 1 の調査成果と、周辺の既往の調査成果との対応を考えてみたい。

第 69 図は、今回の調査区と植松遺跡 05 － 1 調査成果、及び 2002 年度に大阪府教育委員会によって行われた植松遺跡の調査成果より作成した、基本層序模式図である（位置は第 6 図を参照）。これを見ると、今回の調査において発見した弥生時代前期相当層と古墳時代前期相当遺構面は、南へ 50 mを隔てた 05 － 1 － 1 － 2 区でも対応するものがあり、さらに東北東へ 300 mを隔てた府教委 2002 調査区で報告された相当層及び遺構面とも対応させることが可能である。遺構検出の有無はあるものの、これまで洪水砂以下には遺構面が残存しないとされていた旧来の認識は、改められる必要があるだろう。

植松遺跡 05 － 1 の調査では、旧平野川の南岸を確認し、その高まり上で弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺構面が検出された。この遺構面が川岸で途絶えていたことから、担当者は、「本来的には遺構面がもっと広がっていたが、大規模な河川の氾濫によって削平された」と推測されている〔川瀬 2005〕。今回の調査では、相当する洪水砂の下層には一定の厚さをもった粘土が堆積し、土壌の削平等は認められなかった。旧平野川の水流の中心軸は、08 － 1 － 2 区と 05 － 1 － 1 － 2 区の距離間のうち後者寄りの地点にあり、相当の勢いがあったと考えてよいだろう。

では、この旧平野川はいつごろからこの地点を流れることになったのであろうか。08 － 1 区の堆積状況を見ると、古墳時代前期遺構面の基盤層となる灰色粘土層は、１m程度の比高差はあるものの、05 － 1 － 1 － 2 区の一部でも確認されており、緑灰色粘土、黒色粘土と続くそれ以下の層序も 08 － 1 区と対応しているようである。つまり、05 － 1 － 1 － 2 区の一部は、古墳時代前期を遡る弥生時代から低い地点であったと考えられる。この地点の最下層洪水砂が、上層に比べて弥生土器を多く含むと報告されていることからも、古代の平野川が通じる以前の古い流路が存在した可能性が想像される。

府教委 2002 調査区では、古代の平野川洪水砂の堆積は見られず、弥生時代後期末～古墳時代初頭の流路が認められている。調査担当者は、この流路を当該時期の平野川と推測されている〔泉本ほか 2002〕。この流路は北北西－南南東の方向軸をもっており、そのまま延長させると、丁度、05 － 1 － 1 － 2 区北方付近へと達するようである。

古墳時代前期の平野川がどのルートを通っていたのか、まだ明らかにされてはいないが、今日のように大きな河川が定まっていたとは考え難く、小規模な河川が時々によってルートを変えながら、網の目

状に錯綜していた可能性が高い。このため、05 － 1 － 1 － 2 区の一部や府教委 2002 調査区で検出された流路は、ともに古代以前の平野川の一部として機能した可能性がある。

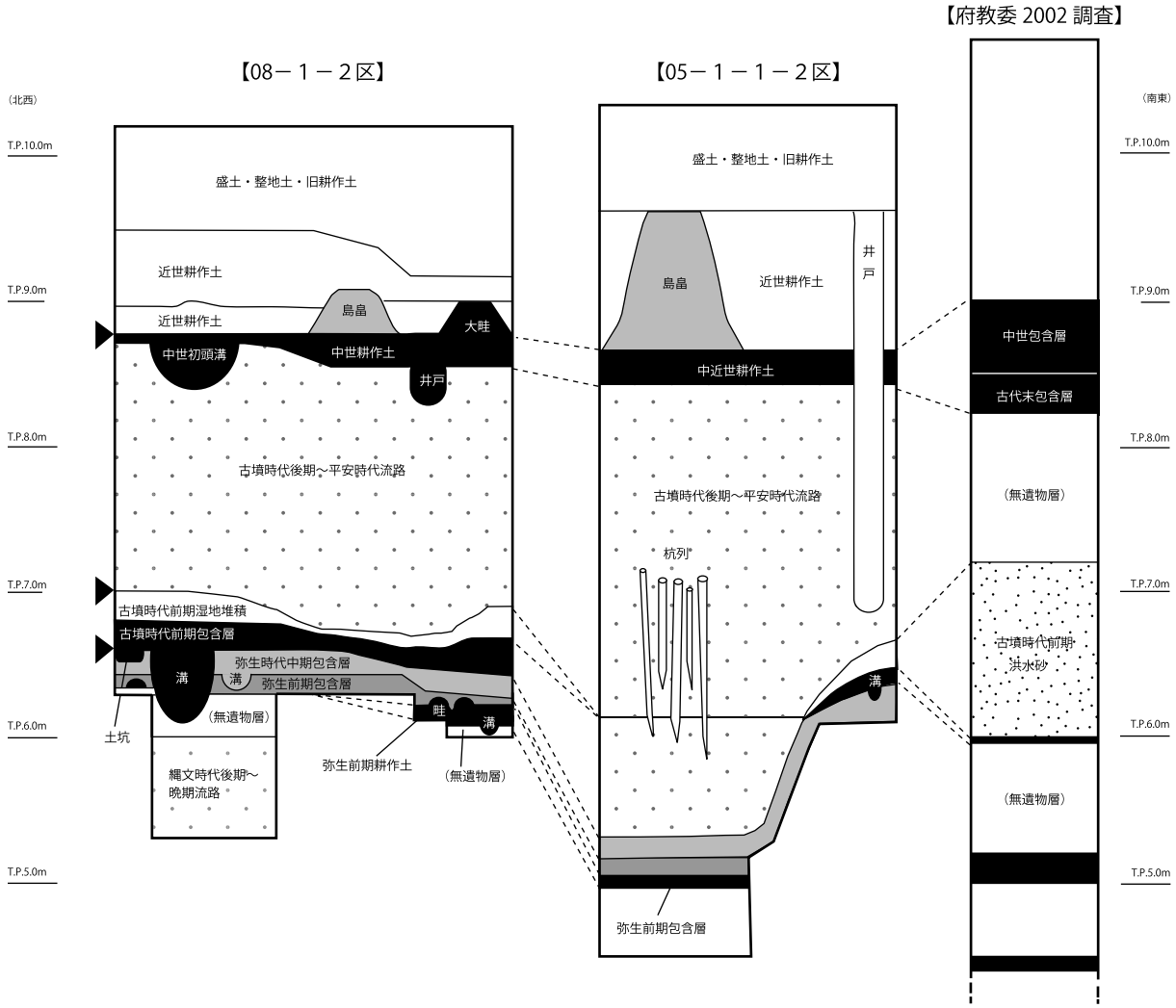
以上を踏まえて、遺構面の広がりを確認したい。第 70 ～ 72 図は、植松遺跡 05 － 1 調査及び植松遺跡08 － 1 調査において検出された遺構面のうち、対応が可能な計 3 面を合成し、図示したものである。

弥生時代後期～古墳時代前期の植松遺跡では、上述した原流路を挟んで南北に集落が存在したと考えられる（第 70 図）。但し、この集落は、南側の集落が弥生時代後期末～庄内式前半期、北側の集落が庄内式後半期～布留式前半期の出土遺物を主体とするため、南側集落が早く、やや遅れて北側集落が形成されたと考えられる。

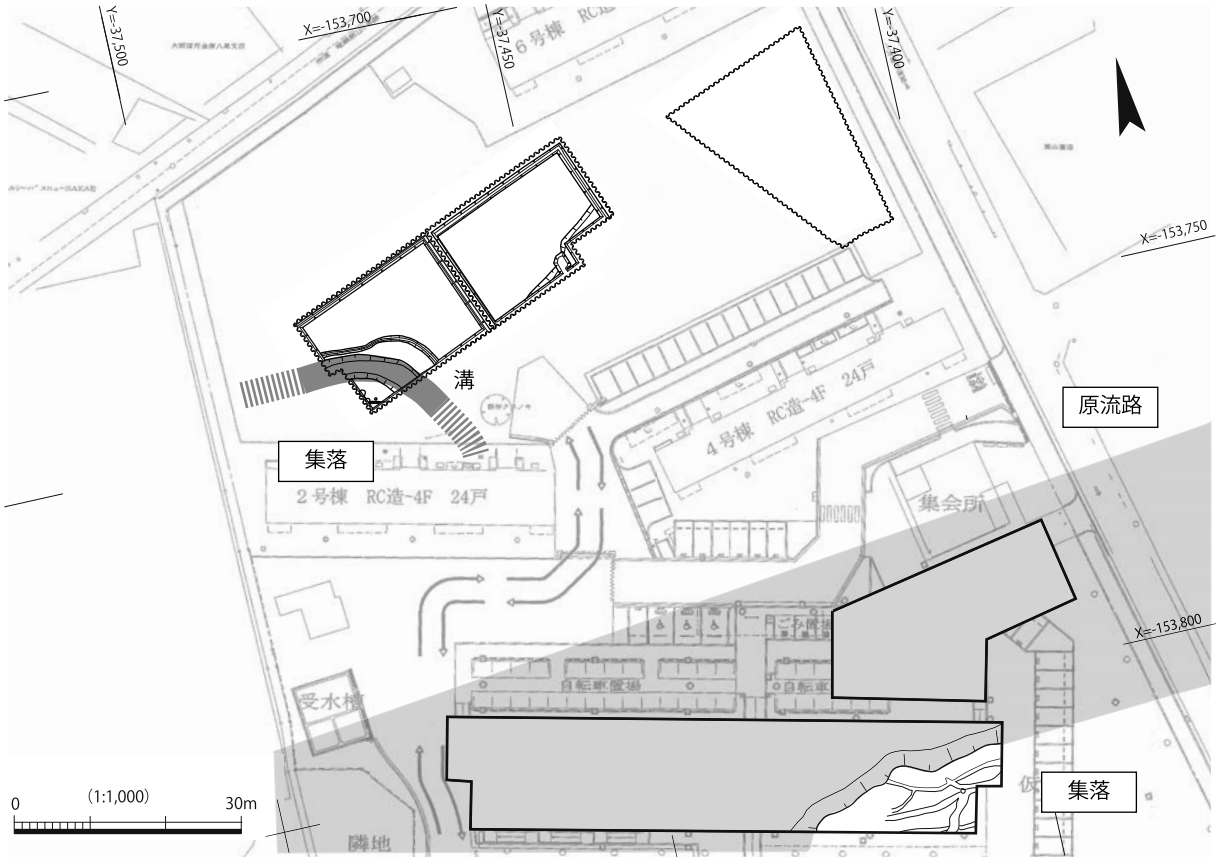
やがて、原流路の水量が増し、周辺の湿地化が進んだため、両岸ともに集落は放棄された。集落の存続時期は、土器型式から 100 年足らずの間であったと推測される。

古墳時代後期には、かつての集落域にも河川の氾濫が及ぶようになり、旧平野川となる（第 71 図）。このころの川幅は 90 ～ 100 m程度、前時代の流路付近に川の中心軸があったものと推測される。

その後、さらに旧平野川は南北へ拡張し、奈良時代～平安時代には、周辺一帯が川の流れに沈むこととなる。このときの川幅は、植松遺跡 05 － 1 でも言及されている通り、150 mを越える規模であったと考えられる。

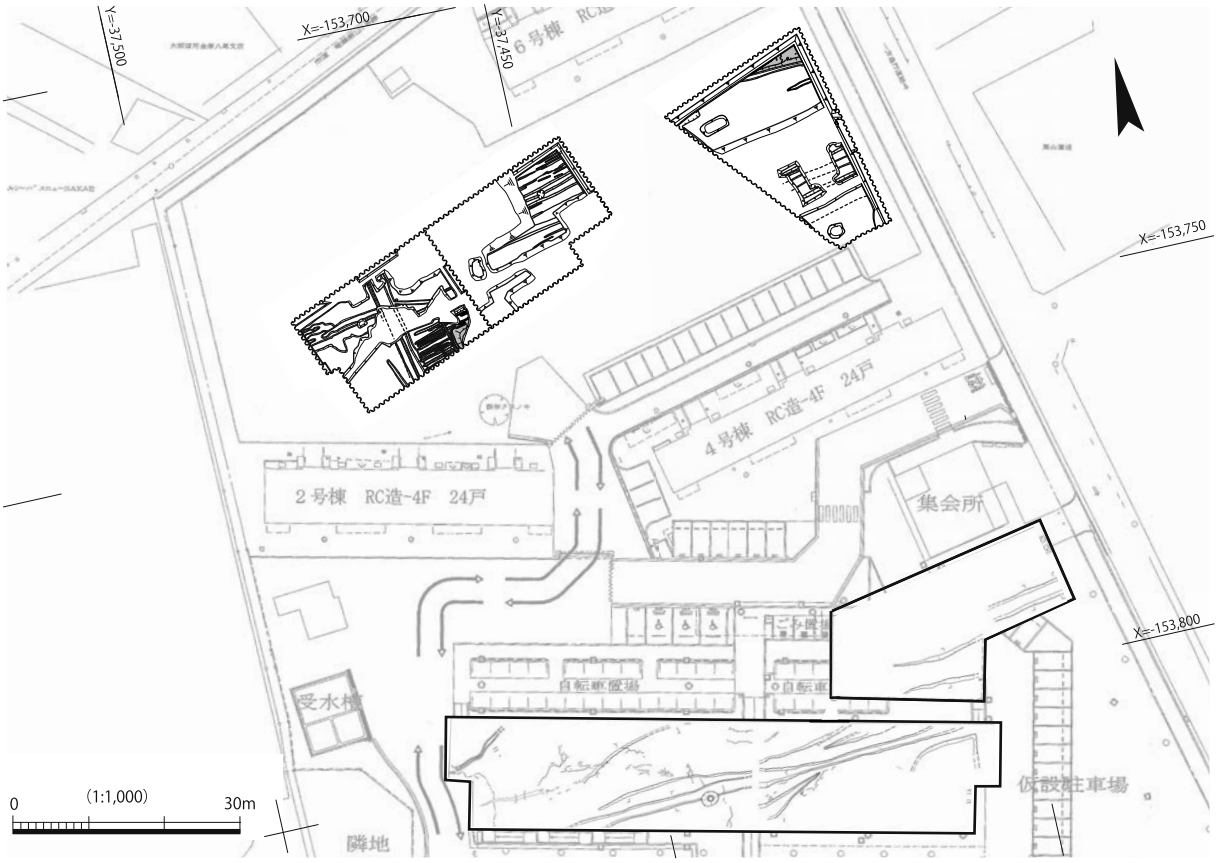


第 69 図　植松遺跡　土層対応図



第 70 図　植松遺跡 05 － 1 ・08 － 1　遺構面合成図（弥生時代後期～古墳時代前期）

第 71 図　植松遺跡 05 － 1 ・08 － 1　遺構面合成図（古墳時代後期～古代初頭）



第 72 図　植松遺跡 05 － 1・08 － 1　遺構面合成図（中世末～近世初頭）

古代末頃、平野川が流れを変えたことにより、周辺地域は乾燥し、再び人々の関与が可能となった。まず開墾が着手されたのは、08 － 1 調査区付近である。耕作地は大規模な開発などによって中世を通じて広げられ、近世初頭には、植松遺跡 05 － 1 調査区周辺まで及んだと推測される（第 72 図）。

以上、調査成果より得られた情報を基として、植松遺跡周辺の変遷について記述した。

今回の調査では、弥生時代前期の水田跡の平面的な広がりや、古墳時代前期の集落跡などを検出することができた。ともに植松遺跡内の調査では、特筆すべき成果である。これまで奈良時代以降の集落遺跡として語られることが多かった植松遺跡の新たな面を発見したと言えるだろう。

今後も周辺の調査が進むことにより、新たな情報が得られることに期待したい。

【参考・引用文献】

泉本知秀・山田隆一　2002「植松遺跡」『中田遺跡他発掘調査報告～寝屋川流域下水道事業に伴う～』大阪府教育委員会　P21

川瀬　貴子　2007　「第２章　調査成果」『（財）大阪府文化財センター調査報告書第 164 集　植松遺跡　大阪府営八尾植松（第１期）住宅（建て替え）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人大阪府文化財センター　P110

表 4　遺物観察表（土器）

挿図番号	遺物番号	図版番号	調査区 遺構	器種 器形	口径 器高 胴径 底径	最大長 最大幅 最大厚	色調	胎土 焼成	時期	残存率	調整・形態の特徴など
21	1	16-2	08-1-1 10 落込み	黒色土器 椀	- (1.6) - (7.5)	- - 0.5	外）7.5YR7/4 にぶい橙色 内）N3/0 暗灰色 断）7.5YR8/3 浅黄橙色	良好 良好	10 世紀後半 ～ 11 世紀	10%	内面のみ黒色化。 底部内面はミガキ。 第 5 層内より出土した破片と接合。
21	2	16-2	08-1-1 10 落込み	土師器 皿	(10.5) (1.5) - -	- - 0.3	外）10YR7/3 にぶい黄橙色 内）10YR7/3 にぶい黄橙色 断）10YR7/3 にぶい黄橙色	良好 良好	10 世紀後半 ～ 11 世紀	20%	「て」の字状口縁をもつ。
21	3	16-2	08-1-2-2 42 溝	瓦器 椀	(14.0) 5.4 - -	- - 0.45	外）N3/0 暗灰色～ N8/0 灰白色 内）N4/0 灰色 断）N8/0 灰白色	良好 良好	12 世紀 初頭	20%	底部内面に格子状暗文あり。 和泉型。
22	1	15-1	08-1-1 第 2 層	瓦質土器 捏鉢 or 擂鉢	(29.0) (4.3) - -	- - 1.25	外）N3/0 暗灰色 内）N4/0 灰色 断）N8/0 灰白色	良好 良好	14 世紀 ～ 15 世紀	10%	外面調整はヘラケズリ。 内面調整は粗いハケ後ユビナデ。
22	2	15-1	08-1-1 第 3 面	白磁 碗	(17.3) (5.55) - -	- - 0.75	釉）5Y6/2 灰オリーブ色 地）5Y7/1 灰オリーブ色 断）5Y7/1 灰白色	良好 良好	12 世紀	10%	内外面体部のみに施釉。 底部内面に円刻あり。
22	3	15-1	08-1-1 側溝 第 1 ～ 4 層	円筒埴輪	- - - -	(4.3) (6.0) 1.2	外）5YR4/2 灰褐色～ 10Y7/1 灰白色 内）2.5Y5/4 にぶい赤褐色 断）N6/0 灰色	やや粗 良好	古墳時代 後期	10%	タガの貼り付け部にハケ目あり。 摩滅著しい。
22	4	15-1	08-1-1 第 3 層	平瓦	- - - -	(6.85) (6.2) 2.1	外）N4/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）7.5Y7/1 灰白色	良好 良好	中世	10%	凸面に縄目痕あり。 凹面に布目痕あり。
22	5	15-1	08-1-1 北壁 第 1 ～ 4 層	瓦器 椀	(8.9) (2.8) - -	- - 0.4	外）N8/0 灰白色～ N4/0 灰色 内）N8/0 灰白色～ N4/0 灰色 断）N8/0 灰白色	良好 やや甘	14 世紀	20%	内面はミガキ。 口縁外面に一段ナデ。 大和型。
22	6	15-1	08-1-1 第 5 層	瓦器 皿	(8.8) (2.05) - -	- - 0.4	外）7.5YR7/4 にぶい橙色～ 10YR7/1 灰白色 内）10YR6/1 褐灰色～ N3/0 暗灰色 断）N7/0 灰白色	良好 良好	14 世紀	10%	内面は摩滅。 口縁外面に一段ナデ。 和泉型。
22	7	15-1	08-1-1 第 4 層	瓦器 椀	(10.3) 2.6 0.4 -	- - 0.4	外）N4/0 灰色 内）N4/0 灰色 断）N8/0 灰白色	良好 良好	14 世紀 前半	20%	内面はミガキ。 口縁外面に一段ナデ。 底部外面に高台なし。 和泉型。
22	8	15-1	08-1-1 第 4 層	瓦器 椀	- (1.8) - (3.0)	- - -	外）N4/0 灰色 内）N5/0 灰色 断）N8/0 灰白色	良好 良好	13 世紀	10%	底部のみの出土。 内面は僅かにミガキ。 断面方形の高台を持つ。
22	9	15-1	08-1-1 第 4 層	瓦器 椀	(4.4) (0.8) - -	- - 0.5	外）N4/0 灰色 内）N4/0 灰色 断）N8/0 灰白色	良好 良好	12 世紀 後半	10%	底部のみの出土。 内面に格子状の暗文あり。 和泉型。
22	10	15-1	08-1-1 第 4 層	土師器 皿	(6.8) 1.3 - -	- - 0.5	外）5Y7/2 灰白色 内）5Y7/2 灰白色 断）5Y6/1 灰色	良好 良好	13 世紀	20%	小型品。 口縁端部を丸く作る。
22	11	15-1	08-1-1 第 4 層	土師器 皿	(8.6) 2.0 - -	- - 0.35	外）10YR6/3 にぶい黄橙色 内）10YR7/2 にぶい黄橙色 断）5YR7/6 橙色	良好 良好	中世	10%	口縁外面に一段ナデ。 底部のユビオサエ顕著。
22	12	15-1	08-1-1 第 4 層	土師器 皿	(8.6) 1.35 - -	- - 0.5	外）5Y7/1 灰白色 内）5Y7/1 灰白色 断）5Y7/1 灰白色	良好 良好	13 世紀	20%	口縁外面に強い一段ナデ。
22	13	15-1	08-1-1 第 4 層	土師器 皿	(12.3) (1.6) - -	- - 0.5	外）2.5Y6/2 灰黄色 内）2.5Y6/1 黄灰色 断）2.5Y7/2 灰黄色	良好 良好	中世	10%	口縁部を尖らせる。 口縁外面に一段ナデ。 内面にハケメ。
22	14	15-1	08-1-1 第 5 層	土師器 皿	(12.7) (1.9) - -	- - 0.4	外）5Y8/1 灰白色 内）5Y8/1 灰白色 断）5Y8/1 灰白色	良好 良好	11 世紀？	10%	口縁外面に二段ナデ。
22	15	15-1	08-1-1 北壁 第 1 ～ 4 層	土師器 皿	(7.2) 0.9 - -	- - 0.5	外）7.5YR6/3 にぶい橙色 内）7.5YR6/3 にぶい橙色～ 7.5YR3/0 暗灰色 断）10YR6/1 褐灰色	良好 やや甘	中世	20%	小型品。 口縁外面に一段ナデ。底面の凹凸顕著。 口縁外面が一部黒色化。灯明皿か。
22	16	15-1	08-1-1 第 4 層	白磁 碗	- (2.6) - (6.9)	- - 1.1	釉）7.5Y7/1 灰白色 地）7.5Y8/1 灰白色 断）N8/0/ 灰白色	粗 良好	12 世紀	30%	内面施釉。底部外面の一部が露胎。 胎土表面に平行タタキ痕跡あり。 底部内面に円刻あり。
23	1	15-2	08-1-2-1 第 1 層	白磁 紅皿	4.6 1.4 - 1.4	- - 0.4	地）N8/1 灰白色 釉）7.5GY8/1 明緑灰色 断）N8/1 灰白色	良好 良好	近世	100%	内面・外面口縁部に施釉。 底面・外面下半部は露胎。
23	2	15-2	08-1-2-1 第 1-2 層	染付 碗	- (5.0) - (4.2)	- - 0.6	釉）2.5GY7/1 明オリーブ灰色 地）2.5GY7/1 明オリーブ灰色 断）N8/0 灰白色	良好 良好	近世	20%	外面に梅の絵付けあり。 見込部に蛇ノ目釉剥ぎあり。 高台先端に離れ砂付着。
23	3	15-2	08-1-2-1 第 1-2 層	青磁 碗	- (3.05) - (4.8)	- - 2.1	釉）10Y5/2 オリーブ灰色外 地）5YR5/4 にぶい赤褐色 N8/0 灰白色 断）N8/0 灰白色～ 10YR8/4 浅黄橙色	良好 良好	15 世紀末 ～ 16 世紀	30%	底部内面に牡丹の影刻あり。 内外面ともに全面に施釉。 高台内輪状の釉掻きあり。

挿図番号	遺物番号	図版番号	調査区 遺構	器種 器形	口径 器高 胴径 底径	最大長 最大幅 最大厚	色調	胎土 焼成	時期	残存率	調整・形態の特徴など
23	4	16-1	08-1-2-1 第３層	土師器 皿	(8.0) (1.7) - -	- - 0.5	外）10YR5/1 褐灰色 内）10YR6/1 褐灰色 断）10YR8/2 灰白色	良好 良好	15 世紀以後	10%	口縁外面に一段ナデ。 内面の一部に煤付着。
23	5	16-1	08-1-2-1 第３層	瓦器 椀	(12.6) (3.1) - -	- - 0.3	外）5Y7/1 灰白色 内）2.5Y5/1 黄灰色 断）5Y7/1 灰白色	良好 良好	13 世紀	5%	口縁外面に一段ナデ。 内面に疎らなミガキ。 和泉型。
23	6	16-1	08-1-2-1 第３面	土師器 皿	(12.0) 2.4 - -	- - 0.4	外）5YR6/4 にぶい橙色 内）5YR6/4 にぶい橙色 断）5YR6/4 にぶい橙色	良好 良好	中世？	10%	内面にハケメあり。
23	7	16-1	08-1-2-1 第５面	瓦器 椀	(15.7) (4.6) - -	- - 0.5	外）N4/0 灰色 内）N3/0 暗灰色 断）N8/0 灰白色	良好 良好	12 世紀中葉	20%	内外面にミガキ。 底部内面に格子状暗文あり。 和泉型。
23	8	16-1	08-1-2-1 第４層	土師器 皿	(8.5) 1.4 - -	- - 0.55	外）7.5YR8/4 浅黄橙色 内）7.5YR8/4 浅黄橙色 断）7 .5YR8/4 浅黄橙	良好 良好	13 世紀以後	10%	小型品。
23	9	16-1	08-1-2-1 第５層	白磁 碗	- (2.7) - (6.7)	- - 1.5	釉）10Y7/1 灰白色 地）10Y8/1 灰白色 断）10Y8/1 灰白色	良好 良好	11 世紀後半 ～ 12 世紀初頭	10%	内面施釉。 底面中央が僅かに盛り上がる。 高台・高台内は露胎。
23	10	16-1	08-1-2-1 第５層	須恵器 壺	- (1.8) - (10.6)	- - 0.8	地）N8/0 灰白色 釉）2.5GY7/1 明オリーブ灰色 内）N8/0 灰白色 断）N8/0 灰白色	やや粗 良好	古代	5%	底部外面に沈線一条。 底部内面に自然釉付着。 壷Ｋ or Ｎ？
23	11	16-1	08-1-2-2 第２層	施釉陶器 碗	- (2.7) - (6.7)	- - 1.1	外）N6/0 灰色 釉）7.5YR3/3 暗褐色 内）N6/0 灰色 断）N6/0 灰色	良好 良好	中近世	10%	胎土は須恵質。 見込部に蛇ノ目釉剥と離れ砂付着。 底部外面は露胎。
23	12	16-1	08-1-2-1 第３層	平瓦	- - - -	5.4 (9.0) (2.3)	外）N4/0 灰色 内）N4/0 灰色 断）N6/0 灰色	良好 良好	中世	10%	凸面は縄目。 凹面はヘラケズリ。
25	1	-	08-1-1 第６層 中層	弥生土器 甕	- (2.4) - 4.4	- - 1.0	外）5YR7 /4 にぶい橙色 内）5Y8/1 灰白色 断）N3/0 暗灰色	良好 良好	弥生時代後期	10%	外面はタタキ。 内面はヘラケズリ。
25	2	17-1	08-1-1 第６層 上層	土師器 鉢	(9.2) (3.2) - -	- - 0.6	外）2.5Y6/3 にぶい橙色 内）2.5Y6/3 にぶい橙色 断）5Y6/1 褐灰色	良好 良好	古墳時代前期 （庄内式後半期）	10%	内外面ともにユビナデ。
25	3	17-1	08-1-1 第６層 上層	土師器 小型壺	(10.1) 5.4 - -	- - 0.5	外）7.5YR7/2 明褐灰色 内）10YR7/2 にぶい黄橙色 断）2.5YR6/6 橙色	良好 良好	古墳時代前期 （庄内式後半期）	20%	外面はユビナデ。 内面はヘラケズリ。
25	4	17-1	08-1-1 第６層 上層	土師器 杯	(12.5) 2.95 - -	- - 0.4	外）2.5Y7/2 灰黄色～ N3/0 暗灰色 内）2.5Y7/2 灰黄色 断）2.5Y7/2 灰黄色	良好 良好	8 世紀前半	20%	器壁内面に放射状暗文あり。 底部内面に螺旋暗文あり。
25	5	17-1	08-1-1 第６層 上層	須恵器 杯蓋	(16.2) (3.55) - -	- - 0.8	外）5B5/1 青灰色 内）5B5/1 青灰色 断）N5/0 灰色	良好 良好	6 世紀後半 ～ 7 世紀初頭	10%	外面口縁部はユビナデ。 外面天井部はヘラケズリ。
25	6	17-1	08-1-1 第６層 上層	須恵器 杯身	(11.7) 4.7 - -	- - 1.0	外）N6/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）10YR7/1 灰白色	良好 良好	6 世紀中葉	40%	口縁部はやや内傾し、口縁端部に段を作る。 底部外面・蓋受部に釉着痕跡あり。
25	7	17-1	08-1-1 第６層 中層	須恵器 杯椀	11.4 3.7 - -	- - 0.7	外）N6/0 灰色 内）N5/0 灰色 断）N6/0 灰色	良好 良好	7 世紀	80%	底部外面は回転ヘラ切り。 内面はヨコナデ後、中央に縦方向のナデ。
25	8	17-1	08-1-1 第６層 上層	須恵器 杯身	(10.6) (5.0) - -	- - 0.65	外）N6/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）N6/0 灰色	やや粗 良好	8 世紀	10%	摩滅著しい。 低い貼付け高台あり。
25	9	17-1	08-1-1 第６層 上層	須恵器 壺	(9.8) (5.7) - -	- - 1.0	外）N6/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）N8/0 灰白色	良好 良好	8 世紀	10%	底部外面縁辺部に工具の掻痕あり。 内面に自然釉付着。
25	10	17-1	08-1-1 第６層 上層	須恵器 壺	(12.4) (11.4) - -	- - 1.5	外）N6/0 灰色 内）N7/0 灰白色 断）N7/0 灰白色	良好 良好	8 世紀	20%	高台内に粘土塊付着。
25	11	17-1	08-1-1 第６層 上層	須恵器 平瓶	- 2.4 - -	- - 1.0	外）N4/0 灰色 内）5B4/1 暗青灰色 断）10R5/2 灰赤色	良好 甘	7 世紀	20%	粘土板の充填痕跡顕著。 外面にヘラ記号あり。
26	1	18-1	08-1-2-1 第６層 下層	弥生土器 壺	- (5.9) - (10.5)	- - 3.2	外）2.5R4/4 にぶい赤褐色 内）5YR6/6 橙色 断）10YR4/1 褐灰色	粗 やや甘	弥生時代	10%	摩滅著しい。
26	2	18-1	08-1-2-1 第６層 下層	土師器 高杯	(16.4) (3.6) - -	- - 0.5	外）7 .5YR8/3 浅黄橙色 内）5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR8/3 浅黄橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式期？）	15%	摩滅著しい。 外面にハケメ僅かに残る。
26	3	18-1	08-1-2-1 第６層 下層	土師器 高杯	- (8.9) - (12.4)	- - 0.9	外）2.5Y7 /2 灰黄色 内）7.5YR7/3 にぶい橙色 断）7.5YR5/3 にぶい褐色	粗 やや甘	古墳時代前期 （布留式期）	30%	裾端部はナデにより端面を作る。 外面はハケメ後ミガキ 内面は横方向のヘラケズリ

挿図番号	遺物番号	図版番号	調査区 遺構	器種 器形	口径 器高 胴径 底径	最大長 最大幅 最大厚	色調	胎土 焼成	時期	残存率	調整・形態の特徴など
26	4	18-1	08-1-2-1 第６層 下層	土師器 高杯	(20.0) 13.45 - -	- - 0.7	外）10YR7/2 にぶい黄橙色 内）10YR7/2 にぶい黄橙色 断）10YR6/2 灰白色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式後半期）	50%	外面は斜め方向のハケメ。 口縁端部に凹線状の段あり。 脚部・裾部外面に縦方向のハケメ。
26	5	19-1	08-1-2-1 第６層 下層	土師器 小型器台	(9.8) (3.3) - -	- - 1.2	外）5YR7/3 にぶい橙色 内）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）7.5YR5/4 にぶい褐色	良好 良好	古墳時代前期 （庄内式後半期）	40%	底部内面は中央が僅かに盛り上がる。 外面は粗いユビナデ。
26	6	18-1	08-1-2-1 第６層 下層	土師器 小型丸底壺	(7.6) 9.1 - -	- - 0.55	外）2.5Y7/2 灰黄色 内）2.5Y7/2 灰黄色 断）10YR6/2 灰黄褐色	やや粗 やや甘	古墳時代前期 （布留式後半期）	70%	肩部外面はハケメ後ヨコナデ。 胴部外面はヘラケズリ。
26	7	19-1	08-1-2-1 第６層 下層	土師器 小型丸底壺	- (7.5) 9.3 -	- - 0.65	外）10YR7/3 にぶい黄橙色 内）10YR7/3 にぶい黄橙色 断）10YR7/3 にぶい黄橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式後半期）	70%	肩部外面は縦方向のハケメ。 胴部外面はヘラケズリ。
26	8	19-1	08-1-2-1 第６層 上層	土師器 杯	(12.7) 4.3 - -	- - 0.55	外）10YR7/3 にぶい黄橙色 N3/0 暗灰色 内）10YR7/2 にぶい黄橙色 断）10YR7/2 にぶい黄橙色	良好 良好	7 世紀末葉 ～ 8 世紀初頭	30%	口縁部外面に一段のヨコナデ。 器壁内面に粗い放射暗文あり。
26	9	18-1	08-1-2-1 第６層 下層	土師器 杯	(14.0) (4.5) - -	- - 0.5	外）5YR7/6 橙色 内）5YR7/6 橙色 断）5YR7 4 にぶい橙色	良好 良好	8 世紀	10%	口縁外面に二段のヨコナデ。 器壁内面に僅かに放射暗文残る。
26	10	19-1	08-1-2-1 第６層 下層	土師器 杯	(14.4) 4.5 - -	- - 0.5	外）7.5YR6/3 にぶい褐色 内）10YR6/3 にぶい黄橙色 断）10YR7/3 にぶい黄橙色	良好 良好	8 世紀	15%	口縁外面に二段のヨコナデ 器壁内面に放射暗文あり。
26	11	18-1	08-1-2-1 第６層 下層	土師器 杯	(16.0) (3.1) - -	- - 0.4	外）2.5YR6/4 にぶい橙色 内）10R5/4 赤褐色 断）2.5YR6/4 にぶい橙色	良好 良好	8 世紀	5%	口縁部外面に一段のヨコナデ。 器壁内面に粗い放射暗文あり。
2	12	19-1	08-1-2-1 第６層 下層	土師器 杯	(11.2) 2.5 - -	- - 0.45	外）2.5Y7/2 灰黄色 内）2.5Y7/2 灰黄色 断）2.5Y7/2 灰黄色	良好 良好	8 世紀	25%	口縁部外面に一段のヨコナデ。 器壁内面に粗い放射暗文あり。 底部内面に螺旋暗文あり。
26	13	18-1	08-1-2-1 第６層 中層	土師器 杯	- (2.6) 14.0 -	- - 0.65	外）2.5Y7/2 灰黄色 内）2.5Y7/2 灰黄色 断）5YR5/6 明赤褐色	良好 良好	8 世紀	20%	器壁内面に放射暗文あり。 底部内面に輪状暗文あり。 底部外面に細かい指頭圧痕あり。
26	14	18-1	08-1-2-1 第６層 下層	土師器 杯	(13.0) (2.3) - -	- - 0.6	外）7.5YR7/3 にぶい橙色 内）7.5YR7/3 にぶい橙色 断）7.5YR7/3 にぶい橙色	良好 良好	8 世紀	10%	口縁部外面に一段のヨコナデ。 内面はナデ。 口縁の一部が黒色化。墨痕または煤痕か？
26	15	19-1	08-1-2-1 第６層 下層	土師器 杯	(13.6) 3.9 - -	- - 0.5	外）2.5Y7/2 灰黄色 内）2.5Y7/2 灰黄色 断）7.5YR5/4 にぶい褐色	良好 良好	8 世紀	50%	口縁部外面に一段のヨコナデ。 内面はナデ。
26	16	18-1	08-1-2-1 第６層 下層	土師器 鉢	(13.6) (4.2) - -	- - 0.35	外）7.5YR7/3 にぶい橙色 内）7.5YR7/3 にぶい橙色 断）7.5YR7/3 にぶい橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式期）	10%	摩滅顕著。
26	17	19-1	08-1-2-1 第６層 中層	土師器 高杯	- 10.1 - 14.4	- - 2.3	外）2.5Y7/2 灰黄色 内）2.5Y7/2 灰黄色 断）5YR6/4 にぶい橙色	良好 良好	8 世紀	40%	脚部外面はヘラケズリ。 裾部外面はハケメ。 脚部内面に絞り目が残る。
26	18	18-1	08-1-2-1 第６層 下層	土師器 皿	(19.4) 2.3 - -	- - 0.5	外）5YR7/3 にぶい橙色 内）5YR7/3 にぶい橙色 断）5YR7/3 にぶい橙色	粗 良好	8 世紀	10%	口縁部外面に一段のヨコナデ。 口縁の一部が炭化物付着により黒色化。
26	19	18-1	08-1-2-1 第６層 中層	土師器 鉢	(24.2) (8.3) - -	- - 0.95	外）5YR7/3 にぶい橙色 内）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）7.5YR7/4 にぶい橙色	良好 良好	8 世紀	10%	大型品。 内外面ともにヨコナデ。 内面器壁の表面が剥離。使用痕か？
26	21	19-1	08-1-2-1 第６層 下層	須恵器 甕	(21.6) (6.4) - -	- - 1.0	外）N6/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）2.5YR5/2 灰赤色	良好 良好	古代	10%	底部外面は平行タタキ後ヨコナデ。 肩部外面は平行タタキ後カキ目。 体部内面は同心円状タタキ。 内面頚部に工具によるキズあり。
27	1	20-1	08-1-2-1 第６層 下層	須恵器 杯蓋	(13.8) 3.7 - -	- - 0.9	外）5Y6/1 灰色 内）5Y6/1 灰色 断）5Y6/1 灰色	粗 良好	6 世紀	70%	天井部外面は回転ヘラケズリ。 口縁部の稜線退化。 天井部外面中央に焼成後線刻三条あり。
27	2	20-1	08-1-2-1 第６層 下層	須恵器 杯蓋	(13.9) 3.7 - -	- - 0.8	外）N6/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）N6/0 灰色	良好 良好	6 世紀末葉 ～ 7 世紀初頭	15%	天井部外面は回転ヘラケズリ。 口縁部に指頭圧痕顕著。
27	3	20-1	08-1-2-1 第６層 下層	須恵器 杯蓋	(14.8) 3.9 - -	- - 0.6	外）N6/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）N6/0 灰色	粗 良好	6 世紀前半	15%	口縁部の稜が明確に残る。 口縁端部に段を作る。
27	4	20-1	08-1-2-1 第６層 下層	須恵器 杯蓋	(14.2) (4.6) - -	- - 0.6	外）N6/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）N6/0 灰色	良好 良好	6 世紀末葉 ～ 7 世紀	25%	内面広く黒色化。煤または墨痕？
27	5	20-1	08-1-2-1 第６層 下層	須恵器 杯身	12.8 5.4 - -	- - 0.8	外）N6/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）N6/0 灰色	粗 良好	6 世紀	100%	受部・口縁部は丁寧なユビナデ。 内面はヨコナデ、中央に縦方向のナデ。
27	6	20-1	08-1-2-1 第６層 下層	須恵器 杯身	(12.6) 3.2 - -	- - 0.8	外）N7/0 灰色 内）N7/0 灰色 断）N7/0 灰色	粗 良好	7 世紀	60%	底部外面の回転ヘラケズリ周辺をユビナデして高台状に作る。 底部内面に焼成前線刻あり。

挿図番号	遺物番号	図版番号	調査区 遺構	器種 器形	口径 器高 胴径 底径	最大長 最大幅 最大厚	色調	胎土 焼成	時期	残存率	調整・形態の特徴など
27	7	20-1	08-1-2-1 第６層 中層	須恵器 杯身	(16.0) (4.3) - -	- - 0.4	外）N6/0 灰色 内）N7/0 灰白色 断）N7/0 灰白色	良好 良好	８世紀	5%	口縁部内外面ともにナデ。
27	8	21-1	08-1-2-1 第６層 下層	須恵器 杯蓋	10.4 2.9 - -	- - 0.7	外）N7/0 灰白色 内）N6/0 灰色 断）-	粗 良好	７世紀中葉	100%	小型品。頂部に乳頭状の摘みをもつ。 器壁内面はナデ。外面に自然釉付着。
27	9	20-1	08-1-2-1 第６層 下層	須恵器 杯蓋	(15.0) (1.8) - -	- - 0.6	外）N6/1 灰色 内）7.5Y7/1 灰白色 断）7.5Y7/1 灰白色	粗 良好	８世紀前半	25%	外面はヨコナデ後ヘラケズリ。 内面はナデ。
27	10	-	08-1-2-1 第６層	須恵器 長頸壺	8.9 (5.7) - -	- - 0.55	外）N6/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）N6/0 灰色	良好 良好	８世紀末葉 ～ ９世紀	15%	口縁端部を受口状に摘み上げる。 口縁部先端に端面を作る。
27	11	21-1	08-1-2-1 第６層 下層	須恵器 平瓶	- 11.8 16.6 -	- - 0.7	外）N6/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）N6/0 灰色	粗 良好	７世紀	80%	胴部外面は平行タタキ、底部はヘラケズリ。 肩部以上は丁寧なナデ。 内部に粘土板の充填痕跡残る。
27	12	21-1	08-1-2-1 第６層 下層	須恵器 甕	- 16.1 20.65 -	- - 0.8	外）N7/0 灰色 内）N7/0 灰色 断）7.5Y4/1 灰色	粗 やや甘	７世紀 ～ ８世紀	80%	体部外面は平行タタキ後カキメ。 底部外面はヘラケズリ。 胴部に工具によるキズ？あり。
27	13	20-1	08-1-2-1 第６層 下層	須恵器 長頸壺	- (6.2) - (11.7)	- - 0.9	外）N7/0 灰白色 釉）7.5Y7/2 灰白色 内）N7/0 灰白色 断）N7/0 灰白色	良好 良好	８世紀	10%	内外面ともにナデ。 底部内面に自然釉付着。
27	14	21-1	08-1-2-1 第６層 上層	須恵器 短頸壺	(18.0) (7.3) - -	- - 1.4	外）N7/0 灰白色 釉）10Y6/1 灰色 内）N7/0 灰白色 断）N7/0 灰白色	粗 良好	７世紀後半	10%	器壁内面は同心円状タタキ。 肩部外面は平行タタキ。 自然釉の付着あり。
27	15	21-1	08-1-2-1 第６層 上層	須恵器 甕	- (8.0) 19.7 -	- - 1.1	外）7.5Y7/1 灰白色 内）7.5Y7/1 灰白色 断）7.5Y8/1 灰白色	粗 やや甘	７世紀 ～ ８世紀	20%	底部外面に粗いヘラケズリ。 火襷状の黒斑が数条あり。 器壁内面はナデ。
27	16	21-1	08-1-2-1 第６層 下層	須恵器 提瓶	- (7.3) - -	20.3 19.3 1.2	外）5B5/1 青灰色 内）5B5/1 青灰色 断）5RP6/1 紫灰色	粗 やや甘	６世紀後半	40%	体部外面、渦巻き状にカキメあり。 体部下半に焼成前線刻あり。 自然釉付着、釉着痕跡あり。
27	17	20-1	08-1-2-1 第６層 下層	須恵器 杯？	- (2.85) - -	(8.5) (7.9) 0.95	外）N5/0 灰色 内）N4/0 灰色 断）2.5YR4/2 灰赤色	良好 良好	–	20%	底部外面はヘラケズリ後線刻あり。 内面に墨または煤付着。
28	1	22-1	08-1-2-2 第６層 中層	土師器 杯	(12.2) 3.2 - -	- - 0.45	外）10YR6/3 にぶい黄橙色 内）10YR6/4 にぶい黄橙色 断）10YR4/1 褐灰色	良好 やや甘	７世紀末葉 ～ ８世紀初頭	20%	口縁部外面に一段のヨコナデ。 器壁内面に僅かに放射暗文残る。
28	2	22-1	08-1-2-2 第６層 下層	土師器 杯	(13.5) (2.9) - -	- - 0.3	外）2.5Y7/1 灰白色 内）2.5Y7/1 灰白色 断）2.5Y7/1 灰白色	良好 良好	７世紀後半	15%	口縁部外面に一段のヨコナデ。 器壁内面はナデ後放射暗文あり。
28	3	22-1	08-1-2-2 第６層 下層	土師器 高杯	(15.3) (4.75) - -	- - 0.45	外）7.5YR6/6 橙色 内）5YR6/6 橙色 断）10YR8/3 浅黄橙色	粗 やや甘	６世紀末葉 ～ ７世紀	20%	外面摩滅著しい。 器壁内面はナデ後放射暗文あり。
28	4	22-1	08-1-2-2 第６層 下層	土師器 高杯	(15.6) (3.6) - -	- - 0.6	外）2.5Y7/1 灰白色 内）2.5Y7/2 灰黄色 断）2.5Y7/2 灰黄色	良好 良好	７世紀前半	5%	杯部が浅く、器壁が厚い。 杯部下半部に段あり。
28	5	22-1	08-1-2-2 第６層 中層	土師器 高杯	(19.4) (4.9) - -	- - 0.75	外）2.5Y7/1 灰白色 内）2.5Y7/2 灰黄色 断）2.5Y7/2 灰黄色	良好 良好	６世紀末葉 ～ ７世紀	10%	杯部外面下半部に簡略化された段あり。器壁内面はナデ後、疎らな放射暗文あり。
28	6	21-2	08-1-2-2 第６層 下層	土師器 ミニチュア 土器	- (3.3) - 5.4	- - 0.8	外）5YR6/6 橙色 内）5YR6/6 橙色 断）5YR6/6 橙色	良好 良好	８世紀？	50%	高杯形ミニチュア土器の脚部。 手捏ねで作成。 指頭圧痕顕著に残る。
28	7	22-1	08-1-2-2 第６層 中層	土師器 皿	(16.6) 2.2 - -	- - 0.4	外）10YR7/2 にぶい黄橙色 内）10YR7/2 にぶい黄橙色 断）5YR5/3 にぶい赤褐色	良好 良好	８世紀前半	10%	器壁内面に放射暗文 底部内面に螺旋暗文。 外面口縁部と内面に煤付着。
28	8	22-1	08-1-2-2 第６層 中層	土師器 皿	(17.6) 1.9 - -	- - 0.4	外）10YR7/4 にぶい黄橙色 内）2.5Y7/2 黄灰色 断）10YR7/4 にぶい黄橙色	良好 良好	８世紀中葉	25%	底部外面、指頭圧痕顕著。 器壁は内外面ともにナデ。
28	9	22-1	08-1-2-2 第６層 下層	土師器 皿	(22.2) 2.8 - -	- - 0.5	外）5Y7/2 灰白色 内）5Y7/3 浅灰色 断）5Y7/2 灰白色	良好 良好	８世紀前半	15%	口縁部外面に一段のヨコナデ。 器壁内面に放射暗文。
28	10	22-2	08-1-2-2 第６層 下層	土師器 皿	- 1.2 - -	(9.8) (8.3) 0.7	外）10YR7/1 灰白色 内）10YR6/3 にぶい黄橙色 断）10YR7/1 灰白色 5YR5/4 にぶい赤褐色	良好 良好	８世紀前半	10%	大型品。 底部内面に螺旋暗文。
28	11	22-1	08-1-2-2 第６層 中層	円筒埴輪	- - - -	(9.0) (8.8) 1.8	外）7.5YR8/4 浅黄橙色 内）7.5YR7/6 橙色 断）5YR7/8 橙色 10YR8/4 浅黄橙色	やや粗 やや甘	古墳時代後期	5%	タガの突出、明瞭。 外面、斜め方向のハケメ。
28	12	21-2	08-1-2-2 第６層 下層	弥生土器 甕	- (4.2) - 8.8	- - 2.0	外）2.5Y7/2 灰黄色 内）2.5Y6/2 灰黄色 断）2.5Y4/1 黄灰色	やや粗 良好	弥生時代	10%	外面、縦方向の細かいハケメ。 内面、ヘラケズリ。 底部外面に煤付着。

挿図番号	遺物番号	図版番号	調査区 遺構	器種 器形	口径 器高 胴径 底径	最大長 最大幅 最大厚	色調	胎土 焼成	時期	残存率	調整・形態の特徴など
28	13	21-2	08-1-2-2 第６層 下層	弥生土器 壺	- (10.1) - 9.8	- - 3.0	外）2.5Y5/2 暗灰黄色 内）2.5Y6/2 灰黄色 断）2.5Y4/1 黄灰色	やや粗 やや甘	弥生時代中期	20%	外面、縦方向のミガキ。 内面、ヘラケズリ。
29	1	22-2	08-1-2-2 第６層 下層	須恵器 杯蓋	(14.7) 4.25 - -	- - 0.7	外）N5/0 灰色～ N7/0 灰白 内）N7/0 灰白色 断）N7/0 灰白色	やや粗 良好	６世紀末葉	30%	外面天井部、回転ヘラケズリ後、 焼成前線刻「×」。 内面ヨコナデ後、縦方向のナデ。
29	2	22-2	08-1-2-2 第６層 中層	須恵器 杯蓋	(13.1) (3.9) - -	- - 0.7	外）N4/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）N6/0 灰色	粗 良好	７世紀初頭	20%	外面天井部、回転ヘラケズリ。 内面、ヨコナデ。
29	3	22-2	08-1-2-2 第６層 下層	須恵器 杯蓋	(15.9) (4.2) - -	- - 0.7	外）N7/0 灰白色 内）N7/0 灰白色 断）N7/0 灰白色	粗 良好	６世紀	10%	外面、ヨコナデによる稜あり。 口縁端部に段あり。
29	4	23-1	08-1-2-2 第６層 中層	須恵器 蓋	(15.4) 3.7 - -	- - 1.7	外）N5/0 灰色 内）N4/0 灰色 断）N7/0 灰白色～ 2.5YR5/1 赤灰色	やや粗 やや甘	８世紀初頭	50%	外面に融着痕跡あり。 内面ヨコナデ後、縦方向のナデ。
29	5	23-1	08-1-2-2 第６層 下層	須恵器 杯蓋	(18.3) 2.8 - -	- - 0.8	外）N8/0 灰白色 内）N8/0 灰白色 断）N8/0 灰白色	粗 良好	８世紀前半	50%	外面天井部、回転ヘラケズリ。 内面ヨコナデ後、縦方向のナデ。
29	6	23-1	08-1-2-2 第６層 下層	須恵器 蓋	- (2.2) - -	- - 0.5	外）2.5Y6/1 黄灰色 内）2.5Y4/1 黄灰色～ 2.5Y3/1 黒褐色 断）N6/0 灰色	やや粗 やや甘	８世紀後半	50%	口縁部全周欠損。 内面に広く墨痕あり。 墨痕の上から使用後線刻「×」。
29	7	23-1	08-1-2-2 第６層 中層	須恵器 蓋	- (2.4) - -	- - 0.8	外）N7/0 灰白色 内）N7/0 灰白色 断）N7/0 灰白色	粗 良好	８世紀後半 ～ ９世紀前半	70%	外面天井部、回転ヘラケズリ。 外面摘部横に焼成前線刻「キ」。 内面ヨコナデ後、縦方向のナデ。
29	8	23-1	08-1-2-2 第６層 下層	須恵器 杯身	10.4 3.65 - -	- - 1.0	外）N6/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）N6/0 灰色	粗 良好	７世紀	90%	底部外面、回転ヘラケズリ。 外面に焼成後線刻「－」。 内面ヨコナデ後、縦方向のナデ。
29	9	23-1	08-1-2-2 第６層 下層	須恵器 杯身	11.6 4.1 - -	- - 1.0	外）N4/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）N6/0 灰色	粗 良好	６世紀末葉 ～ ７世紀初頭	100%	内外面に自然釉あり。 底部外面に石片と土器片が融着。
29	10	23-1	08-1-2-2 第６層 下層	須恵器 杯身	(11.4) (2.1) - -	- - 0.75	外）N7/0 灰白色 内）N7/0 灰白色 断）N6/0 灰色	粗 やや甘	７世紀？	40%	外面天井部、回転ヘラケズリ。 外面に焼成後線刻「－」。 内面ヨコナデ後、縦方向のナデ。
29	11	23-1	08-1-2-2 第６層 下層	須恵器 杯身	(11.8) 2.1 - -	- - 0.8	外）N5/0 灰色 内）N7/0 灰白色 断）N8/0 灰白色～ 2.5YR5/1 赤灰色	やや粗 やや甘	古墳時代後期	40%	底部外面中央に焼成前線刻「－」。 線刻の上から指または工具による 掻痕あり。 融着痕跡あり。
29	12	24-1	08-1-2-2 第６層 中層	須恵器 杯身	- (2.4) 0.6 (13.4)	- - 0.6	外）N6/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）N7/0 灰白色	粗 やや甘	８世紀	20%	底部外面に低い高台あり。 内面ヨコナデ後、縦方向のナデ。
29	13	24-1	08-1-2-2 第６層 上層	須恵器 杯身	(15.1) 4.9 - (9.8)	- - 0.7	外）N6/0 灰色 内）N7/0 灰白色 断）N7/0 灰白色	良好 良好	８世紀	25%	底部外面に低い高台あり。 内外面に黒漆が付着。漆皿として 転用か？
29	14	24-1	08-1-2-2 第６層 下層	須恵器 長脚高杯	(9.2) (4.5) - -	- - 0.5	外）N5/0 灰色 内）N5/0 灰色 断）N5/0 灰色	粗 やや甘	６世紀	10%	底部外面、回転ヘラケズリ。 脚部との接合部、僅かに残る。 ３～４方向に方形スカシあり。
29	15	22-2	08-1-2-2 第６層 下層	須恵器 長脚高杯	(12.6) (5.7) - -	- - 0.5	外）N6/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）N6/0 灰色	やや粗 良好	６世紀	5%	杯部内面に焼成前線刻「－」。 杯部外面に同心円タタキのこる。 ３箇所に方形スカシあり。
29	16	22-2	08-1-2-2 第６層 下層	須恵器 無蓋高杯	(9.2) (4.1) - -	- - 0.8	外）N7/0 灰白色 内）N6/0 灰 断）N6/0 灰色	良好 良好	６世紀	10%	内外面ともにユビナデ。 ４箇所に方形のスカシあり。
29	17	24-1	08-1-2-2 第６層 中層	須恵器 甕	21.0 (4.4) - -	- - 1.1	外）7.5YR6/2 灰褐色～ 5B6/1 青灰色 内）7.5YR6/2 灰褐色～ 5B6/1 青灰色 断）5B7/1 明青灰色～ 7.5YR7/6 橙色	やや粗 やや甘	古墳時代後期	10%	口縁部のみ出土。 口縁部外面、平行タタキ後ナデ。 口縁端面に凹線状の窪みあり。
29	18	24-1	08-1-2-2 第６層 下層	須恵器 甕	36.0 (11.4) - -	- - 1.1	外）N4/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）10R6/1 赤灰色	やや粗 甘	古墳時代後期	10%	口縁部のみ出土。 口縁外面中央に１～２状の凹線、 その上位に波状文あり。
29	19	22-2	08-1-2-2 第６層 中層	須恵器 短頸壺	(10.6) (2.5) - -	- - 0.6	外）N7/0 灰白色 内）N7/0 灰白色 断）N7/0 灰白色	やや粗 良好	８世紀前半	5%	肩部外面に自然釉付着。
29	20	22-2	08-1-2-2 44 溝	須恵器 壺	(15.1) (8.0) - -	- - 0.7	外）7.5Y3/1 オリーブ黒色 内）N3/0 暗灰色 断）7.5YR5/1 褐灰色	やや粗 やや甘	８世紀前半	5%	内外面ともにユビナデ。 肩部の屈曲が明瞭。
29	21	22-2	08-1-2-2 第６層 中層	須恵器 盤 or 壺	- 2.8 - (18.0)	- - 0.7	外）2.5Y7/2 灰黄色 内）2.5Y7/2 灰黄色 断）2.5Y7/2 灰黄色	やや粗 甘	８世紀	5%	底部のみの出土。 軟質。須恵器の器形を模した土師 器の可能性あり。

挿図番号	遺物番号	図版番号	調査区 遺構	器種 器形	口径 器高 胴径 底径	最大長 最大幅 最大厚	色調	胎土 焼成	時期	残存率	調整・形態の特徴など
30	2	25-1	08-1-2-1 第７層	土師器 有段鉢	(12.4) (3.0) - -	- - 0.5	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR6/4 にぶい橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	5%	外反する口縁部に緩い段あり。 内外面ともに横方向ミガキ。
33	1	25-2	08-1-2-1 土器だまり１	土師器 小型丸底壺	11.2 7.9 - -	- - 0.5	外）7.5YR5/4 にぶい褐色 内）7.5YR5/4 にぶい褐色 断）7.5YR5/4 にぶい褐色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	80%	口縁部外面、ユビナデ後ミガキ。 体部外面、ヘラケズリ後ミガキ。 底部内面、ユビナデ。
33	2	25-2	08-1-2-1 土器だまり１	土師器 壺	- (8.4) (14.0) -	- - 0.6	外）10YR5/2 灰黄褐色 内）10YR6/2 灰黄褐色 断）10YR6/2 灰黄褐色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	25%	外面、ハケメまたはユビナデ。 内面ヘラケズリ。
33	3	25-2	08-1-2-1 土器だまり１	土師器 高杯	- (9.8) - (10.6)	- - 1.4	外）7.5YR6/6 橙色 内）7.5YR7/6 橙色 断）7.5YR7/6 橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式初頭）	40%	裾端部、全周欠損。 脚部外面、ヘラケズリ後ミガキ。 脚部内面に胎土の絞り目あり。
33	4	25-2	08-1-2-1 土器だまり１	土師器 二重口縁壺	(14.8) (6.4) - (6.4)	- - 0.7	外）10YR6/2 灰黄褐色 内）10YR6/2 灰黄褐色 断）10YR6/2 灰黄褐色	やや粗 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	5%	口縁端部、全周欠損。 頸部外面、ハケメ後ヨコナデ。 口縁部外面、内面はナデ。
33	5	26-1	08-1-2-1 土器だまり１	土師器 広口壺	(18.8) (29.7) - -	- - 0.8	外）10YR5/3 にぶい黄橙色 内）10YR5/3 にぶい黄橙色～ N2/0 黒色 断）10YR7/3 にぶい黄橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式初頭）	20%	外面、斜め方向のハケメ。 口縁部・頸部外面はハケメ後ナデ。
33	6	25-2	08-1-2-1 土器だまり１	土師器 甕	(14.2) - (22.0) -	- - 0.5	外）10YR7/3 にぶい黄橙 内）7.5YR6/3 にぶい褐色 断）10YR7/3 にぶい黄橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	20%	高さがある口縁部をもつ。 体部外面、縦方向のハケメ。 底部外面付近に煤付着。
33	7	26-1	08-1-2-1 土器だまり１	土師器 甕	(12.6) (5.8) - -	- - 0.4	外）N2/0 黒色 内）10YR5/2 灰黄褐色 断）10YR6/2 灰黄褐色	やや粗 良好	古墳時代前期 （庄内式後半期）	10%	口縁端部、上方への摘み上げ顕著。 体部外面、タタキ後ハケメ。 体部内面、ヘラケズリ。 口縁部内面、横方向のハケメ。
33	8	26-1	08-1-2-1 土器だまり１	弥生土器 甕	13.4 3.4 - 10.7	- - 0.7	外）2.5Y6/3 にぶい黄色 内）10YR6/4 にぶい黄橙色 断）10YR6/4 にぶい黄橙色	良好 良好	弥生時代後期	95%	底部接地面はドーナツ状。 体部外面、横～斜め方向のタタキ。 体部内面、ヘラケズリとヨコナデ。
33	9	26-1	08-1-2-1 土器だまり１	弥生土器 甕	12.5 3.5 - 12.6	- - 0.7	外）10Y7/4 にぶい黄色 内）7.5YR7/4 にぶい黄橙色 断）7.5YR7/4 にぶい黄橙色	良好 良好	弥生時代後期	100%	底部接地面はドーナツ状。 体部外面、横～斜め方向のタタキ。 体部内面、ヘラケズリとヨコナデ。 体部外面に黒斑、輪状に煤付着。
35	1	26-1	08-1-2-1 土器だまり２	土師器 小型丸底壺	(10.7) (7.6) - -	- - 0.7	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR6/4 にぶい橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	70%	外面体部・口縁部、ミガキ。 内面、ユビナデ。
35	2	26-1	08-1-2-1 土器だまり２	土師器 小型丸底壺	11.3 7.9 - -	- - 0.5	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR6/4 にぶい橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	90%	外面体部・口縁部、ミガキ。 内面、ユビナデ。 底部外面に黒斑あり。
35	3	26-1	08-1-2-1 土器だまり２	土師器 有段鉢	15.1 4.9 - -	- - 0.6	外）7.5YR5/4 にぶい橙色 内）7.5YR5/4 にぶい橙色 断）7.5YR5/4 にぶい橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	60%	内外面ともにミガキ。 底部内面に「－」黒色痕跡。
35	4	27-1	08-1-2-1 土器だまり２	土師器 有段鉢	(14.6) (5.4) - -	- - 0.5	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR6/4 にぶい橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	10%	内外面ともにミガキとナデ。 内面、横方向ミガキ後、疎らな縦方向ミガキ。
35	5	27-1	08-1-2-1 土器だまり２	土師器 有段鉢	(17.0) (5.7) - -	- - 0.4	外）5YR6/6 橙色 内）5YR6/6 橙色 断）5YR6/6 橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	5%	段の屈曲、鋭い。 内外面ともに横方向のミガキ。
35	6	27-1	08-1-2-1 土器だまり２ 大畦ｂ内	土師器 小型器台	(9.1) (1.5) - -	- - 0.4	外）7.5YR5/4 にぶい褐色 内）5YR5/6 明赤褐色 断）10YR5/3 にぶい黄褐色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式初頭）	10%	外面、縦方向ナデ後ミガキ。 内面、横方向ミガキ後、放射状にミガキ。 杯部内面底部に使用痕跡？
35	7	27-1	08-1-2-1 土器だまり２	土師器 壺	(8.7) 5.0 - -	- - 0.7	外）5YR6/6 橙色 内）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）N6/0 灰色	良好 やや甘	古墳時代前期 （布留式併行期）	10%	口縁部に屈曲あり。 外面、ミガキ、ハケメ後ユビナデ。 内面、ユビナデ。 瀬戸内（阿波）系？
35	8	27-1	08-1-2-1 土器だまり２	土師器 高杯	- (2.2) - (10.7)	- - 0.8	外）7.5YR7/6 橙色 内）7.5YR7/6 橙色 断）10YR6/2 灰黄褐色	やや粗 やや甘	古墳時代前期	10%	外面、ハケメ後ユビナデ。指頭圧痕顕著。 内面、ハケメ。粘土塊付着。
35	9	27-1	08-1-2-1 土器だまり２	土師器 甕	(18.2) (5.2) - -	- - 0.6	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR6/4 にぶい橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 （庄内式末期 ～ 布留式初頭）	5%	外面、ハケメ後ユビナデ。 内面、ユビナデ。 頸部外面に煤の付着あり。 口縁部内面に蓋の痕跡あり。
35	10	27-1	08-1-2-1 土器だまり２	土師器 甕	(11.6) (9.2) - -	- - 0.6	外）7.5YR6/6 橙色～ N2/0 黒色 内）5YR6/6 橙色～ 5/1 褐灰色 断）5YR6/6 橙色～ 5/1 褐灰色	やや粗 良好	古墳時代前期 （庄内式末期 ～ 布留式初頭）	20%	外面、ハケメ後ユビナデ。 内面、ヘラケズリ、ユビナデ。 外面口縁部から体部に黒斑あり。
35	11	27-1	08-1-2-1 土器だまり２	土師器 二重口縁壺	- (15.4) (18.4) -	- - 0.5	外）10YR7/3 にぶい黄橙色 内）10YR7/3 にぶい黄橙色 断）5YR5/4 にぶい赤褐色	やや粗 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	40%	外面、ハケメ後ユビナデ。 内面、ヘラケズリ後ユビナデ。
37	1	28-1	08-1-2-1 土器だまり３	土師器 小型丸底壺	(11.4) 7.9 - -	- - 0.5	外）5YR5/6 明赤褐色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR6/4 にぶい橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	50%	外面、縦方向後横方向のミガキ。 口縁部内面に放射状のミガキ。 体部内面、ユビナデ。

挿図番号	遺物番号	図版番号	調査区 遺構	器種 器形	口径 器高 胴径 底径	最大長 最大幅 最大厚	色調	胎土 焼成	時期	残存率	調整・形態の特徴など
37	2	28-1	08-1-2-1 土器だまり３	土師器 小型丸底壺	(10.6) (4.5) - -	- - 0.4	外）5YR6/4 にぶい橙色 内）5YR6/4 にぶい橙色 断）5YR6/4 にぶい橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	10%	外面、横方向ミガキ。 内面、横方向後放射状ミガキ。 体部外面に煤付着。
37	3	28-1	08-1-2-1 土器だまり３	土師器 小型丸底壺	(10.8) 5.9 - -	- - 0.4	外）5YR6/6 橙色 内）5YR6/6 橙色 断）5YR6/6 橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	20%	外面、横方向ミガキ。 内面、ハケメ後ミガキ。 底部外面摩滅のためミガキ消滅。
37	4	28-1	08-1-2-1 土器だまり３	土師器 有段鉢	(13.6) (3.4) - -	- - 0.4	外）7.5YR5/4 にぶい褐色 内）7.5YR5/4 にぶい褐色 断）7.5YR5/4 にぶい褐色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	10%	口縁部の立ち上がり低く、段の屈曲が甘い。 外面横方向ミガキ。 内面横方向後放射状ミガキ。
37	5	28-1	08-1-2-1 土器だまり３	土師器 甕	- (3.0) - (3.4)	- - 0.8	外）2.5Y7/2 灰黄色 内）2.5Y7/2 灰黄色 断）2.5Y4/1 黄灰色	やや粗 やや甘	古墳時代前期 （庄内式後半期）	5%	底部のみの出土。 外面、タタキ。 内面ヘラケズリ。
37	6	28-1	08-1-2-1 土器だまり３	弥生土器 甕	(25.0) (3.5) - -	- - 0.9	外）7.5YR6/2 灰褐色 内）2.5Y6/3 にぶい黄色 断）2.5Y6/3 にぶい黄色	やや粗 良好	弥生時代中期 前葉	10%	摩滅顕著。 口縁端部にビーンズ形の刻目あり。
37	7	28-1	08-1-2-1 土器だまり３	土師器 甕	(12.5) (4.9) - -	- - 0.6	外）10YR5/2 灰黄褐色 内）10YR5/1 褐灰色 断）10YR6/1 褐灰色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	10%	外面、斜め後縦方向ハケメ。 内面、ヘラケズリ。 口縁端部は内側へ折り曲げる。
37	8	28-1	08-1-2-1 土器だまり３	土師器 甕	(13.2) (9.3) - -	- - 0.5	外）10YR7/3 にぶい黄橙色 内）7.5YR7/6 橙色 断）2.5Y8/2 灰白色	良好 良好	古墳時代前期 （庄内式後半期）	30%	外面、斜め方向ハケメ後ヨコナデ、その上にジグザグ状のハケメ。 内面、ヘラケズリ。内外面に煤付着。 布留式祖形甕。
39	1	29-1	08-1-2-1 土器だまり４	土師器 小型丸底壺	(8.8) (8.6) - -	- - 0.5	外）5YR6/6 橙色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）5YR6/6 橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	30%	外面、ハケメ後ミガキ。 内面、ユビナデ。 底部付近に工具キズあり。煤付着。
39	2	29-1	08-1-2-1 土器だまり４	土師器 小型丸底壺	8.3 8.9 - -	- - 0.5	外）2.5Y7/2 灰黄色 内）10YR7/2 にぶい黄橙色 断）10YR7/2 にぶい黄橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	80%	外面、ハケメ後ヘラケズリ。 内面、ヘラケズリ、ハケメ。 粗略化の傾向あり。
39	3	28-1	08-1-2-1 土器だまり４	土師器 小型丸底壺	(11.4) (2.8) - -	- - 0.4	外）7.5YR6/6 橙色 内）7.5YR6/6 橙色 断）2.5Y8/2 灰白色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	5%	口縁部のみの出土。 外面、ハケメ後ミガキ。 内面、横方向後斜め方向ミガキ。
39	4	29-1	08-1-2-1 土器だまり４	土師器 有段鉢	16.2 5.2 - -	- - 0.5	外）7.5YR6/6 橙色 内）7.5YR6/6 橙色 断）7.5YR6/4 橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	60%	口縁部は幅広。段の屈曲は甘い。 内外面ともに摩滅顕著。
39	5	29-1	08-1-2-1 土器だまり４	土師器 高杯	(23.0) (6.1) - -	- - 0.9	外）5YR5/4 にぶい赤褐色 内）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）2.5Y7/1 灰白色	良好 良好	古墳時代前期 （庄内式末期～ 布留式前半期）	15%	有稜高杯の杯部。 外面、ハケメ後ミガキ。煤付着。 内面、横方向後放射状ミガキ。
39	6	29-1	08-1-2-1 土器だまり４	土師器 甕形製塩土器	(19.9) 22.2 - 4.2	- - 0.5	外）2.5YR6/4 にぶい橙色～ 7.5YR7/4 にぶい橙色 内）5YR6/6 橙色 断）2.5Y5/2 暗灰黄色	やや粗 やや甘	古墳時代前期 （庄内式後半～ 布留式前半期）	50%	口縁端部、手捏ねで整形。斜め方向のユビナデ痕跡あり。 体部外面、平行タタキ。 体部内面、ハケメ、ヘラケズリ。 二次焼成の痕跡顕著。器壁の一部が白色～灰白色に変色。
39	7	28-1	08-1-2-1 土器だまり４	土師器 壺	(14.2) (5.3) - -	- - 0.7	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）5YR7/3 にぶい橙色 断）5YR7/2 明褐灰色	やや粗 良好	古墳時代前期 （庄内式末期～ 布留式前半期）	5%	二次焼成の痕跡あり。 外面、ハケメ後ヨコナデ。 内面、ヨコナデ。器壁の剥落顕著。
39	8	29-1	08-1-2-1 土器だまり４	土師器 甕	(16.4) (6.3) - -	- - 0.5	外）10YR4/2 灰黄褐色 内）10YR6/3 にぶい黄橙色 断）2.5Y7/2 灰黄色	良好 良好	古墳時代前期 （庄内式末期）	10%	外面、斜め方向のハケメ重複。 内面、ヘラケズリ。 外面に広く煤の付着あり。
39	9	30-1	08-1-2-1 土器だまり４	土師器 甕	13.6 (19.7) - -	- - 0.5	外）10YR6/6 明黄褐色 内）5YR6/6 橙色 断）5YR6/6 橙色	良好 良好	古墳時代前期 （庄内式末期～ 布留式前半期）	70%	外面、縦方向後横方向ハケメ。 内面、ヘラケズリ。指頭圧痕顕著。 口縁端部、内側へ折り曲げ。 外面全体に煤付着。内面黒色化。
39	10	29-1	08-1-2-1 土器だまり４	土師器 甕	(11.9) (11.3) - -	- - 0.4	外）7.5YR7/4 にぶい橙色 内）2.5Y6/2 灰黄色 断）2.5Y7/2 灰黄色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式）	25%	外面、縦方向後横方向ハケメ。 内面、ヘラケズリ。指頭圧痕顕著。 口縁端部、内側へ折り曲げ。 外面全体に煤付着。器壁剥落あり。
39	11	30-1	08-1-2-1 土器だまり４	土師器 甕	(13.0) (18.2) - -	- - 0.4	外）10YR2/1 黒色（煤付着） 内）5Y7/1 灰白色 断）5Y7/1 灰白色	やや粗 良好	古墳時代前期 （布留式）	40%	外面、縦方向後横方向ハケメ。 内面、ヘラケズリ。指頭圧痕あり。 外面に煤付着。 口縁部内面、輪状に煤付着。
39	12	30-1	08-1-2-1 土器だまり４	土師器 甕	(17.6) (10.3) - -	- - 0.5	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR6/4 にぶい橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 （布留式）	20%	外面、縦方向後横方向ハケメ。 内面、ヘラケズリ。 外面に煤付着。
41	1	30-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 小型丸底壺	10.9 7.8 - -	- - 0.7	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR6/4 にぶい橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	80%	外面、ヘラケズリ後ミガキ。 内面、ヘラケズリ後ユビナデ。
41	2	30-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 小型丸底壺	(10.0) (5.9) - -	- - 0.6	外）10YR7/3 にぶい黄橙色 内）10YR6/4 にぶい黄橙色 断）7.5YR6/4 にぶい橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	30%	外面、ミガキ。 内面口縁部、ミガキ。体部ユビナデ。 外面に煤の付着あり。
41	3	31-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 小型丸底壺	(10.2) (3.8) - -	- - 0.3	外）10YR6/3 にぶい黄橙色 内）10YR7/3 にぶい黄橙色 断）10YR7/3 にぶい黄橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	10%	口縁部のみの出土。 摩滅顕著。

挿図番号	遺物番号	図版番号	調査区 遺構	器種 器形	口径 器高 胴径 底径	最大長 最大幅 最大厚	色調	胎土 焼成	時期	残存率	調整・形態の特徴など
41	4	30-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 小型丸底壺	- (5.6) 10.0 -	- - 0.3	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR6/4 にぶい橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	15%	体部外面、ハケメ後ミガキ。 口縁部内面、横方向ミガキ。 体部内面、ユビナデ。
41	5	31-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 有段鉢	(15.0) (4.0) -- -	- - 0.4	外）7.5YR7/6 橙色 内）7.5YR7/6 橙色 断）7.5YR7/6 橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	15%	口縁部段の退化顕著。
41	6	31-2	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 有段鉢	(15.0) (4.1) - -	- - 0.5	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR6/4 にぶい橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	5%	口縁部段、直線的。 内外面ともに横方向ミガキ。
41	7	31-2	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 高杯	(22.6) (7.9) - -	- - 0.8	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）10YR7/3 にぶい黄橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式初頭）	10%	外面、斜め方向ミガキ。 内面、横方向後放射状ミガキ。 底部内面に器壁の剥離あり。
41	8	31-2	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 小型器台	- (4.1) - (9.8)	- - 0.7	外）10YR6/4 にぶい黄橙色 内）10YR6/4 にぶい黄橙色 断）10YR6/4 にぶい黄橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 （布留式初頭）	10%	円形スカシあり。 外面、ミガキ。 内面、ハケメ後ユビナデ
41	9	32-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 高杯	- (8.1) - 6.6	- - 1.3	外）10YR6/4 にぶい黄橙色 内）10YR6/4 にぶい黄橙色 断）10YR7/2 にぶい黄橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 （庄内式末期～ 布留式初頭）	50%	外面、ハケメ後ミガキ。 内面、ユビナデ。絞り目残る。 杯部と脚部の接合部に未貫通穴。
41	10	32-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 高杯	- (7.5) - 7.4	- - 0.8	外）10YR6/3 にぶい黄橙色 内）10YR6/3 にぶい黄橙色 断）5YR6/4 にぶい黄橙色	やや粗 やや甘	古墳時代前期 （庄内式末期～ 布留式初頭）	30%	外面、ハケメ後ミガキ。 内面、ユビナデ。絞り目残る。 杯部と脚部の接合部に未貫通穴。 外面に煤付着。
41	11	31-2	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 直口壺	(15.9) (7.9) - -	- - 0.8	外）7.5YR5/4 にぶい褐色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR6/4 にぶい橙色	良好 良好	古墳時代前期 （庄内式末期～ 布留式初頭）	20%	外面、縦方向後横方向ミガキ。 内面、横方向ミガキ。 口縁部内側に摩滅帯あり。蓋の痕跡か？
41	12	31-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 直口壺	(10.8) (6.1) - -	- - 0.5	外）10YR6/3 にぶい黄橙色 内）10YR6/4 にぶい橙色 断）2.5Y7/2 灰黄色	良好 良好	古墳時代前期 （庄内式後期）	10%	口縁部のみの出土。 外面、ユビナデ。 内面、ハケメ。
41	13	30-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 短頸壺	(9.4) (5.9) - -	- - 0.4	外）7.5YR7/4 にぶい橙色 内）7.5YR4/2 灰褐色 断）7.5YR7/4 にぶい橙色	良好 良好	古墳時代前期	20%	外面、ハケメ後ミガキ。 内面、ハケ後ユビナデ。 外来系土器？
41	14	32-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 広口壺	(18.6) (7.0) - -	- - 1.3	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/6 橙色 断）2.5Y7/1 灰白色	良好 良好	古墳時代前期 （庄内式併行期）	30%	口縁端部端面に三条の沈線あり。 外面、ハケメ後ユビナデ。 内面、ユビナデ。 口縁部内面に摩滅帯あり。 外来系土器（阿波系）
41	15	32-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 広口甕	(13.6) (7.0) - -	- - 0.7	外）2.5Y7/1 灰白色 内）2.5Y7/1 灰白色 断）2.5Y7/1 灰白色	やや粗 良好	古墳時代前期 （庄内式末期）	5%	外面、ハケメ後ユビナデ。 口縁部内面、ハケメ。 体部内面、ヘラケズリ。 内面、黒色化。
41	16	32-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 甕	(12.8) (3.6) - -	- - 0.7	外）2.5Y7/1 灰白色 内）2.5Y7/1 灰白色 断）2.5Y7/1 灰白色	やや粗 やや甘	古墳時代前期 （庄内式末期）	10%	外面、ハケメ後ユビナデ。 口縁部内面、ハケメ。 体部内面、ヘラケズリ。 口縁部に摩滅痕跡あり。
41	17	31-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 甕	(15.0) (2.9) - -	- - 0.5	外）10YR6/2 灰黄褐色 内）2.5Y6/2 灰黄色 断）2.5Y6/2 灰黄色	良好 良好	古墳時代前期 （庄内式末期）	10%	口縁部のみの出土。 内面に粘土紐の継ぎ目あり。 口縁端部に煤付着。
41	18	32-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 甕	(15.2) (19.5) - -	- - 0.5	外）10YR4/2 灰黄褐色 内）2.5Y7/1 灰白色 断）2.5Y7/1 灰白色	良好 良好	古墳時代前期 （庄内式後期）	30%	外面、タタキ後ハケメ。 内面、ヘラケズリ。 口縁部外面、指頭圧痕や粘土干物継ぎ目が残る。 外面に煤付着。内面、黒色化。
41	19	32-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 甕	(20.4) (9.6) - -	- - 0.7	外）5Y6/1 灰色 内）5Y6/1 灰色 断）5Y6/1 灰色	やや粗 やや甘	古墳時代前期 （庄内式後期）	5%	外面、タタキ後ハケメ。 内面、ヘラケズリ。 口縁部内面に輪状の剥離痕跡あり。 口縁部外面、煤付着。
48	1	33-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 小型丸底壺	10.8 (9.1) - -	- - 0.5	外）7.5YR6/6 橙色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR7/4 にぶい橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	40%	外面、横方向後斜め方向ミガキ。 口縁部内面、横方向後斜め方向ミガキ。内面、ユビナデ。
48	2	33-1	08-1-2-1 30 溝 上層	土師器 小型丸底壺	(11.4) (6.7) - -	- - 0.4	外）2.5YR6/6 橙色 内）5YR6/6 橙色 断）2.5Y5/1 黄灰色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	30%	外面、横方向後斜め方向ミガキ。 口縁部内面、横方向ミガキ。 体部内面、ユビナデ。
48	3	33-1	08-1-2-1 30 溝 上層	土師器 小型丸底壺	(10.4) (4.2) - -	- - 0.4	外）7.5YR7/4 にぶい橙色 内）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）7.5YR7/4 にぶい橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	20%	内外面ともに横方向ミガキ。 一部摩滅。
48	4	33-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり８	土師器 小型丸底壺	8.0 9.1 - -	- - 0.5	外）5YR6/6 橙色 内）5YR6/6 橙色 断）10YR6/1 褐灰色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	100%	体部外面、ハケメ後ヨコナデ。 口縁部内面、横方向ハケメ後ナデ。 調整粗雑、指頭圧痕顕著。 底部外面に焼成前線刻「一」。
48	5	33-1	08-1-2-1 30 溝 上層	土師器 小型丸底壺	(9.8) (5.0) - -	- - 0.6	外）7.5YR8/3 浅黄橙色 内）2.5Y6/1 黄灰色 断）2.5Y6/1 黄灰色	やや粗 やや甘	古墳時代前期 （布留式前半期）	10%	外面、ハケメ後ユビナデ。 内面、ヘラケズリ後ユビナデ。 体部外面に黒斑あり。
48	6	33-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり６	土師器 小型丸底壺	8.6 8.9 - -	- - 1.1	外）10YR6/3 にぶい黄橙色 内）10YR6/4 にぶい黄橙色 断）-	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	100%	外面、ハケメ後ヨコナデ。 内面、ユビナデ。指頭圧痕顕著。 内面に炭化物の付着あり。

挿図番号	遺物番号	図版番号	調査区 遺構	器種 器形	口径 器高 胴径 底径	最大長 最大幅 最大厚	色調	胎土 焼成	時期	残存率	調整・形態の特徴など
48	7	34-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 8	土師器 小型丸底壺	- 8.5 - (10.6)	- - 0.5	外）10YR7/3 にぶい黄橙色 内）10YR7/3 にぶい黄橙色 断）10YR7/3 にぶい黄橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	60%	外面、ヘラケズリ後ユビナデ。 内面、ユビナデ。
48	8	34-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 7	土師器 小型丸底壺	7.4 7.4 - -	- - 0.7	外）7.5YR7/6 橙色 内）7.5YR7/6 橙色 断）7.5YR7/6 橙色	やや粗 やや甘	古墳時代前期 (布留式前半期)	95%	底部外面、ヘラケズリ。 口縁部外面、ハケメ後ユビナデ。 内面、ヘラケズリ後ユビナデ。
48	9	34-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 6	土師器 小型丸底壺	7.5 8.5 - -	- - 0.7	外）10YR7/3 にぶい黄橙色 内）10YR7/3 にぶい黄橙色 断）10YR7/3 にぶい黄橙色	やや粗 やや甘	古墳時代前期 (布留式前半期)	98%	底部外面、ヘラケズリ。 口縁部外面、ハケメ後ユビナデ。 その上から沈線一条。 体部内面、ヘラケズリ後ユビナデ。 口縁部内面、横方向ハケメ。
48	10	34-1	08-1-2-1 30 溝 上層	土師器 小型丸底壺	8.2 9.7 - -	- - 0.6	外）2.5Y7/3 浅黄色 内）2.5Y7/3 浅黄色 断）-	良好 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	100%	外面、ハケメ後ユビナデ。 体部内面、ヘラケズリ後ユビナデ。 口縁部内面、横方向ハケメ。 内面に炭化物付着。外面に黒斑。
48	11	34-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 8	土師器 小型丸底壺	(10.2) (6.1) - -	- - 0.7	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）5Y6/1 灰色	良好 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	20%	外面、斜め方向後横方向ハケメ。 口縁部内面、横方向ハケメ。 体部内面、ヘラケズリ。
48	12	34-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 8	土師器 壺	- (10.5) - (13.4)	- - 0.8	外）10YR7/3 にぶい黄橙色 内）2.5Y7/3 浅黄色 断）7.5YR5/4 にぶい褐色	やや粗 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	40%	体部のみ残存。 外面、摩滅顕著。 内面、ヘラケズリ後ユビナデ。
48	13	34-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 8	土師器 壺	(11.3) (4.7) - -	- - 0.7	外）10YR7/4 にぶい黄橙色～ 10YR3/1 黒褐色 内）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）7.5YR7/4 にぶい橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	10%	口縁部のみ出土。 外面、ハケメ後ユビナデ。 内面、横方向ハケメ。 外面に煤の付着あり。
48	14	33-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 6	土師器 小型鉢	(10.4) (3.5) - --	- - 0.5	外）10YR6/4 にぶい黄橙色 内）7.5YR6/6 橙色 断）10YR7/4 にぶい黄橙色	良好 良好	古墳時代前期 (庄内式後半期)	10%	外面、斜め方向ハケメ後ユビナデ。 内面、横方向ユビナデ。 口縁部の屈曲甘い。
48	15	33-1	08-1-2-1 30 溝 下層	土師器 小型鉢	(11.0) (4.9) - -	- - 0.5	外）7.5YR7/4 にぶい橙色 内）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）7.5YR7/4 にぶい橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 (庄内式後半期)	10%	底部外面、指または工具ナデ。 口縁部内面、ハケメ後ユビナデ。
48	16	33-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 6	土師器 有段鉢	(16.2) (5.0) - -	- - 0.5	外）5YR5/6 明赤褐色 内）5YR5/6 明赤褐色 断）10YR7/2 にぶい黄橙色	良好 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	40%	段の屈曲、明瞭。 内外面ともに横方向ミガキ。
48	17	33-1	08-1-2-1 30 溝 上層	土師器 小型器台	(10.0) (3.1) - -	- - 0.5	外）10YR6/4 にぶい黄橙色 内）5YR6/6 にぶい黄橙色 断）10YR7/3 にぶい黄橙色	良好 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	10%	外面、横方向ミガキ。 内面、ハケメ後横方向ミガキ。 脚部は中空。
48	18	35-1	08-1-2-1 30 溝 上層	土師器 小型器台	(9.2) (6.9) - -	- - 1.1	外）7.5YR7/6 橙色～ N2/0 黒色 内）N2/0 黒色 断）7.5YR8/4 浅黄橙色	良好 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	30%	脚部外面、横方向ミガキ。 口縁部外面、ミガキ後ユビナデ。 杯部内面に器壁の剥落あり。
48	19	35-1	08-1-2-1 30 溝 上層	土師器 小型器台	- (8.3) - (10.0)	- - 0.6	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）10YR7/3 にぶい黄橙色 断）5YR7/4 にぶい橙色	良好 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	10%	脚部のみの出土。 中位に円形スカシあり。 外面、縦及び横方向ミガキ。
48	20	35-1	08-1-2-1 30 溝 上層	土師器 ミニチュア 土器	- (3.4) - 7.0	- - 1.1	外）10YR6/3 にぶい黄橙色 内）10YR6/3 にぶい黄橙色 断）7.5YR6/4 にぶい橙色	良好 良好	古墳時代前期	40%	高杯形の脚部。 手捏ね。指頭圧痕顕著。 脚部内面、杯部内面にヘラケズリ。
48	21	35-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 8	土師器 高杯	(15.5) 10.0 - 10.4	- - 0.6	外）2.5Y3/1 黒褐色 内）10YR5/4 黄褐色 断）5YR5/6 明赤褐色	やや粗 やや甘	古墳時代前期 (布留式前半期)	70%	外面、ミガキまたはユビナデ。 内面、横方向ユビナデ。 裾部に焼成前線刻の痕跡あり。 杯と脚の接合部に未貫通穴あり。
48	22	35-1	08-1-2-1 溝 30 土器だまり 7	土師器 高杯	17.5 11.5 - 12.7	- - 0.9	外）5YR6/4 にぶい橙色 内）5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR6/2 灰褐色	良好 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	80%	外面、磨ミガキまたはユビナデ。 杯と脚の接合部はヘラケズリ。 杯部内面、ミガキ及びナデ。 脚部内面、ヘラケズリ。絞り目残る。
48	23	35-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 8	土師器 高杯	(18.3) 13.4 - 12.6	- - 0.7	外）2.5Y5/2 暗灰黄色 内）2.5Y6/3 にぶい黄色 断）2.5Y6/2 灰黄色	良好 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	70%	杯部、不正円のため歪。 外面、縦または横方向ミガキ。 口縁部内面、ユビナデ。 脚部外面、ヘラケズリ。
48	24	33-1	08-1-2-1 30 溝 下層	土師器 高杯	(16.7) (4.1) - -	- - 0.5	外）10YR6/2 灰黄褐色～ N4/0 灰色 内）10YR7/2 にぶい黄橙色 断）10YR6/1 褐灰色	良好 やや甘	古墳時代前期 (布留式前半期)	10%	杯部のみの出土。 外面、ミガキ後ユビナデ。 内面、横方向ミガキ。
48	25	35-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 8	土師器 高杯	- (6.8) - (12.8)	- - 0.6	外）10YR6/4 にぶい黄橙色 内）10YR6/4 にぶい黄橙色 断）10YR6/4 にぶい黄橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	30%	脚部のみ出土。 脚部外面、縦方向ミガキ。 裾部外面、横方向ユビナデ。
48	26	36-1	08-1-2-1 30 溝 上層	土師器 脚部	- (6.3) - 8.2	- - 1.0	外）10YR6/4 にぶい黄橙色 内）10YR6/3 にぶい黄橙色 断）10YR7/3 にぶい黄橙色	良好 良好	古墳時代前期	40%	台付甕の脚部か？ 外面、縦方向ミガキ。 内面、ヘラケズリ後ユビナデ。 外面一部に黒斑あり。
49	1	37-1	08-1-2-1 溝 30 土器だまり 7	土師器 甕	(13.6) (14.7) - -	- - 0.7	外）7.5YR7/6 橙色 内）7.5YR7/6 橙色 断）7.5YR7/6 橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	20%	体部外面、タタキ後縦方向ハケメ。 胴部に線刻状のキズあり。 口縁部内面、横方向ハケメ。 体部内面、ヘラケズリ。黒色化。
49	2	37-1	08-1-2-1 30 溝 下層	土師器 甕	(16.2) (8.2) - -	- - 0.4	外）10YR6/3 にぶい黄橙色 内）10YR6/3 にぶい黄橙色 断）5Y4/1 灰色	良好 良好	古墳時代前期 (庄内式後半期)	20%	体部外面、タタキ後ハケメ。 口縁部内面、横方向ハケメ後ナデ。 内面、ヘラケズリ。 体部及び口縁部に煤付着。

挿図番号	遺物番号	図版番号	調査区 遺構	器種 器形	口径 器高 胴径 底径	最大長 最大幅 最大厚	色調	胎土 焼成	時期	残存率	調整・形態の特徴など
49	3	37-1	08-1-2-1 30 溝 下層	土師器 甕	(14.8) (7.6) - -	- - 0.7	外）2.5Y8/2 灰白色 内）2.5Y6/1 黄灰色 断）2.5Y8/2 灰白色	良好 良好	古墳時代前期 (庄内式後半期)	10%	体部外面、タタキ後ハケメ。 口縁部内面、横方向ハケメ後ナデ。 内面、ヘラケズリ。 体部外面に黒斑あり。 外来系土器（播磨系）。
49	4	37-1	08-1-2-1 30 溝 下層	土師器 甕	(16.0) (3.9) - -	- - 0.9	外）10YR6/3 にぶい黄橙色 内）10YR6/3 にぶい黄橙色 断）10YR6/3 にぶい黄橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 (庄内式後半期)	5%	外面、タタキ後ユビナデ。 内面、ヘラケズリ。
49	5	37-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 7	土師器 甕	(18.6) (7.2) - -	- - 0.6	外）2.5Y3/1 黒褐色 内）10YR5/3 にぶい黄褐色 断）10YR6/2 灰黄褐色	良好 良好	古墳時代前期 (庄内式後半期)	10%	外面、タタキ後ユビナデ。 内面、ヘラケズリ。 外面に煤付着。
49	6	37-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 6	土師器 甕	- (4.2) - 4.3	- - 1.6	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）10YR3/1 黒褐色 断）10YR3/1 黒褐色	やや粗 良好	古墳時代前期 (庄内式前半期)	10%	底部のみの出土。 外面、粗いタタキ後縦方向ミガキ。 内面、ヘラケズリ後ユビナデ。
49	7	37-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 6	土師器 甕	(13.6) (6.7) - -	- - 0.7	外）2.5Y6/2 灰黄色 内）2.5Y6/3 にぶい黄色 断）2.5Y5/2 暗灰黄色	良好 良好	古墳時代前期 (庄内式後半期)	10%	肩部以上の出土。 外面、縦方向ハケメ。 内面、ヘラケズリ。
49	8	37-1	08-1-2-1 30 溝 上層	土師器 甕	(14.8) (7.1) - -	- - 0.6	外）10YR7/3 にぶい黄橙色 内）10YR7/3 にぶい黄橙色 断）10YR7/3 にぶい黄橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 (庄内式後半～ 布留式初頭)	15%	体部外面、ハケメ。 体部内面、上位はヘラケズリ。下位はハケメ及びユビナデ。 体部外面に煤付着。
49	9	38-1	08-1-2-1 30 溝 上層	土師器 甕	(16.0) (13.2) - -	- - 0.6	外）2.5Y5/2 暗灰黄色 内）2.5Y6/2 灰黄色 断）2.5Y7/3 浅黄色	良好 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	40%	外面、縦方向ハケメ後、胴部に横方向ハケメ。 内面、ヘラケズリ。
49	10	37-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 6	土師器 甕	(12.2) (3.8) - -	- - 0.4	外）7.5YR7/6 橙色 内）7.5YR4/1 褐灰色 断）5YR6/4 にぶい橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	10%	外面、ハケメ後ユビナデ。 内面、ヘラケズリ。黒色化顕著。 口縁端面に沈線二条。
49	11	38-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 6	土師器 甕	(14.2) (6.4) - -	- - 0.6	外）5YR7/4 にぶい橙色 内）7.5YR7/3 にぶい橙色 断）7.5YR7/3 にぶい橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	5%	体部外面、縦及び斜め方向ハケメ。 内面、ヘラケズリ。 外面に煤付着。
49	12	38-1	08-1-2-1 30 溝 上層	土師器 甕	14.5 (6.7) - -	- - 0.9	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）7.5YR7/4 にぶい橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	20%	外面、摩滅。ハケメ僅かに残る。 口縁部に粘土紐の継ぎ目が残る。 内面、ヘラケズリ。
49	13	38-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 6	土師器 甕	13.0 20.7 - -	- - 0.8	外）10YR5/2 灰黄褐色～ N2/0 黒色 内）10YR5/2 灰黄褐色～ N2/0 黒色 断）10YR8/2 灰白色	やや粗 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	90%	外面、縦及び横方向ハケメ。 口縁部外面、ハケメ後ユビナデ。 口縁部内面、横方向ハケメ。 胴部外面に黒斑あり。 外面の広い範囲に煤付着。
50	1	38-1	08-1-2-1 30 溝 上層	土師器 甕	(14.2) (7.4) - -	- - 0.6	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/6 橙色 断）10YR7/2 にぶい橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	30%	外面、ハケメ後ユビナデ。 内面、ヘラケズリ。 口縁部から肩部に煤付着。
50	2	38-1	08-1-2-1 土器だまり 7	土師器 甕	(14.8) (9.7) - -	- - 0.6	外）7.5YR6/4 にぶい黄橙色 内）7.5YR6/6 橙色 断）10YR6/3 にぶい黄橙色	やや粗 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	30%	外面、ハケメ後ユビナデ。 内面、ヘラケズリ。 外面に煤付着。内面、黒色化。
50	3	36-1	08-1-2-1 30 溝 上層	土師器 直口壺	(16.5) (12.0) - -	- - 0.5	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）10YR6/2 灰黄褐色	良好 良好	古墳時代前期 (庄内式後半～ 布留式前半期)	25%	外面、横方向ミガキ。 口縁部外面、横後縦方向ミガキ。 口縁部内面、横後縦方向ミガキ。
50	4	36-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 8	土師器 直口壺	(9.6) (12.8) - 12.5	- - 0.7	外）7.5YR7/4 にぶい橙色 内）7.5YR7/4 にぶい橙色 断）7.5YR7/4 にぶい橙色	やや粗 良好	古墳時代前期	65%	上位外面、ヘラケズリ後ユビナデ。 下位外面、ミガキ後ユビナデ。 内面、ヘラケズリ後ユビナデ。 外面及び口縁部内面に煤付着。
50	5	36-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 6	土師器 直口壺	(14.0) (11.5) - -	- - 0.6	外）7.5YR7/6 橙色 内）5YR6/6 橙色 断）5YR7/4 にぶい橙色	良好 良好	古墳時代前期	40%	外面、ミガキ。 内面、ハケメ。指頭圧痕残る。
50	6	36-1	08-1-2-1 30 溝 下層	土師器 二重口縁壺	- (11.5) - (17.4)	- - 0.8	外）5YR7/6 橙色 内）10YR7/2 にぶい黄褐色 断）10YR7/2 にぶい黄褐色	良好 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	30%	外面、ハケメ及びミガキ。 内面ヘラケズリ及びハケメ。 外面に黒斑あり。
50	7	33-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 7	土師器 二重口縁壺	(27.9) (3.4) - -	- - 0.8	外）7.5YR5/3 にぶい褐色 内）10YR6/3 にぶい黄橙色 断）10YR6/3 にぶい黄橙色	良好 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	5%	段上及び口縁端面に列点文。 内外面ともに縦方向ミガキ。
50	8	33-1	08-1-2-1 30 溝 上層	土師器 二重口縁壺	(19.4) (6.8) - -	- - 0.8	外）10YR7/2 にぶい黄橙色 内）10YR7/2 にぶい黄橙色 断）10YR7/2 にぶい黄橙色	良好 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	5%	口縁部のみの出土。 内外面とも横方向ユビナデ。
50	9	36-1	08-1-2-1 30 溝 最下層	土師器 二重口縁壺	- (10.0) - (24.6)	- - 1.1	外）5YR7/6 橙色 内）10YR7/2 にぶい黄褐色 断）10YR7/2 にぶい黄褐色	やや粗 良好	古墳時代前期 (布留式前半期)	10%	外面、摩滅顕著。僅かにミガキ及びユビナデ残る。 内面、ヘラケズリ。
50	10	36-1	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 8	弥生土器 壺	- (4.6) - (6.0)	- - 2.0	外）10YR7/3 にぶい黄橙色 内）10YR7/3 にぶい黄橙色 断）10YR7/3 にぶい黄橙色	やや粗 やや甘	弥生時代	10%	摩滅顕著。外面に指頭圧痕残る。 内面、ヘラケズリ。 底部外面に黒斑あり。
50	11	-	08-1-2-1 30 溝 土器だまり 7	弥生土器 甕	- (4.7) - (8.0)	- - 2.0	外）5YR6/6 橙色 内）2.5Y7/3 浅黄色 断）2.5Y6/4 にぶい黄色	やや粗 やや甘	弥生時代前期	10%	摩滅顕著。外面に指頭圧痕残る。 内面、ヘラケズリ。 下層より混入か。

挿図番号	遺物番号	図版番号	調査区 遺構	器種 器形	口径 器高 胴径 底径	最大長 最大幅 最大厚	色調	胎土 焼成	時期	残存率	調整・形態の特徴など
50	12	38-1	08-1-2-1 31 溝	土師器 有段鉢	(15.8) (5.7) - -	- - 0.6	外）5YR6/6 橙色 内）10YR6/3 にぶい黄橙色 断）2.5Y5/1 黄灰色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	10%	内外面ともにミガキ。 口縁部外面と内面に煤付着。
50	13	32-1	08-1-2-1 35 土坑 36 土坑	土師器 甕	(18.2) (4.3) - -	- - 0.5	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/6 橙色 断）7.5YR6/6 橙色	良好 良好	古墳時代前期 （布留式前半期）	10%	口縁部のみの出土。 口縁端部を内側に折り曲げる。 内外面ともにユビナデ。
53	1	41-1	08-1-2-2 第 9-2 層	弥生土器 壺	- - - -	(4.1) (3.2) 0.7	外）2.5Y7/2 灰黄色 内）2.5Y7/2 灰黄 断）2.5Y7/2 灰黄色	やや粗 やや甘	弥生時代中期 前葉	5%	口縁部端面に列点文あり。 口縁部外面に波状文一条。 口縁部内面、ミガキ。
60	1	41-1	08-1-2-2 第 10-1 層	弥生土器 壺	(14.1) (3.3) - -	- - -	外）10YR6/3 にぶい黄橙色 内）2.5Y6/2 灰黄色 断）2.5YR6/1 黄灰色	やや粗 やや甘	弥生時代前期	5%	内外面ともに横方向ミガキ。
60	2	41-1	08-1-2-2 第 10 層 （側溝）	弥生土器 壺	(11.8) (3.0) - -	- - 0.8	外）7.5Y4/3 褐色 内）7.5Y4/3 褐色 断）7.5Y4/3 褐色	やや粗 良好	弥生時代前期	5%	三条の削り出し突帯あり。 内外面ともに横方向ミガキ。
60	3	41-3	08-1-2-2 第 10-2 層	弥生土器 壺	(17.0) (4.0) - -	- - 0.7	外）10YR6/2 灰黄褐色 内）10YR6/1 褐灰色 断）10YR6/1 褐灰色	やや粗 やや甘	弥生時代前期	5%	頸部に沈線一条。 外面、ユビナデ。
60	4	41-2	08-1-2-2 第 10-1 層	弥生土器 壺	- (4.4) - -	- - 0.8	外）5YR6/6 橙色 内）10YR6/4 にぶい黄褐色 断）10YR5/1 褐灰色	やや粗 やや甘	弥生時代前期 中段階新相	5%	穿孔あり。 内外面ともに横方向ミガキ。
60	5	41-1	08-1-2-2 第 10-1 層	弥生土器	- - - -	(3.5) (2.8) 0.5	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）10YR4/1 褐灰色 断）2.5Y6/1 黄灰色	やや粗 やや甘	弥生時代前期	5%	外面、ミガキ。 沈線一条。
60	6	41-1	08-1-2-2 第 10-1 層	弥生土器 壺	- - - -	(3.2) (4.9) 0.7	外）2.5Y7/3 浅黄色 内）2.5Y5/1 黄灰色 断）2.5Y7/1 灰白色	良好 やや甘	弥生時代前期	5%	外面、ミガキ。 削り出突帯と沈線三条。
60	7	41-1	08-1-2-2 第 10-1 層	弥生土器	- - - -	(3.5) (3.1) 0.8	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）10YR5/3 にぶい黄褐色 断）7.5YR6/6 橙色	やや粗 やや甘	弥生時代前期 新段階	5%	貼付突帯あり
60	8	41-1	08-1-2-2 46 溝	弥生土器 壺	- - - -	(3.9) (4.6) 0.6	外）10YR6/2 灰黄褐色 内）2.5Y5/1 黄灰色 断）10YR6/2 灰黄褐色	やや粗 良好	弥生時代前期 新段階	5%	沈線五条。 うち一条に刻み目をもつ貼付け突帯付着。
60	9	41-1	08-1-2-2 第 10-2 層	弥生土器	- - - -	(4.0) (4.4) 0.6	外）10YR6/4 にぶい黄橙色～ 5YR6/6 橙色 内）N2/0 黒色 断）10YR6/1 褐灰色	粗 やや甘	弥生時代前期	5%	沈線三条
60	10	41-3	08-1-2-2 第 10-2 層	弥生土器	- - - -	(2.8) (2.9) 0.5	外）10YR7 /4 にぶい黄橙色 内）2.5Y8/2 灰白色 断）2.5Y8/2 灰白色	やや粗 やや甘	弥生時代前期 中段階	5%	削り出し突帯上に米粒状の列点文。
60	11	41-1	08-1-2-2 第 10-1 層	弥生土器 鉢？	- - - -	(4.5) (3.6) 0.6	外）10YR4/2 灰黄褐色～ 10YR2/1 黒色 内）10YR4/2 灰黄褐色 断）10YR4/2 灰黄褐色	やや粗 やや甘	弥生時代前期 中段階	5%	削り出し突帯上に米粒状の列点文。
60	12	41-3	08-1-2-2 第 10-2 層	弥生土器 壺	- - - -	(3.8) (3.5) 0.6	外）10YR7/4 にぶい黄橙色 内）2.5Y8/1 灰白色 断）10YR8/3 浅黄橙色	やや粗 良好	弥生時代前期 中段階	5%	削り出し突帯上に円形の列点文。
60	13	41-1	08-1-2-2 第 10-1 層	弥生土器 または 突帯文土器	- (3.9) - (6.6)	- - 1.5	外）2.5Y6/2 灰黄色 内）N3/0 暗灰色 断）7.5Y5/1 灰色	やや粗 やや甘	弥生時代前期	5%	外面、ユビナデ、指頭圧痕のこる。 内面黒色化。
60	14	41-3	08-1-2-2 第 10-2 層	弥生土器 ミニチュア 土器	(6.6) (4.5) - -	- - 0.6	外）2.5Y6/2 灰黄色 内）2.5Y6/2 灰黄色 断）2.5Y6/2 灰黄色	やや粗 良好	弥生時代前期	10%	壺形土器。 手捏ねで整形。 内面に粘土紐の継ぎ目残る。
60	15	41-3	08-1-2-2 第 10-2 層	投弾	- - - -	(4.0) 2.7 -	外）10YR6/3 にぶい黄橙色 段）10YR4/1 褐灰色	やや粗 やや甘	弥生時代前期	90%	一部摩滅、欠損あり。
-	①	15-2	08-1-2-1 第 1-1 層	施釉陶器 蓋	- - - -	5.7 (5.1) 0.4	外）2.5Y6/2 灰黄色 内）5Y6/1 灰色 断）5Y6/1 灰色	良好 良好	近世以後	5%	内外面ともに施釉。
-	②	15-2	08-1-2-1 第 1-2 層	染付 碗	- - - -	(5.7) (4.0) 0.4	外）10GY8/1 明緑灰色 内）10GY8/1 明緑灰色 断）N8/0 灰白色	良好 良好	近世以後	5%	内外面ともに施釉。
-	③	15-2	08-1-2-1 第 1-2 層	施釉陶器 鉢？	- - - -	(5.3) (4.5) 0.6	外）2.5Y5/1 黄灰色 内）2.5Y5/1 黄灰色 断）5YR6/4 にぶい橙色	良好 良好	近世以後	5%	内外面ともに施釉。 外面に唐草状の絵付けあり。
-	④	15-2	08-1-2-1 第 1-2 層	施釉陶器 小形壺	- - - -	(5.5) (3.9) 0.5	外）7.5YR3/4 暗褐色 内）7.5Y4/4 褐色 断）2.5Y6/1 黄灰色	やや粗 やや甘	近世以後	5%	備前焼徳利？
-	⑤	15-2	08-1-2-1 第 1-2 層	土師質土器 土製品	- - - -	(5.5) (2.8) 0.7	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）7.5YR6/4 にぶい橙色	良好 良好	近世以後	5%	容器把手または土製品の一部か？

挿図番号	遺物番号	図版番号	調査区遺構	器種器形	口径 器高 胴径 底径	最大長 最大幅 最大厚	色調	胎土 焼成	時期	残存率	調整・形態の特徴など
-	⑥	15-2	08-1-2-1 第 1-2 層	磁器 碗	- - - -	(4.6) (2.1) 0.4	外）2.5GY7/1 明オリーブ色 内）7.5GY8/1 明緑灰色 断）2.5GY8/1 灰白色	良好 良好	近世	5%	内外面ともに施釉。
-	⑦	15-2	08-1-2-1 第 1-2 層	染付 碗	- - - -	(4.7) (3.2) 0.4	外）7.5Y7/2 灰白色 内）7.5Y7/2 灰白色 断）7.5Y7/1 灰白色	良好 良好	近世	5%	内外面ともに施釉。 外面に梅の絵付けあり。
-	⑧	15-2	08-1-2-1 第 1-2 層	染付 皿	- - - -	(6.4) (4.5) 0.5	外）2.5GY7/1 明オリーブ灰色 内）2.5GY7/1 明オリーブ灰色 断）N8/0 灰白色	良好 良好	近世	5%	内外面ともに施釉。 底部内面に花の絵付けあり。
-	⑨	15-2	08-1-2-1 第 1-2 層	染付 碗	- - - -	(5.6) (3.9) 0.6	外）7.5GY7/1 明緑灰色 内）5G7/1 明緑灰色 断）N8/0 灰白色	良好 良好	近世	5%	内外面ともに施釉。 高台床付面及び高台内は露胎
-	⑩	15-2	08-1-2-1 2・3 層	染付 碗	- - - -	(6.4) (5.5) 0.5	外）5G7/1 明緑灰色 内）5G7/1 明緑灰色 断）N8/0 灰白色	良好 良好	近世	5%	内外面ともに施釉。 高台床付面及び高台内は露胎
-	①	16-1	08-1-2-1 第 3 層	須恵器 鉢	- - - -	(6.2) (5.0) 1.0	外）10YR5/1 褐灰色 内）10YR5/1 褐灰色 断）N6/0 灰色	やや粗 良好	中世	5%	口縁部端面に段あり。
-	②	16-1	08-1-2-1 第 3 層	瓦器 椀	- - - -	(4.9) (4.8) 0.5	外）2.5Y8/1 灰白色 内）10YR2/1 黒色～ 10YR4/1 褐灰色 断）2.5Y8/1 灰白色	良好 やや甘	13 世紀	5%	内外面ともに摩滅顕著。
-	③	16-1	08-1-2-1 第 4 層	須恵質 こね鉢	- - - -	(4.7) (4.6) 0.8	外）N6/01 灰色～ N3/0 灰色 内）7.5Y6/1 灰白色～ N3/0 灰色 断）10Y6/1 灰色	良好 やや甘	中世	5%	片口鉢の口縁部。
-	①	16-2	08-1-1 第 2 層	土師器 羽釜	- - - -	(11.8) (4.6) 1.1	外）2.5Y7/2 灰黄色～ 10YR3/1 黒褐色 内）10YR7/3 にぶい黄橙色 断）7.5YR6/6 橙色	粗 やや甘	11 世紀	5%	鍔部短い。
-	②	16-2	08-1-2-1 第 3 層	黒色土器 椀	- - - -	(6.7) (6.3) 0.7	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）10YR6/3 にぶい黄橙色 断）10YR6/3 にぶい黄橙色	良好 良好	11 世紀	5%	摩滅顕著。
-	③	16-2	08-1-2-2 第 5 面	土師器 皿	- - - -	(3.9) (2.9) 0.4	外）7.5YR6/3 にぶい褐色 内）7.5YR6/3 にぶい褐色 断）10YR4/3 にぶい黄褐色	良好 良好	古代末～中世	5%	摩滅顕著。
-	④	16-2	08-1-2-2 第 5 面	土師器 皿	- - - -	(3.8) (2.5) 0.4	外）10YR7/4 にぶい黄橙色 内）10YR7/4 にぶい黄橙色 断）10YR7/4 にぶい黄橙色	良好 良好	古代末～中世	5%	摩滅顕著。
-	①	17-1	08-1-1 第 6 層	須恵器 甕	- - - -	(11.7) (6.1) 1.2	外）N5/0 灰色 内）N7/0 灰色 断）7.5YR5/1 褐灰色	良好 良好	古墳時代後期	5%	体部外面、平行タタキ。 体部内面、同心円状タタキ。 外面に、融着痕跡あり。
-	②	17-1	08-1-1 第 6 層	須恵器 甕	- - - -	(6.6) (4.7) 0.8	外）5Y7/1 灰白色 内）N8/0 灰白色 断）5Y7/1 灰白色	やや粗 良好	古墳時代後期	5%	体部外面、平行タタキ。 体部内面、同心円状タタキ。 外面に、融着痕跡あり。
-	③	17-1	08-1-1 第 6 層	土師器 高杯	- - - -	(5.7) (4.0) 0.8	外）5YR6/6 橙色 内）5YR6/6 橙色 断）5YR6/6 橙色	良好 良好	古墳時代	5%	摩滅顕著。 脚部内面に絞り目あり。
-	①	18-1	08-1-2-1 第 6 層	土師器 杯	- - - -	(4.9) (4.4) 0.4	外）7.5YR5/6 明褐色 内）7.5YR5/6 明褐色 断）7.5YR5/6 明褐色	やや粗 良好	古代	5%	摩滅顕著。黒色土器か？
-	②	18-1	08-1-2-2 第 6 層	土師器 皿	- - - -	(4.5) (4.1) 0.4	外）7.5YR6/4 にぶい橙色 内）7.5YR4/1 褐灰色～ 7.5YR6/4 にぶい橙色 断）N5/0 灰色	やや粗 良好	古代	5%	内面に煤付着。
-	③	18-1	08-1-2-2 第 6 層	土師器 皿	- - - -	(4.1) (3.9) 0.4	外）10YR6/2 灰黄褐色 内）10YR6/3 にぶい黄橙色 断）10YR6/3 にぶい黄橙色	良好 良好	古代	5%	摩滅顕著。
-	①	19-1	08-1-2-1 第 6 層	土師器 高杯	- - - -	(13.1) (6.8) 0.7	外）2.5Y6/2 灰黄色 内）2.5Y6/2 灰黄色 断）2.5Y6/2 灰黄色	良好 良好	古代	5%	摩滅顕著。脚柱部のみ残存。
-	①	20-1	08-1-2-1 第 6 層 下層	須恵器 杯蓋	- - - -	(6.4) (5.8) 0.8	外）N5/0 灰色 内）N7/0 灰白色 断）5RP5/1 紫灰色	良好 良好	古墳時代	20%	摩滅顕著。 外面に焼成後線刻あり。
-	②	20-1	08-1-2-1 第 6 層 下層	須恵器 杯蓋	(12.7) (1.95) -	- - 0.8	外）N6/0 灰色 内）N6/0 灰色 断）N6/0 灰色	良好 良好	7 世紀	20%	外面天井部に焼成前指頭掻痕あり。
-	③	20-1	08-1-2-2 第 6 層 上層	須恵器 杯身	- - - -	(4.9) (3.9) 0.5	外）5Y7/1 灰色 内）2.5Y6/1 黄灰色～ N6/0 灰色 断）5Y7/1 灰色	良好 良好	8 世紀	5%	底部内面やや黒色化。
-	④	20-1	08-1-2-2 第 6 層 上層	須恵器 短頸壺	- - - -	(6.2) (5.2) 0.7	外）5Y7/1 灰色 内）N7/0 灰白色 断）5Y7/1 灰色	良好 良好	8 世紀	5%	口縁部。 外面に自然釉付着。

挿図番号	遺物番号	図版番号	調査区 遺構	器種 器形	口径 器高 胴径 底径	最大長 最大幅 最大厚	色調	胎土 焼成	時期	残存率	調整・形態の特徴など
-	①	22-2	08-1-2-1 第６層	須恵器 杯蓋	- - - -	(6.1) (3.1) 0.7	外）5Y6/3 灰色～ N7/0 灰 白色 内）2.5Y7/1 灰白色 断）5Y7/1 灰色	良好 良好	８世紀	5%	外面に自然釉付着、釉着痕跡あり。
-	①	24-1	08-1-2-2 第６層 下層	須恵器 甕	- - - -	(17.5) (17.3) 1.0	外）N7/0 灰白色 釉）5GY3/1 暗オリーブ灰色 内）N6/0 灰白色 断）N6/0 灰白色	良好 良好	６世紀	5%	外面、平行タタキ。自然釉付着。 内面、同心円状タタキ。 外面に杯の融着痕跡あり。
-	①	25-1	08-1-2-1 第７層	土師器 小型丸底壺	- - - -		外）10YR6/3 にぶい黄橙色～ 5YR5/4 にぶい赤褐色 内）10YR7/3 にぶい黄橙色 断）7.5YR5/4 にぶい褐色	やや粗 良好	古墳時代前期	5%	体部のみ残存。 外面、ヘラケズリ後ユビナデ。
-	①	28-1	08-1-2-1 土器だまり３	土師器 小型丸底壺	- - - -		外）10YR5/3 にぶい黄褐色～ 10YR3/1 黒褐色 内）7.5YR5/4 にぶい褐色 断）7.5YR5/4 にぶい褐色	良好 良好	古墳時代前期	5%	摩滅顕著。
-	①	28-2	08-1-2-1 土器だまり４	土師器 二重口縁壺	- - - -	(9.1) (8.5) 1.15	外）7.5YR5/4 にぶい褐色 内）7.5YR5/4 にぶい褐色 断）7.5YR5/4 にぶい褐色	やや粗 良好	古墳時代前期	5%	生駒西麓産。 外面、細かいハケメ。 内面、ヘラケズリ及びユビナデ。
-	①	31-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 壺	- (11.3) 0.65 -	(14.3) (胴部最大径)	外）10YR6/3 にぶい黄橙色 内）7.5YR6/4 にぶい橙色 断）2.5Y6/1 黄灰色	やや粗 やや甘	古墳時代前期	50%	庄内か？
-	②	31-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 壺			外）7.5YR5/4 にぶい褐色～ N2/0 黒色 内）7.5YR6/4 にぶい褐色 断）2.5Y7/2 灰黄色	良好 良好	古墳時代前期	5%	外面、ハケメ。 内面、ヘラケズリ。 底部外面に煤付着。
-	③	31-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 小型丸底壺			外）2.5Y6/2 灰黄色～ 7.5YR5/3 にぶい褐色 内）10YR6/3 にぶい黄橙色 断）7.5YR6/3 にぶい褐色	良好 良好	古墳時代前期	5%	外面、平行タタキ後ミガキ。 内面、ヘラケズリ 外面に煤付着。
-	④	31-1	08-1-2-1 土器だまり５	土師器 器台			外）7.5YR5/4 にぶい褐色 内）7.5YR5/4 にぶい褐色 断）2.5Y6/1 黄灰色	良好 やや甘	古墳時代前期	5%	外面、平行タタキ後ミガキ。 内面、ヘラケズリ 外面に煤付着。
-	①	41-1	08-1-2-2 第 10-1 層	弥生土器 壺	- - - -	(3.5) (2.1) 0.65	外）10YR7/2 にぶい黄橙色 内）N3/0 暗灰色 断）N5/0 灰色～ 10YR7/2 にぶい黄橙色	粗 やや甘	弥生時代 前期	5%	摩滅顕著。
-	②	41-1	08-1-2-2 第 10-1 層	弥生土器 甕	- - - -	(5.7) (3.2) 1.1	外）10YR4/2 灰黄褐色 内）10YR3/2 黒褐色 断）10YR5/3 にぶい黄橙色	やや粗 やや甘	弥生時代 前期	5%	摩滅顕著。
-	③	41-1	08-1-2-2 第 10-2 層	弥生土器 壺	- - - -	(3.3) (2.6) 0.6	外）10YR6/4 にぶい黄橙色 内）2.5Y4/1 黄灰色 断）2.5Y5/1 黄灰色～ 10YR6/4 にぶい黄橙色	やや粗 やや甘	弥生時代 前期	5%	摩滅顕著。
-	①	41-4	08-1-2-1 トレンチＡ 第 12-2 層	縄文土器 鉢	- - - -	(7.0) (2.7) 0.6	外）10YR5/1 褐灰色 内）2.5Y4/1 黄灰色～ N4/0 灰色 断）10YR6/3 にぶい黄橙色	粗 良好	縄文時代 晩期	5%	摩滅顕著。
-	②	41-4	08-1-2-1 トレンチＡ 第 12-2 層	縄文土器 鉢	- - - -	(5.0) (4.0) 0.4	外）2.5Y5/2 暗灰黄色 内）2.5Y5/2 暗灰黄色 断）2.5Y5/1 黄灰色	粗 良好	縄文時代 晩期	5%	摩滅顕著。 わずかに縄文残る。
-	③	41-4	08-1-2-1 トレンチＡ 第 12-2 層	縄文土器 鉢	- - - -	(3.5) (4.3) 0.4	外）2.5Y5/1 黄灰色 内）2.5Y6/2 灰黄色 断）2.5Y5/1 黄灰色	粗 良好	縄文時代 晩期	5%	摩滅顕著。
-	④	41-4	08-1-2-1 トレンチＡ 第 12-2 層	縄文土器 鉢	- - - -	(2.5) (3.7) 0.3	外）2.5Y5/1 黄灰色 内）2.5Y6/2 灰黄色 断）2.5Y5/1 黄灰色	粗 不良	縄文時代 晩期	5%	摩滅顕著。
-	⑤	41-4	08-1-2-1 トレンチＡ 第 12-2 層	縄文土器 注口土器	- - - -	(4.5) (4.5) 0.4	外）2.5Y5/2 暗灰黄色 内）2.5Y4/1 黄灰色 断）2.5Y6/1 黄灰色	やや粗 良好	縄文時代 晩期	5%	内外面ともにユビナデ。
-	⑥	41-4	08-1-2-1 トレンチＡ 第 12-2 層	縄文土器	- - - -	(2.5) (3.0) 0.4	外）7.5YR5/4 にぶい褐色 内）10YR7/2 にぶい黄橙色 断）10YR6/3 にぶい黄橙色	粗 甘い	縄文時代 晩期	5%	摩滅顕著。
-	⑦	41-4	08-1-2-1 トレンチＡ 第 12-2 層	縄文土器	- - - -	(2.2) (4.7) 0.6	外）2.5Y6/2 灰黄色 内）2.5Y6/2 灰黄色 断）2.5Y6/2 灰黄色	やや粗 良好	縄文時代 晩期	5%	摩滅顕著。 外面、わずかに縄文残る。 内面、横方向の圧痕残る。
-	⑧	41-4	08-1-2-1 トレンチＡ 第 12-2 層	縄文土器	- - - -	(5.5) (3.7) 0.6	外）2.5Y6/3 褐灰色 内）2.5Y6/3 褐灰色 断）2.5Y6/3 褐灰色	粗 甘い	縄文時代 晩期	5%	摩滅顕著。
-	⑨	41-4	08-1-2-1 トレンチＡ 第 12-2 層	縄文土器	- - - -	(3.2) (4.5) 0.6	外）10YR7/2 にぶい橙色 内）10YR6/2 灰黄褐色 断）10YR7/2 にぶい橙色	粗 不良	縄文時代 晩期	5%	摩滅顕著。
-	⑩	41-4	08-1-2-1 トレンチＡ 第 12-2 層	縄文土器	- - - -	(3.0) (4.0) 0.6	外）2.5Y6/2 灰黄色 内）2.5Y4/1 黄灰色 断）2.5Y4/1 黄灰色	粗 不良	縄文時代 晩期	5%	摩滅顕著。

表５　遺物観察表（動物遺体）

図版番号	遺物番号	写真番号	遺構名	器種・種別	長さ	幅	厚	材質	時期	形態・手法の特徴
30	1	39-3	08-1-2-2 第７層	骨	14.3	0.6	0.65	ウマ 第２または第４中手骨	古墳時代前期	未加工
-	-	39-4	08-1-2-1 30 溝 土器だまり６	歯	1.45	1.0	1.2	イノシシ 小臼歯	古墳時代前期	未加工
-	-	-	08-1-2-1 第３層	歯	-	-	-	ウマ 臼歯	中世	未加工

表６　遺物観察表（金属製品）

図版番号	遺物番号	写真番号	遺構名	種別器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	時期	形態・手法の特徴
23	13	15-2	08-1-2-1 1a 層	煙管 吸口	7.9	0.95	0.05	7.9	銅製？	近世	

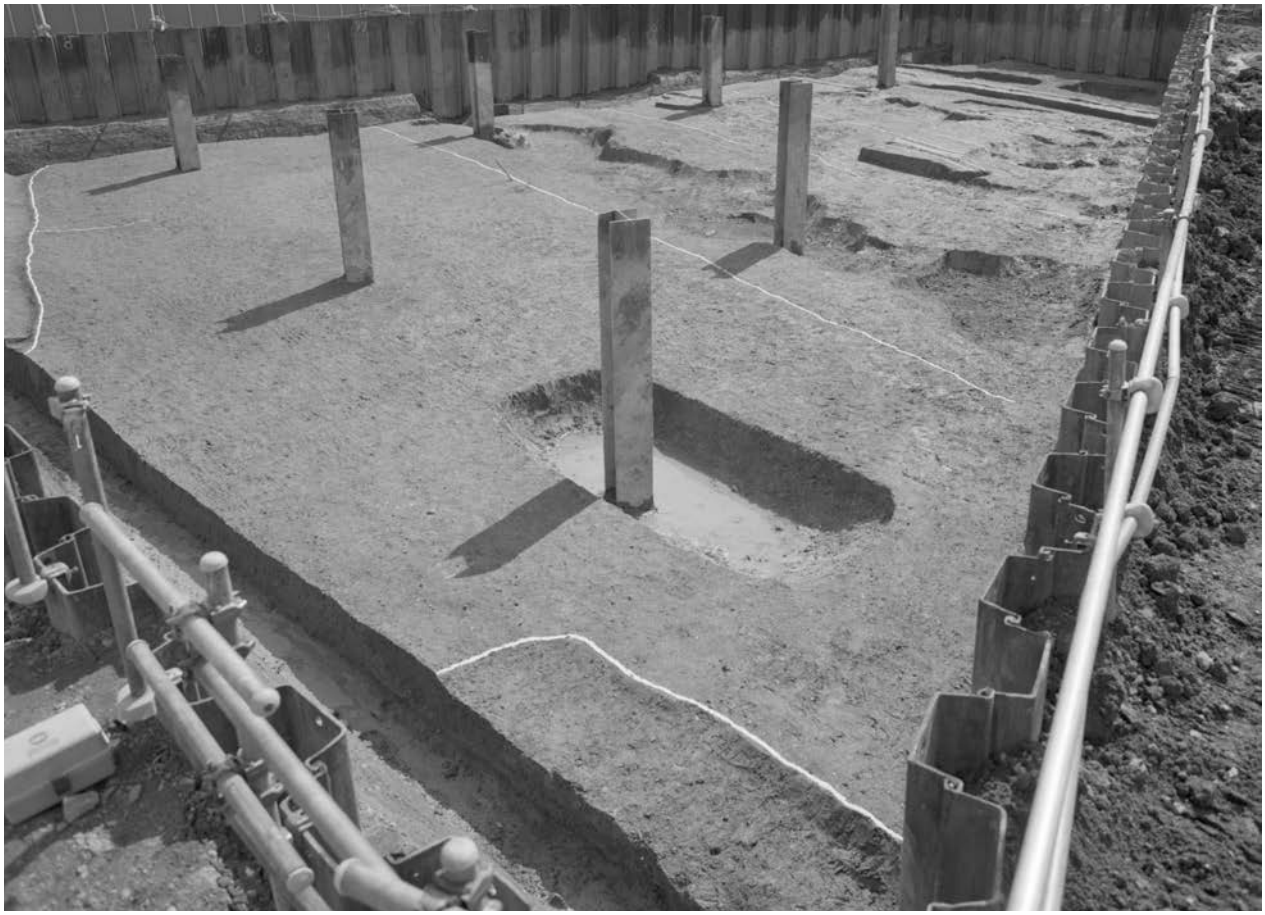
表７　遺物観察表（木製品・自然木）

図版番号	遺物番号	写真番号	遺構名	器種・種別	長さ	幅	厚さ	材質	時期	形態・手法の特徴
57	1	39-1	08-1-2-1 30 溝上層	割材	(62.6)	(4.8)	(3.5)	スギ	古墳時代前期	断面三角形。両端欠損。 一部炭化。
57	2	39-2	08-1-2-1 30 溝上層	板状部材	30.05	6.0	0.7	ヒノキ	古墳時代前期	欠損箇所多い。
57	3	39-3	08-1-2-1 30 溝上層	板状部材	18.0	6.0	0.8	アカガシ亜属	古墳時代前期	農耕土木具か？
57	4	-	08-1-2-1 30 溝大畦 b	付木	(16.6)	(1.4)	(1.5)	スギ	古墳時代前期	断面四角形。一部炭化。
57	5	-	08-1-2-1 30 溝下層	角棒状部材	29.0	(2.2)	(1.6)	スギ	古墳時代前期	側面を蟻状に加工。 指物机の脚板先端部か？
57	6	-	08-1-2-1 30 溝下層	板状割材	(18.0)	(4.5)	(1.2)	ヒノキ	古墳時代前期	上辺及び表面の一部を加工する。
-	①	16-3	08-1-2-1 第３層	付木	-	-	-	マツ科	中世	一部炭化。
-	②	16-3	08-1-2-2 第５面	付木	-	-	-	マツ科	古代末～中世初頭	一部炭化。
-	-	-	08-1-2-1 第２～３層	自然木	-	-	-	ヒノキ	中世	未加工。
-	-	-	08-1-2-1 30 溝上層	自然木	-	-	-	ヤナギ属	古墳時代前期	未加工。
-	-	-	08-1-2-2 第３層	自然木	-	-	-	ヒノキ	中世	未加工。
-	-	-	08-1-2-1 第６層下層	自然木	-	-	-	マツ科	古代以前	未加工。
-	-	-	08-1-2-1 第８－１層	自然木	-	-	-	ヒノキ	古墳時代前期	未加工。

表８　遺物観察表（石器・石製品）

図版番号	遺物番号	写真番号	調査区 層位・遺構面	種別　器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	時期	形態・手法の特徴
26	20	19-1	08-1-2-1 第６層下層	石板？	(14.9)	(9.5)	1.9	225.0	片麻岩	古代以前	表裏面ともに細かく敲打。 鑿状工具による加工痕あり。
59	1	40-1	08-1-2-1 第 10-1 層	石剣 (石槍)	(14.9)	3.3	1.3	59.2	サヌカイト	弥生時代前期後～ 中期初	
59	2	40-2	08-1-2-1 第 10-2 層 (側溝)	石庖丁	(5.9)	(3.5)	0.6	15.2	緑泥片岩	弥生時代前期	
-	①	40-4	08-1-2-1 第 1-2 層	剥片	5.7	4.8	2.4	57.6	サヌカイト	-	
-	②	40-4	08-1-2-1 第３層	剥片	4.6	3.65	1.1	20.0	サヌカイト	-	
-	③	40-4	08-1-2-1 第６層下層	剥片	3.8	2.8	0.6	5.0	サヌカイト	-	
-	④	40-4	08-1-2-1 第６層下層	剥片	5.8	2.4	0.8	11.1	サヌカイト	-	
-	⑤	40-4	08-1-2-1 第３遺構面	剥片	4.9	1.8	0.6	6.2	サヌカイト	-	
-	⑥	40-4	08-1-2-1 第６層下層	剥片	5.2	4.7	1.5	39.7	サヌカイト	-	
-	⑦	40-4	08-1-2-1 第６層下層	剥片	3.8	7.6	1.2	34.7	サヌカイト	-	
-	⑧	40-4	08-1-2-1 第６層下層	石剥	6.3	5.0	1.7	42.8	サヌカイト	-	
-	⑨	40-4	08-1-2-1 第５層	剥片	7.0	5.9	1.05	30.1	サヌカイト	-	
-	⑩	40-4	08-1-2-1 第６層上層	剥片	5.1	4.0	1.2	24.2	サヌカイト	-	
-	⑪	40-4	08-1-2-1 第６層上層	砥石	(6.3)	(5.5)	2.3	91.6	凝灰岩	-	上下面は折損。 側面は滑らかな使用痕あり。

写　真　図　版



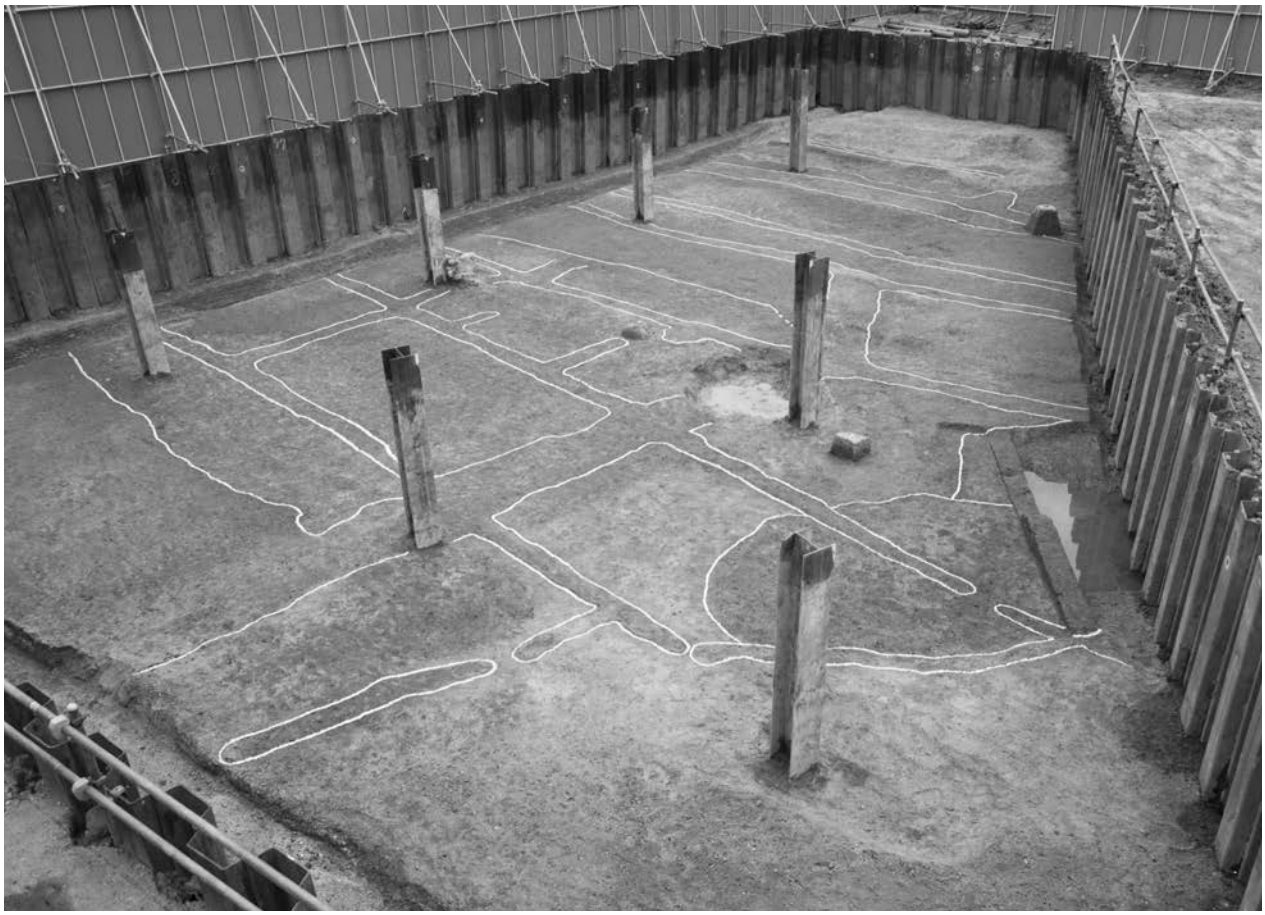
１．08－１－１区　第１遺構面全景（北西から）

２．08－１－１区　第２遺構面全景（北西から）

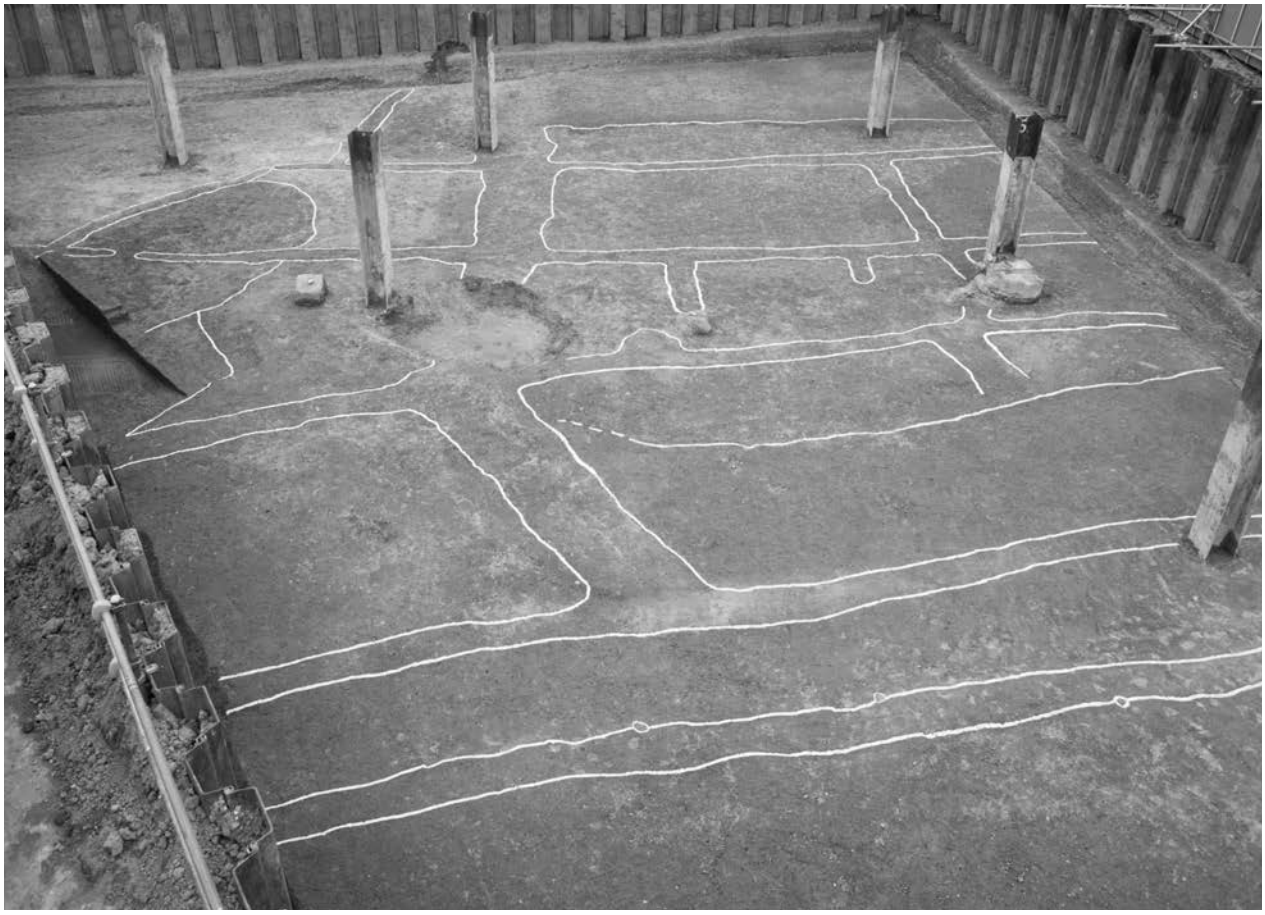
図版２　遺構

１．08－１－１区　第２遺構面全景（西から）

２．08－１－１区　第３・第４遺構面全景（北西から）

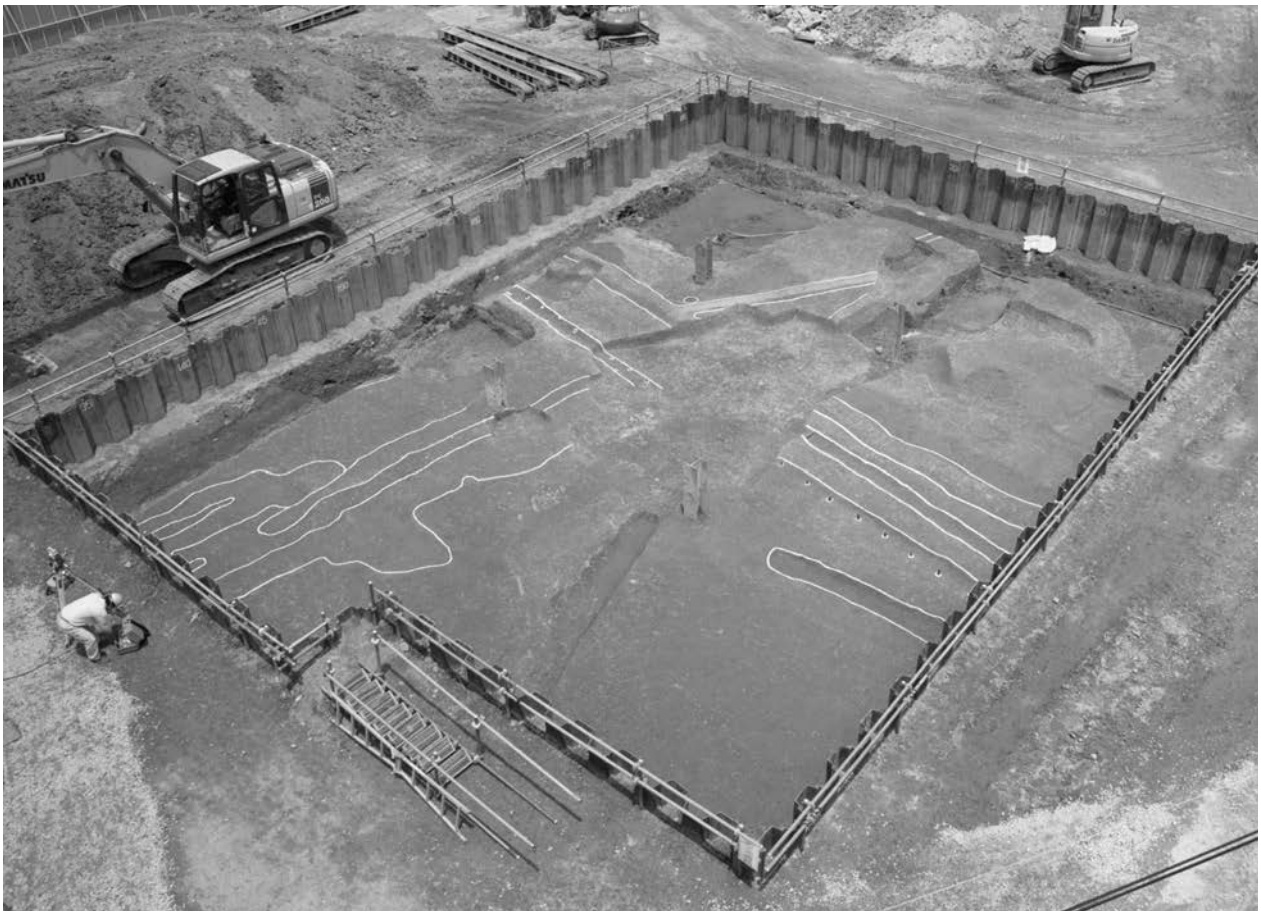


１．08－１－１区　第５遺構面全景（北西から）

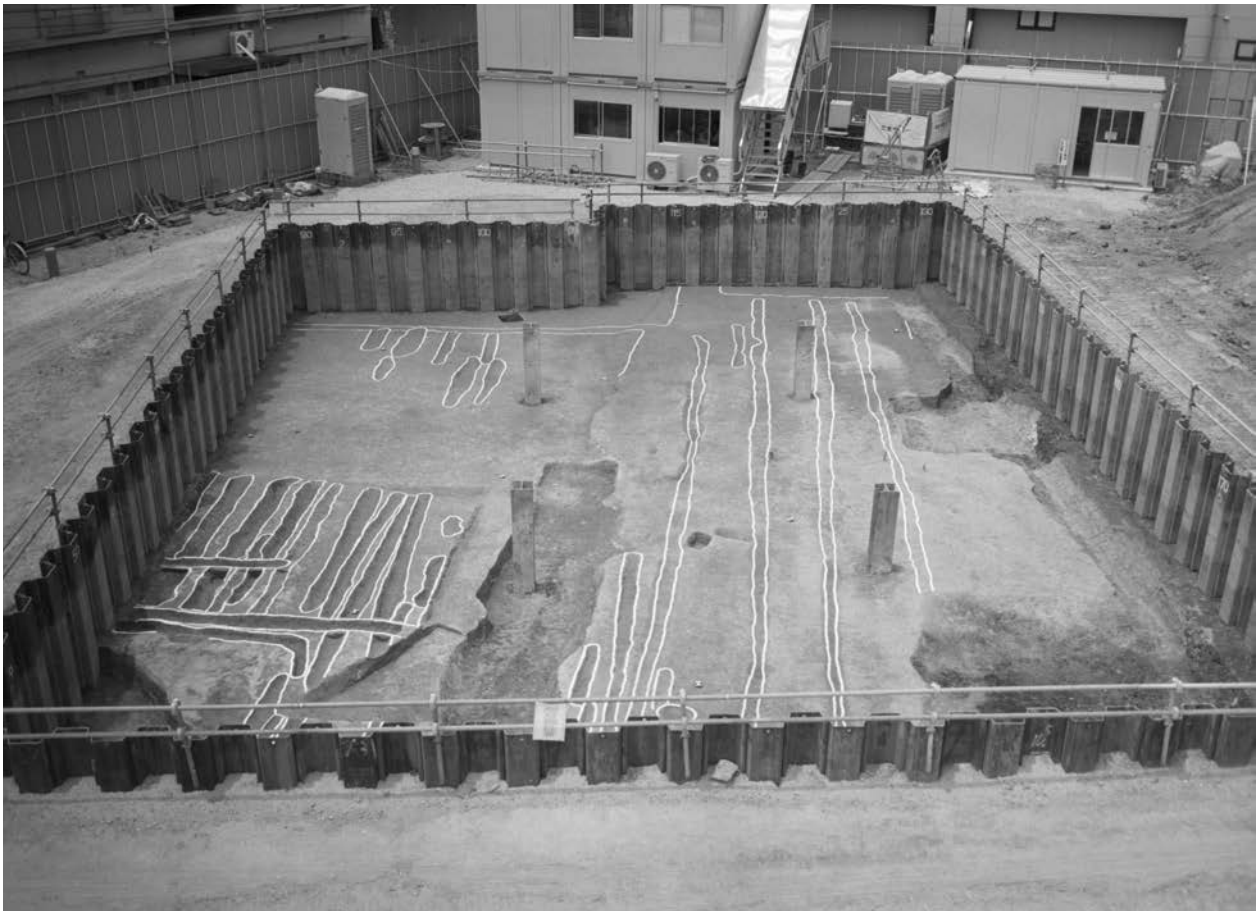


２．08－１－１区　第５遺構面全景（南から）

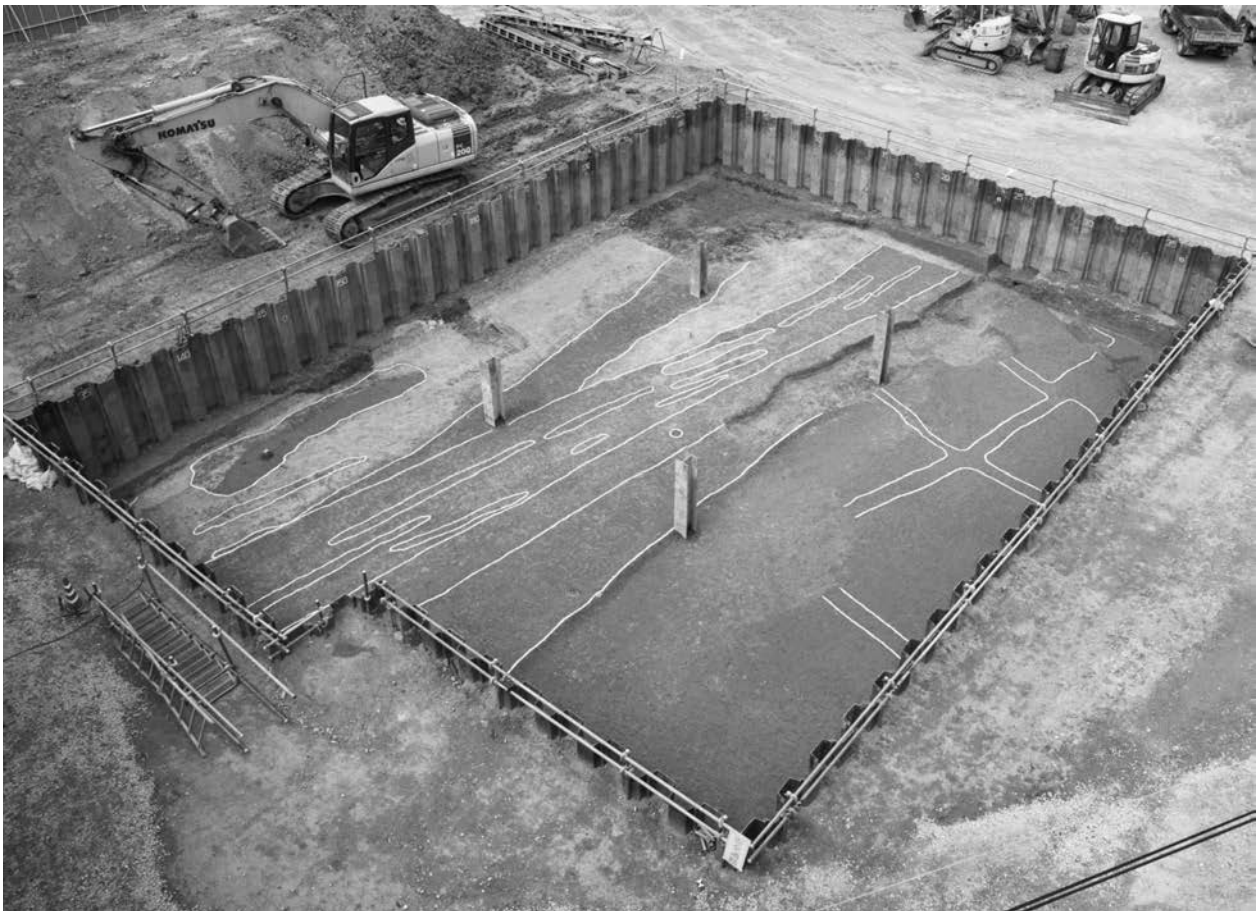
図版４　遺構



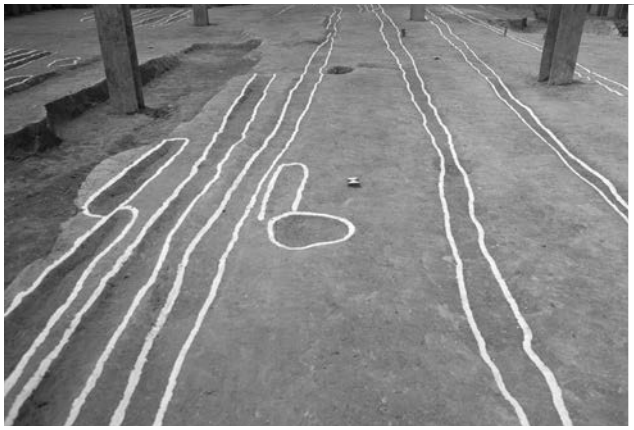
１．08－１－２－１区　第１遺構面全景（南西から）



２．08－１－２－１区　第２遺構面全景（東から）

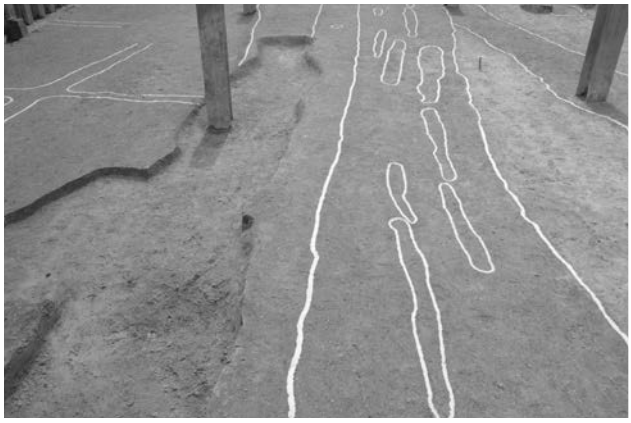


１．08－１－２－１区　第４遺構面全景（南西から）

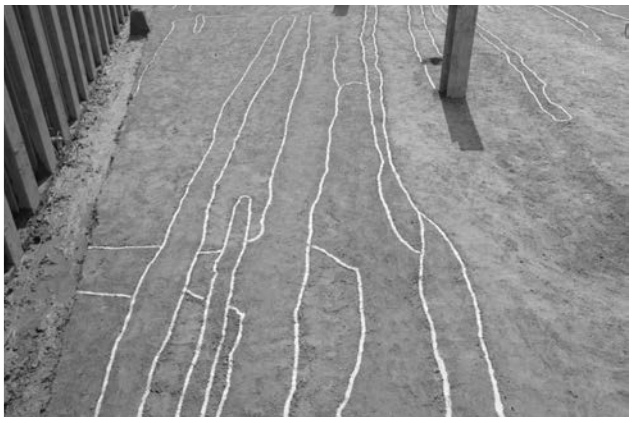


２．08－１－２－１区
第２遺構面畝群検出状況（東から）

３．08－１－２－１区
第４遺構面水田検出状況（東から）

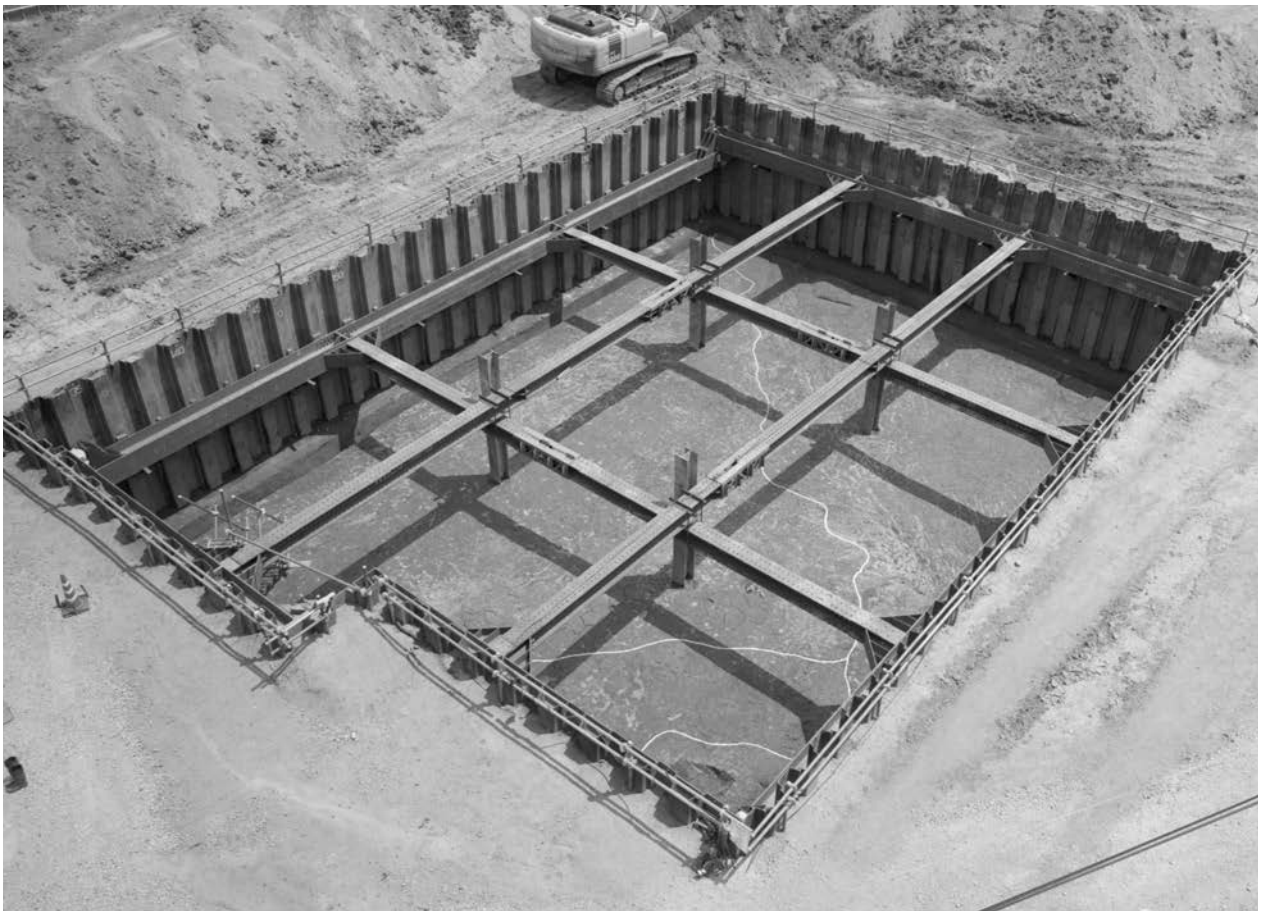


４．08－１－２－１区
第４遺構面鋤溝群検出状況（東から）



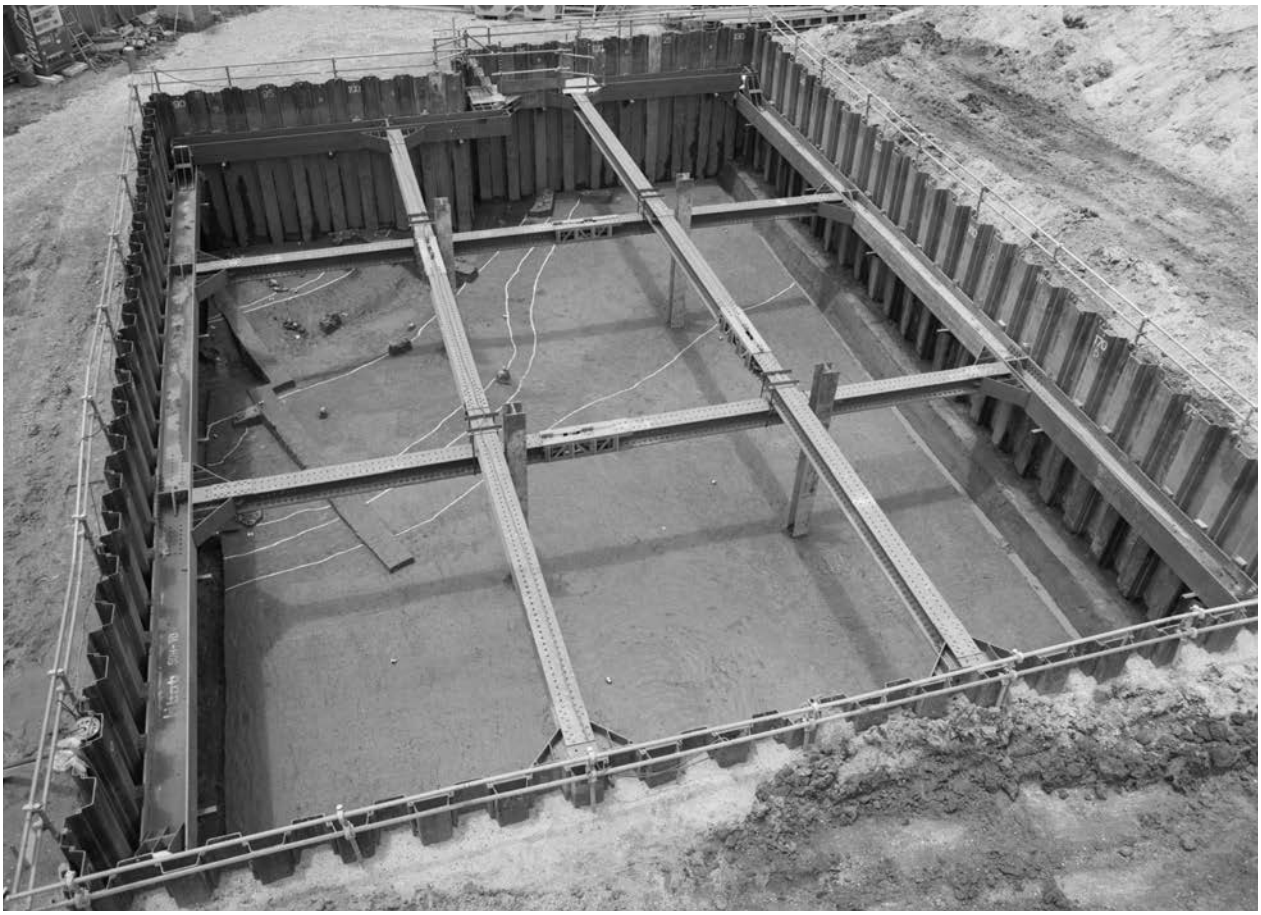
５．08－１－２－１区
第５遺構面溝群検出状況（東から）

図版６　遺構

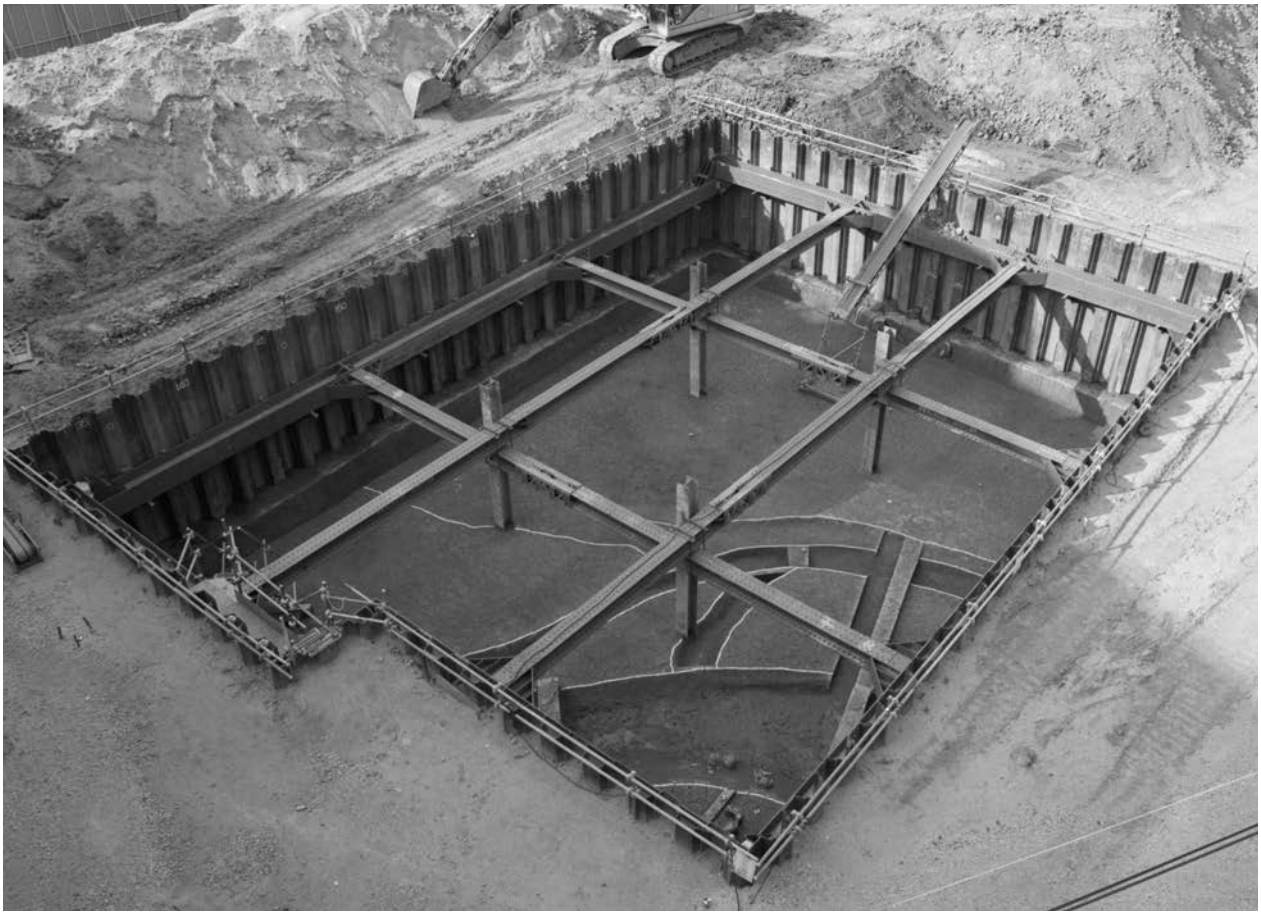


１．08－１－２－１区　第６遺構面全景（南西から）

２．08－１－２－１区　第６遺構面全景（北東から）



１．08－１－２－１区　第８－１遺構面全景（東から）

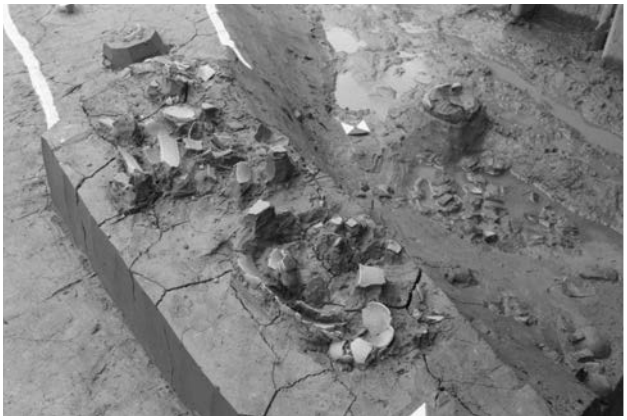


２．08－１－２－１区　第８－２遺構面全景（南西から）

図版８　遺構

１．08－１－２－１区　土器だまり１遺物出土状況

２．08－１－２－１区　土器だまり２遺物出土状況



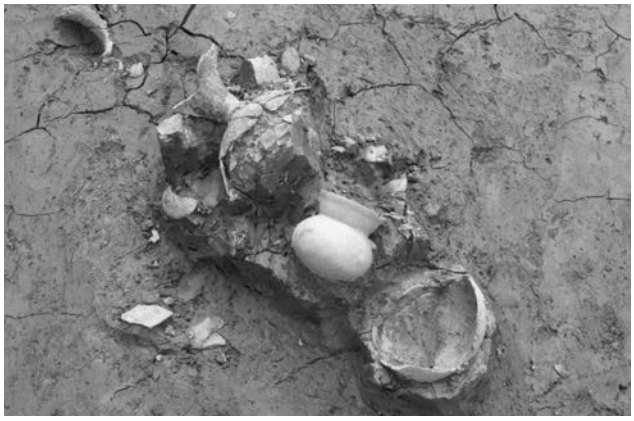
３．08－１－２－１区　土器だまり３遺物出土状況

４．08－１－２－１区　土器だまり４遺物出土状況

５．08－１－２－１区　土器だまり５遺物出土状況

６．08－１－２－１区
30 溝土器だまり６遺物出土状況

７．08－１－２－１区
30 溝土器だまり７遺物出土状況



８．08－１－２－１区
30 溝土器だまり８遺物出土状況

１．08－１－２－１区　南西部微高地（東から）

２．08－１－２－１区　36 土坑・37 土坑（東から）

３．08－１－２－１区　30 溝上層完掘状況

４．08－１－２－１区　30 溝南端部断面ａ（北から）

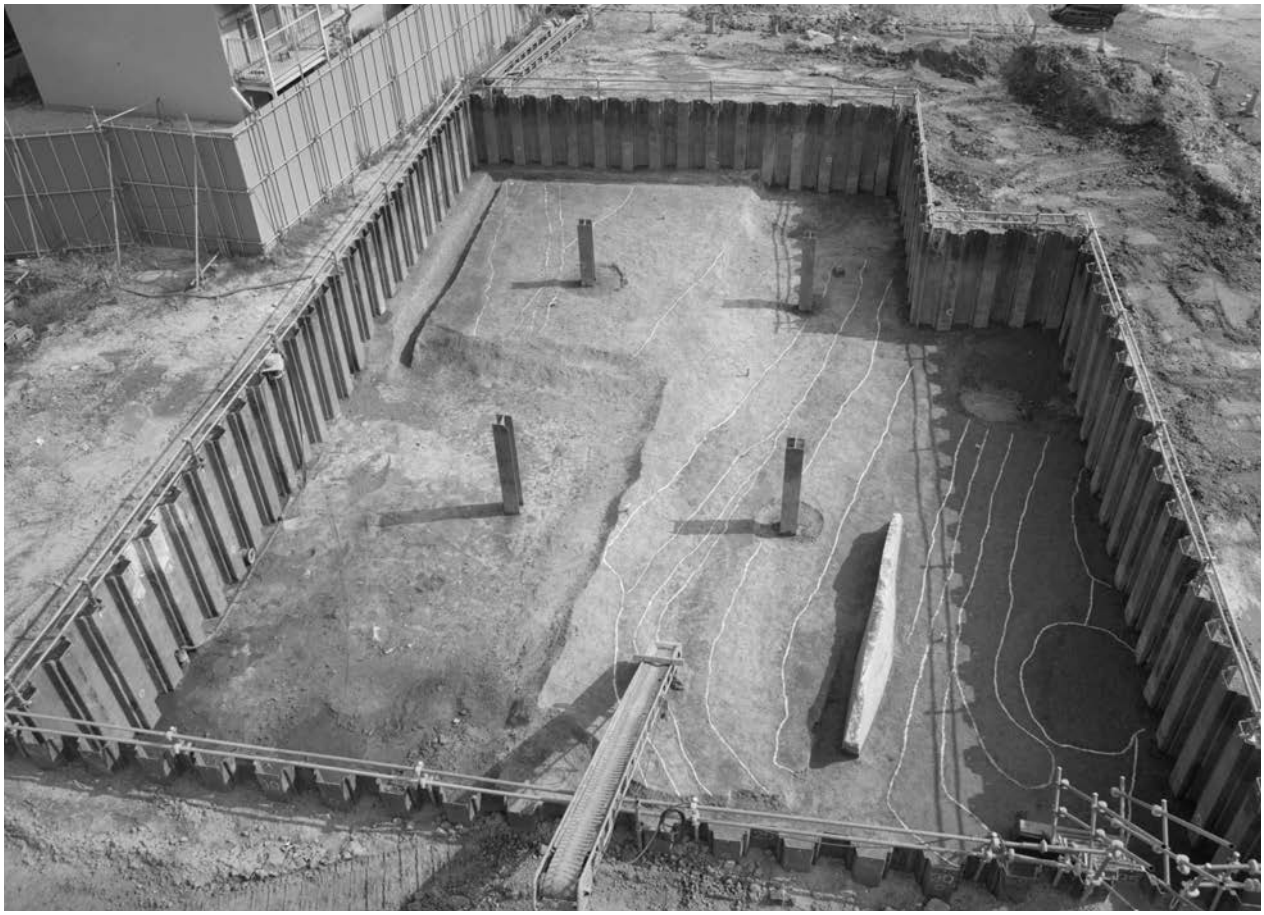
５．08－１－２－１区　第９遺構面全景（南西から）

図版 10　遺構

1．08－1－2－2区　第1遺構面全景（北東から）

2．08－1－2－2区　第2遺構面全景（西から）

1．08－1－2－2区　第３遺構面全景（北東から）



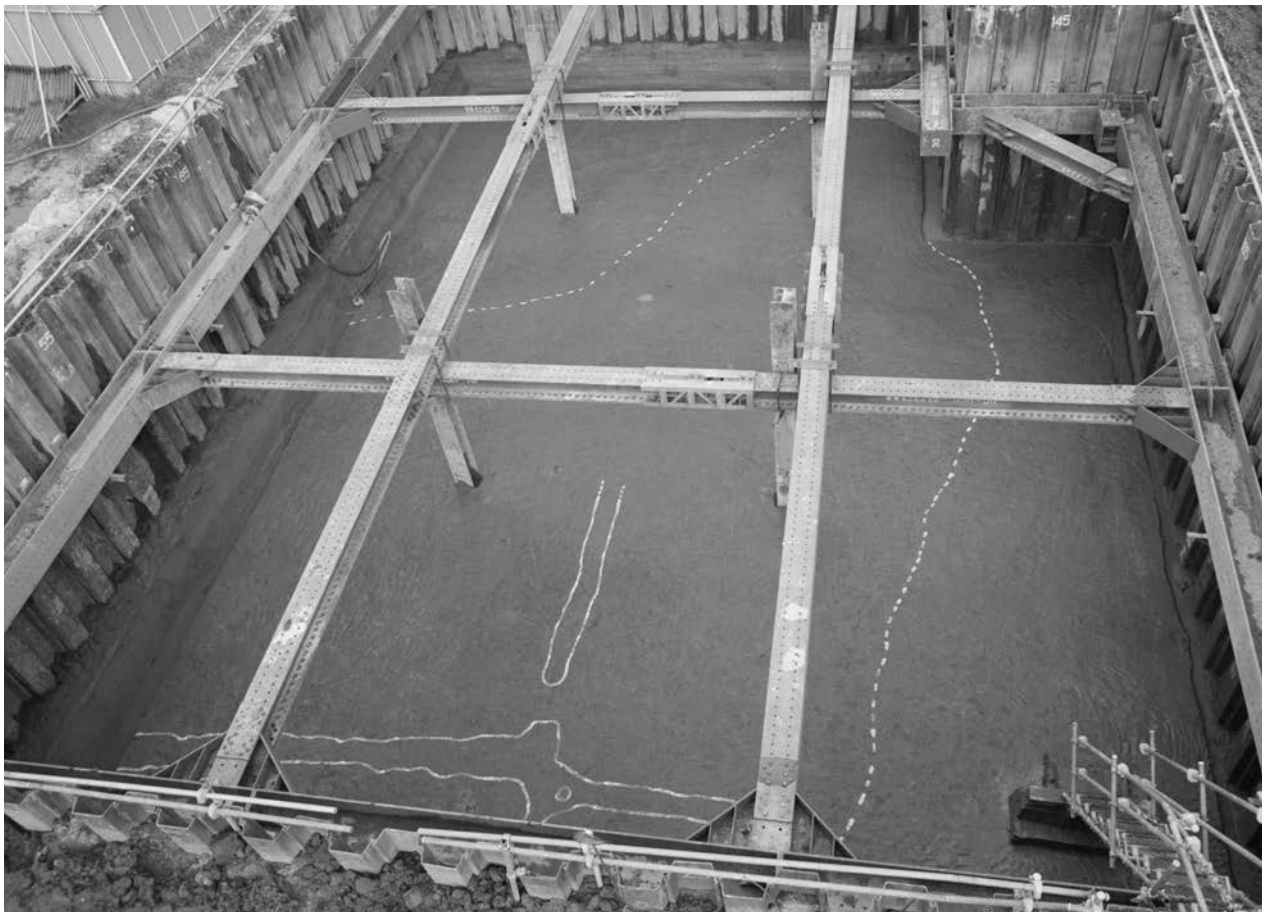
2．08－1－2－2区　第５遺構面全景（西から）

図版 12　遺構

1．08－1－2－2区　第６遺構面全景（北東から）

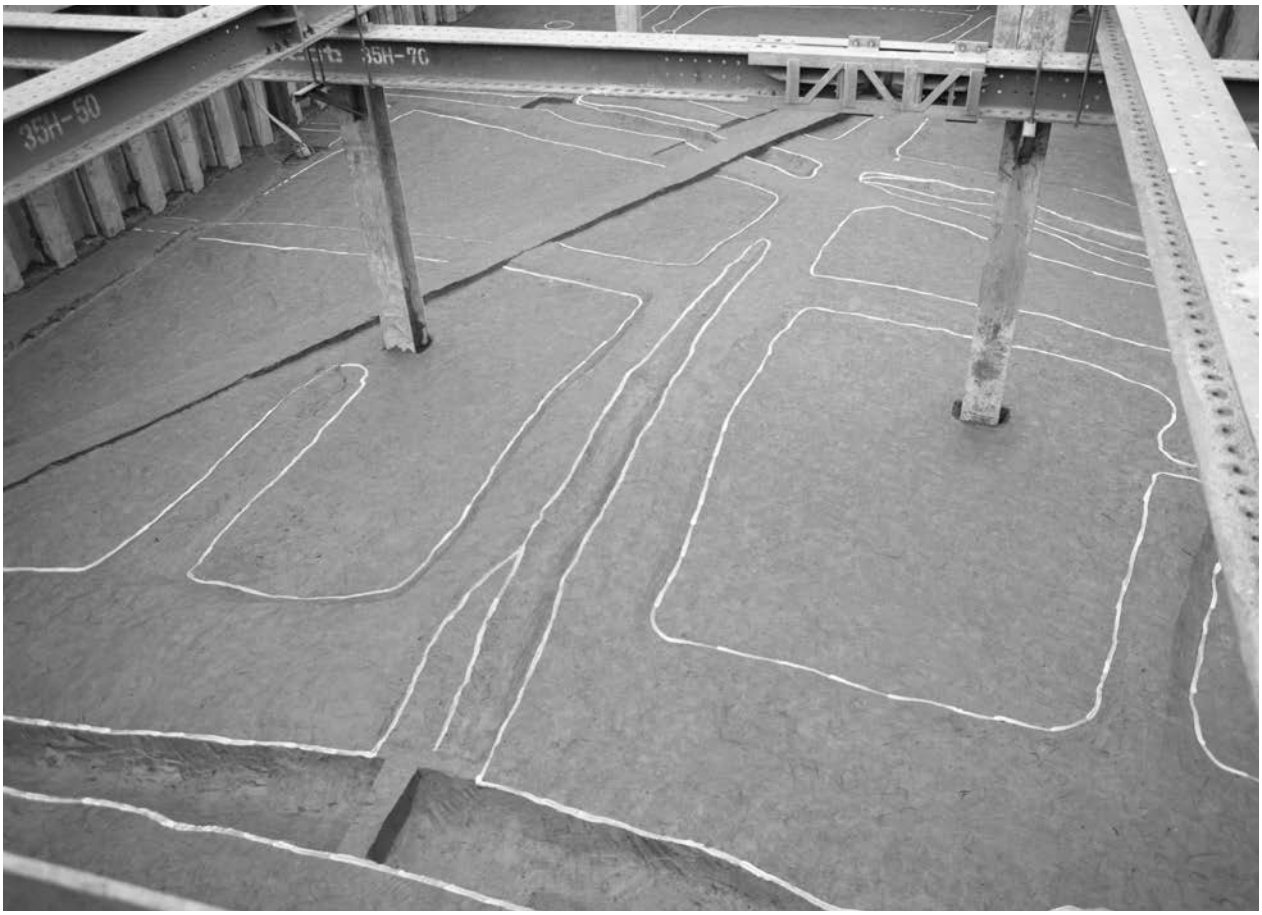
2．08－1－2－2区　第８－２遺構面全景（北東から）

1．08－1－2－2区　第8－3遺構面全景（西から）



2．08－1－2－2区　第9遺構面全景（西から）

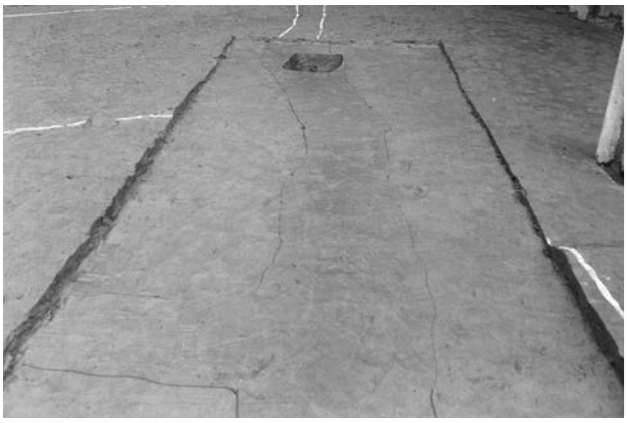
図版 14　遺構



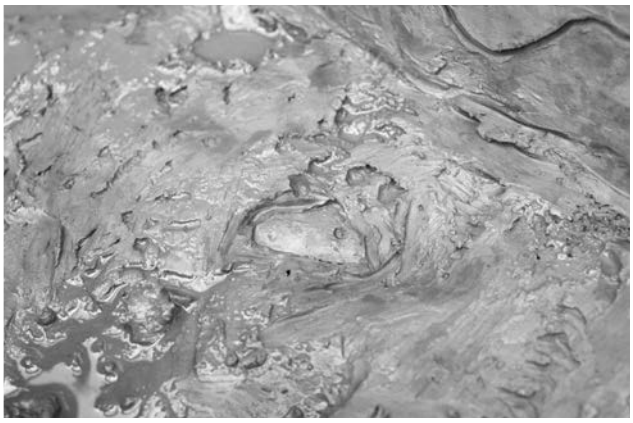
1．08 － 1 － 2 － 2 区　第 10 － 1 遺構面全景（西から）

2．08 － 1 － 2 － 2 区　第 10-1 遺構面小区画水田

3．08 － 1 － 2 － 2 区　第 10 － 1 層打製石器出土状況

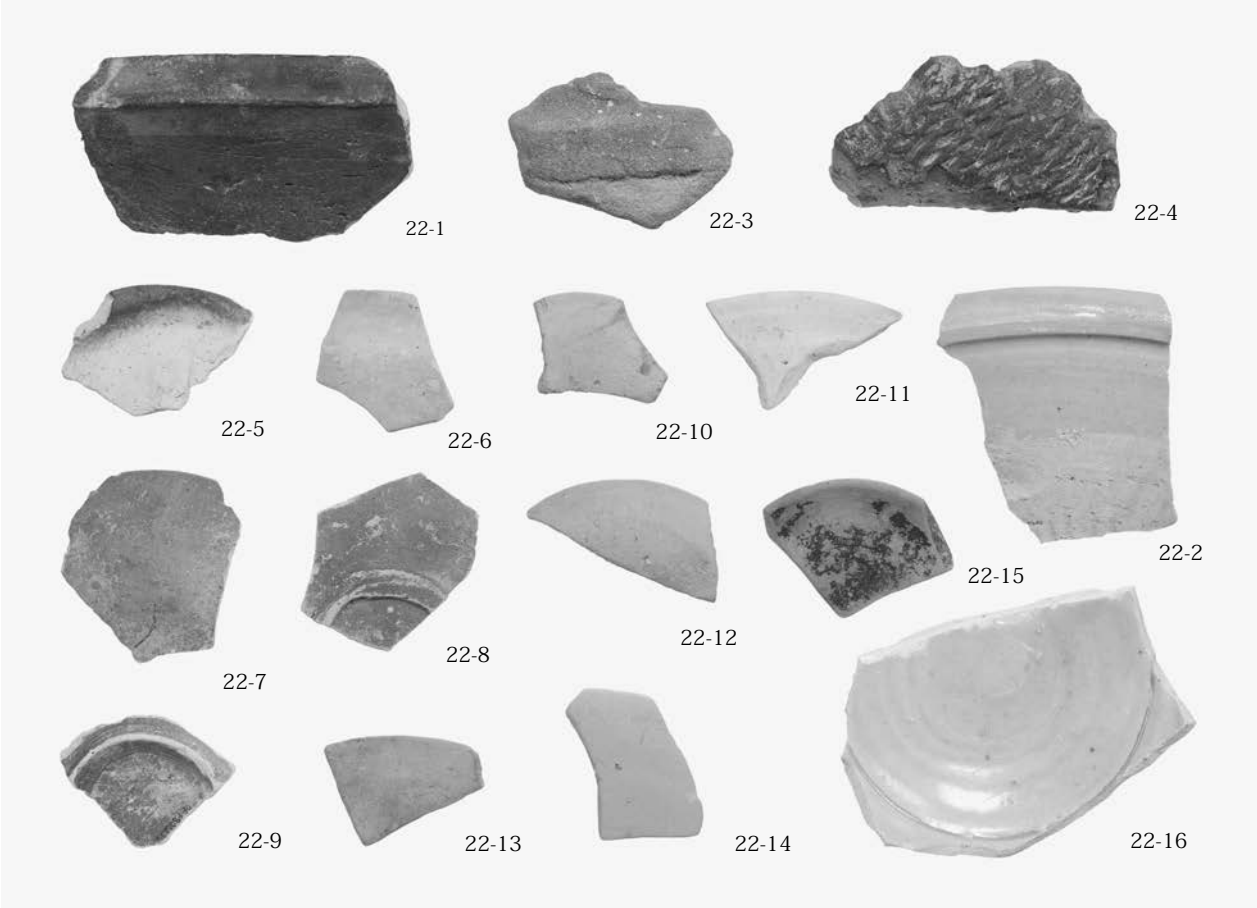


4．08 － 1 － 2 － 2 区
下層掘削トレンチ B　遺構検出状況（西から）

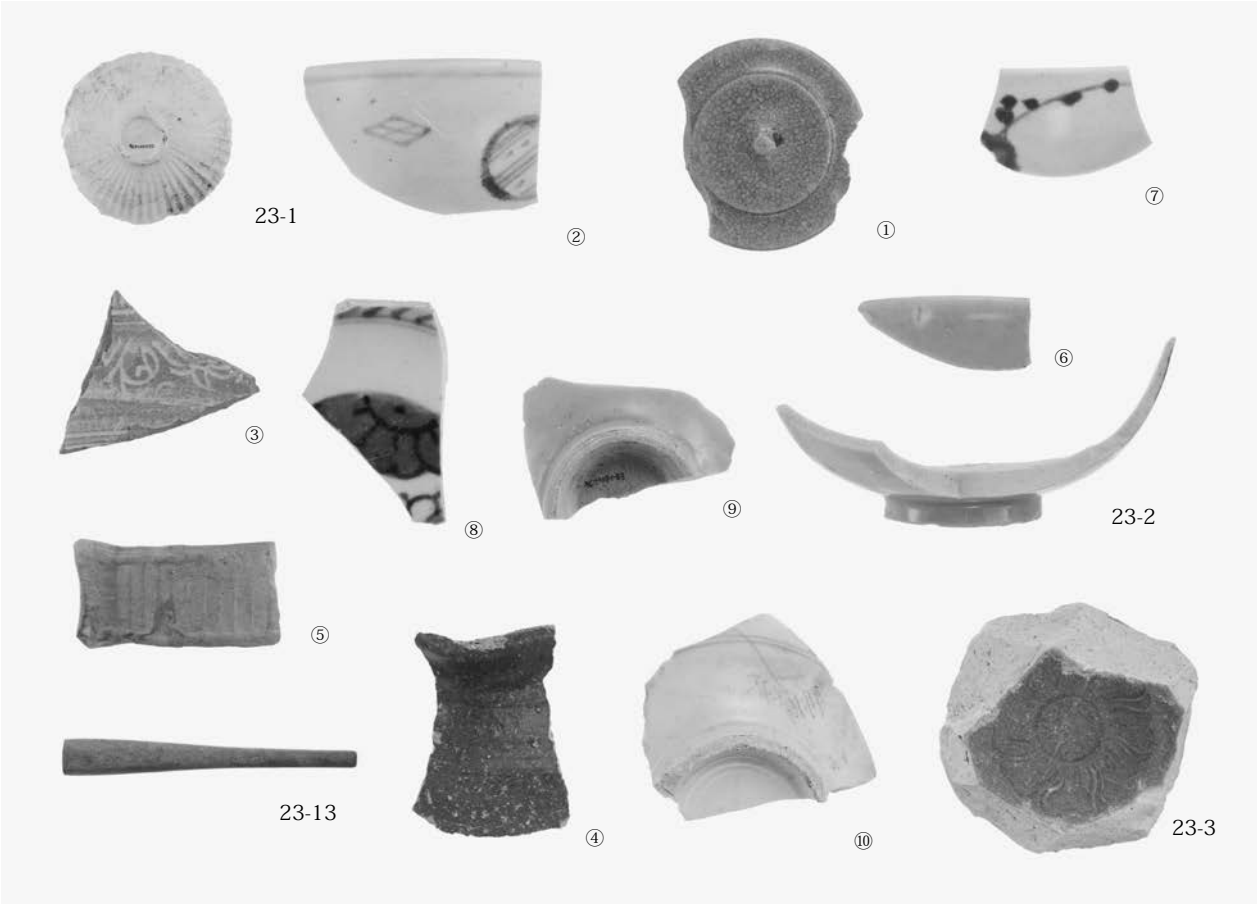


5．08 － 1 － 2 － 2 区　第 10 － 2 層石庖丁出土状況

※　番号は本文中掲載挿図番号・遺物観察表記載番号に同じ

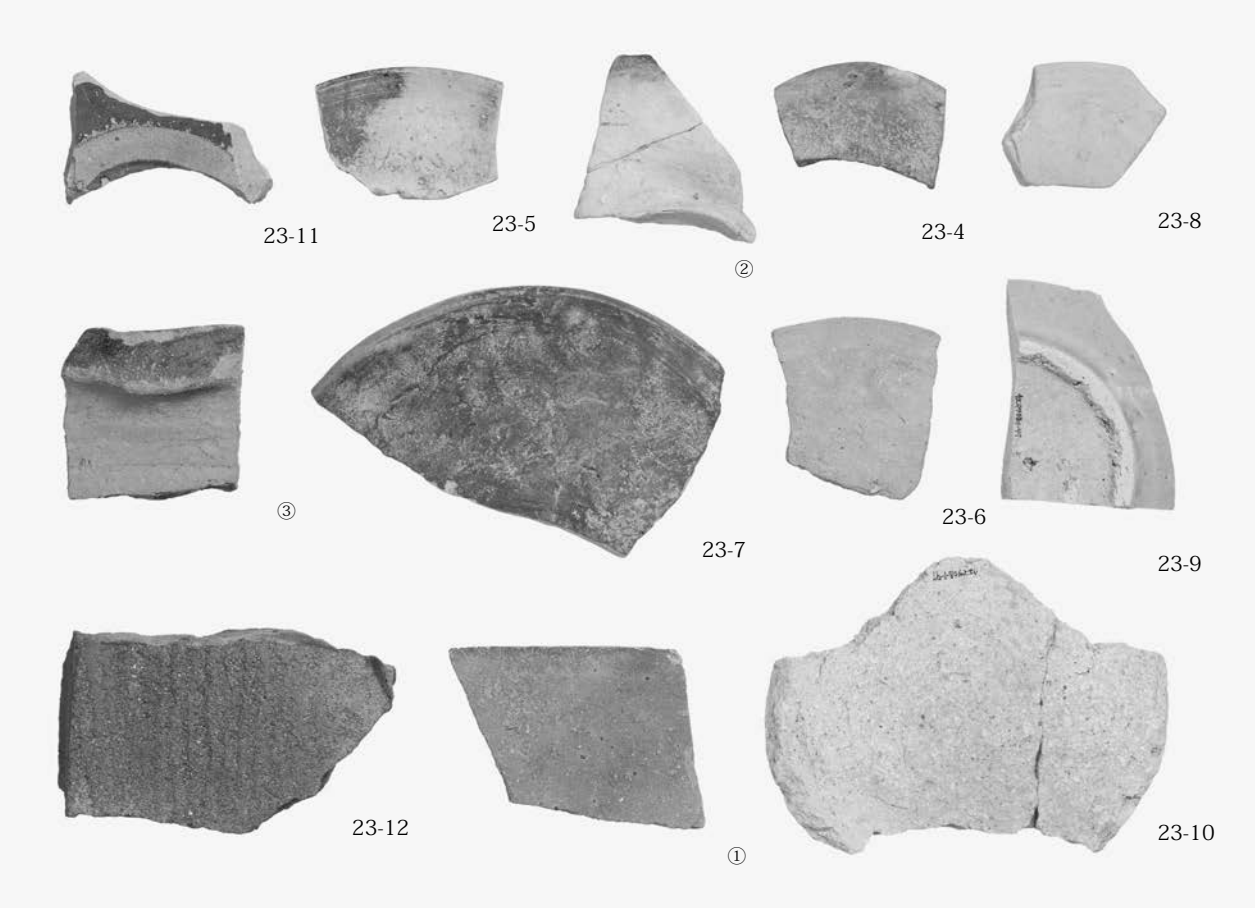


1．08－1－1区　　第1～5層出土遺物

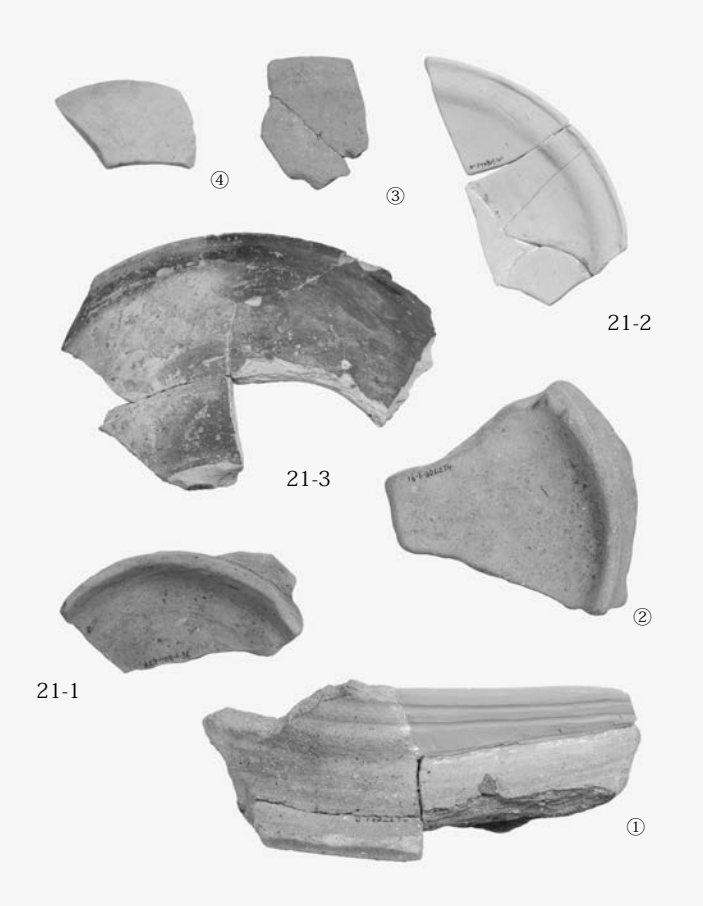


2．08－1－2－1区　　第1層出土遺物

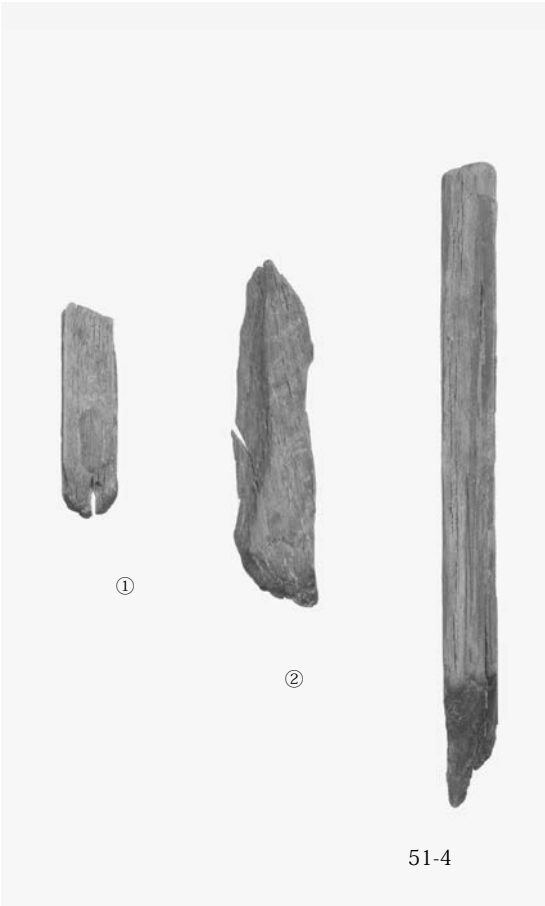
図版 16　遺物



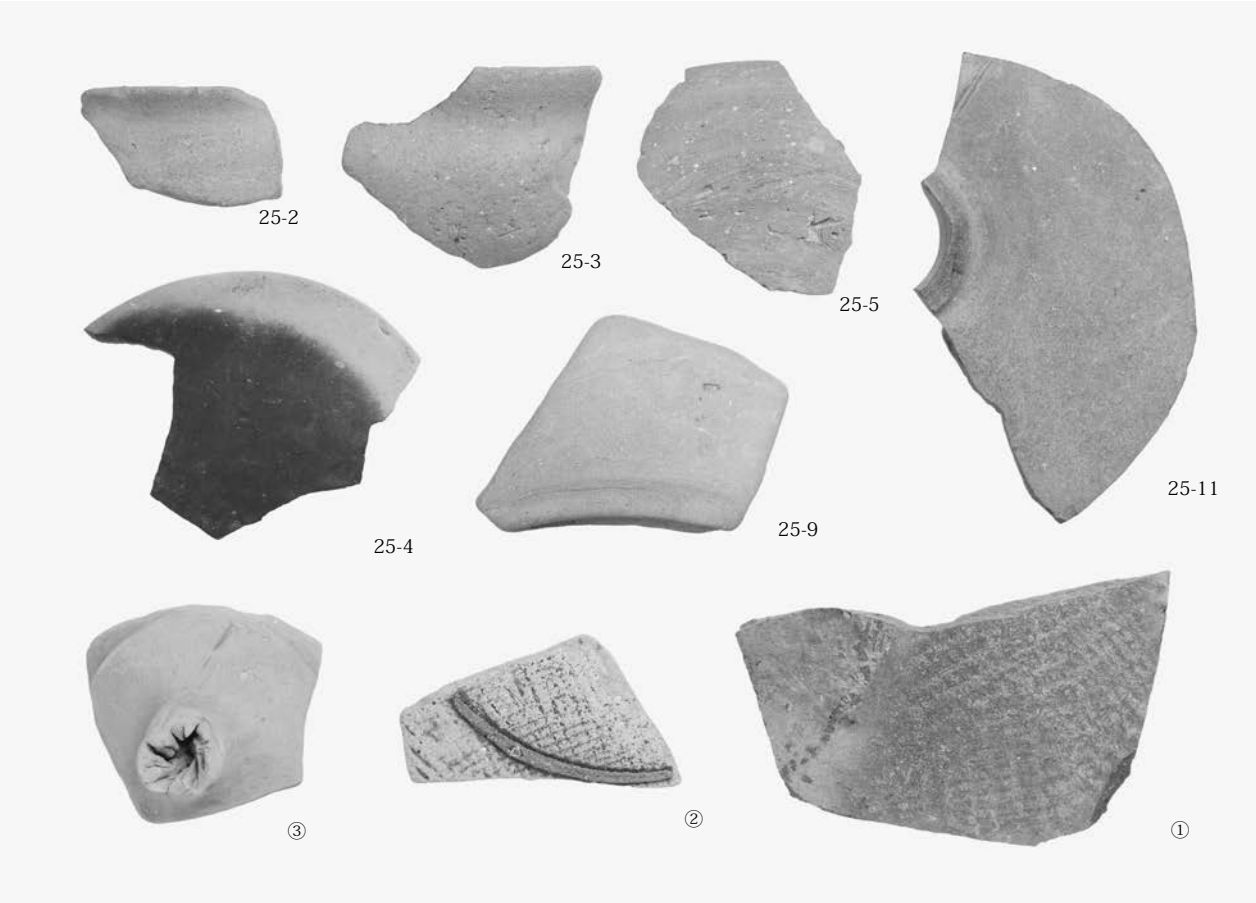
1．08－1－2－1区・08－1－2－2区　　第2～5層出土遺物



2．08－1－2－1区・08－1－2－2区
第5遺構面検出遺構内出土遺物

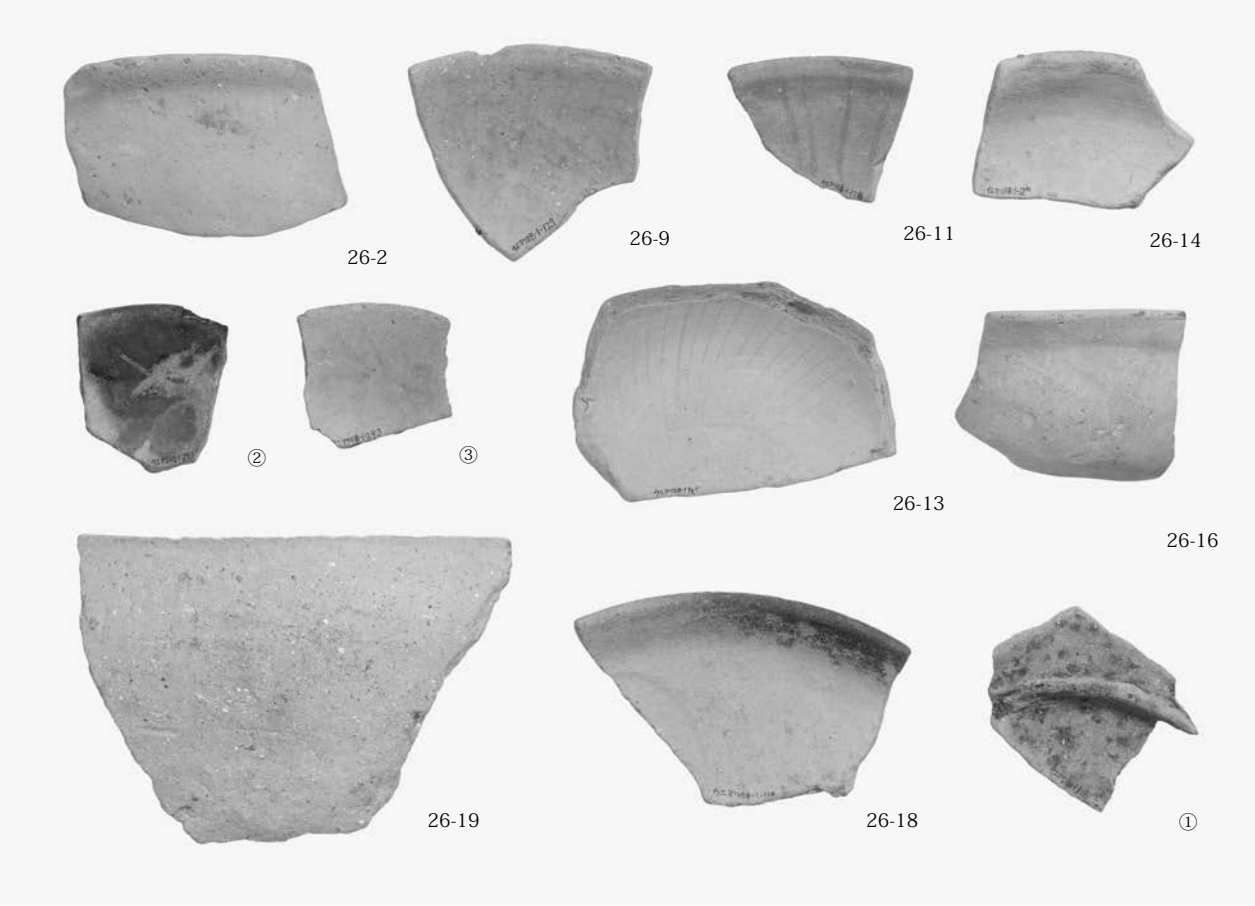


3．08－1－2－1・08－1－2－2区
出土遺物（付木）



1．08－1－1区　第6層出土遺物

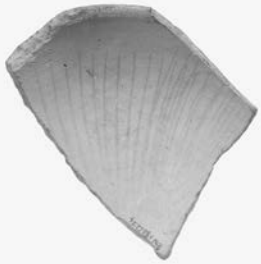
図版 18　遺物



1．08－1－2－1区　第6層出土遺物

26-6

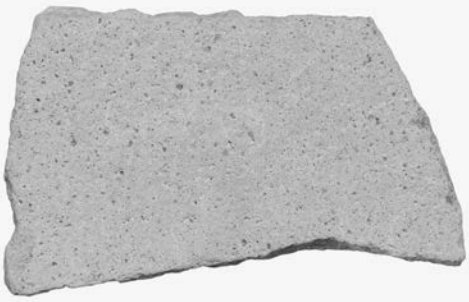
26-8



26-10

26-12

26-7



26-20

26-17

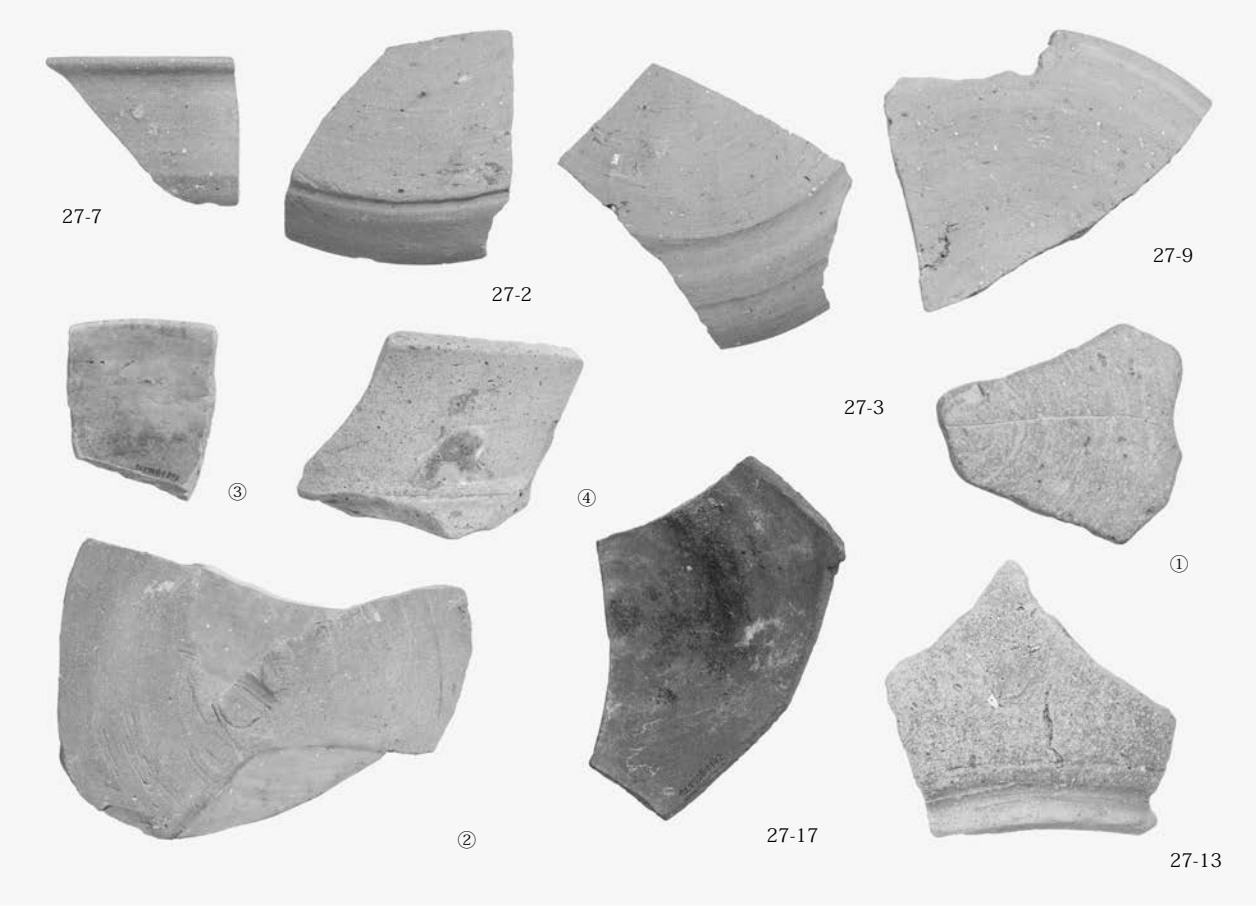
26-15

①

26-21

1．08－1－2－1区　第6層出土遺物

図版 20　遺物



1．08－1－2－1区　第6層出土遺物

27-8

27-14

27-11

27-15

27-12

27-16

1．08－1－2－1区　第6層出土遺物

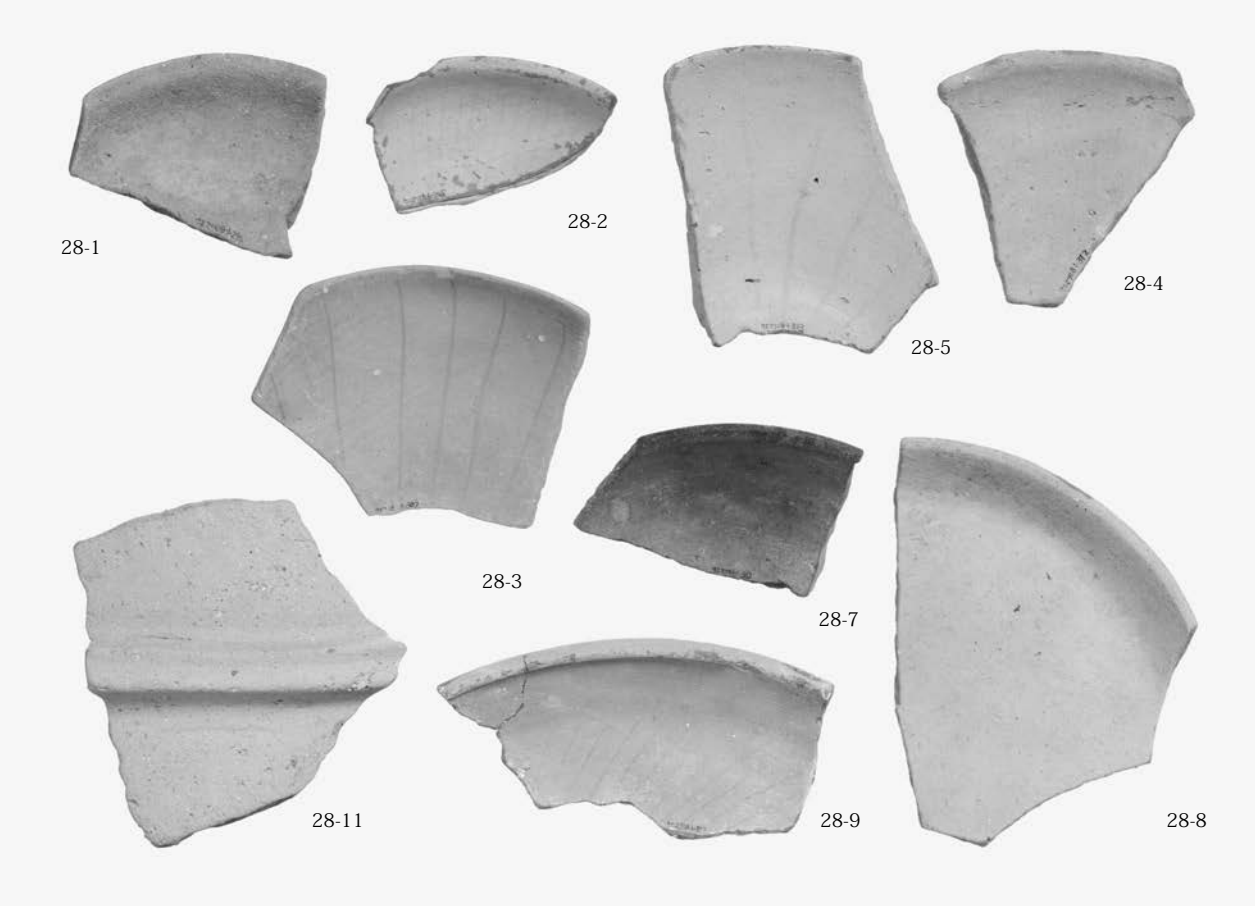
28-12

28-6

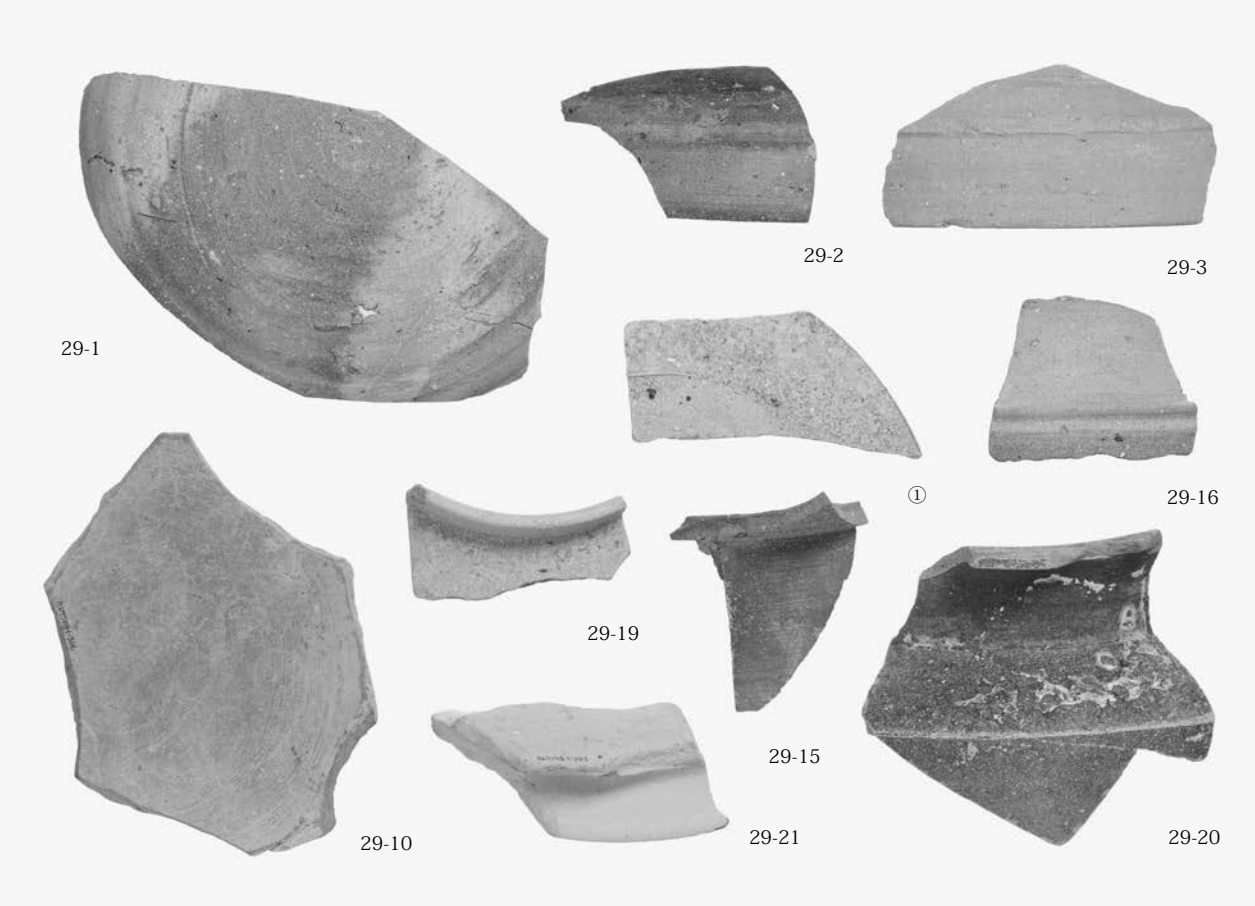
28-13

2．08－1－2－2区　第6層出土遺物

図版 22　遺物



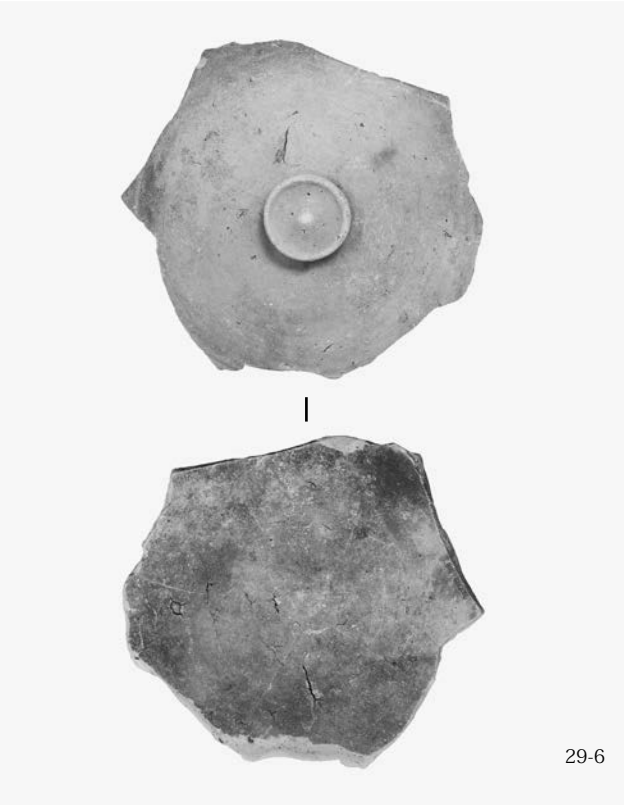
1．08－1－2－2区　第６層出土遺物



2．08－1－2－2区　第６層出土遺物

29-4

29- 5


29-6

29-7

29-8

29-9

29-10

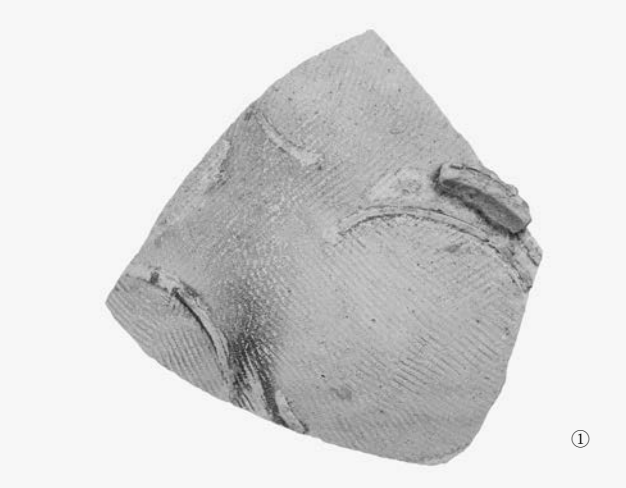
29-11

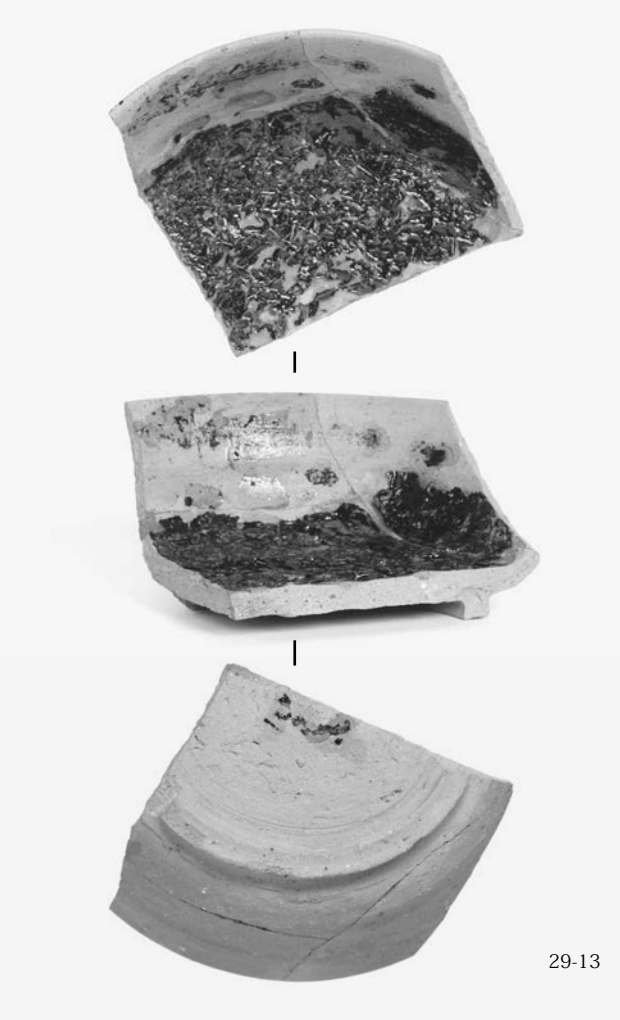
1．08－1－2－2区　第6層出土遺物

図版 24　遺物

29-12

29-14


①


29-13

29-17

29-18

1．08－1－2－2区　第6層出土遺物

30-2

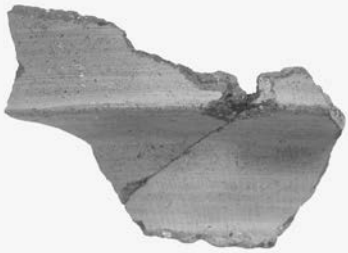
①

1．08－1－2－2区　第７層出土遺物

33-1

33-2

33-3



33-4

33-6

2．08－1－2－1区　第８－１遺構面土器だまり１出土遺物

図版 26　遺物

33-8

33-9

33-7

33-5

35-1

35-2

35-3

1．08－1－2－1区　第8－1遺構面土器だまり1・土器だまり1付近・土器だまり2出土遺物

35-4

35-5

35-6

35-7

35-8

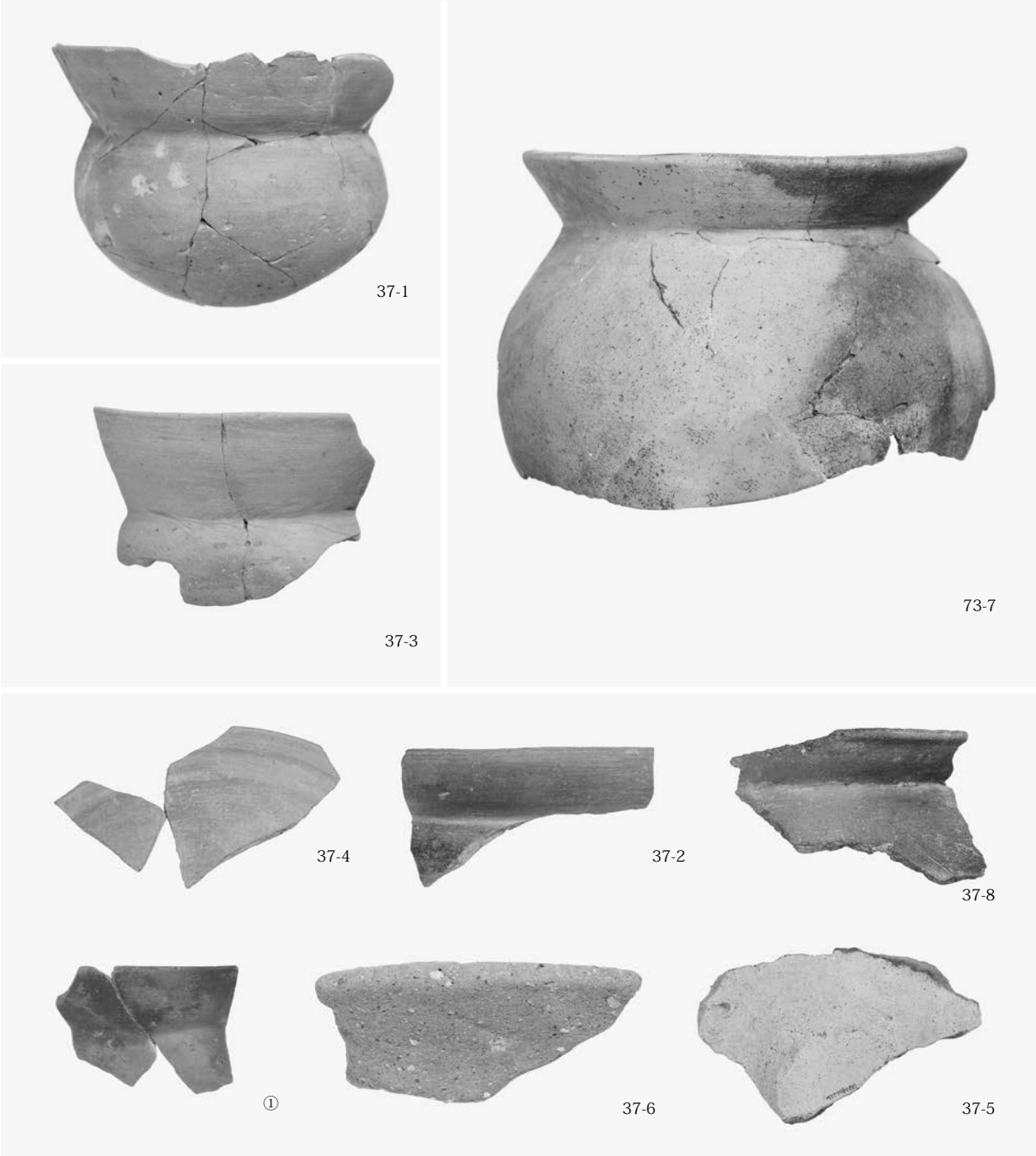
35-9

35-11

35-10

1．08－1－2－1区　第8－1遺構面土器だまり2出土遺物

図版 28　遺物



1．08－1－2－1区　第8－1遺構面土器だまり3出土遺物

2．08－1－2－1区　第8－1遺構面土器だまり4出土遺物

39-1

39-4

39-2

39-5

39-6

39-8

39-10

1．08－1－2－1区　第8－1遺構面土器だまり4出土遺物

図版 30　遺物

39-9

39-11

39-12

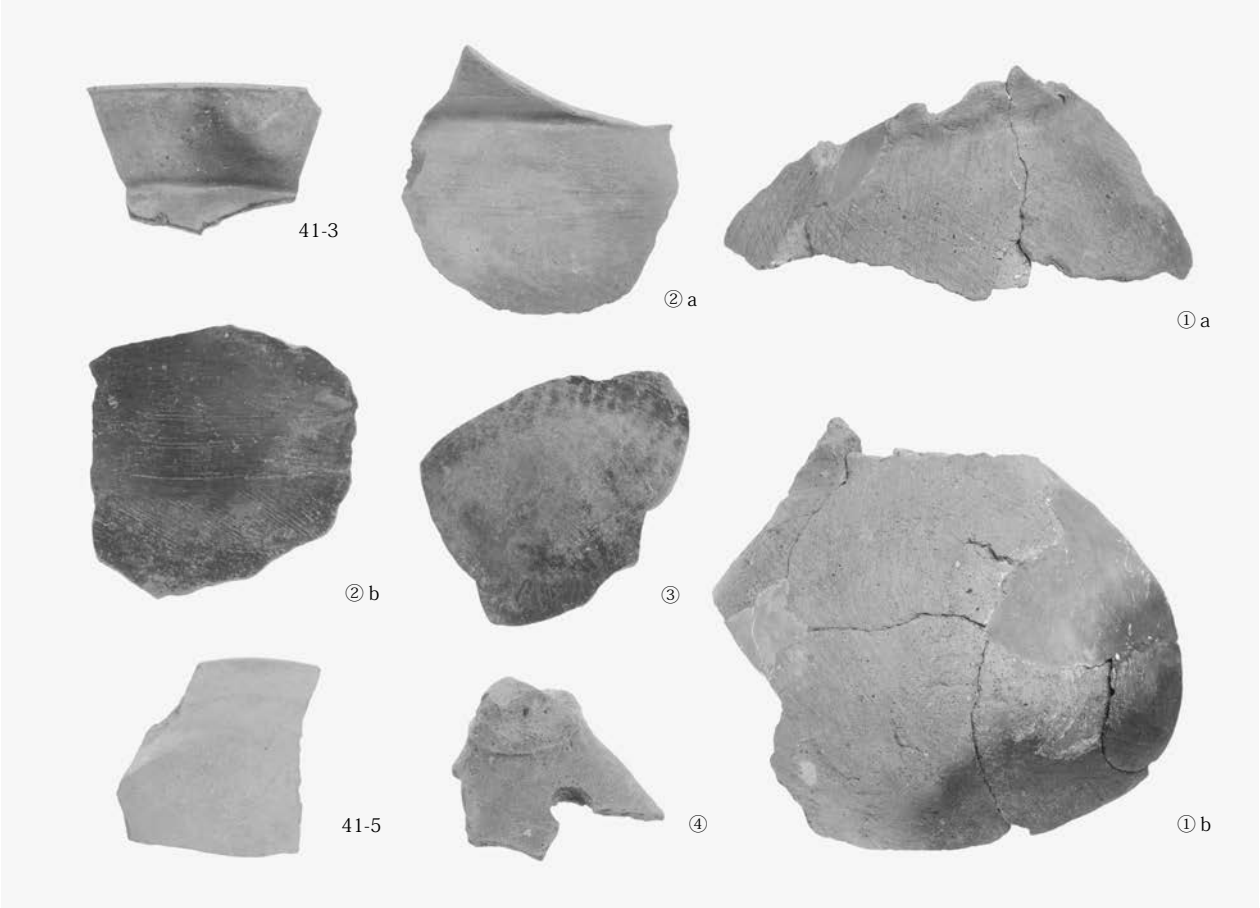
41-1

41-2

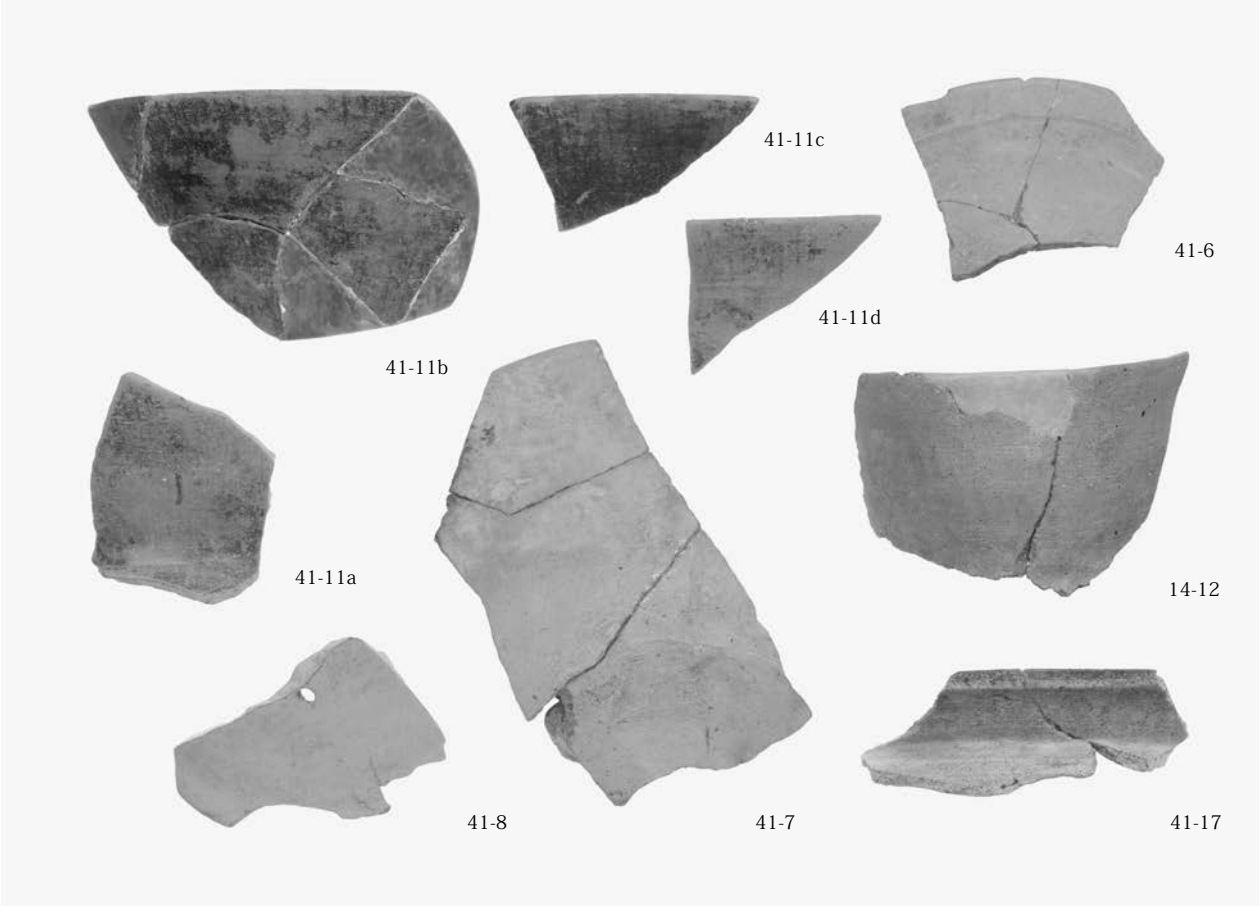
41-4

41-13

1．08－1－2－1区　第8－1遺構面土器だまり4・5出土遺物



1．08－1－2－1区　第8－1遺構面土器だまり5出土遺物



2．08－1－2－1区　第8－1遺構面土器だまり5出土遺物

図版 32　遺物

41-9

41-10

41-15

41-14

41-16

41-18

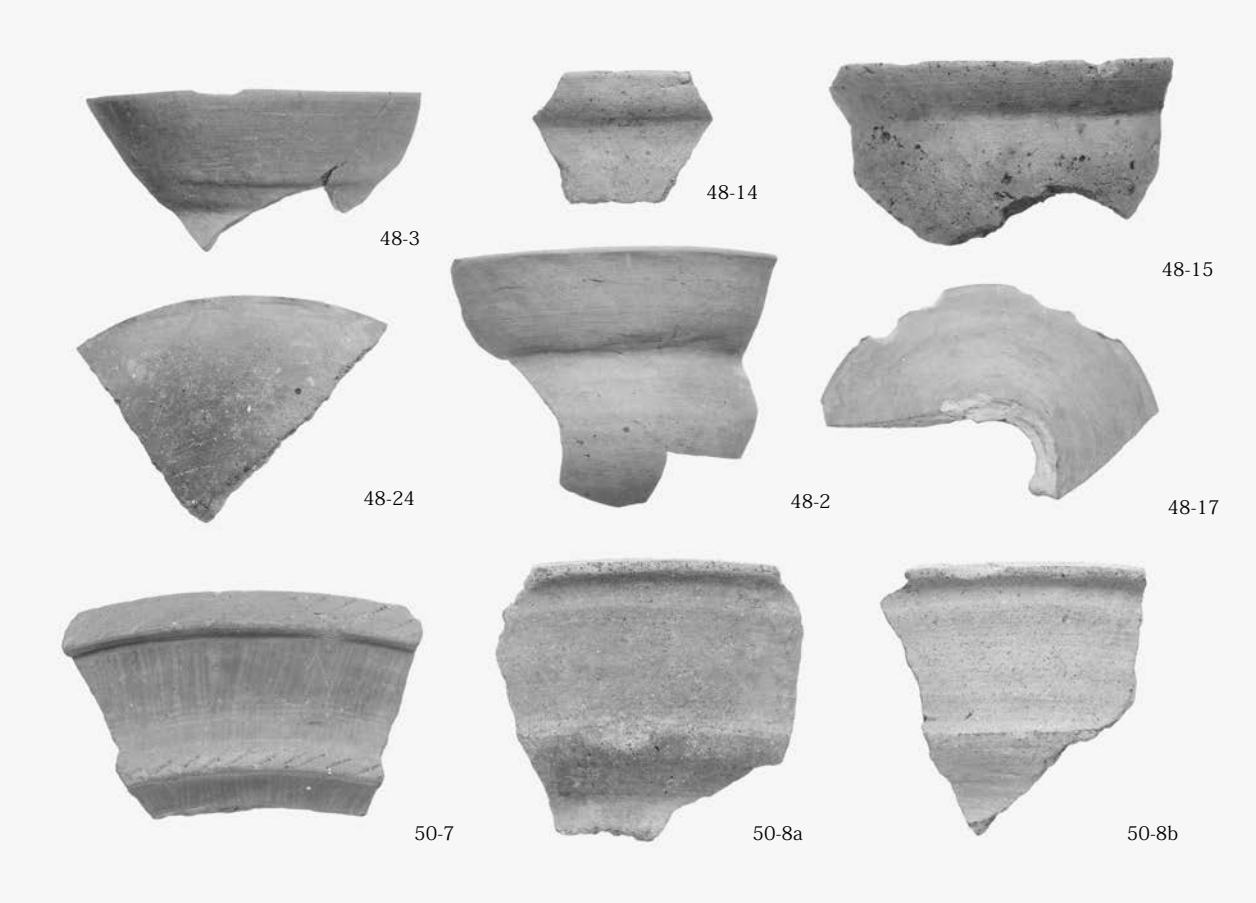
41-19

1．08－1－2－1区
第８－１遺構面土器だまり５出土遺物

50-13a

50-13b

2．08－1－2－1区　第８－２遺構面 35 土坑・36 土坑出土遺物



1．08－1－2－1区　第8－2遺構面30溝出土遺物

図版 34　遺物

48-7

48-8

48-9

48-10

48-11

48-12

48-13

48-16

1．08－1－2－1区　第8－2遺構面 30 溝出土遺物

48-19

48-18

48-20

48-21

48-22

48-25

48-23

1．08－1－2－1区　第8－2遺構面 30 溝出土遺物

図版 36　遺物

48-26

50-3

50-4

50-6

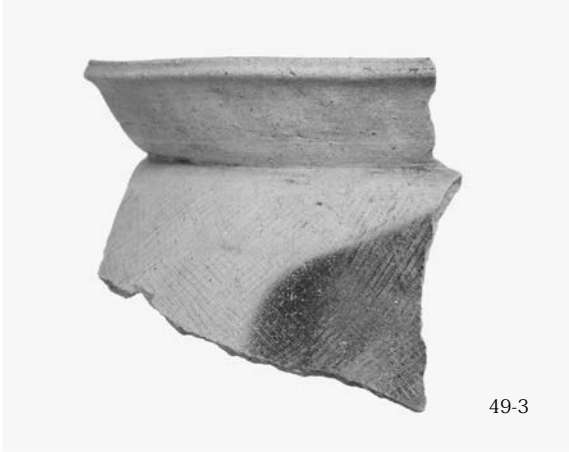
50-5

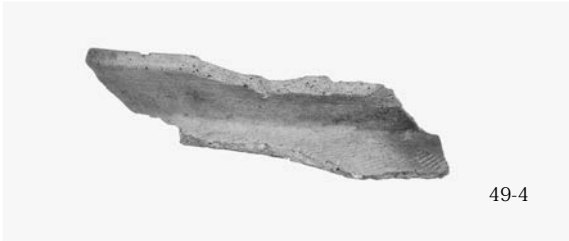
50-9

50-10

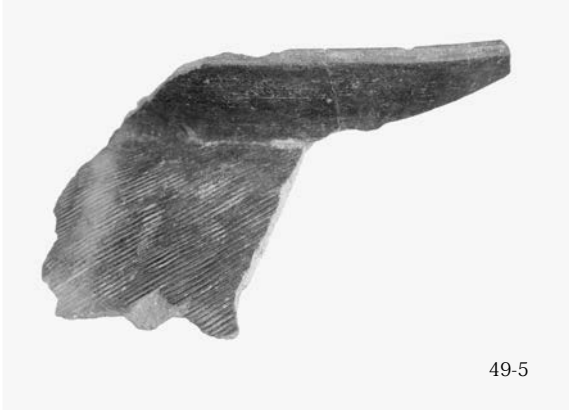
1．08－1－2－1区　第8－2遺構面30溝出土遺物

49-1


49-3


49-4

49-2


49-5

49-6

49-7

49-8

49-10

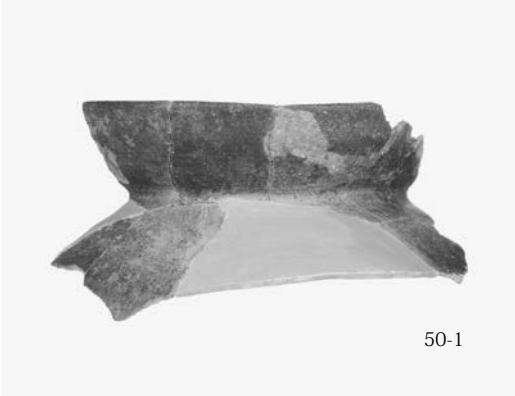
1．08－1－2－1区　第8－2遺構面 30 溝出土遺物

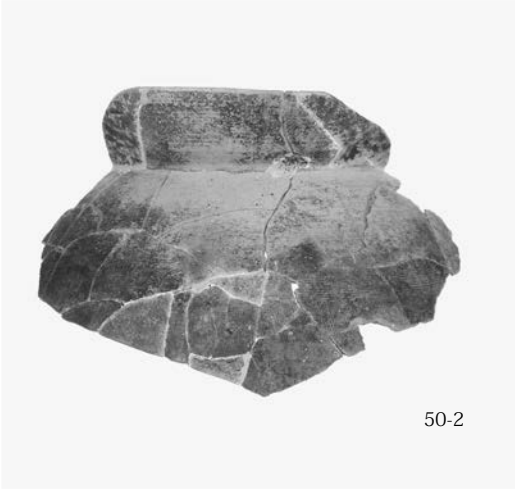
図版 38　遺物

49-9

49-11

49-12


50-1


50-2

49-13

50-12

1．08－1－2－1区　第8－2遺構面30溝・31溝出土遺物

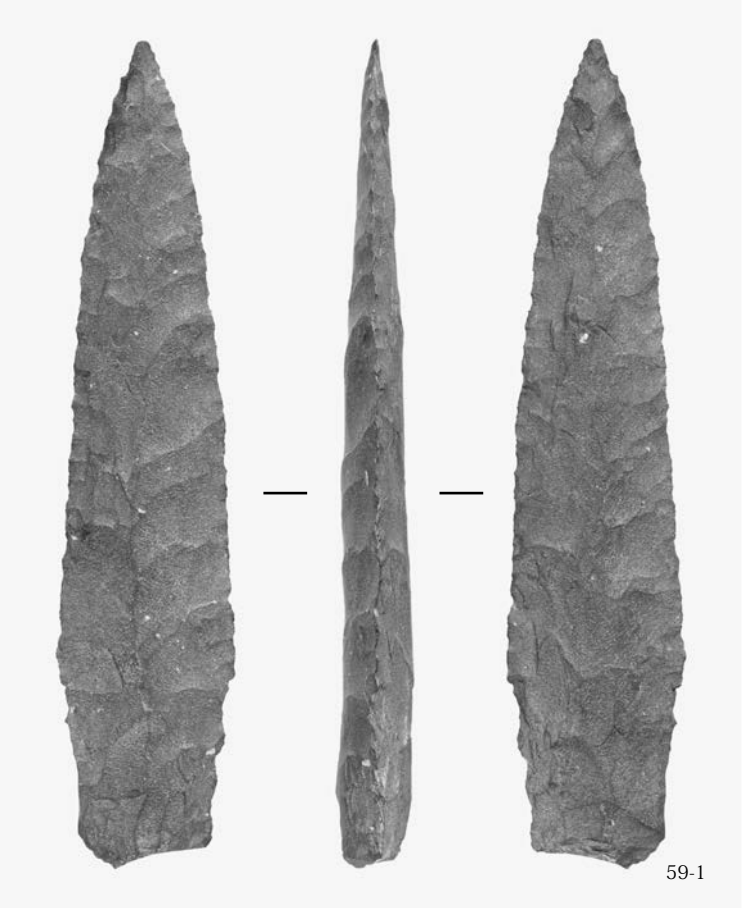
1．08－1－2－1区
第８－２遺構面 30 溝出土棒状割材

2．08－1－2－1区　第８－２遺構面 30 溝出土板状割材

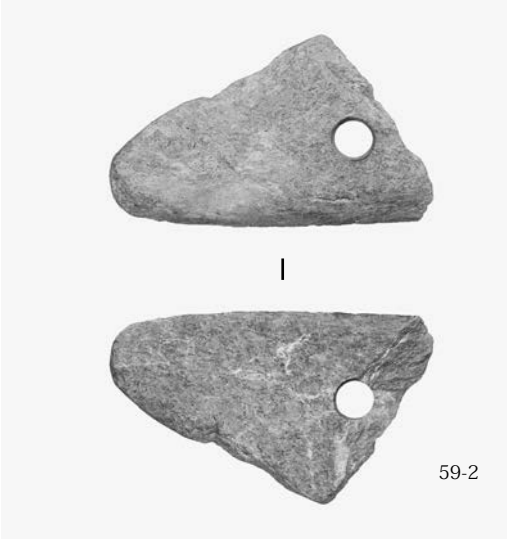
3．08－1－2－2区
第７層出土獣骨（ウマ）

4．08－1－2－1区
第８－２遺構面 30 溝
出土獣歯（イノシシ）

図版 40　遺物

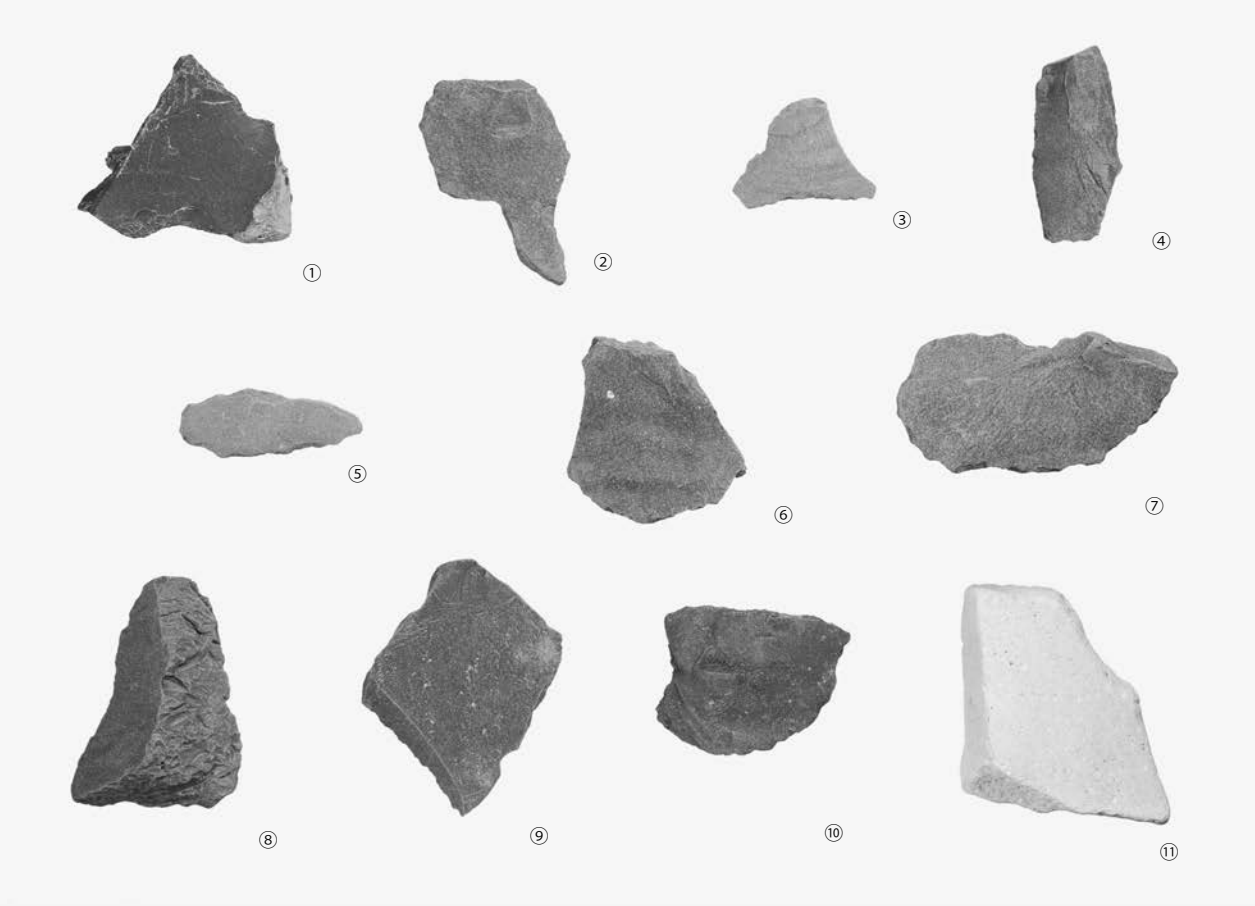


1．08－1－2－2区　第 10－1 層出土打製石槍（石剣）

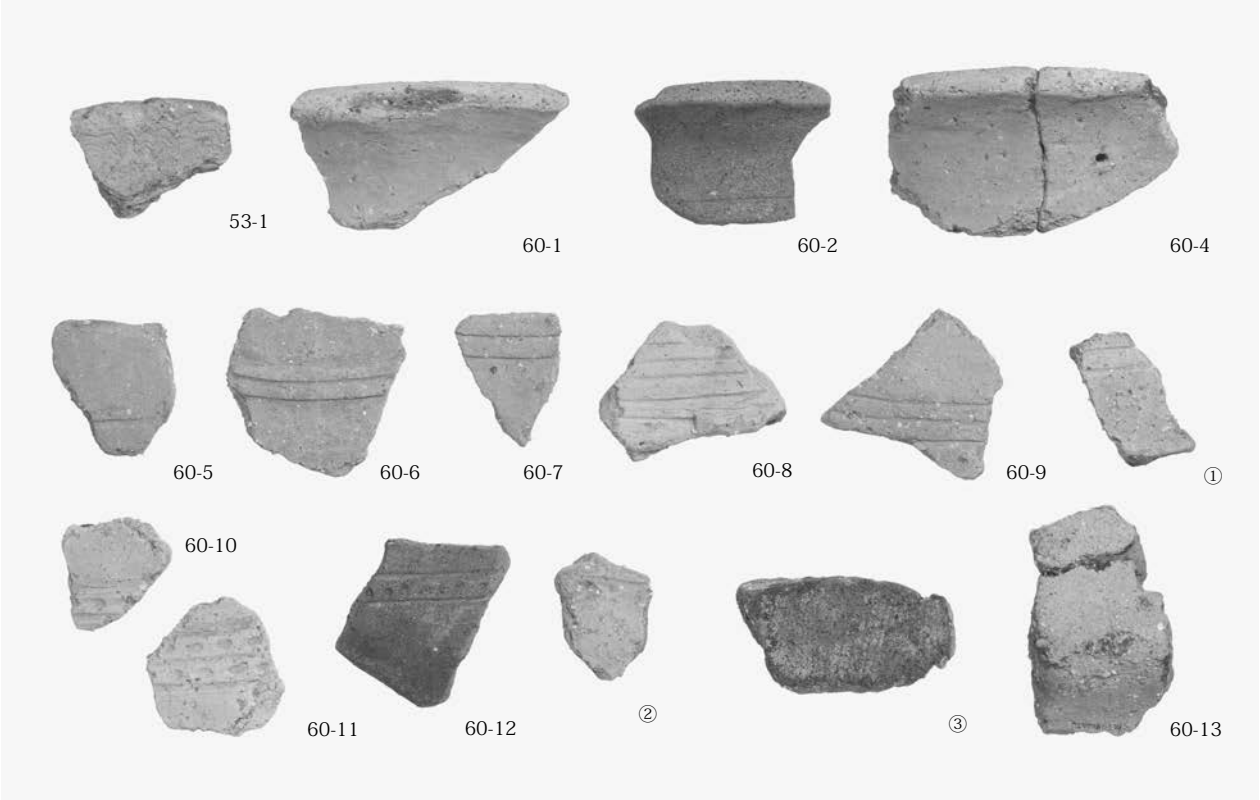


2．08－1－2－2区
第 10－2 層出土石庖丁

3．08－1－2－2区
第 10－2 層出土土製投弾



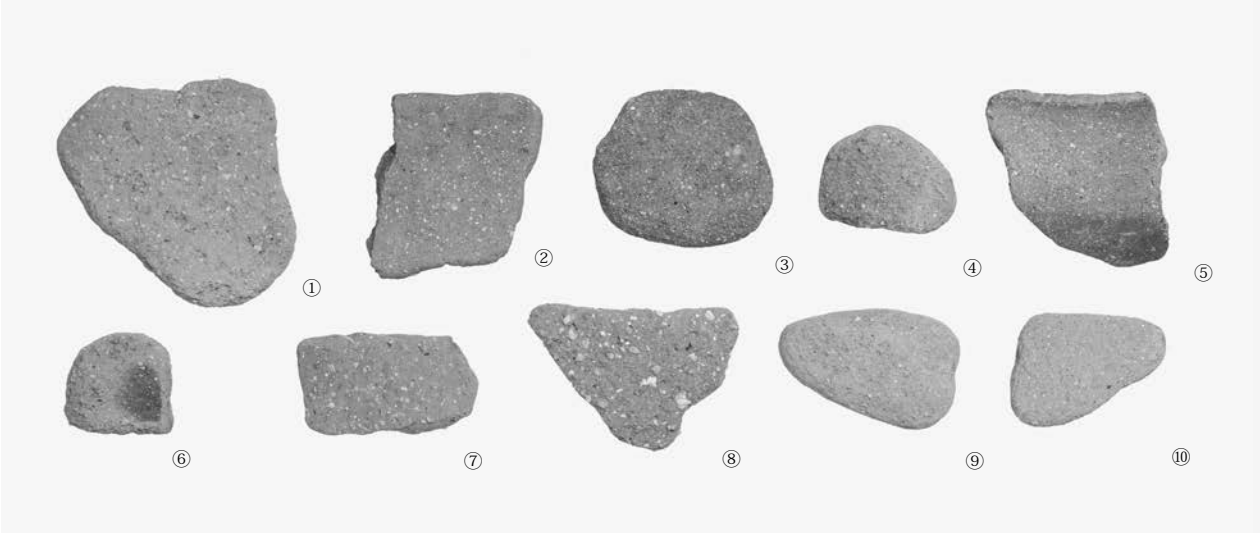
4．08－1－2－1区・08－1－2－2区　石製品・剥片



1．08－1－2－2区　第９層・第 10 層出土遺物

2．08－1－2－2区　第 10 層出土弥生土器壺頸部

3．08－1－2－2区
第 10－2層出土壺形ミニチュア土器



4．08－1－2－1区　下層掘削トレンチＡ　出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	うえまついせき２
書名	植松遺跡２
副書名	大阪府営八尾植松（第２期）住宅（建て替え）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次数	
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 208 集
編著者名	黒須亜希子
編集機関	財団法人　大阪府文化財センター
所在地	〒 590 － 0105　大阪府堺市南区竹城台３丁 21 番４号　TEL ／ 072 － 299 － 8791
発行年月日	2010 年 11 月 30 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	緯度・経度	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
植松遺跡（うえまついせき）	大阪府八尾市植松町８丁目地内（おおさかふやおしうえまつちょう８ちょうめ／ちない）	27212	63	北緯 34°36′49″ 東経 135°35′31″	20090206 ～ 20091222	1,033 ㎡	大阪府営住宅建て替えに伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
植松遺跡	生産	弥生時代前期	水田・溝・畦畔	弥生土器・緑泥片岩製石庖丁・サヌカイト製打製石槍（石剣）	
	集落	古墳時代前期	竪穴状遺構・土坑・溝・土器だまり	土師器・木製品・獣歯（猪）・獣骨（ウマ）・桃核	
	生産	古代末～中近世	水田・畦畔・溝・土坑・落込み・井戸・島畠	土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器・獣歯（イノシシ）・鉄鍋・煙管・石製品・木製品	

要約

弥生時代前期の遺構面において水田跡を検出した。溝を伴う畝畝状の大畦を敷設し、その間を細かく小畦畔で区切って作られた小区画水田である。小尾根状部の傾斜を利用して、階段状に整形されていた。水田耕土からは弥生土器のほか、石庖丁や石槍（石剣）が出土した。

古墳時代前期の遺構面において、集落の一部を確認した。集落を限る溝や土坑、土器だまり等の遺構を検出した。出土遺物量からは一定規模以上の居住人口があったことを想像できる。

古代末～中世の各遺構面において水田遺構を検出し、その変遷を捉えた。大溝や大畦、井戸、島畠状の高まり等の遺構の残存により、古代末期以降、当地が生産域として利用されたことを確認した。

（財） 大阪府文化財センター調査報告書　第 208 集

植 松 遺 跡 2

大阪府営八尾植松（第２期）住宅（建て替え）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／ 2010 年 11 月 30 日

編集・発行／財団法人　大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台３丁 21 番４号

印刷・製本／株式会社　中島弘文堂印刷所
大阪府大阪市東成区深江南２丁目６番８号